

# 光仙房遺跡

(須恵器窯跡編)

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

2003

日本道路公団  
財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 光仙房遺跡

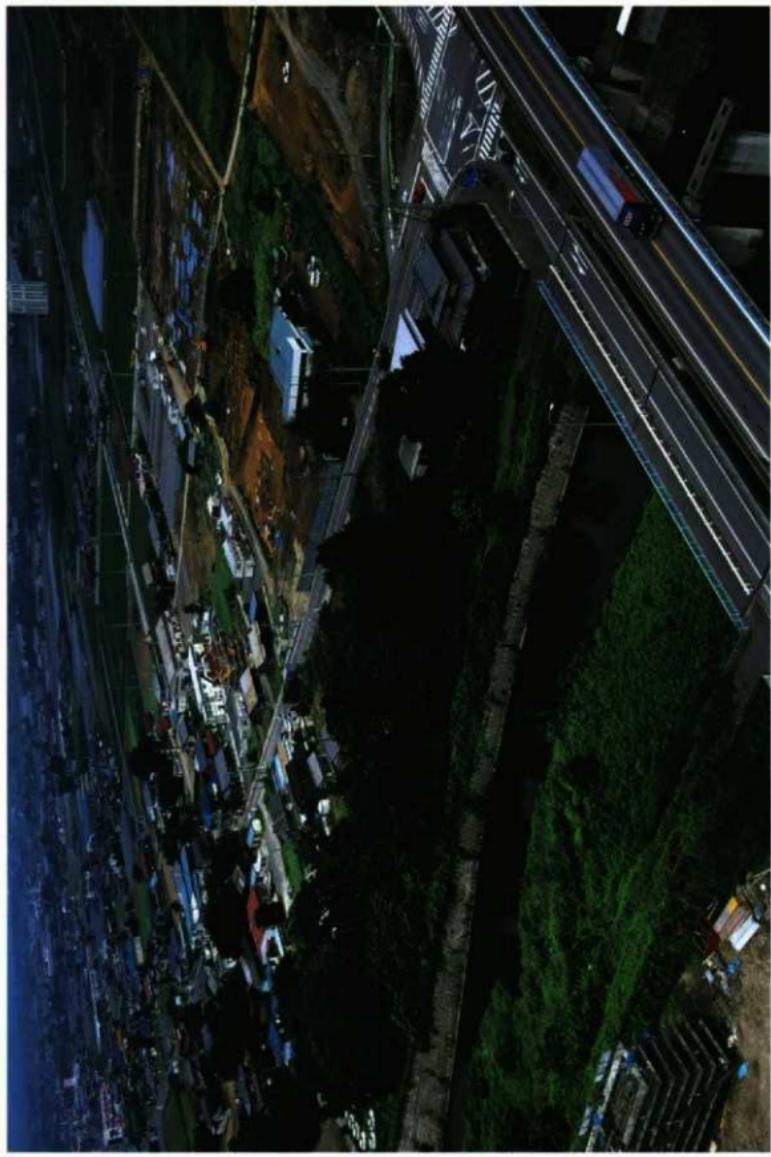
(須恵器窯跡編)

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

2003

日本道路公団  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





1. 遠景遠景（上が北） 西に前川(左)岸は本町古墳群が分布し、6～7世紀の古墳が上原木光山跡・ここ光山跡遺跡の発掘でその一部が調査されている。





2. 光仙房遺跡B区全景(上が南) 右が墓跡群、左は堅穴住居と掘立柱建物跡群。左端は大溝（B8号溝）で東線に道路遺構が併走する



3. 墓跡群全景(上が北) 南北一線上に北から2号、中央に8号・13号室が連なる。これを境にして、東側には1号・4号・6号・10号・9号室跡が、西側には3号・5号・7号・11号室跡の窓体が枝葉のように伸びる

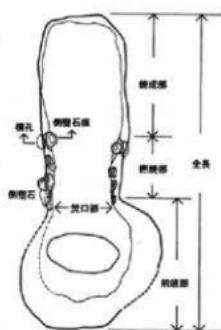


## 例　　言

1. 本書は、北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域建設に伴い事前調査された光仙房遺跡(遺跡略号 KT-310)の発掘調査報告書である。本書は『光仙房遺跡』(集落編)・『須恵器窯跡編』2分冊のうちの(須恵器窯跡編)である。
2. 発掘調査及び報告書作成には次の機関・方々にご協力ご指導を頂いた。  
伊勢崎市教育委員会・荒川正夫・石井栄一・小笠原良人・加部二生・北原勝彦・  
昆 彦生・佐々木幹雄・須長泰一・高橋 紘・平田貴正
3. 本書光仙房遺跡(須恵器窯跡編)報告の編集は綿貫がこれを担当した。  
執筆分担 第1章～第4章 綿貫邦男  
補遺編 光仙房遺跡出土瓦について 大江正行  
その他必要に応じて本文中に記した。

## 凡　　例

1. 本書の遺構図版にある+印とそれに記される3桁2種の数値は、国家座標値X・Y値を示す。ただし X・Y値5桁数値のうち前2桁のX値38・Y値54は省略してある。
2. 本書における遺構図にはそれぞれ比例尺を付したが、基本的には次のようにある。  
窯跡: 1/30  
ただし、図によってはこの限りではない。
3. 本書における遺物図版にはそれぞれ比例尺を付したが、基本的には次のようにある。  
土器・石: 1/3 瓦: 1/4  
ただし遺物によってはこの限りではない。
4. 本書における遺構図版中の断面基準は標準値でこれを表した。単位はmである。
5. 各遺構に帰属する遺物は、各遺構図版中の遺物・遺物図版・遺物写真図版・遺物観察・計測表とも同一の算用数字で番号を付してある。
6. 土器の実測図は原則として四分割法をとった。ただし残存量が二分の一以下、あるいは歪みの著しいものは180°展開して図上復元とし、中心線は点線で示した。
7. 遺物の撮影および展開・断面図は基本的に一角法で示した。
8. 土器の色調は基本的には「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修の土色名称に準じた。
9. 遺構図版中、窯跡土層の網表示のうち  
黒網は焼土層  
緑線網は還元層  
点網は粘土をそれぞれ示す。
10. 窯体規模の長さと幅の計測は基本的には水平長と床面基底幅によった。



光仙房遺跡窯跡部位図

# 目 次

口 絵	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 発掘調査の経過と遺跡概要	1
第2章 窯跡の概要	7
第1節 県内の須恵器窯跡概要	7
1. 須恵器窯の成立とその動向	7
2. 立窯の地理的環境	8
3. 窯構築の方法と形態・構造	8
4. 須恵器生産の変容	9
5. 群馬県内の平安時代須恵器窯の概略	9
第2節 光仙房遺跡窯跡群の調査経過と概要	18
1. 調査経過	18
2. 光仙房遺跡窯跡群の概要	20
第3章 窯跡と出土遺物	23
第1節 窯 跡	23
1. 窯跡各説	24
2. 窯跡操業に関わる灰及び燃料材について	54
第2節 出土遺物	56
1. 焼成須恵器の器種構成と特徴	56
2. 器種分類	59
3. 窯跡出土遺物各説	62
第4章 成果と課題	113
はじめに	113
第1節 光仙房窯跡群の築窯とその構造	113
1. 築窯の経過と方法	113
2. 窯構造	115
3. 須恵器工人関連施設	116
第2節 光仙房窯跡群の須恵器とその年代	117
1. “くせ”(作風)としての類型	117
2. 計測値分布	119
3. 年代について	120
4. 光仙房窯跡群と舞台窯跡群	125
おわりに	128
補遺編 光仙房遺跡出土瓦について	129
1. 出 土 瓦	129
2. 光仙房窯跡出土瓦の存在意義	132

## 挿図目次

第 1 図 北関東自動車道関連遺跡位置図 〔前橋・「高崎」〕 1/50000	第 30 図 7 号・8 号・11 号窯跡 前底部土層図	第 69 図 9 号窯跡出土遺物 2	86
国土地理院	8 号窯跡(1) ..... 39	第 70 図 9 号窯跡环計測值分布図	87
昭和 61 年現況図	8 号窯跡(2) ..... 40	10 号窯跡出土遺物 1	88
第 2 図 光仙房道路地盤図 1/10000	8 号窯跡(1) ..... 41	10 号窯跡出土遺物 2	89
第 3 図 光仙房道路調査区断面 ..... 3	9 号窯跡(1) ..... 43	10 号窯跡出土遺物 3	90
第 4 図 光仙房道路全体図 1/800 ..... 4	9 号窯跡(2) ..... 44	11 号窯跡环計測值分布図	91
第 5 図 上野の地盤分けと窯跡の位置図 ..... 7	10 号窯跡(1) ..... 46	11 号窯跡出土遺物 1	92
第 6 図 太田金山陣跡群、丸山腰巻 1 号室 〔上野原・「足利南部」〕 1/25000	10 号窯跡(2) ..... 47	11 号窯跡出土遺物 2	93
国土地理院	11 号窯跡(1) ..... 49	11 号窯跡出土遺物 3	94
第 7 図 秋間窯跡群二反田遺跡・周辺窯 跡分布図 〔下室田〕 1/25000	11 号窯跡(2) ..... 50	11 号窯跡出土遺物 4	95
国土地理院	13 号窯跡(1) ..... 51	11 号窯跡出土遺物 5	96
第 8 図 二反田遺跡窯跡 1 ..... 11	13 号窯跡(2) ..... 52	11 号窯跡出土遺物 6	97
第 9 図 二反田遺跡窯跡 2 ..... 12	14 号窯跡 ..... 60	13 号窯跡环計測值分布図	99
第 10 図 藤岡市下日野・金井窯跡群 SY-2・SY-3 窯跡 ..... 12	14 号窯跡 ..... 60	13 号窯跡出土遺物 1	100
第 11 図 藤岡・吉井窯跡群「四回」 1/25000 国土地理院 ..... 13	15 号窯跡 ..... 62	10 号窯跡出土遺物(土器類) ..... 101	
第 12 回 下五反田窯跡 1 号・2 号窯跡-19	1 号窯跡出土遺物 ..... 63	窯跡出土瓦 1 ..... 102	
第 13 回 夜野窯跡群「狼」京 1/25000 国土地理院 ..... 15	2 号窯跡环計測值分布図 ..... 64	窯跡出土瓦 2 ..... 104	
第 14 回 上西原遺跡復原模型 ..... 16	2 号窯跡出土遺物 ..... 65	窯跡出土瓦 3 ..... 105	
第 15 回 附生上小友窯跡「桐生」・「足利 北原」1/25000 国土地理院 ..... 17	4 号窯跡 ..... 66	窯跡出土瓦 4 ..... 106	
第 16 回 光仙房窯跡全図 1/80 ..... 19	4 号窯跡出土遺物 ..... 67	窯跡出土瓦 5 ..... 107	
第 17 回 光仙房窯跡 B 区全体図 1/800 ..... 20	5 号窯跡 ..... 68	窯跡出土瓦 6 ..... 108	
第 18 回 1 号窯跡(1) ..... 25	6 号窯跡 ..... 68	窯跡出土瓦 7 ..... 109	
第 19 回 1 号窯跡(2) ..... 26	7 号窯跡 ..... 69	窯跡出土瓦 8 ..... 110	
第 20 回 2 号窯跡(1) ..... 29	7 号窯跡出土遺物 3 ..... 70	窯跡出土瓦 9 ..... 111	
第 21 回 2 号窯跡(2) ..... 29	7 号窯跡出土遺物 4 ..... 70	窯跡出土瓦 10 ..... 111	
第 22 回 3 号窯跡 ..... 30	7 号窯跡出土遺物 5 ..... 71	窯跡出土瓦相關圖 ..... 111	
第 23 回 4 号窯跡(1) ..... 32	7 号窯跡出土遺物 6 ..... 72	舞台窯跡と関連構造 ..... 114	
第 24 回 4 号窯跡(2) ..... 32	7 号窯跡出土遺物 7 ..... 73	光仙房遺跡延跡窯跡連構造図 ..... 116	
第 25 回 5 号窯跡(1) ..... 33	7 号窯跡出土遺物 8 ..... 73	光房屋・舞台窯跡新分類別 ..... 118	
第 26 回 5 号窯跡(2) ..... 35	7 号窯跡出土遺物 9 ..... 74	光仙房・舞台窯跡環類類別 ..... 119	
第 27 回 6 号窯跡 ..... 36	7 号窯跡出土遺物 10 ..... 75	分類別 ..... 119	
第 28 回 7 号窯跡(1) ..... 37	7 号窯跡出土遺物 11 ..... 76	光仙房常陸窯造住瓦器出土遺物 ..... 121	
第 29 回 7 号窯跡(2) ..... 38	7 号窯跡出土遺物 12 ..... 76	光仙房常陸窯造住瓦器出土遺物 2 ..... 122	
	7 号窯跡出土遺物 13 ..... 77	C18 号窯跡出土灰土転釉陶器と 黒袋 11 号窯跡の短頸壺 ..... 123	
	7 号窯跡出土遺物 14 ..... 77	灰釉器皿と須頭器皿 ..... 124	
	7 号窯跡出土遺物 15 ..... 78	舞台窯跡開闢住瓦器出土遺物 ..... 126	
	7 号窯跡出土遺物 16 ..... 78	芋 1 型と上柳木庵慶寺瓦例 ..... 130	
	7 号窯跡出土遺物 17 ..... 79	女瓦格子 1 ~ 5 型 ..... 131	
	7 号窯跡出土遺物 18 ..... 79	索文 1 型式一覧 ..... 131	

## 写真図版目次

P.L. 1 光仙房窯跡窯跡群全景(北上から)	2. 5 号窯跡全景(南から)	物出土状況
P.L. 2 1. B 号全景(上右側)	3. 5 号窯跡焼成部土層堆積状況	P.L. 15 1. 10 号窯跡環状掘削状況
2. B 号東半(北から)	4. 5 号窯跡出土遺物	2. 10 号窯跡焼成部同様下石設置箇
P.L. 3 1. 1 号窯跡(西より)	P.L. 9 1. 6 号窯跡(南から)	3. 10 号窯跡出土遺物
2. 1 号窯跡全景(西より)	2. 7 号窯跡全景(東から)	4. 11 号窯跡全景(東から)
P.L. 4 1. 1 号窯跡焼成部同様出土状況	3. 7 号窯跡全景(東から)	P.L. 16 1. 11 号窯跡焼成部土層堆積状況
2. 1 号窯跡(むかむね郷)土層堆 積状況	P.L. 10 1. 7 号窯跡遺跡出土状況	2. 11 号窯跡遺跡出土状況
3. 1 号窯跡前底部土層堆積状況	2. 7 号窯跡焚口部土層断面	3. 11 号窯跡遺跡出土状況
4. 1 号窯跡焼成部同様石組	4. 7 号窯跡完形部状況(南から)	4. 11 号窯跡出土遺物
5. 2 号窯跡(南から)	5. 7 号窯跡出土遺物	P.L. 17 1. 13 号窯跡全景(北から)
P.L. 5 1. 2 号窯跡全景(南から)	6. 7 号窯跡焼成部土層下石設置箇	2. 13 号窯跡焼成部土層堆積状況
2. 2 号窯跡表面遺物出土状況	P.L. 11 1. 8 号窯跡(南から)	3. 13 号窯跡焼成部遺物出土状況
3. 2 号窯跡焼成部土層堆積状況	2. 8 号窯跡(南から)	4. 13 号窯跡焼成部
4. 2 号窯跡焼成部土層堆積状況	3. 窯跡群配置図	6. 13 号窯跡出土遺物
5. 1 号窯跡使用的機台と出土遺物	4. 8 号窯跡完形状況	7. 光仙房窯跡窯跡群の調査風景
6. 2 号窯跡出土遺物	P.L. 12 1. 8 号窯跡焼成部土層堆積状況	P.L. 18 1 号・2 号・4 号窯跡出土遺物
P.L. 6 1. 3 号窯跡全景(南東から)	2. 8 号窯跡焼成部遺物出土状況	P.L. 19 5 号・6 号・7 号窯跡出土遺物
2. 4 号窯跡全景(西から)	3. 8 号窯跡焼成部土層堆積状況	P.L. 20 7 号窯跡出土遺物
P.L. 7 1. 4 号窯跡全景(西から)	4. 8 号窯跡出土遺物	P.L. 21 7 号窯跡出土遺物
2. 4 号窯跡焼成部土層堆積状況 (横断)	5. 9 号窯跡焼成部出土遺物	P.L. 22 8 号窯跡出土遺物
4. 4 号窯跡出土遺物	6. 9 号窯跡出土遺物	P.L. 23 9 号・10 号窯跡出土遺物
6. 4 号窯跡焼成部土層堆積状況 (横断)	7. 9 号窯跡焼成部土層堆積状況	P.L. 24 10 号・11 号窯跡出土遺物
P.L. 8 1. 5 号窯跡(左 3 番目)全景(東 から)	8. 9 号窯跡出土遺物	P.L. 25 11 号窯跡出土遺物
	9. 10 号窯跡(南西から)	P.L. 26 11 号窯跡出土遺物
	10. 10 号窯跡第 1 面(最終面)遺物	P.L. 27 11 号・13 号窯跡出土遺物
	11. 10 号窯跡出土状況	P.L. 28 3 号・10 号窯跡出土土器類、窯跡出土瓦
	3. 10 号窯跡第 2 面(前操作面)遺	P.L. 29 窯跡出土瓦
		P.L. 30 窯跡出土瓦、1 号窯跡焼成部の石

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	こうせんぼういせき（すえきかまあとへん）
書名	光仙房遺跡（須恵器窯跡羣）
副書名	北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第17集
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第308集
編集者	綿貫邦男
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511
発行年月日	西暦2003年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
光仙房遺跡	伊勢崎市 三和町	10204		36°21'05"	139°13'32"	19970401 19991031	34,650m <sup>2</sup>	北関東自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
光仙房遺跡	生産跡	平安	須恵器窯跡	須恵器・瓦	窯跡12基

# 第1章

## 発掘調査の経過 と遺跡概要

光仙房遺跡の発掘調査は、平成9年4月1日より平成11年3月31日まで実施した。調査にあたっては国家座標第IX系を用い10m方眼を設定し、これを基準とした。各方眼の名称は、南東隅の座標値で表し、X=39258・Y=-54970のように標記した。本遺跡の調査は複数年次にわたるため、調査対象地区を便宜的に区割りをした。調査範囲は北関東自動車道の計画路線内、南北幅約70m・東西延長約430mで調査対象面積は約23,000m<sup>2</sup>にのぼる。調査区は主に現道を目安に西から東へA・B・C・Dの4区画に区分し、西端で柏川左岸の崖上と主要地方道伊勢崎・大間々線の間をA区とした。B～D区は伊勢崎・大間々線を西端に東接する舞台遺跡の間を南北走る市道を区境とした。(第3図)

遺構名称は基本的には区名にあたるalphabetを付して、遺構の類別に算用数字を用い通番で示した。A 1号住居跡・B 1号井戸等であるが通番の順序は検出ないしは、調査着手の順に従っている。なお、用地買収状況によりB区の南側側道部についての遺構名称は「B南」を付した。遺物註記には光仙房遺跡の略号であるKT-310を使用してある。

第1図 北関東自動車道関連遺跡位置図「前橋」・「高崎」1/50000 國土地理院



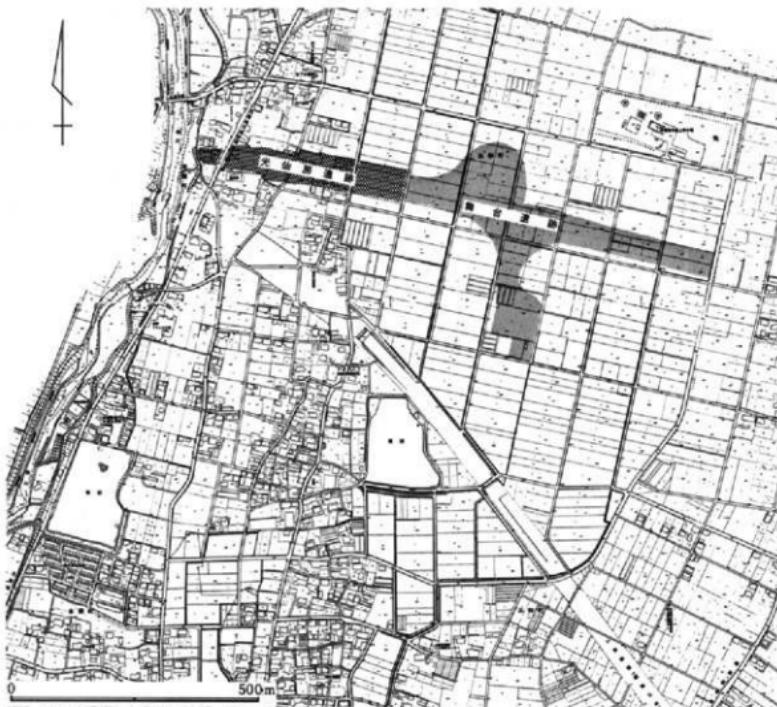
## 第1章 発掘調査の経過と遺跡概要

平成9年度（平成9年4月1日～平成10年3月31日）

当年度の調査はC・D区を対象とした。

C区の現況は標高約87mの平坦地形をなすが西半は洪積Loam台地に、東半は黒褐色土gley層の堆積する埋没谷地形に分れる。遺構の構成内容は竪穴住居跡を主とするが区域西半に平安時代の住居群が偏在し、25軒を検出・調査した。電構築材には瓦使用の住居がみられ、瓦形態から南1.5kmに位置する上植木庵寺との関係が注目される。東半のgley層面には明瞭な遺構が確認できなかったが、上層には浅間山C軽石の二次堆積がみられ、堆積土中には古墳時代前期に属する土器片が多数検出されており住居等遺構の存否は来年度の課題となった。

D区は標高86mで西側のC区とは1mの高低差をもつが、地表面では段差などの変換地形は認められない。現況ではC区東半の様相から全体が沖積低地と考えていたが、調査区を横断するように西側では水浸還元気味のLoam低台地と3筋の湧水開析谷流路からなり、中央部にはgley化した土壤の舌状台地が形成され複雑な様相を見せている。西側のLoam低台地では古墳時代前期の竪穴住居跡が確認された。中央部のgley層低台地には300箇所余りの粘土探掲坑が検出され、坑内からは古墳時代後期に属する土器片のほか一木平鋤・



第2図 光仙寺遺跡地域図 1/10000 昭和61年現況図

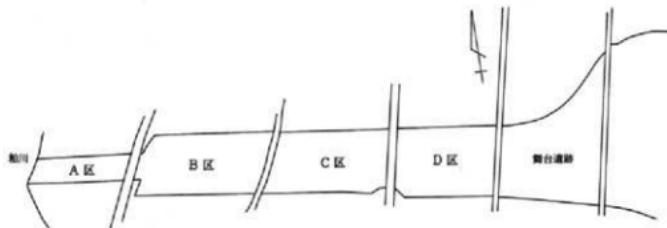
曲柄平鋸などの木製品が出土している。この粘土探査坑は、東に隣する舞台遺跡に展開する古墳時代後期の集落跡との強い関連が考えられた。三筋の開析谷流路は中央台地の南端で合流する。堆積土中には三枚の火山灰層、上位から浅間山B軽石・中位に榛名山ニシ岳FA軽石・下位に浅間山C軽石層が見られる。谷中からの出土遺物は主にFA層下に集中し、古墳時代前期に属する多量の土器片がある。また、未完成品の一木作り平鋸など木製品も出土している。

#### 平成10年度（平成10年4月1日～平成10年10月31日）

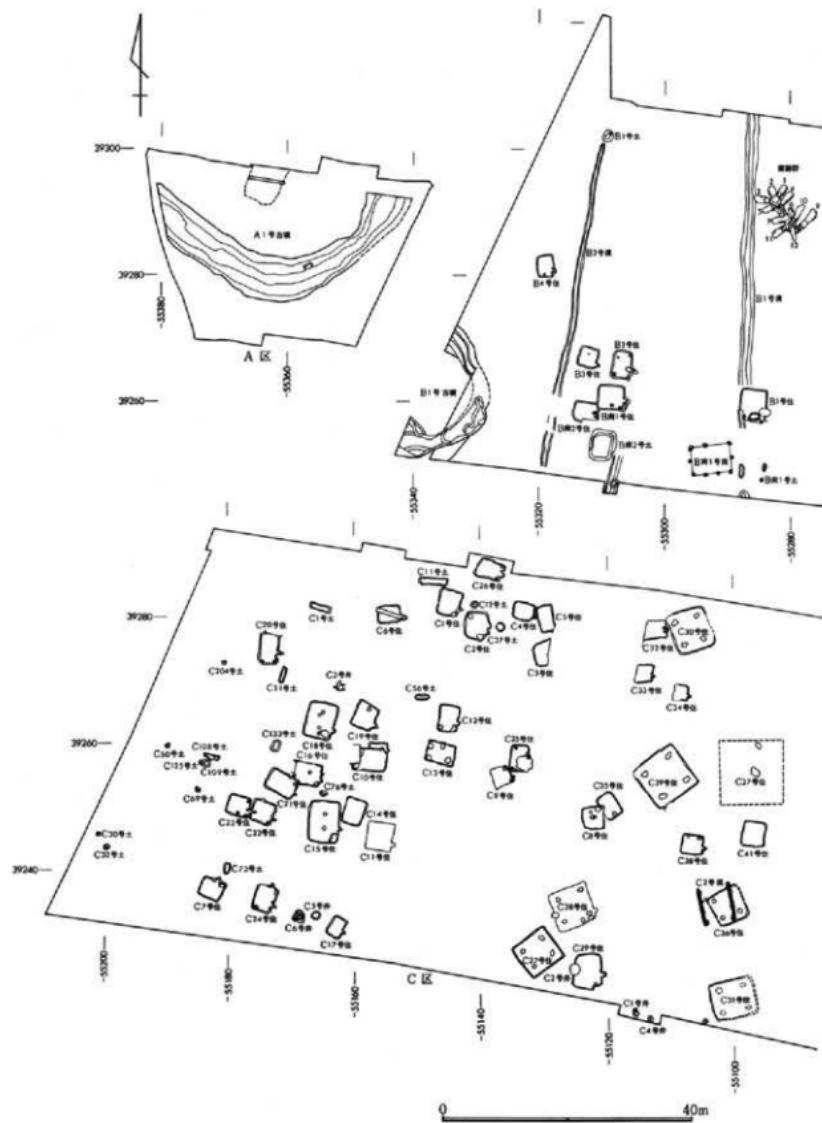
当年度の調査は2班体制で実施され、9年度の継続としてC・D区を、そして新たな調査区として主要地方道伊勢崎・大間々線を挟むA・B区を対象とした。なお、B区に一部残る未買収部分については来年度平成11年度に調査することになった。

A区は柏川左岸の崖線上に形成される本関町古墳群の範域にあり、当区でも6世紀中頃から後半にかけての古墳が検出された。墳丘は削平されており、現地表からはその痕跡も窺えない状態であった。周堀と石室底面掘形が幸うじて残存するのみであった。主体部地点からの遺物は少量で石室が想定される部分より2個の塗金製耳環が出土したのみである。周堀は約1/4が明らかにされ、径33m程度の本関町古墳群中では比較的大型の円墳が想定される。B区南西隅においても小円墳の周堀の一部が検出された。

B区で特筆される遺構は、平安時代の前半期に操業されたと考えられる12基の須恵器窯跡群がある。密集重複した状態は短期間に連続して生産が行われたことを示している。また、立地条件が平野部平坦地形である特異性は、東に隣する舞台遺跡窯跡群に繋がる。しかし、平坦地形利用の構築方法は舞台遺跡窯跡よりもなお徹底したものとなっている。平安時代における窯業生産のありかたに新たな視点を投げかけるものとなる。その他、平安時代の竪穴住居跡9軒・掘立柱建物跡4棟・井戸跡・前年にC区西端で確認された大溝の全容が明らかになった。北南走するこの溝は上幅5m、深さ3mで鋭いV字形の掘形をもつ。底面および下位壁面は流水の作用で激しい抉れ現象が生じている。埋土は多量の水量が流れ込んだことを示す砂礫の互層が厚く堆積するが、流水には数次におよぶ間隔がある。堆積土層中に見られるこの間隔の原因が溝の埋没と流水による自然現象か、人工的に繰り返された開削に因るかは検討を要する。堆積土の縁辺から中位にかけて浅間山B軽石の二次堆積が見られる。取水源は湧水とは考えられず西方に流れる柏川からの導水の可能性が高く水路としての機能が考えられる。また、この溝の左岸縁辺には道路遺構と考えられる幅約1mで黒色土の帯状硬化面が沿う。

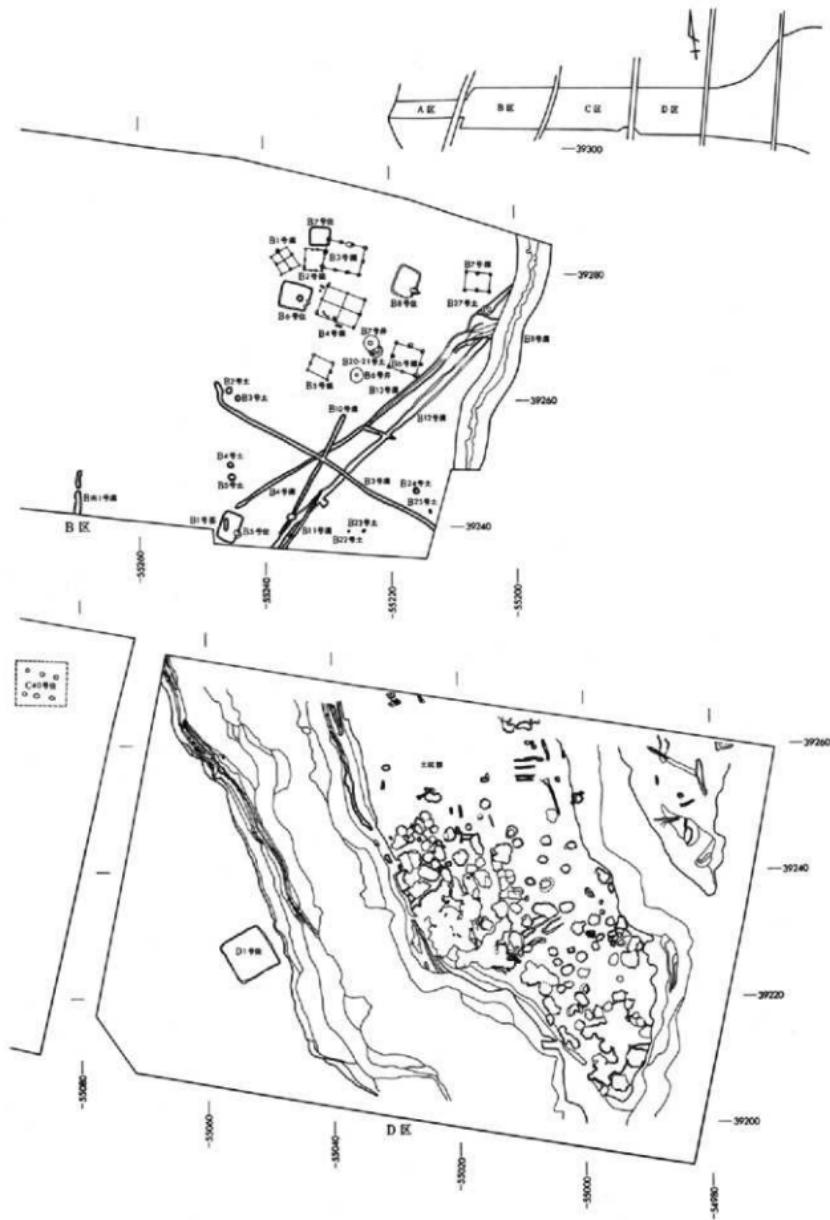


第3図 光仙房遺跡調査区割図



第4図 光仙寺遺跡全体図 1/800

第1章 発掘調査の経過と遺跡概要



## 第1章 発掘調査の経過と遺跡概要

旧石器の存在はB区に限られ、南西部でAs-OPを含む褐色硬質Loam層(暗色帯)の上面より100点以上の剝片と礫の集中分布が検出され、石器種にはナイフ型石器や細石器核が混じる。

C区は縦統調査によって41軒にのぼる竪穴住居跡が検出された。時代別には東半部のgley層面の精査によって古墳時代前期11軒・奈良時代4軒・平安時代25軒の内訳になる。分布には時代によって偏りが見られ、古墳時代前期および奈良時代の住居跡はgley化層面の東に、平安時代住居跡は西側のLoam台地面に偏る傾向がある。

D区では前年度に確認されていた唯一1軒の古墳時代前期の竪穴住居跡が注目される。4本の柱穴内すべてに柱材を良好な状況で残し、さらに底面には加工板材による礎盤がしつらえられていた。なお、先年度から継続して調査された粘土探査坑は380余基にのぼり、個別形状の認識が困難な重複地点もある。分布は台地西縁から南端部で濃密になりとくに重複が著しい。

### 平成11年度(平成11年9月1日～10月31日)

B区南の側道部を対象に調査を実施した。中・近世に属する土坑墓、井戸、平安時代の住居跡、掘立柱建物跡の他、前年度にその一部を検出していた円墳周囲に続く部分を調査した。周囲内からは中型の須恵器窯が出土している。また、周囲埋土上位面には浅間山B軽石層の堆積を確認した。

光仙房遺跡は平成9年度より平成11年度の3カ年にわたりて調査が実施された。調査で検出された遺構・遺物は弥生時代こそ欠如するが、旧石器時代から歴史時代と多岐にわたる。旧石器時代はB区で2枚の文化層が確認され、下位文化層からは礫群を含む2つの石器集中BBlockの分布が認識された。縄文時代は遺構の確認はないが、埋没谷内からは後期加曾利B型式を中心とした多量の土器片が検出されている。古墳時代では、6世紀後半代の円墳2基が、竪穴住居跡はすべて古墳時代前期4世紀代で13軒がある。粘土探査坑は383余基を数え、坑内出土遺物は6世紀代を中心とする。歴史時代は平安期を中心に竪穴住居跡41軒・須恵器窯12基・墓壙2基・道路遺構併設の水路状大溝がある。その他、井戸6基・土坑29基・掘立柱建物跡9棟が検出されている。(第4図)

平成10年10月3日から4日にかけて調査終了後の窯跡を用いての焼成実験を実施した。休日を利用しての実験とは言え、これには日本道路公团高崎工事事務所のご理解によるところが大きい。また、明星大学高橋祐先生には須恵器製作や焼成方法のご指導を、早稲田大学木庄高等学院佐々木幹雄先生には窯跡復元や実験データーの収集方法の御助言及び測定機材などの提供をいただいた。

実験の目的は、須恵器窯天井部被覆方法の検討、須恵器焼成温度、須恵器製作技法の検討、粘土探査坑の検討を主とした。具体的には光仙房遺跡の須恵器窯跡群の発掘調査所見から窯跡構造を分析し、須恵器窯の築窯方法を検討し再現した。焼成物については先に調査した舞台遺跡窯跡から出土した須恵器の製作方法を検討し、D区粘土探査坑の粘土を生地として、須恵器を輪轉引きにより製作した。焼成実験のための復元窯構造については、地下式窯窯で無階無段型式であり、その天井部及び燃焼部両側壁の礫と一対の横孔に着目した。また、須恵器の製作に際しては、光仙房遺跡粘土探査坑及び周辺の第6層暗褐色粘土層を使用し、円盤作りの底部上に粘土紐を巻き上げて輪轉引きした。焼成後の破損観察からは、底部と体部巻き上げの接合部に亀裂が生じて实物に酷似した状況となった。

なお、実験の成果は、土器作り研究会「須恵器窯焼成実験報告」として群馬県埋蔵文化財調査事業団の「研究紀要18」に報告した。

## 第2章 窯跡の概要

### 第1節 県内の須恵器窯跡概要

群馬県の窯跡は現在のところおよそ12の地域で窯跡や窯跡群の存在が知られ、河川や県域の地勢から東・西・北毛の地域に大別されて語られることが多い。東毛では太田金山・笠懸・桐生窯跡群、西毛には藤岡・吉井・秋間・乗附窯跡群、北毛は月夜野窯跡群等が代表的な古窯跡群である。(第5図)

#### 1. 須恵器窯の成立とその動向

県内の須恵器生産は、消費遺跡からの所見では5世紀後半の開始も想定されるものの、現状では太田金山窯跡群の6世紀前半～後半の頃と考えられている。7世紀前半まで関東有数の窯業地とされ、県内はもとより広く関東各地にその製品供給と技術的影響を与えていた。上記諸窯跡群の多くは7世紀後半から遅れても8世紀初頭には開窯があり全県的に須恵器生産を開始する。中で、安中市秋間窯跡群は山王庵寺創建瓦焼成を開窯の契機とされるが以後、太田金山窯跡群に代わり、少なくとも8世紀代は群馬県における須恵器生産の中核として成長する。この背景には、上野国律令政治の中心となる国府・国分寺を擁する中毛の地域が消費地として供給版図にあったことに由来するであろう。笠懸窯跡群は上野国分寺創建瓦の生産によって8世紀中葉に開窯が考えられているが太田金山や秋間窯跡群などに比しては群としての規模はかなり小さいものと考えられ、須恵器よりもむしろ瓦生産に主体があったようである。しかし近年、8世紀前半代の須恵器窯が発見調査され笠懸窯跡群域での開窯時期が早まるとともに、須恵器の生産体制も従来はやや過小に評価さ



第5図 上野の地域分けと窯跡の位置図

## 第2章 窯跡の概要

れていたきらいがある。ここに限らず調査例が多いとは言えない県内須恵器窯跡群成立の契機とその後の動向には未だ流動的な要素も多くある。各窯跡群の終焉に関してはまだ充分掌握されているとは言いがたいが、大方は9世紀代の後半から進行するようである。一定程度の規模で操業が10世紀代ないしは11世紀におよぶものとしては、吉井窯跡群の下五反田窯や利根郡月夜野窯跡群が知られる。

### 2. 立窯の地理的環境

群馬県各地域に展開する大規模窯跡群は山寄り丘陵地帯ないしは山間地域に営まれるという漠然とした既成概念があった。そしてこれら諸窯跡群は伝統的ともいえる生産の継続性を維持している場合が多い。これに対し、近年、大間々扇状地末端の平野部である伊勢崎市域において、平坦地形に構築される9世紀代の須恵器窯跡群があきらかになった。舞台遺跡窯跡群の11基に続き(既報告「舞台遺跡(1)」)当報告になる光仙房遺跡の12基、さらには隣接三和工業団地遺跡の2基が知見に上がっている。これらは伊勢崎三和窯跡群とも言うべき様相を呈し、各遺跡の窯跡は支群としての位置付けも可とするような様相である。現在のところ、既存窯跡群との地理的・時間的・系譜的な関連はたどることができない言わば突発非伝統的な出現のように考えられる。また、当該期(広くとらえて古代後半期)の須恵器窯跡には、立地要件の類似・共通性に興味ある事例が知られる。時期的にやや下るもの、赤城山南麓地域の前橋市上西原遺跡や同富田漆田遺跡では集落内において從来の窖窓構造をなさない須恵器焼成構造が検出され、古代後半期の須恵器生産技術や体制の在り方を考えるに注目すべき遺構が知られつつある。これらを正しく歴史認識の中に位置付けるためには、窯体の形状や構造の変化過程を形態論や形式論の自然科学的な法則を規範にする方法だけではなく、そのように成らしめた社会機構・構造(ここでは須恵器の需要と生産体制)の変化を、当然ながら社会全体のものも指向・文化・伝統・政治・経済のもの力を考慮した複眼的な理解方法が必要となってくる。

### 3. 窯構築の方法と形態・構造

最近の窯跡研究の潮流は、焼成製品である須恵器そのものの研究と共に、付属的施設を含めた窯構築にかかる技術的・構造的面での研究成果が著しい展開を見せている(窯跡研究会「須恵器窯構造」)。群馬県内の窯跡調査例は少なくまた、事例報告としては古く、構築・構造内容に詳しく接することのできるものは希少である。古墳時代の太田金山窯跡群以後、7世紀から8世紀にかけて操業を開始する県内の各窯跡群は平安期に至っても基本的な形態・構造は部分的には天井加構がなされてはいても地下式の形態をとる。窯跡構造にかかるような窯体内外のPitや溝、煙道付属施設などの例は今のところ知られていない。この事実は列島的な視野で各地の窯形態を概観したとき上野窯業者集団の執拗なまでの伝統固持を感じる。この傾向は構造物としての窯跡にかぎらず製品としての須恵器製作技法や器形にも多く認められるところである。ただ、側壁煙道をもつ太田金山の山去1号窯や桐生窯跡群の上小友窯跡、半地下式有段煙道の桐生宿ノ島窯跡など県内では特異例で、系譜的な検討をするが時間的・空間的にもその存在は単発で独立的である。

9世紀の操業になる舞台・光仙房遺跡の窯跡群はその立地要件での緩和そして、構築方法の変化が著しい。舞台遺跡の場合巨視的には平野部平坦地形とするが、微視的には開窓当初は傾斜面に窯体が構築され從来の窯跡立地と同じことができる。舞台遺跡で考えられる概念的窯窯方法としては最終段階にあたる平坦面縦坑掘り抜き・前部縦坑の壁面非開放の形態は窯跡群の形成過程を検討する限りでは外的要因などによる唐突な出現ではなく、立地用件に制約された中での窯業構成員による考案の可能性が高い。築窯方法については宮城県春日大沢窯跡群や岐阜県美濃須須窯など表層的現象面では近い類似性を見ることができる。

しかし、8世紀中葉とする春日大沢窯跡との時間的な隔たり、急傾斜地築窯の圧倒的窯姿をもつ美濃須衛窯には経験に近付くことは誰まなければならない。光仙房遺跡の窯跡群は、舞台遺跡窯跡の平坦面での構築方法考案が窯窓の初発と考えるが、窓の内部施設について舞台遺跡のそれには見られない特徴がある。それは、燃焼部両壁に施される石材の使用と一対の横孔である。燃焼部天井や焚口部の構造解明に今後一つの検討資料となろう。

#### 4. 須恵器生産の変容

光仙房遺跡や舞台遺跡の窯跡群のごく平野部に進出した須恵器窯の継続形態は不明だが、赤城南麓地帯に検出された上西原遺跡の須恵器窯や富田漆田遺跡の須恵器焼成遺構とされる窯形態の存在は古代終末期須恵器生産における生産体制や窯業技術の変遷とともに当該期社会における需要供給関係の変化を反映しているよう興味深い。さらには、いまだ生産跡すら明らかになっていない鐵輪使用的酸化炎焼成土器（土師質土器）の立地環境や窯体構造、さらには焼成技術などその出自・系譜追及の手立てとなることも期待される。

山間・山麓地帯に展開し、平安期に操業が及びわゆる伝統的な窯跡群との対比では、窯構築構造とともに生産器種の違いも看取される。平安期の操業になる光仙房・舞台遺跡窯跡では環類を中心とする供膳具主体に対し、当該期あるいはこれ以降の須恵器生産器種の動向は吉井下五反田窯の大量な甕類や月夜野須磨野支群での脚付き羽釜の生産に見られるとともに、生産器種の区別化と供給先の差別化や地域限定化を目指すことによる住み分け的な生産体制を指向していたとも考えられる。

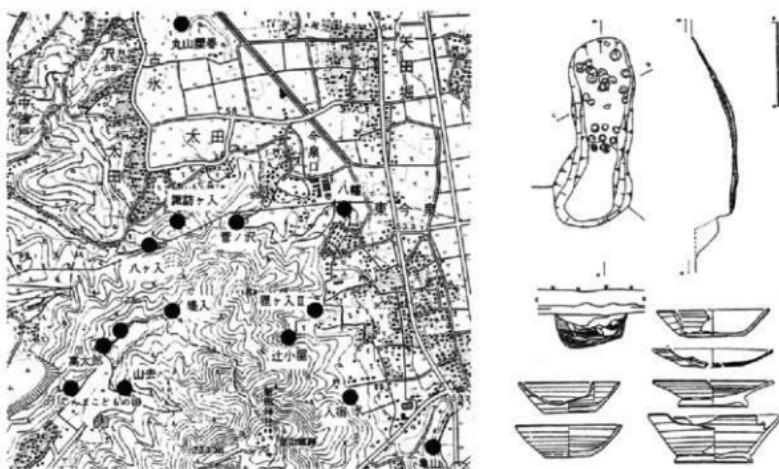
#### 5. 群馬県内の平安時代須恵器窯の概略

関東有数の窯業地域として知られる群馬県には既知の窯跡群や窯跡は多い。しかしながらそれらは表面採集による分布調査の成果によるところが大きい。発掘調査・報告による窯跡は少なく、ここでは平安時代と考えられる須恵器生産窯跡を限って管見に上った事例を概述する。窯跡群及び窯跡は、太田金山窯跡群丸山腰巻1号窯・秋間窯跡群二反田遺跡・下日野・金井窯跡群（藤岡窯跡群）・吉井窯跡群下五反田窯跡・月夜野窯跡群・前橋市上西原遺跡（赤城山南麓）・桐生市城上小友窯跡の諸例である。

**太田金山窯跡群丸山腰巻1号窯（第6図）** 金山丘陵の北縁から東縁にかけての一帯は菅ノ沢窯跡・八幡窯跡・辻小屋窯跡など古墳時代からの操業が知られているが近年、丘陵の北西部で7世紀代窯跡の発見・調査が行われ、6世紀から7世紀にかけての須恵器生産が明らかになりつつある。また、平安期の窯跡としては金山丘陵から北に連なる茶臼山丘陵東縁や両丘陵から派生した独立小丘陵の平坦地に接するような緩傾斜地に、丸山北須恵器窯跡や丸山腰巻1号窯などが調査されている。

丸山腰巻1号窯は幅広な窯尻から焼成部にかけて寸胴形状で、燃焼部に至り僅かに壁線が狭まり前底部で大きく膨らむ。窯体長2.23m、焼成部幅70cmの小規模窯である。床面は燃焼部から焼成部中央付近まで平坦で、窯尻に向かい26度の傾斜をなす。奥壁の立ち上がりは削平のためか床面傾斜にしたがっている。前底部は縦坑様で壁面の立ち上がりは垂直に近く、窯体周辺には灰原の形成は確認されていない。平面形状や前底部の構造などに限れば光仙房窯跡に共通点が多い。天井構築は、窯体内埋土中位に一部焼土化した白色粘土の堆積が見られることから天井架構材と推定されているが、堆積土中 Loam 層が介在し粘土は壁面に塗布された部材とも考えられる。操業年代は9世紀中頃とされ出土器種には环・皿・壇がある。なお近隣の丸山北須恵器窯は年代的にも近しいとされているが、窯体は丘陵傾斜面に構築され灰原も形成されているようである。

島田孝雄「丸山腰巻遺跡」[市内遺跡x vi] 太田市教育委員会 2000



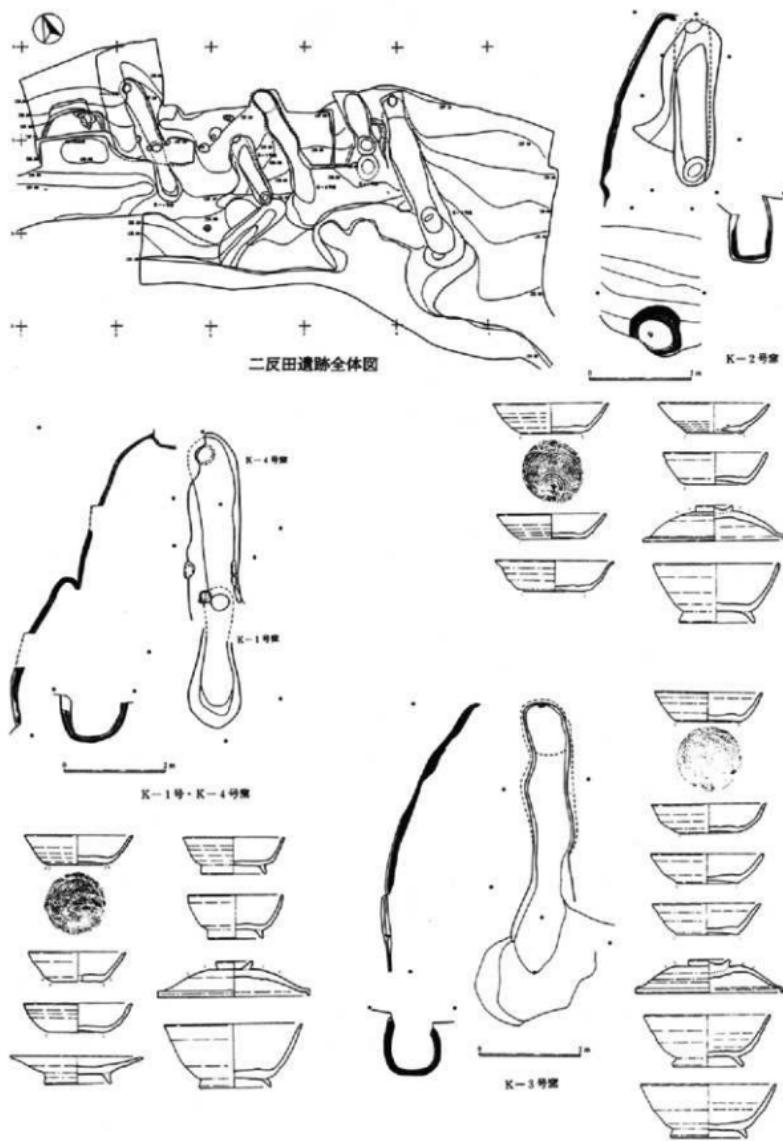
第6図 太田金山窯跡群。丸山腰巻1号窯『上野境』・『足利南部』1/25000 国土地理院

**秋間窯跡群二反田遺跡（第7・8・9図）** 秋間窯跡群は安中市域北縁を東西に延びる秋間丘陵地帯にあり、7世紀後半頃に開窯があるとされている。50余の支群が確認されているが調査例は少ない。当該窯跡群の須恵器製品は県内中央地域から西部地域にかけて広い供給域を網羅している。

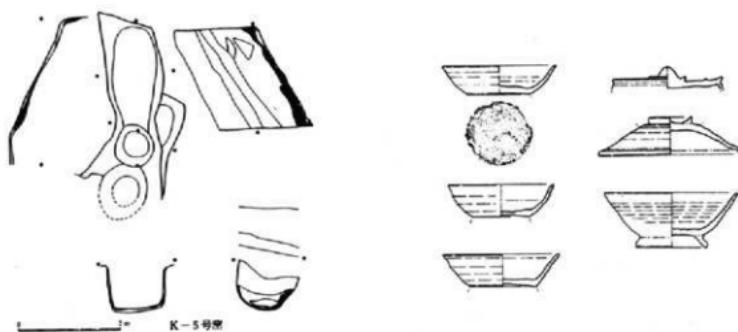
二反田遺跡は東西方向へ尾根・谷地形が波状に連なる地形帯の尾根東斜面にあり、6基の窯跡が調査されている。窯構造はいずれも深い地下式の窯で急傾斜面に構築されている。最小・最大規模の1号・6号窯の2基が8世紀代に属する。2号・4号窯は小規模で寸胴形状をなすが4号窯燃烧部両壁には2・3の石が補強材として用いられる。奥壁は煙道部にかけて強く湾曲して立ち上がる。2号窯は全長3.35m・最大幅0.95m。4号窯は4m以上・最大幅1.05mである。ともに煙道孔は30cm前後である。3号窯は規模が大きく全長5.35m・最大幅1.05m。燃烧部にやや絞り込みが見られるが寸胴形状で焼成部壁線は緩く蛇行する。焚口部と燃烧部の境には段差を有するようである。5号窯は幅広な窯尻と胴張り気味の焼成部で燃烧部をやや絞り込んでいる。前底部には径1.0mほどの落ち込みを作る。全長3.95m・最大幅1.4m。焼成器種は壺・皿・蓋・塊などで構成されている。

千田茂雄 「二反田遺跡」安中市埋蔵文化財発掘調査団 1998

第7図 秋間窯跡群二反田遺跡・周辺窯跡分布図  
『下室田』1/25000 国土地理院



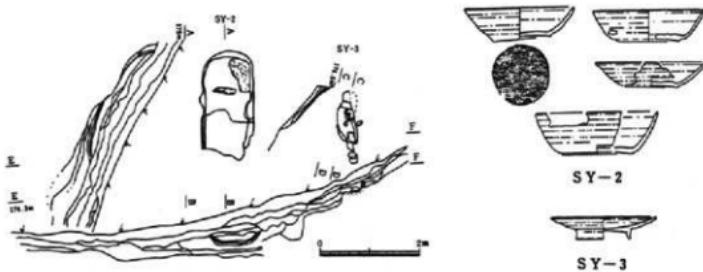
第8図 二反田遺跡窯跡(1)



第9図 二反田遺跡窯跡(2)

**藤岡窯跡群下日野・金井窯跡 (第10・11図)** 藤岡窯跡群は藤岡市の西南、御荷鉢山系裾部が作り出す多くの丘陵支谷に占地する。金山・中原・鉢沢などの支群が知られる。下日野・金井窯跡は鉢沢支群に属し、16基の須恵器窯跡が調査されている。それらのうち、7世紀末頃を初源とするが平安期に属する窯跡は調査された内で半数以上に及ぶと考えられる。当該期の窯跡は市史掲載の2基であるが、部分的な遺存状態で詳細は不明である。SY-2号窯は幅広な窯尻で焼成部への変化は無い。床面の傾斜度は30度前後で急になる。SY-3号窯はかなり小規模で、両者とも地下式の窯窓である。焼成器種には壺・無高台塊・皿などがある。

古郡正志「藤岡市下日野・金井窯跡群」『藤岡市史』資料編 原始・古代・中世 1993



第10図 藤岡市下日野・金井窯跡群 SY-2・SY-3 窯跡

**吉井窯跡群下五反田窯 (第11・12図)** 吉井窯跡群は御荷鉢山系に連続する丘陵地帯崖線に立地し藤岡窯跡群との境域を分かちがたい地域にある。窯跡群の開窯は古墳時代にあると考えられているが、現状では8世紀初頭の末沢窯が最も旧く1基のみ調査されているが周辺の遺物散乱状況からはさらに2・3基が存在したと想定されている。吉井窯跡群は造瓦組織の再編に由来し9世紀代には上野最大の窯跡群と考えられているが調査例が少なく実態は不明である。

下五反田窯跡は御荷鉢山系南の独立丘陵に立地する。調査された窯は2基で他に1基が存在したとされる。

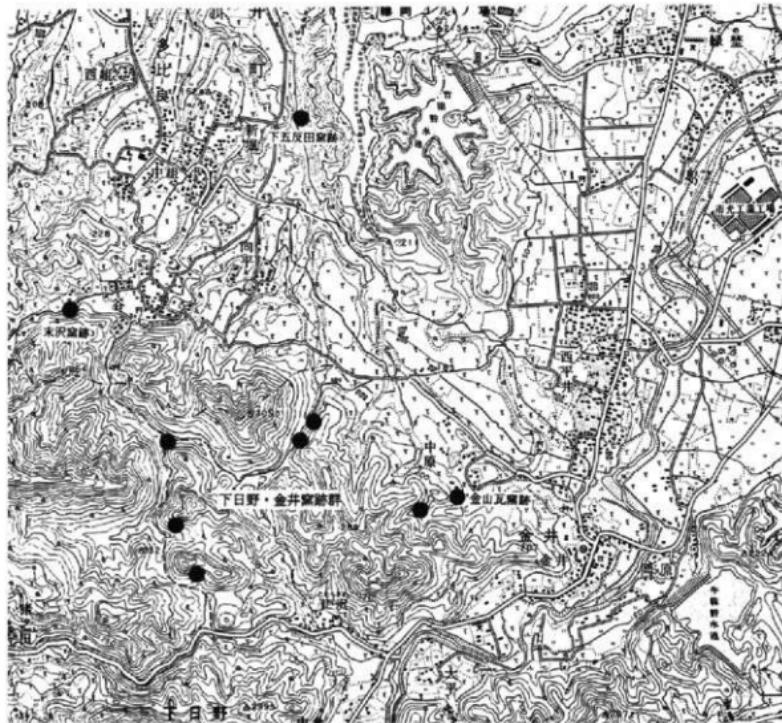
窯構造は地下式で、瓦の出土もあるが生産主体は須恵器である。焼成器種の中で壺・塊類は少量で大・中・小の甕類が大半を占める。9世紀末10世紀の年代が考えられている。

1号窯は寸胴な焼成部で最大幅をここに持つ。窯尻は括れてやや細まって突出し、直立した煙道を作る。燃焼部の壁線は僅かに細まるが、燃焼部との床面傾斜に特段の変化は無く15度ほどの緩い傾斜である。燃焼部両壁には瓦と寸莎入り粘土による修復補強が施され2度の操作が認められる。全長7.0m、焼成部幅1.8m。

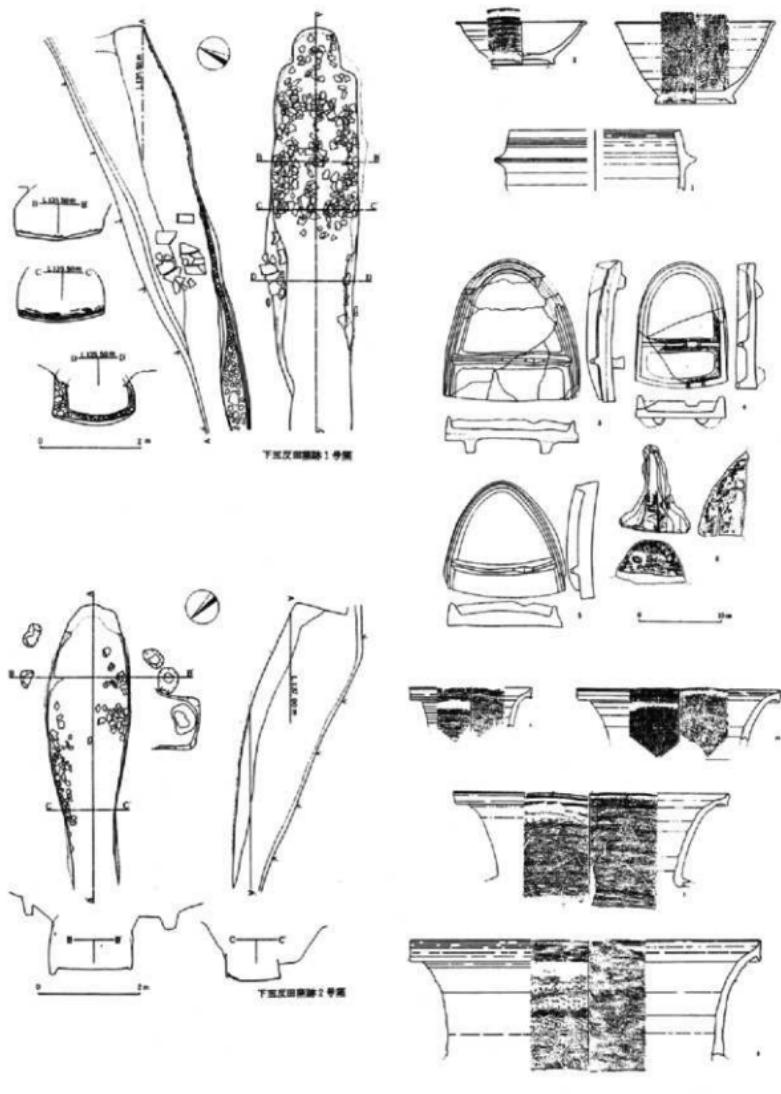
2号窯は胴張りの焼成部から緩やかにすぼまって窯尻は丸く閉じ煙道孔は直立する。燃焼部は明瞭に絞り込まれるが壁線の変化は滑らかである。床面は焼成部中央付近より窯尻に向かい傾斜が強まるが絶じて緩く、15度ほどである。全長5.5m・燃焼部1.7mである。

「群馬県吉井町下五反田・末沢窯跡」『考古学研究室発掘調査報告書』考古学研究室報告甲種第3冊

昭和59年 国士館大学文学部考古学研究室



第11図 藤岡・吉井窯跡群 「藤岡」 1/25000 國土地理院

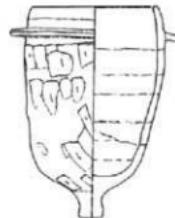


第12図 下五反田窯跡 1号・2号窯跡

**利根郡月夜野窯跡群（第13図）** 月夜野窯跡群は7～8の支群が知られ、利根川を眼下に望む右岸河岸段丘の西縁に形成される小支流の開析谷地帯に立地する。7世紀末から8世紀初頭の開窯と推定されるが、現在確実視されるのは8世紀中葉の沢入窯からである。他、洞・深沢・須磨野・真沢・水沼等の支群がある。調査によって窯体の明らかな例は洞窯跡群の3基のみである。その製品には東海地方窯投窯に類似するとの指摘もあるが、窯構造的にはその影響は認められない。平安期操業と考えられる深沢・須磨野・真沢・水沼支群については9世紀から11世紀頃までの操業で、胴上部から笠削りを施すいわゆる月夜野型羽釜や脚付きの羽釜に特徴がある。それらの分布は北毛地域を中心とした様相が強く極めて限局的な需要・供給関係が想定できる。利根郡という地理的視界も手伝ってのことやも知れないが、上野国における一群一僚制的な窯業生産体制が展開した窯跡群として考えてみる必要もある。

井上唯雄 「群馬県利根郡月夜野町洞窯跡発掘調査報告」月夜野町教育委員会 昭和48年

大江正行・中沢悟 「月夜野古窯跡の成立とその背景」「月夜野古窯跡群」月夜野町教育委員会 1985



須磨野A支群出土遺物

洞窯跡は月夜野窯跡群で調査された数少ない窯跡である。  
奈良末から平安初期の操業とされる。  
生産器種には再利用すべき要素が多く、ここでの掲載はしていない。

第13図 月夜野窯跡群「猿ヶ京」1/25000 国土地理院

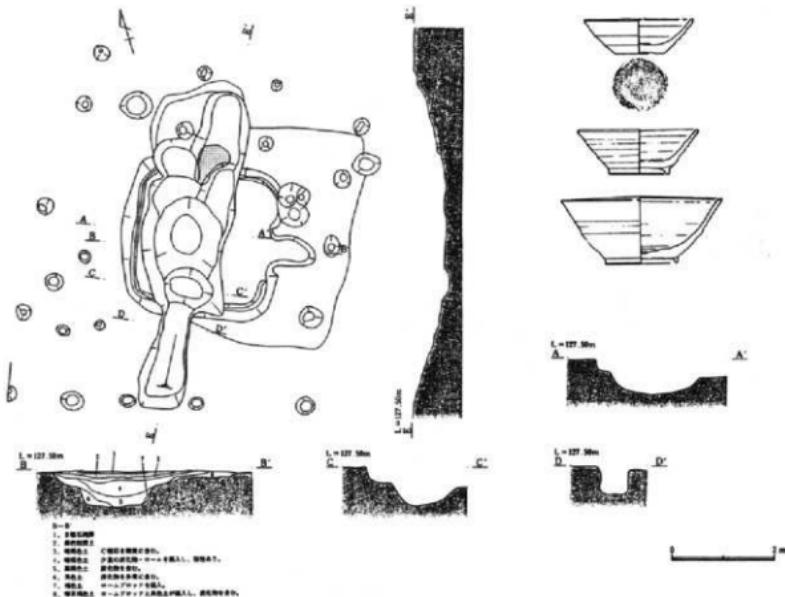
**赤城山南麓地域上西原遺跡（前橋市）（第14図）** 遺跡周辺は赤城山南麓を南流する中小河川によって分断された洪積台地と開析流域からなる。洪積台地上に立地する上西原遺跡では、溝と柵列で区画された基壇建物をもつ寺院跡と掘立柱建物群からなる官衙的な構造群と集落が調査されている。

須恵器窯とされる遺構は、平坦面にあり竪穴住居跡の窓を利用して構築される。中央の燃焼部（前底部

## 第2章 窯跡の概要

か) から焼成部はそれぞれ南北に延び一線となり作り替えがなされた結果とされる。床面は13度程度の傾斜をもつ。燃焼部とする中央部の長さは1.7m、深さ70cm、北側焼成部は長さ1.5m・幅1.0m、南側は長さ2.0m・幅90cmである。天井部など窯構造には不明な点が多いが、周辺の小穴群から上屋施設の存在が考えられている。遺物は壺・塊類で9世紀後半から10世紀代の年代が想定されている。官衙的な遺構群とは多少年代に差があり、やや時代が下って形成された集落跡への供給を目的とした可能性が高い。

松田 猛「上西原遺跡」群馬県教育委員会 1999



第14図 上西原遺跡須恵器窯

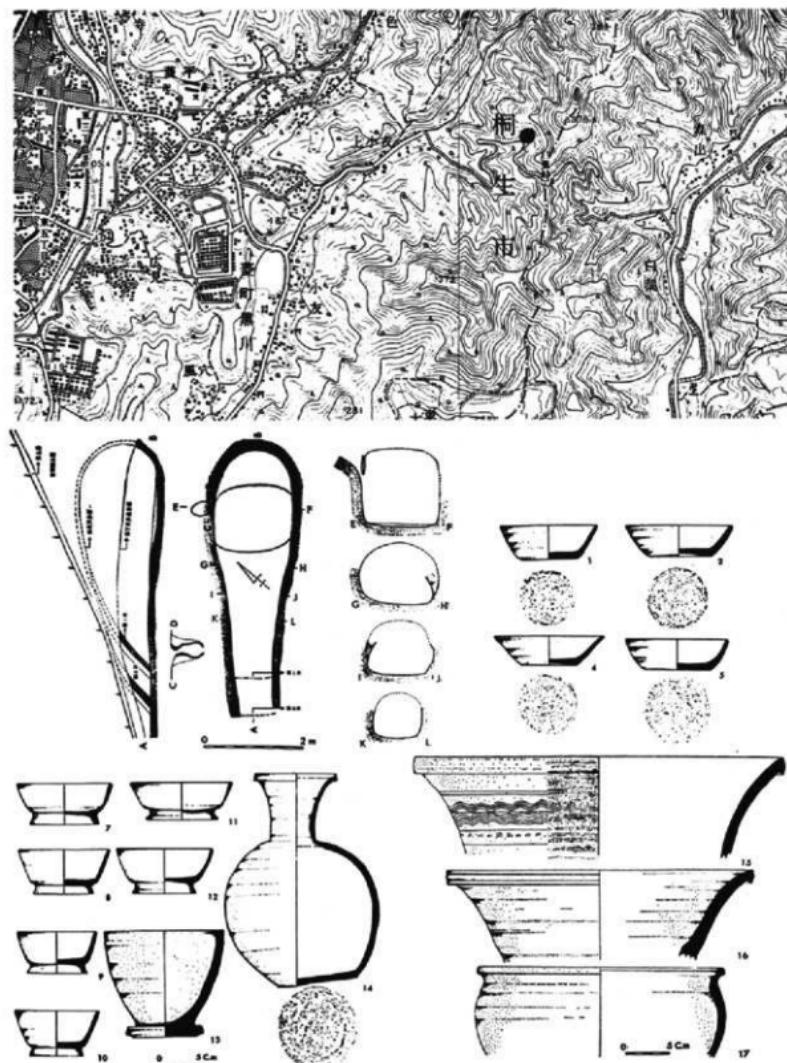
桐生市上小友窯跡（第15図） 上小友窯跡は桐生市街地東方の菱町、栃木県足利市との県境白葉峠近くにある。桐生川の支流である黒川の支谷西南面急傾斜地に構築される。黒川流域の支谷には3～5地点に窯跡の存在が知られているが調査が及んでいないため明瞭ではない。当上小友窯跡のある谷筋にはさらに3地点に窯跡が確認されているとされる。

上小友窯跡は地下式窑窓で弧状に張る窑尻から窑体形は杓文字状を成す。全長5.3m、焼成部最大幅1.6m天井部最高は1.5mを測る。当初壁面などは地山掘り抜きであるが、部分的改窯がされ寸莎入り粘土も使用されたようである。窑構造に特殊性が見られ、窑底面がほぼ水平であること。また、煙道孔は奥壁につながらずに焼成部右壁、底面より1mの高さより側壁煙道の形態を作り、炭窯の構造に近い。遺物は壺・塊・瓶・甕類など多種に及ぶが、壺底部切り離し技法に回転糸切りと箆切りの二技法が混在する。窑構造、出土遺物とも年代を含め検討課題の多い窑跡である。

第1節 県内の須恵器窯跡概要

坂詰秀一 「上野・上小友窯跡」「立正大学文学部論叢」32 立正大学文学部 43年

大江正行 「群馬県における古代窯跡群の背景」「群馬文化」199 群馬県地域文化研究協議会 昭和59年7月



第15図 桐生上小友窯跡、「桐生」・「足利北部」1/25000 國土地理院

## 第2節 光仙房遺跡窯跡群の調査経過と概要

### 1. 調査経過

1998年5月28日

光仙房遺跡B区において性格不明遺構の、Loam層上面では僅かにくすんだ暗褐色土の広がりが認められた。当初段階では暗褐色土の範囲形状は不明確で、周辺を含め精査の必要があった。遺構の存否を含め遺構種や形状をより明確にするため、Loam層をさらに約30cm削平することを決定した。

6月

形状確認の結果、径3m程度の円形部から北西方向へ放射状に窯体部が延びる複数の須恵器窯跡群と判明した。さらに反対方向の南へも延びる窯体が存在し、全体形状は南北に長い窯体軸を中心四方八方へ構築がなされていることが明らかになった。窯跡周辺では灰原らしき形成はなく、遺物も須恵器片が耕作土中に少量が認められたに過ぎない。このような現象は、1996年の調査になる東方に隣接した舞台遺跡窯跡群中の1号窯跡の在り方に酷似していた。窯跡を含め周辺には網の目に掘られた畑のさく状耕作痕が著しく、遺存の度合が危ぶまれた。窯跡はおよそ11基が存在すると考えられたが、各窯跡単体形状はなお不明部分が多い。北西方向に放射状で窯体を延ばす1～5号窯のうち、1・2・3号窯跡の新旧関係について平面観察からおよその把握が可能になった。

9号窯は他窯との切り合いが小さく、埋土観察帯を設定し掘り下げを開始する。埋土中より遺物出土があり図化及び写真撮影。遺物取り上げ。小型品壺類が目立った。

9号窯の調査と平行して、1・2号窯の埋土断ち割りを開始する。前庭部は1・2・3・4・5号窯がほぼ同じ位置にあり、新旧関係の認定は土層観察に負うところが大きいと予想される。土層観察帯の設定方法に苦慮する。

7月

1号窯燃焼部断ち割り。下位より2号窯の床面検出。9号窯の前庭部が13号窯の窯体に僅か重複することが判明。両者の新旧は13号の壁面が残らず9号窯が新しい可能性が高い。

4・7・5号窯土層図実測。5号窯に2号窯の前庭部掘り込みあり。新2号窯、旧5号窯。2号窯床埋土(Loam)上に4号窯灰層がある。各窯跡間の切り合いは相対に止まらず連鎖的な状況を呈している。このため重複新旧の見極めは土層観察に頼らざるを得ず、さらに土層観察帯は一貫性に欠ける任意の設定の場面を多くせざるを得なかった。

新旧関係 (新) 1号→4号→2号→3号 (旧)

→5号 (旧)

(新) 10号→13号 (旧)

→11号 (旧)などの見解に至ったが、かなりの時間を要した。なお新旧関係の決定には慎重な検討をする。

存在の知られなかった6号窯を検出した。当窯尻部の僅かな部分の残存のため、全容は不明。

10号窯の床面断ち割り、床面は3枚を確認した。

4号窯前庭部土層実測。4号窯前庭部付近に窯体壁面を確認する。未検出の窯跡で8号窯とする。

8月

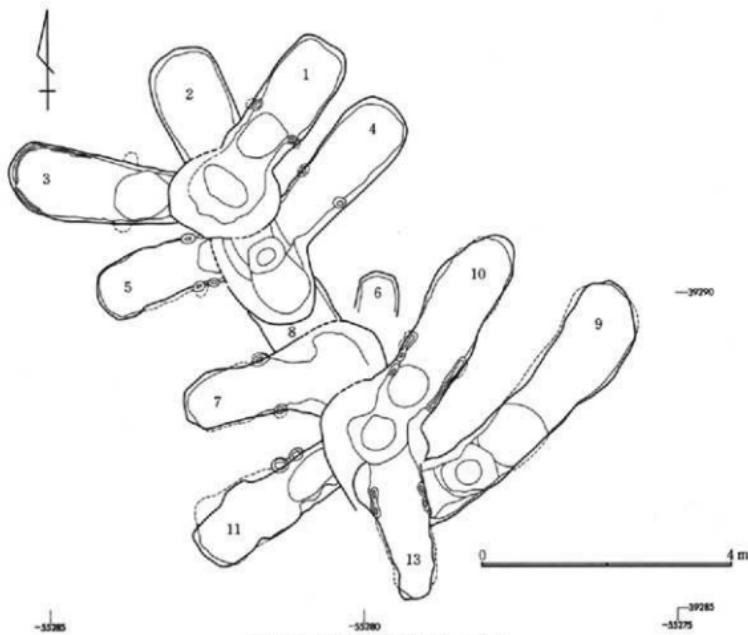
4号窯灰原(前庭部)精査。13号窯前庭部北限土層実測。灰層は13号・7号・11号窯のいずれに属するか

## 第2節 光仙房遺跡窯跡群の調査経過と概要

は不明。新旧確認のため11号・7号窯体前部分通しの土層面を設定。7号窯が新しいと判明。11号窯埋土は切り込み、11号側の壁面に石を構築材として使用。後込めには灰色粘土を用いている。8号窯体の横断面上面を設定。8号窯の天井は酸化層と還元層が帶層状態で窯体内に堆積し一気の崩落を思わせる。人為的な落下であろうか。通常は両者が混在したようである。4号窯遺物取り上げ。全景写真撮影。床面断ち割り作業。床面は1枚のみ。7号窯前部断ち割りで床面を確認する。7号窯は8号窯に直行する位置にある。8号窯床は7号窯焚口部の下に残り、7号窯はこの部分を瓦を敷き床面としていた。なお、瓦と8号窯床面との間には白色粘土の薄層をもって埋めてある。これをもって、(新)7号→8号(旧)を確認した。8号窯体の埋土を掘り込んで構築したための補強と考えられる。7号窯床面近くに角礫がある。8号窯に帰属する可能性もあり要検討。10号窯燃烧部両側壁部に壁面補強と考えられる石設置痕3石一对で検出。石上方には壁面を穿つ凹みを確認した。燃烧部天井架構のための施設とも考えられる。窯構造の新知見になろう。

7号窯遺物出土状況写真・実測。焚口部床面に薙灰状白灰が残り、焼成技術に関する所業の可能性があり、成分分析が必要である。6号窯尻部写真撮影(全景)。5号窯断ち割り。7号窯全景写真撮影。2号窯前部断ち割り。8号窯内崩落土上に4・2・5号窯の灰層が乗る。いずれも8号窯より新しい。11号窯掘り下げ。2号窯床面精査。5号窯断面実測。10号窯の燃烧部両壁の知見を得て、各窯跡燃烧部壁面精査を実施。すべてに一对の凹部が穿たれる。燃烧部天井架構にかかる知見として重要。3号窯精査。操業後の清掃が行われ、壁面整備直前と思われる壁下が溝状にくぼむ僅かな痕跡がある。床面には灰層・遺物など皆無に近

-39295



第16図 光仙房窯跡全体図 1 / 80

## 第2章 窯跡の概要

く、唯一焼成部と焼成部の境界床面に半欠の土師器壺1個体分がぼつねんと検出された。土師器は床面に接していたが、堆積層などに関する出土状況からは3号窯の焼成にかかる所産でないことは明らかである。二次的な流れ込みや祭祀的な意味合いも想定されたが存在そのものに遡る遺物である。当窯は構築後で、なお操業前の空焚きの状況かと考えたが、前段操業後の清掃がなされた可能性も検討する必要がある。

3・2・11号窯写真撮影。2号窯床面遺物・11号窯焼成部遺物とりあげ。11号窯床面断ち割り。床面は1枚のみ確認。8号窯断ち割り土層実測。床面遺物検出。2号窯前庭部によって切られる。1・2・3・4・9・10号窯等高線図実測。11号窯平面実測。

5・7・11・13号窯等高線図実測。8号窯床面遺物出土状況写真・実測取り上げ。全景写真、平面実測、床面断ち割りで床面2枚を確認。

8月27日

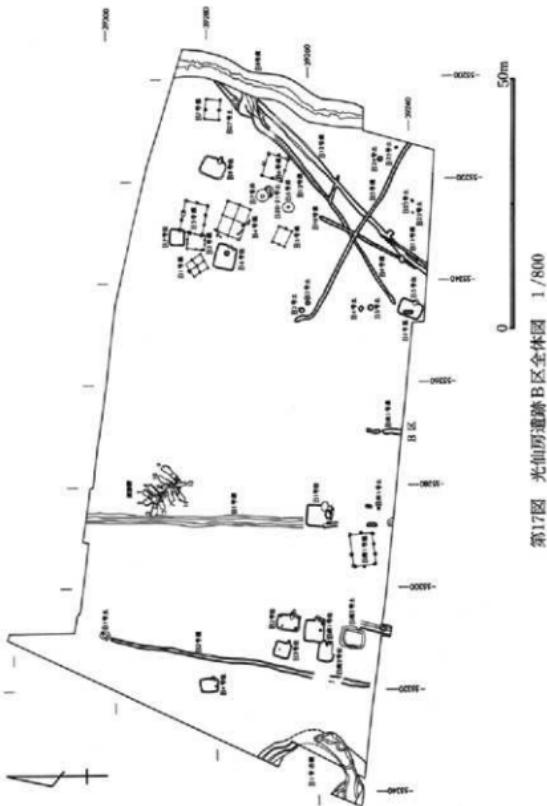
窯跡群全景写真撮影。ラジコンヘリおよび高所作業車を使用した。

本日をもって光仙房遺跡窯跡群の全調査は終了した。

## 2. 光仙房遺跡窯跡群の概要

光仙房遺跡は伊勢崎市域の北東部三和町にあり、佐波郡赤堀町に接している。赤城山南麓に形成される大間々肩状地の西縁で、周辺は広範な平坦地形をなす。遺跡地は赤城山に源を発する柏川中流域左岸の洪積台地上に立地する。東方には角弥清水・男井戸と呼ばれる湧水地があり、これらによって開拓された谷地地形が南に開口して形成されている。

光仙房遺跡の窯跡群は柏川とこの底湿地化した谷地に挟まれた標高89.00～88.00mのLoam低台地上に営まれている。現況の地勢は、台地そのものは緩く北から南に下っているが、窯跡群の立地点はほ



第17図 光仙房遺跡B区全体図 1/800

は平坦と言って良く、検出は Loam 面であった。既報告になる舞台遺跡窯跡群は（『舞台遺跡（1）』群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001年）当光仙房遺跡窯跡群とは異なり、主には谷地縁辺部の傾斜面に構築されている。光仙房遺跡窯跡群の検出当初は形状の捕えにくい染み状の落ち込みとなっており、窯跡としての認識までには多少の時間を要した。窯跡群は窯尻部のみの残存 1基を加え総数12基からなるが、操業の当初はおそらく 1基、ないしは 2基程度の稼働から始まりそのような生産体制を保ちつつ、さほどの時間差をもたず廃絶と築窯を繰り返していたと考えられ、連鎖的な重複関係を作りだしている。

窯体の構築方法は、平坦地形に前庭部にあたる縦穴を 2~3m の深さに掘り、地山 Loam 層をこの縦穴底面から傾斜をつけてトンネル状に掘り抜いて經道部に貫通させる。立地地形からは舞台遺跡窯跡群中の平坦部に単独で築窯されていた 1号窯跡と同様な方法であるとしてよいであろう。当窯跡群でのその後の展開は、天井などの崩落によりその窯が使用不能になると前庭部や廃絶窯体の窪みを前底部を利用して窯体方向を変えて作り替えが行われたものであると考えられる。現状に見る窯跡群全体像の集中的な放射状形態は、窯構築に際してその方位には何らの規制も存在していないようである。また、このような窯跡群の全体像は極めて継続的な窯構築と操業が行われたことを示唆している。（第16図）

窯跡群の見かけ概観的な全体形状は、真北より西へ25°に振れる南北軸線上に 2号・8号・13号窯の窯体長軸が連なり一線をなしている。この連続する 3基の窯体を軸として、直交にちかく左右の側へ他の窯体が延びる。西側は北から 3号・5号・7号・11号が、東側には 1号・4号・6号・10号・9号窯が配置する。ただし、このような配置は窯跡群の平面的でお見かけ上の形状であることは上に述べた通りである。したがって、必ずしも群中における構築の順番が 2号・8号・13号の早・遅を意味しないことは言うまでもない。なお加えて、12基の窯跡全体の位置関係からは北群と南群に分離されるような印象も受ける。両群間には窯体形状や構築の深浅に多少の差異が存在する。北群に擬される 1~5号窯は南群の 9~11・13号窯に比べて掘り込みが浅く、やや窯体長の縮小と窯尻から焼成部にかけては幅広になる傾向がある。これらがいかなる要因で生じたものかについては、窯跡重複からみた群形成の時間的経過や、各窯跡の出土遺物形態・器種組成相互の検討を通して明らかにすることが必要と考える。

窯跡の形態は基本的には地下式窯窓で無階無段形式としてよいであろう（註1）。窯体形は幅広な窯尻から僅かに膨らむ焼成部を作り、ほとんど絞り込みのないままで胴に近く燃焼部へと続く。前庭部はすり鉢状の掘形をもち基本的には閉塞するようである。重複連鎖の多くはこの前庭部で生じている。各窯跡の規模は一律ではなく、窯体全長は大型のもので約 7m、最小規模は 3.5m である。築窯が繰り返される操業後半期へ移行するにしたがってその規模が縮小していくようである。窯体の縮小に伴っての直接の影響は焼成部の長さに反映される。これに対し、床幅は約 80cm、焼成部での天井部の高さは 60cm 程度ではば一定している。焼成部床面の傾斜度は、20~25度の範囲にあり見た目より斜度は比較的きつい。前記したが窯跡群の立地する現況は標高 89.00~88.00m の低台地で、窯跡を確認した Loam 面の標高値はおよそ 87m、調査面の標高値は 86.5m 前後を平均とする。

灰原は、12基ある窯体群の周辺外縁には形成された痕跡ではなく、平面形検出時においても烟作用の狹深な溝状耕土中に僅かな須恵器小片を認めたにすぎない。現地表や窯体確認面までの土中においてさえ窯跡焼成品や炭化物等の残欠を見いだせない現象は舞台遺跡 1号窯跡に全く酷似するものである。このことは前載『舞台遺跡（1）』では削平によって消失したものと考えざるを得ないとしたが、当窯跡群検出経緯の初期段階では窯体形状の捕え難い染み状で確認され、調査時には前庭部を含む窯体はさほどの削平を受けていない印象を受けた。竪坑を利用した地下式窯窓という窯構築とその構造上、灰原は元来窯体においては形成されず

## 第2章 窯跡の概要

前庭部内で処理されていた可能性もあり、舞台遺跡1号窯跡の灰原についてもそのように理解すべきかもしれない。しかし、遺跡内で検出された古墳壇丘の平坦地化からは相当規模で旧地表の削平が行われていることは明らかであり、灰原の形成についてはなお検討課題としておきたい。

生産器種では圧倒的多数を环類が占め、蓋・塊・皿の他僅かながらの甕・広口鉢・小型瓶類が生産されている。なお、瓦の出土もあるが二次被熱の痕跡をほとんどの資料に観察できることから、窯体の補強・修復などのため外部から搬入されたと考えられ、当窯跡群は須恵器専業窯とすることができる。舞台遺跡窯跡群との生産器種の違いは、皿形の器種が加わること僅か1点ながら耳環の存在が確認され、両窯跡群での大きな差異となっている。この生産器種揃いの変化は両者間の時間的な経過を反映しており、光仙房遺跡窯跡群は舞台遺跡窯跡群に後出すると考えられる。しかし現時点で、群馬県における歴史時代土器研究の考古学的時間尺認識水準では、少なくとも舞台遺跡窯跡群の終焉と光仙房遺跡窯跡群の操業開始に大きな空白期間を設定することは考えられない。また、当窯跡群自体の操業期間についても俄かには決めがたいが、およそ10年から20年を限度にこれから大きく逸脱する年月は現在のところ考えていない。

窯跡に関連づけられる遺構には380余基の粘土採掘土坑群がある。(光仙房遺跡 集落編に報告) 溝水起源の開析谷によって形成された舌状低台地縁辺部にあり、窯跡群より東方に約250mの地点である。しかし、これら採掘土坑群は光仙房遺跡や舞台遺跡の窯跡群が須恵器製作に当たって粘土材採取の場として直結していたものかどうかは不明である。土坑内や周辺からは須恵器窯に関連する時代の遺物はほとんど確認されていない。出土遺物の多くは古墳時代後期に属するもので占められる。しかし、採掘土坑粘土と須恵器窯出土遺物の胎土分析からは沼沢湿地付着生指標種群の珪藻化石を特徴的に含有する同一粘土素材である可能性が高い結果が得られている。いずれにしても、須恵器製作にかかる粘土素材は堆積環境の類似する近隣から調達したものと考えられる。須恵器製作工人や構成員の工房および居住跡は、窯跡出土遺物などとの形状・技法・計測値などの比較から年代観を勘案すれば3地点に分散して認められる。3地点は窯跡群を視座にすれば、南方に4軒・近東方に3軒・遠東方に7軒の各地点である。この地点分散型としてとらえられるあり方は、舞台遺跡に見られる統一的集合配置とかなり様相を異にしている。両窯跡群にはその形成に関わる構成員の構造的側面または形成過程に異なった要因が存在する可能性も考慮しなければならない。(第17図)

(注1) 須恵器窯の窯体構造(構築)の用語については従来、地下式・半地下式・地上式に分類されてきた。近年、窯体構造に関する知見や研究視点の深化に伴ってよりこまかに分類・用語案が提唱されている。

窯体構造(構築)用語案 望月裕司「須恵器窯構造雑感」『須恵器の技術と系譜—豊科、信濃、そして日本列島—』窯跡研究会第2回シンポジウム発表要旨集 窯跡研究会 1999.9より転載

筆者分類案	大川案	窯体構築復元案
掘り抜き式	地下式	焚口から排煙孔まで地山を深く掘り抜いて壁・天井を作る。
	焼成部掘り抜き式	地下式 焚口から燃焼部は仮設天井架構で、焼成部から排煙孔までを掘り抜き構造とする。
	局部天井架構式	地下式 窯体掘削方法は掘り抜きだが、窯体耐震保のため部分的に天井架構するもの。
天井架構式	局部掘り抜き式	半地下式 掘削方法は地表から行う天井架構だが、部分的に掘り抜きとして強度をだすもの。
	地下天井架構式	半地下式 窯体地下深くあるが、掘り抜きではなく、地表から窓に掘り、天井頂上ののみ架構。
	半地下天井架構式	半地下式 窯体地下は地山を調査に掘って作り、壁の上方から天井へかけて架構するもの。
	半地上天井架構式	半地下式 地山掘り込み浅く、壁～天井を架構するもので、かま焼上半が地上に出る構造。
	地上窯体構築式	ほとんど地山掘り込みを伴わない地上で窯体を構築する構造もの。

これらの分類はやや理論的な面が優先されているようで、実際の調査現場での検証は難しいと思われる。しかし、調査方法や視点には絶えざる研鑽が必要であり、大いに努力目標として心すべき分類であろう。

## 第3章 窯跡と出土遺物

### 第1節 窯跡

光仙房遺跡窯跡群は12基で構成されている。群の成り立ちは局所集中的な築窯がなされ、個々の窯跡は窯体ないしは前庭部において大なり小なりの重複関係にある。第2章第2節で述べた外観的な配置は光仙房窯跡群に特異な印象を与える要素の一つになっている。8号窯を中心とする長軸線上を南と北に伸びる2号窯と13号窯の直線的な窯体配置を窯底を利用して群形成の過程を考えるに示唆的であるという期待を抱かせる。また、12基の配置関係から南群・北群に分離できるのではないかとの見通しは、南北一直線状に長軸を連ねる2号・8号・13号窯のうち中央8号窯体を分断して北側左右対に構築される4号・5号と南左側の7号窯との間には隣接する窯跡同士にはない間隔が存在するという理由が第一である。さらにこうした見かけ上の区別を個々の窯跡そのものに反映させた場合には、構築の深・浅や規模、形状などに微妙な差違が生じていることがわかる。南・北群としての分離はかなり現実味を帯びたものとして考えているが、その主たる原因は窯跡操業の担い手が外的な接触や参入などによって変化すると言うことではなく、また、操業の経緯に大きな時間的絶続が生じた結果とも思えない。おそらくは須恵器生産行為にかかる同一集団内部での部分的世代交代など協業構成員構造における自然的ともいえる時間の推移の中で理解・解消されるのではないかと考えている。

窯跡群の平面的確認での新旧の切り合いは見極め難く、この段階での前後関係は通観することはできなかった。幸うして1号・9号窯が新しい一群であることが看取できた。ただし両者の間に重複関係ではなく、窯跡群の外見的配置では前者が北群に、後者は南群に属している。北群での1号窯については平面的のみならず、土層断面の切り合い事象でも最終段階のものである査証は得られた。しかし、9号窯については間接的な連鎖重複もあり、最も後出であるという確証はない。想定される窯跡群の全体的形成過程では、おそらく操業を停止した既存窯体の一部（光仙房遺跡では基本的に前庭部を繰り返し使用する）を利用しつつ築窯する方法を取りため、前庭部を含む窯体の全体形を残しているものは少ない。ほぼその形状の全貌を知り得たのは、1・4・9号窯に過ぎない。また、新旧関係についても2者間の単純重複ではなくその認定には困難をきわめた。狭小な前庭部分を共用とする放射状の築窯形態は土層観察溝・帯による層位の帰属も明瞭にはたどり得ない場合が多く、先出する複数の窯と最終段階窯の関係のみが認識できた事例もあった。窯跡の記述に当たっては調査時に付した通番にしたがっており、窯跡の新旧に基づくものではない。

窯体構造や構築の技術については、興味深い共通する特徴的な2・3の事項が抽出される。ただし燃焼部から前底部にかけて重複による消失の著しい2号窯と窯体遺存部分の少ない6号窯・8号窯は不明な部分が多く、特徴項目を全て満たしているわけではない。特に6号窯は残存部位が窯尻の僅かな範囲のため存在認定に止まる。特徴の1つは天井部の構築方法である。少なくとも焼成部位の1m強範囲の天井は掘り抜きであり、当窯跡群では通有の築窯技術としてよい。2つは石材の大きさや数量には多少の過多は見られるものの燃焼部から焚口にかけての両壁面に石材が使用されることである。なお、全ての窯跡に石そのものが残されることはないのであるが、いずれにも設置痕が明瞭に検出されている事実がある。3つには燃焼部両壁面に穿たれる一対の横孔である。穿つ位置は燃焼部の最も焼成部寄りに設置された石材の上位で、少なくとも

この部位の床面・壁面が検出されたすべての窯に設けられ、この原則に違う例はない。この横孔の機能については明らかではないが、壁面に付設される石材が壁面保護・補強機能だけでなく両者を考え合わせたとき、燃焼部の天井架構に関連する施設としての機能も想定できよう。窯体の部位区分の中で焼成部と燃焼部については、上述した壁石（設置の痕跡）ないしは壁面に穿たれた横孔が指標になる。また、窑尻煙道孔の窯体内天井に穿たれる孔径は崩落した基盤 Loam 層の位置から 40~50cm と考えられ、窯跡群での状況はほぼ似通った規模となっている。窯体の規模を考えた場合には相対的にやや大きすぎる印象を受ける。煙道孔の地上に達するまで、あるいは地上での構造は定かでないが、径の絞り込みなどの工夫があったものと考えられる。これら窯構造についての上記類似共通事象は窯跡群全体の表層的な外観形状とともに、群形成の共時的時間経過や工人構成員の築窯技術に対する一系性などを考えるにあたってより示唆に富むものである。

## 1. 窯跡各説

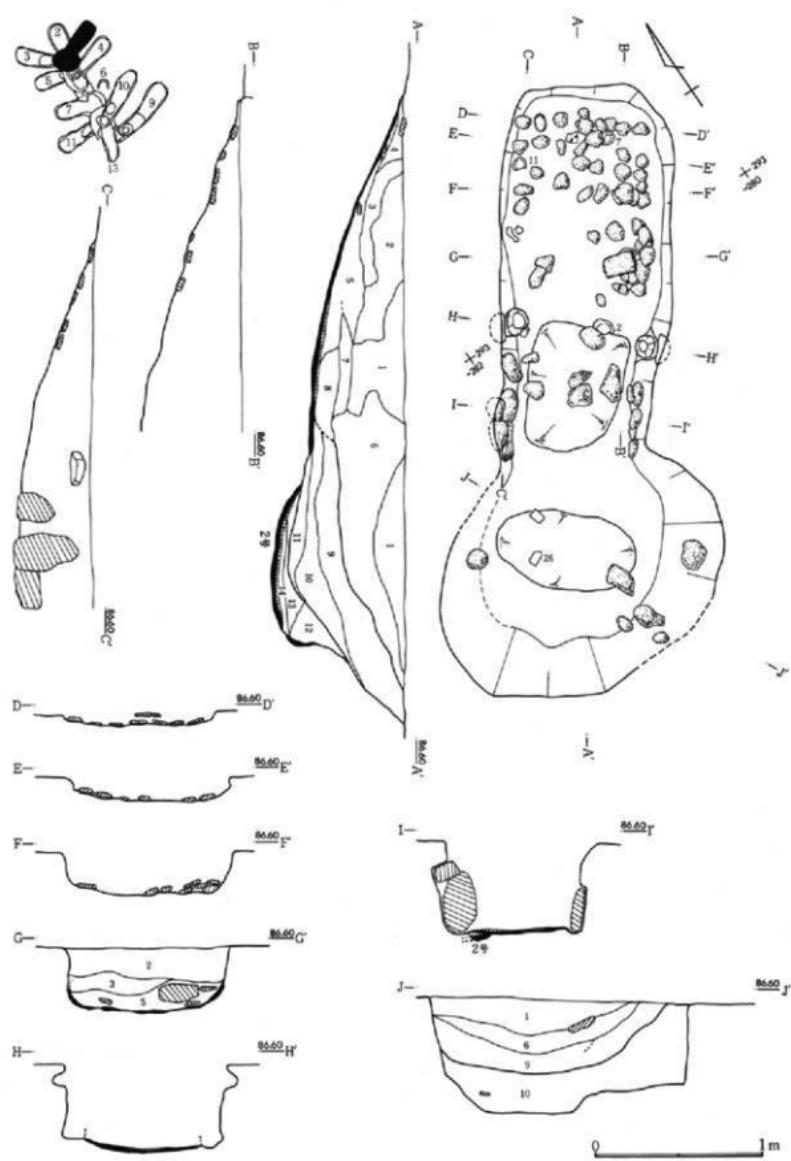
### 1号窯跡（第18・19図 P.L. 3・4）

窯体の埋土に崩落地山 Loam 帯があり、地下式窯である。平面的には 2・3・4・5・8 号窯と重複するが、直接の切り合い関係を土層断面で証明できたのは 2 号窯と 4 号窯である。北群では最終段階の窯で、西側に 2 号窯が、東側に 4 号窯が位置する。

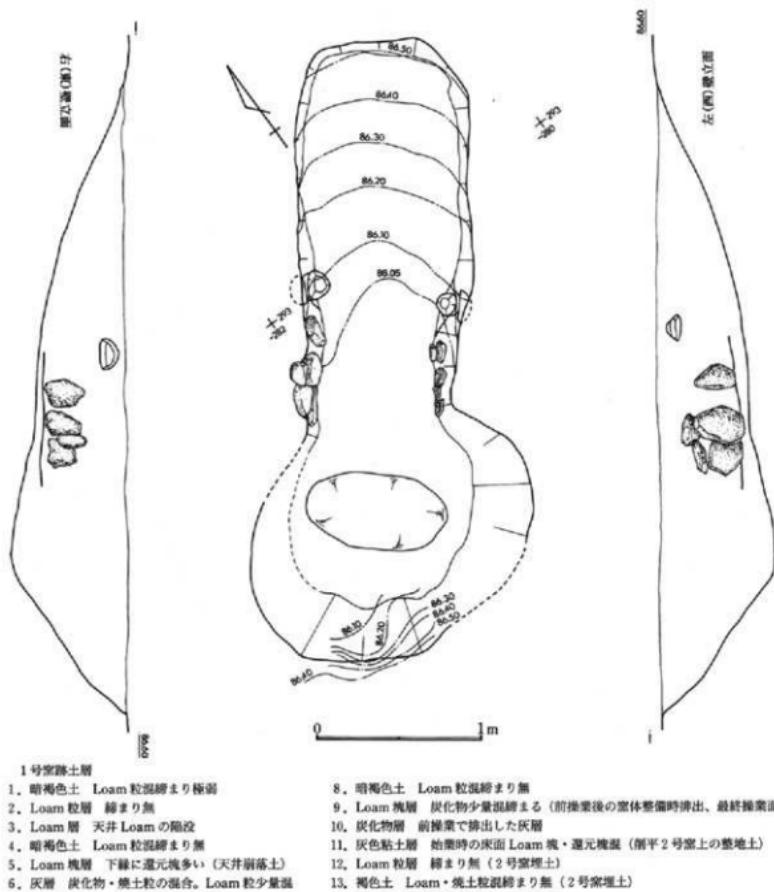
**形状** 平面形は幅広直線的で隅丸方形の奥壁部をもち、焼成部から燃焼部・焚口部まで壁線は絞り込みなどの変化は少なく寸胴の窯体をなすが燃焼部基底壁線は僅かに狭まる。前庭部は断面すり鉢状の略円形土坑の形状を呈する。

**埋土** 窯体の埋土は焼成部床面近くに Loam 塊層（4 層）があり、同層下位には還元・焼土小塊が多く混じる。これより上層には厚さ 10cm 程度の汚れの少ない Loam 層（2 層）が面的・帯状に続く。両者は天井の落下・崩落したものと考えられるが、最下層の還元・焼土塊には側壁の剥落も含まれている。焼成部の床面には外部からの流入土はほとんど見られず天井の崩落は操業終了後比較的早かったことが窺われる。崩落天井 Loam 層の分布から、掘り抜き天井の範囲は焼成部を中心に少なくとも 0.8~1.2m、煙道部の孔径は約 40cm になる。1 号窯前庭部の下面には 2 号窯体が埋まる。前庭部には整地層と炭化灰・灰混合層のそれぞれ 2 層が存在する。構築に際しては 2 号窯床面に僅かに達しない深さまで掘り込まれ、露呈した 2 号窯埋土のままでは作業面としての危険さを補うためか灰色の粘土（11 層）を用いて被覆してある。この粘土による整地面が最初の操業面と考えられ、直上の塊・粒・粉状の炭化層（10 層）を問して 2 面目には炭化物を少量混入する Loam 塊層（9・9' 層）が 15~20cm 厚で明らかに整地したごとくに観察された。前段の操業後に窯体整備による排土によるものと考えられるが、燃焼部とはかなりの段差を生じている。最終操業によると思われる灰層（8 層）は燃焼部寄りに厚くやや不整堆積の状況が見られる。燃焼部上縁の自然堆積土を思わせる暗褐色土の存在は、窯廃棄直後には開口していた燃焼部に、掻き出された灰層の逆流現象の結果とも考えられる。

**規模・構造** 窯体の全長は 3.7m、長軸方位は N-37°-E を示す。焼成部床面は 15 度の傾斜をもち、無階無段である。燃焼部は平坦に近く前庭部は緩くくぼむ。各部位の規模は、焼成部長さ 1.4m・床面基底幅 0.95m で最大幅をもつ。燃焼部は長さ 0.9m・基底部幅 0.6m で焚口幅も同規模である。床面断ち割りでは 1 面のみ確認であるが、焼成部と燃焼部の境付近では青灰還元層上に硬質な黒灰層が一部残り、複数回操業の可能性もある。また、前庭部では 2 枚の整地層が認められ、窯体整備に伴う排土の整地層とすれば前述の硬質黒灰層を考えあわせれば少なくとも 2 回の操業が考えられる。その初期段階では上端径 1.65×1.5m で、深さは 0.7m から 2 枚目の整地面での深さは約 0.4m でかなりの底上げ状態である。窯体の壁面は剥落のためか赤色や硬質



第18図 1号窓跡(1)



第19図 1号窯跡(2)

化を顕著には止めていない。壁高は燃焼部で最も高く約0.5mを測るが、窯尻へ向い徐々に高さを減じて奥壁の立ち上がりは僅かにその痕跡を留めるに過ぎない。焼成部は幅広で変化のない壁線をなす。床面はさほど硬質化が見られず、焼台に用いた掌大偏平橢円形の粗粒安山岩60余個が検出された。これら焼台のうち、奥壁寄りには現位置に近い状態で横位1単位をおよそ8個とする6~7列が残されていた。焼成部の残余面積を考えれば、焼台の設置は100個を若干上回る数が可能である。なお、同種・同類の粗粒安山岩塊は窯跡群西方間に近い流れる柏川で容易に採取できる。

燃焼部底面幅は僅かに狭まり、床面はほぼ平坦である。しかし、一回目の操業によって排出された灰層と

改修による排土の嵩上げで次回の操業時には10cm前後窪みとなっている。両壁面には3~4石をもって石壁面を作る。左壁面は重複する2号窯の埋土を切り込んで構築されるが、石による壁面の施工は埋土による軟弱さの補強にもとれる。しかし、1号窯に限らず群中の窯ほとんどに施される施設であり重複による特別施工でないことは明らかである。壁石は密着するものと隙間のある場合もあり均一な石面とはなっていない。最大30cmの不定形石材を用い左壁の一部は2段積みになる。焼成部寄りの左右壁下には石材を設置したと考えられる窪み痕跡がみられ、床面の被熱赤化面はその縁辺をなぞっている。この左右石材設置窓の上位壁面にそれぞれ横孔が穿たれる。床面よりの高さ約30cmである。幅20cm・高さ10cm・奥行き5~10cmの断面薄鉢状をなす。埋土は汚れの比較的少ない軟らかなLoam粒層である。

前庭部は梢円すり鉢状の断面形を呈し背後の収束する土坑状である。2枚の整地面と灰層が堆積し、排水や防湿機能をもつような施設は確認されていない。

**遺物** 遺物は窯本体や前庭部からの出土も少なく、かなり効率的な焼成が行われたと考えられる。遺物種には壺・皿・塊があり壺類の量が多い。なお、底部切り離しは回転糸切り無調整のものが大半であるが、壺の一部には腰部に手持ちの箝削りを施すものがある。

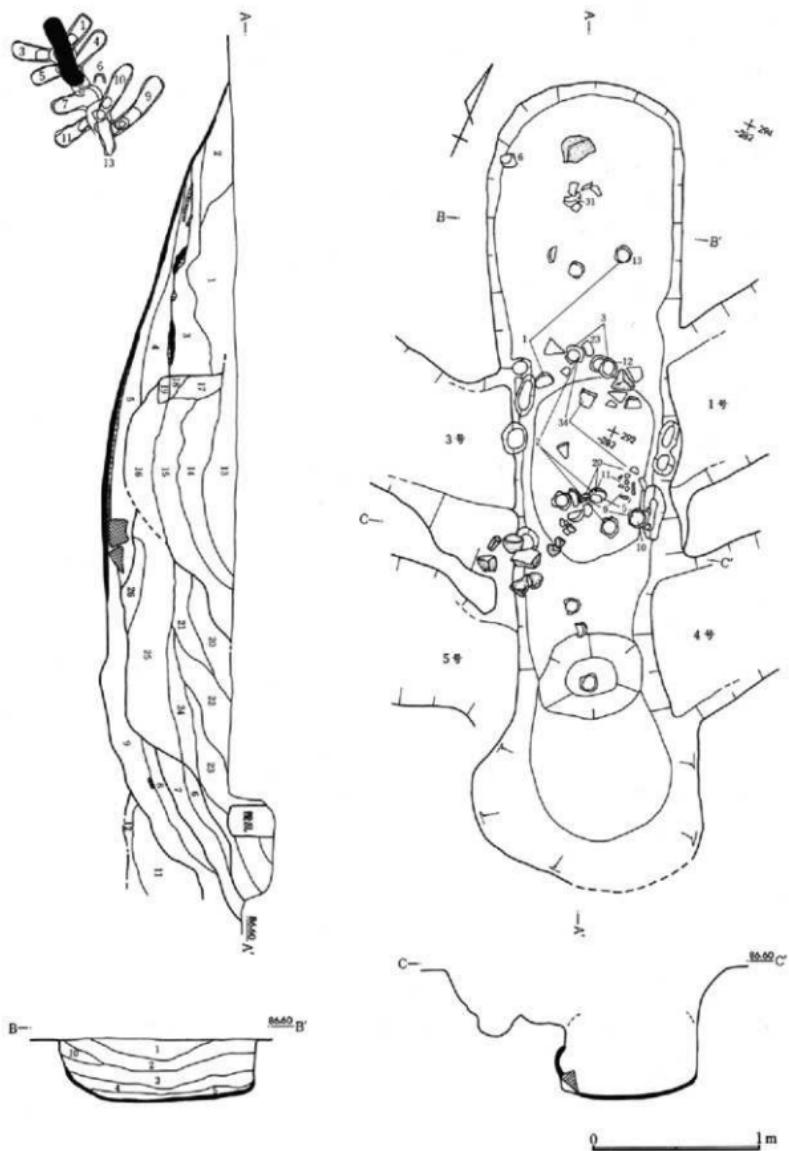
#### 2号窯跡（第20・21図 P.L. 4・5）

窯体の埋土にはLoam層を主体にする崩落埋土があり、掘り抜きの地下式窯室である。8号窯の長軸延長線上で北方に窯体を伸ばす。1号・3号・4号・5号・8号窯と重複するが、8号窯より新しく、1号・4号窯がこれを切って構築されていることは土層観察より明瞭である。3号・5号窯との新旧関係は1号・4号窯築窯段階での開削により土層に表れる切り合いは失われている。しかし、1号・4号窯の構築が2号窯の横腹ともいべき、前底部から燃焼部にかけての部位に取り付くように伸びる。3号・5号窯はこの築窯手順や配置に酷似しており、この点から見ても2号窯は同窯に先立つ所産である蓋然性は高い。北群の各窯は2号窯の窯体を利用したごとくに築窯された可能性は濃厚である。

**形状** 平面形は幅広弧状の奥壁部をなし、寸胴の焼成部から燃焼部基底壁線は僅かに絞られる様相をなす。焚口部はさらに狭まるが、その変化は緩やかである。前底部は梢円すり鉢形の土坑状を呈し、上縁の開口は西縁に若干の広がりをみせるが全体的には窯体幅に沿った規模である。

**埋土** 窯体内の埋土は燃焼部位で1号窯により大きく開削を受ける。埋土は天井の構築材と考えられるLoam塊状層（2層）とLoam粒層に還元・焼土粒の混在する（5層）が見られる。この2層間に還元・焼土帯が比較的大きな塊状のまま水平に近く分布し、埋土の状況より地山Loamの掘り抜きによる築窯と考えられる。還元・焼土塊には寸莎等の混入はなく掘り抜き地山のままである可能性が強い。窯尻部の落下天井と考えられるLoam層の位置から推定する煙道孔径は30~40cmになろう。最下層には還元粒・焼土粒の混在する灰が層厚に堆積し（6層）床面直上を薄く黒色灰が覆う。前底部は4号窯と重なり埋土状況は明瞭とはいえないが、炭化物を若干はじめるLoam塊層を間層にして2枚の灰層がみられる。床・壁の断ち割りでは複数の面はとらえられなかったが、2号窯は少なくとも2度の操業が行われた可能性がある。

**規模・構造** 窯体の全長は4.8m、長軸方位はN-25°Wを示す。焼成部床面は約19度の傾斜をもち、奥壁近くで断面上では有段を思わせるが平面的な観察には明瞭な段形状を示していない。奥壁の立ち上がりは削平のためか床面傾斜角度のままの状態である。壁・床面とも顯著な硬化還元状況はなく、弱い焼土面で赤化範囲も薄い。床面の硬化還元は焼成部半部から燃焼部にかけての範囲に生じ、燃焼部は焼成部と段差のないまま緩く窪む。前底部には小穴の浅い落ち込みがある。各部位の規模は、焼成部長さ1.7m、床面基底幅1.1



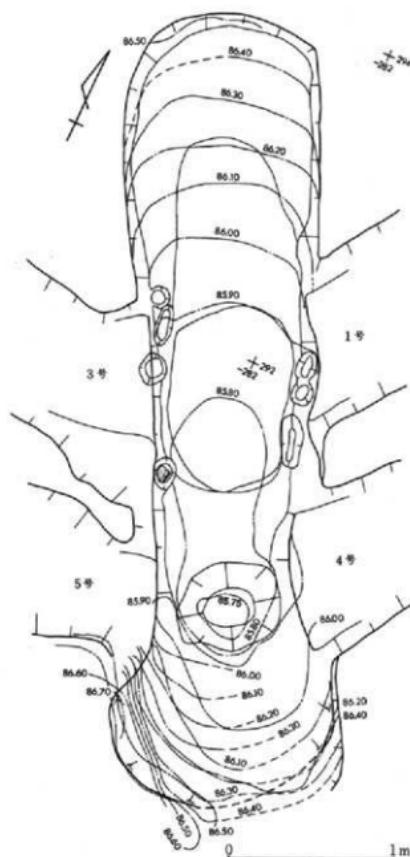
第20図 2号窓跡(1)

## 2号窯跡土層

1. 黒褐色土 灰化物・小Loam粒混縋まり無(天井崩落後の流入土)
2. 黄褐色土 多量の炭・少量の燒土粒(窯底絶後の埋土)
3. Loam塊層 灰化物少量混縋まり無(天井Loamの崩れか)
4. Loam塊・燒土帶・蓮元塊の混合層(天井の崩落)
5. 灰層 遺元塊。最下面は黑色灰
6. Loam塊層 明褐色土・灰化材混
7. 暗褐色土 灰化材・Loam粒混
8. Loam塊層 暗褐色土・灰化材多混
9. 灰層 Loam粒・灰化物混
10. Loam粒層
11. 8号窯天井 Loam層
12. 8号窯天井の燒土・蓮元層

## 1号窯跡前底部埋土

- ( )番号は1号窯の箇中土層番号を示す
13. (1)暗褐色土 Loam粒混縋まり極弱
14. (6)灰層 灰化物・燒土粒の混合。Loam粒少量混
15. (9)Loam塊層 灰化物少量混縋まる
16. (10)灰化物層 灰層
17. Loam塊層 壁面の崩れ
18. 暗褐色土 灰化物混縋まり無
19. 被熱 Loam塊(窓体壁面の崩れ)



第21図 2号窯跡(2)

mで最大幅をもつ。燃焼部は長さ1.4m、基底部幅0.75m、焚口部幅0.7m、壁面の形状が遺存する燃焼部で壁高は約0.6mを測る。前底部は窓体幅に対してはほとんど広がりをもたず平面形状では燃焼部との境が不明瞭である。西縁にややふくらみのある東西上端径1.4m、窓長軸に沿う南北の規模は約2 mを測る。

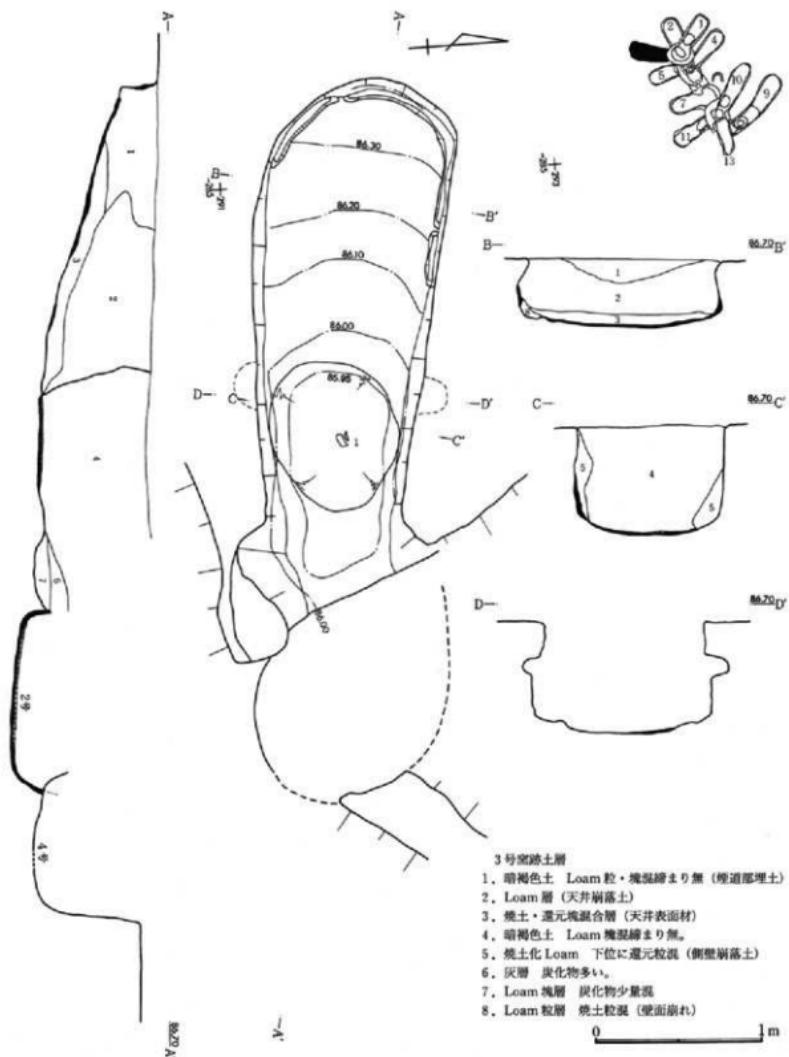
焼成部は幅広で変化のない壁線をなし、焼台として窓底部が使用されているが数量は少ない。元位置を保っているものではなく燃焼部にやや集中している。燃焼部は上記重複により遺存状態は悪く、壁面の状況は不明部分が多い。左壁前底部寄りには数個の石が転がり、壁面に用いられていたことが窓われ僅かに残る左右側壁下部には石材の設置痕が見られる。赤色被熱面はこの石材設置痕の縁辺をなぞっている。ただし、当2号窓においては燃焼部最奥(焼成部寄り)の壁石部の壁面は左右とも1号・3号窓により消失しているためその存在は確認できない。燃焼部は壁石の設置痕からすると約1.4mの範囲になり焼成部の規模にほぼ匹敵する。前底部にはすり鉢状に落ちきった地点で径50cm程度の深い窓みをなすが、操業に伴う灰層が堆積しており特殊な施工は窓えない。

**遺物** 遺物は焼台に使用したと考えられる窓底部が多く、燃焼部周辺に散在的な出土状況である。破損品に類する遺物量はきわめて少なく、焼成技術の高さが窓われる。製品種は窓類が大半を占め・皿・蓋・塊の小型供膳具を中心にしており、中型瓶や鉢も僅かながら焼成していたことを示す小片がみられる。小型器種の底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。

第3章 空跡と出土遺物

3号窯跡 (第22図 P.L. 6)

窯体埋土に厚い地山 Loam が崩落し、無階無段の掘り抜き地下式窯窟である。北群に属し、窯体は西方へ伸びる。南に並列して 5号窯が、中央位置に相当する 2号窯を挟んで時計回りに 1号・4号窯がある。平面



第22図 3号窯跡

的位置は1号・2号・4号・5号窯と重複するが後出する1号・4号窯によって切り合い関係を示す前底部分が消失するため、2号・5号窯との新旧は土層観察では示し得ない。なお、3号窯は重複関係にある窯の中では最も掘形が深く床面と壁の立ち上がりが残る。

**形状** 平面形は弧状幅広な窯尻で、焼成部の壁線は変化がなく燃焼部に向かい徐々に幅の狭まる寸胴形状で窯尻は緩く北側に湾曲する。このような窯尻の形状は9号窯や13号窯にも共通してみられる。構造上機能的意味があるのか、築窯の技術面に由来するのかは不明である。前底部は上述したように重複のため僅かに端部が確認できるのみである。

**埋土** 窯体内の埋土は厚い掘り抜きの天井Loam層(2層)が焼成部を中心とした部分に見られる。このLoam層下の床面直上には天井表面材と考えられる還元塊と焼土塊の混合層(3層)が堆積する。煙道部は地上流入の縮まりのない暗褐色土(1層)で埋まるが、Loam天井と煙道部埋土の範囲をもって煙道孔径とするには大径に過ぎる。天井表面剥落後本天井崩落の前に1層の流入が始まったものと考えられ、3層の堆積範囲からすれば煙道孔径は約30cmになろう。燃焼部位にはLoam塊を混える暗褐色土(4層)で埋まるが、炭化物などの混入ではなく1号窯ないしは4号窯の構築に際して投げ込まれた堆土である可能性もある。

**規模・構造** 窯体の全長は約4.3m、長軸方位はN-85°Wを示す。焼成部床面は20度の傾斜をもち、奥壁は直に立ち上がり、遺存する壁高は約20cmである。燃焼部から焚口部はほぼ平坦をなす。各部位の規模は焼成部長さ1.6m、基底部最大幅1.0m、燃焼部長さ0.9m、幅0.75m、焚口幅0.6mを測る。検出面から床面までの最深は0.65mになるが、壁面形状をたどれる壁高は燃焼部で約0.5mである。

焼成部床・壁とも硬質還元層はおろか焼土化も極めて微弱である。さらに窯体内の堆積物からは通常観察できる操業後の状況である灰・炭化物・焼け損じ品・焼台などの存在は皆無に近い。窯尻奥壁から右壁下にかけて幅10cm程度の浅い溝を巡らす。この壁下の溝にはほとんど焼土化の痕跡はなく床面と壁面に連続すべき被熱面は断絶している。再操業のため壁面の搔き落としや床面の削り均しなど窯体内部の整備が行われた可能性が大きい。床面断ち割りによる床面・壁面の観察所見でも単層焼土面は薄く、硬化の度合いも極めて弱い。上述壁面下の細溝は壁面に粘土材等を塗布するための基部を意識した所作であろうか。

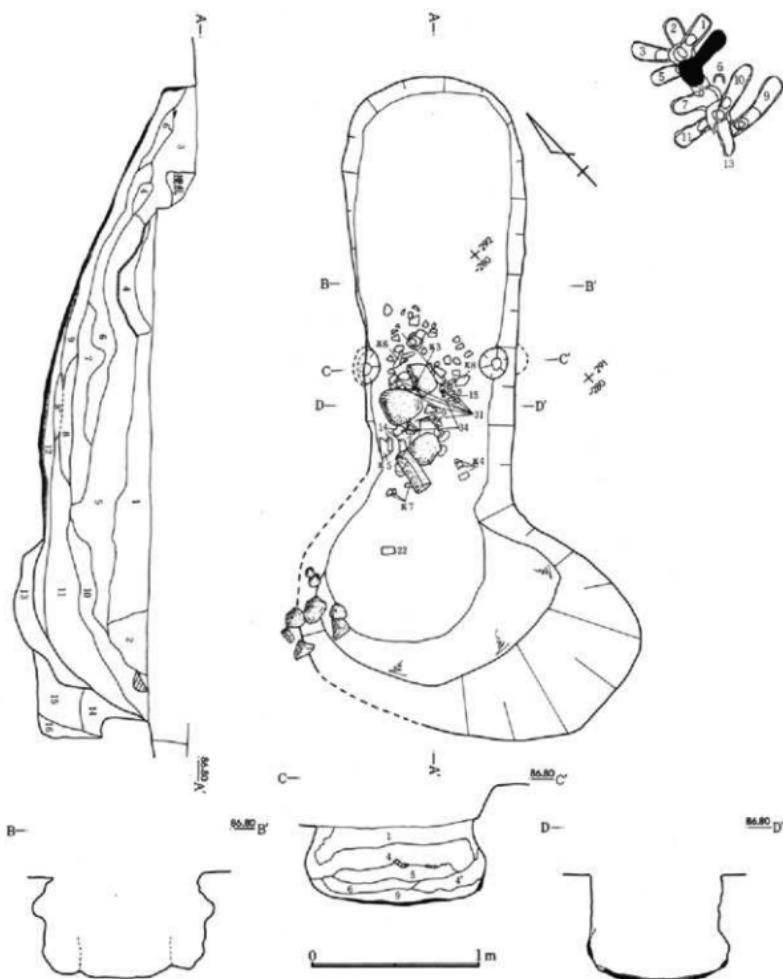
燃焼部においても操業に伴うであろう諸種残滓の痕跡はなく、焼成部と同様な状況を示している。ただ、床面は薄層ながら青灰還元と焼土の対層からなり、窯体には一定の時間、ある程度の熱量が加えられていることは確かである。調査段階では再操業のための窯体内整備とともに、新窯構築に際しての温氣除去等の目的で行われた空焚きの可能性も考えられた。しかし、燃焼部に見られた還元層と前底部に僅かに残された灰層を確認するに至り前者である蓋然性が高いとした。いずれの行為があったにしても、この直後に天井の崩落等によって当窓は廃棄されたと考えられる。

燃焼部の最も焼成部寄りの左右壁下には石材を設置したと考えられるかすかな痕跡が残り、床面より約35cmの高さに横孔が穿たれる。右側の孔は奥行き約15cm、幅20cm左側の孔は奥行き約20cm、幅25cmを測る。断面形状は蒲鉾形状である。

**遺物** 3号窯の焼成に直接関わる遺物は検出されていない。唯一、燃焼部の床面直上より半欠の土師器壺が出土しているが、この窓で焼かれた製品とは思われない。窯体内部の床・壁面整備を思わせる状況は廃棄時の祭祀行為も想定されるが、これを積極的に示す状況は他に見いだすことはできない。

#### 4号窯跡(第23・24図 PL. 6・7)

窯体埋土に天井崩落と考えられる地山Loam帯があり、掘り抜き無階無段地下式窯窓である。1号・2号・

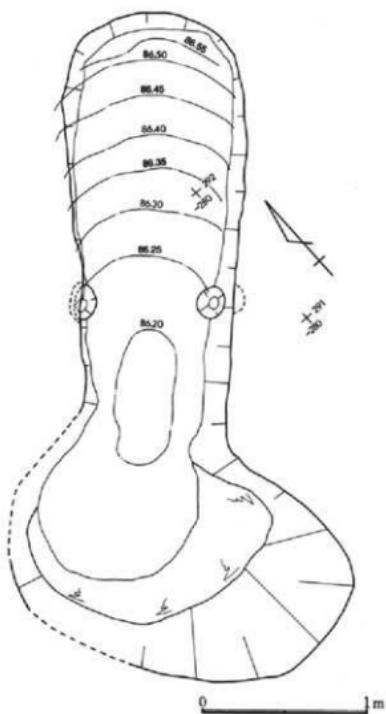


- 4号室跡土層  
 1. 暗褐色土・Loam 粒混合層 締まり無  
 2. Loam 層  
 3. 暗褐色土 砂質（煙道からの流入土）  
 4. Loam 層 壁面 下緑は還元層塊（天井の崩落）  
 4'. Loam 層 還元塊（側壁面の剥落）  
 5. 暗褐色土 硫化物混縋まり無

6. 暗褐色土 Loam 粒・還元塊・炭化物混  
 緋まり無  
 6'. 暗褐色土 Loam 粒少なく締まり無  
 7. Loam 層 緋まり無  
 8. 灰色粘土層（燃焼部材か）  
 8'. 灰色粘土層 炭化物結状に入る  
 9. 黑褐色灰層 炭化物・還元小粒混縋  
 まり無

10. 黑褐色灰層  
 11. 黑色灰層 大粒炭化物混  
 12. 黑色灰層  
 13. Loam 粒層 炭化物多量に混（2号室  
 前底部埋土）  
 14. Loam 層 壁（5号室埋土）  
 15. 暗褐色土 Loam 粒混（5号室埋土）  
 16. Loam 粒層（5号室埋土）

第23図 4号室跡(1)



第24図 4号窯跡(2)

Loam層の間に厚い流入土が見られることから、操業停止から天井の崩落までしばらくの時間があったと考えられる。奥壁と崩落天井の範囲から煙道部の孔径は50cm程度になる。

**規模・構造** 窯体の全長3.9m、長軸方位はN-43°-Eを示す。焼成部の床面はおよそ23度の傾斜をもち、奥壁の立ち上がり高は20cmで直立する。燃焼部は緩く皿状に窯み焚口で小さく高まって平坦をなし、前底部に至って再び窯みをなして壁面は緩やかな内湾曲線で立ち上がる。各部位の規模は、焼成部は長さ1.6m・床面基底最大幅は0.9mを測る。燃焼部は長さ0.65m・基底幅0.75m、焚口で0.65cmに狭まる。前底部の長軸上縁幅は約2.1m・短軸1.4mである。窯底の最も深い部位は前庭にあり、検出面より約1mを測る。窯体の壁面では燃焼部で約80cmの高さがあり、被熱焼土面で内溝する形状を残している高さは約30cmである。

焼成部は幅広で変化のない壁線をなす。壁面は薄い焼土層が形成され、還元化の痕跡はほとんど残らず堆積土（6・7層）中に粒・塊状で剥落している。焼土層及び還元層には寸莎等の混入はなく粘土等の材による被覆は確認していない。床面は奥寄りにはさほど硬化の進まない焼土面が露呈状態にあり、前半部から燃焼部にかけて還元層と焼土層からなる1単位の操業面が確認された。

燃焼部はごく緩やかな窯みを呈する。壁面は焼成部より変化無く続くが、両者の区切りを意図すると考え

3号・5号・8号窯と重複し、北群では1号窯に次ぎ後出の窯で群中東端にあり、逆時計回りで1号・2号・3号・5号窯が位置する。

**形状** 平面形は弧状幅広な窯尻から燃焼部に向かい僅かに窯体幅を狭めるが、変化のない壁線をなしほぼ寸胴な形状である。前底部はすり鉢状の土坑形態で、南側の壁面上半が大きく膨らみやや緩い傾斜で立ち上がる。北側は1号窯によって上縁形状は失われているが、下場線の軌跡からは南側のような膨らむ形態とはならず窯体軸から少し西へ屈する。

**埋土** 窯体内の埋土は焼成部上位層に塊状ではあるが混入物の無い厚さ約10cmのLoam帯が堆積する。その下縁には薄い還元層が形成されており掘り抜きによる天井部であることが知れる（2層）。天井Loam帯は長軸方向での範囲が70cm、横断面では窯体全幅に渡りS字様に折れ重なって崩落の状況を示す。燃焼部を中心として焼成部にかけての床面直上はやや厚めの黒色灰層（13層）が残る。前底部には操業に伴って排出されたと考えられる黒色灰層が形成され、上下に分層（11・12層）できるが両層には間層の介在は無く操業の回数を示すものではないであろう。上位の灰層は下位層の逆流再堆積が1回の操業にまつわる段階的焼き出しによる可能性が高い。底面窯みには燃焼部と同質な黒色灰層が埋まり、大粒な炭化物の混入が多い。窯体内は床面と天井

られる両壁下には石材を設置した痕跡が明瞭に残り掘形には灰色粘土が薄く塗布されている。粘土には寸莎等の混和材は無く、被熱による赤化も認められなかった。この痕跡によれば燃焼部の底面幅は約75cmから50cm前後に絞られることになる。また、石材設置痕真上両壁面にはそれぞれ横孔が穿たれる。床面よりの高さ約60cmを測り、側面形は蒲鉾状で奥行き10cm前後、径18~20cmである。石材を設置した痕跡は左右1対を検出できたのみであったが、燃焼部には数個の石が放置されこれらも壁面を形成していたものと思われる。壁面は焼成部同様に還元硬化での遺存はほとんど無く、薄い赤化面であった。

前底部は燃焼部より低く窪むが緩くすり鉢状である。南側に緩く傾斜をなし大きめに開口する形状で、操業に関わる作業昇降的な部分とも考えられる。前底部の土層観察からは2号・5号窯の前底部を開削する切り合い関係が認められた。灰層については、前述のごとく2層に分層されるもののその堆積状況と窯体床面の断ち割り結果から一回の操業によって排出されたものであろう。

**遺物** 遺物は燃焼部に集中して検出され、選別後に放棄された様相を示している。遺物直上には燃焼部壁面に使用したと思われる石材が乗り、窯体廃棄時に故意に剥落させたような状態である。

遺物器種には壺・皿・蓋・塊類があり、量的には壺類の割合が多い。底部の切り離しは回転糸切り無調整を主とするが、壺類には腰部に手持ちの箋削りを施すものがある。その量は極めて少なく、器形の類似から1号窯からの混入と考えられる。

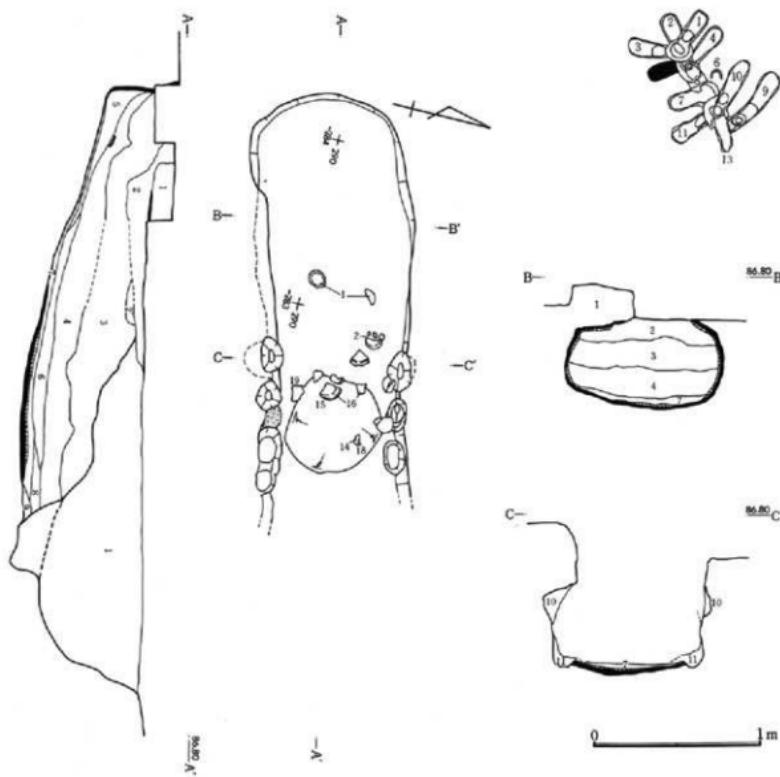
#### 5号窯跡（第25・26図 P.L. 8）

焼成部で壁際の天井部が残存している窯跡で、掘り抜きによる地下式構築を示す好例である。検出面からの天井基盤 Loam 層厚は約20cmを測り、その下縁には直接の被熱面である一对の焼土層と青灰色還元層が形成されている。少なくともこれら天井面に関して寸莎は含まれておらず、粘土等の壁面被覆材そのものをも用いない素掘のままであったと考えられる。5号窯は北群に属し平面位置からは1号・2号・3号・4号・8号窯と重複するが、断面切り合いの関係が確認できたのは4号窯についてのみであり、これよりも古い所産である。群中では西側に窯体を伸ばし、時計回りで3号・2号・1号・4号が扇状に位置する。

**形状** 平面形は弧状幅広な窯尻からやや膨らみ加減に焼成部を作り、寸胴のまま燃焼部に至る。前底部は4号窯の前底部のすり鉢状地形によって消失して形状・規模など詳細は不明である。

**埋土** 窯体内の埋土は燃焼部床面を中心にして焼成部にかけての範囲に、操業時に成されたと思われる黒色灰層（13層）がある。層序中位には炭化大粒が多量に含まれる黒褐色土（3層）とLoam塊層（2層）が厚く堆積する。3層は灰原堆積の灰層に類似する土質で、2層は上縁に還元塊・焼土塊（被熱 Loam）が混在しLoam塊層の堆積後に天井表面が剥落したと考えられる。他窯に比べて天井遺存の良さは、廃窯ほどなくして一気に窯体内に投・流入した3層・2層によって一部崩落が押さえられたためであろう。両層はともに5号窯にその発生源は無く、隣接窯跡の操業や構築に伴う外部からの流入か投棄による堆積の可能性が高い。前底部の層序は4号窯によってほとんど消滅している。また、基底近くは2号窯などの調査過程で細部の層位に対してその帰属を確定することができず不明瞭な状況になっている。

**規模・構造** 窯体の全長は4号窯との重複部分を最大値とすれば約3.6mになり、長軸方位はN-102°-Wを示す。焼成部の床面はおよそ20度の傾斜をもち、奥壁手前20cm付近からは10度に傾斜を減じる。奥壁の立ち上がり高は40cmで直立する。煙道孔径は、天井基盤 Loam 層の位置から約50cmになる。燃焼部は僅かな窪みをなすがほぼ平坦としてよい。各部位の規模は、焼成部の長さ1.5m、基底面最大幅95cmを測る。焼成部に残る天井は頂部が削平され、左方部の弧形が落ち込んで完全な穹窿形はそこねているものの壁面の内湾線跡は

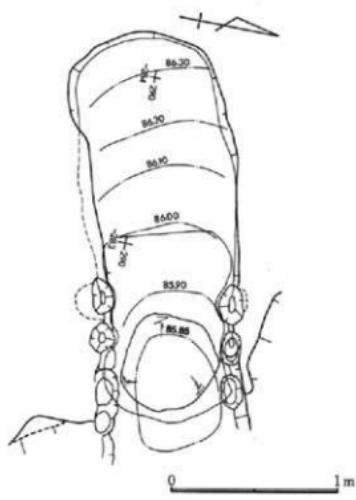


- 5号窯跡土層  
 1. Loam 層 (掘り抜き天井基盤層)  
 2. 暗褐色土 Loam・還元粒混合層縫まり無  
 2'. 暗褐色土 烧土粒・炭化物混縫まり無  
 3. 還元層・炭化 Loam・焼成層 (天井剥落土)  
 4. 黒褐色灰層 接続大粒多量に混縫まり無  
 5. 黑褐色土 炭化粒多量混  
 6. 灰・還元粒・焼土塊の混合層  
 7. 黒色灰層  
 8. 灰層 炭化物・焼土粒混  
 9. Loam 粒層 炭化物混  
 10. Loam 粒層 縫まり無 (燃焼部壁面横孔埋土)  
 11. Loam 粒層 烧土粒混縫まり無 (燃焼部石設置痕埋土)

第25図 5号窯跡(1)

かなり上位までたどることができる。操業当時の窯内法天井高の復元は可能であり約60cmになる。燃焼部は長さ90cm、基底幅75cmを測る。検出面から燃焼部床面までの深さは約88cmに達し、壁面の内湾線跡から内法天井高は焼成部に同じく60cm程度になろう。

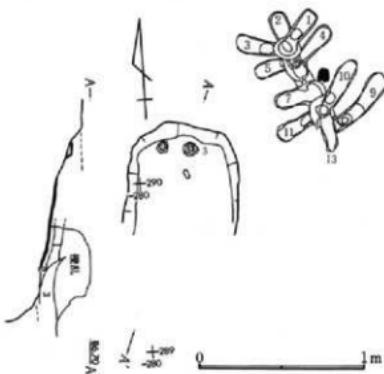
焼成部床面は奥壁寄りで傾斜度を弱めるがその変化は緩やかであり構造的・機能的な意味は認められない。壁面は焼土と還元層の壁面単位が明瞭で、天井部の遺存状況と同じく短時間の窯体内への流入土によって剥落を免れたからであろう。焼土・還元一対のみで修復を示すような被覆行為は認められなかった。ところで、



第26図 5号窯跡(2)

## 6号窯跡 (第27図 P.L. 9)

窯尻から焼成部にかけてのごく小範囲の検出で、平面的な位置では南群に属する。7号・10号窯との重複部分では窯体の痕跡がなくこれらより古い所産である。



## 6号窯跡上層

1. 黄褐色土 烧土粒・炭化物少量混縫まり無（天井の崩れか）
2. 被熱 Loam 粒層 縫まり無（天井の崩れ）
3. 黑褐色土 炭化物多量、Loam 粒少量混縫まり無

第27図 6号窯跡

床面の被熱程度は当窯跡群で一般的にそうであるように奥壁に近づくほど還元化層の生成は見られず焼土面が露呈している。焼成部壁面は崩落が進み、熱気の及ばない基盤 Loam 面となっている。床面は比較的堅緻で焼土・還元の一対単層である。左右壁際には石材設置の痕跡が認められ、左壁側は壁沿い約 1m の範囲に 4 個、右壁は 80cm の間に 3 個の石が用いられ設置痕には 10~15cm の間隔がある。左壁側 4 個の中間部分には灰色粘土塊が充填されるように残り、本来は立てられた石の隙間を埋めるように施工されていたものと考えられる。左右最も焼成部寄りの石材設置痕の上位壁面それには横孔が穿たれる。壁面の崩落が進んでいるため遺存状況は良好とはいえない。左壁の孔は径 20cm、奥行き 15cm で右壁は痕跡程度で埋土は縫まりのない Loam 粒である。壁際床面から横孔下縁までの高さは 35cm を測る。

**遺物** 出土遺物は少なく、焼成部を中心に散在している。壺・皿・蓋・境などがある。

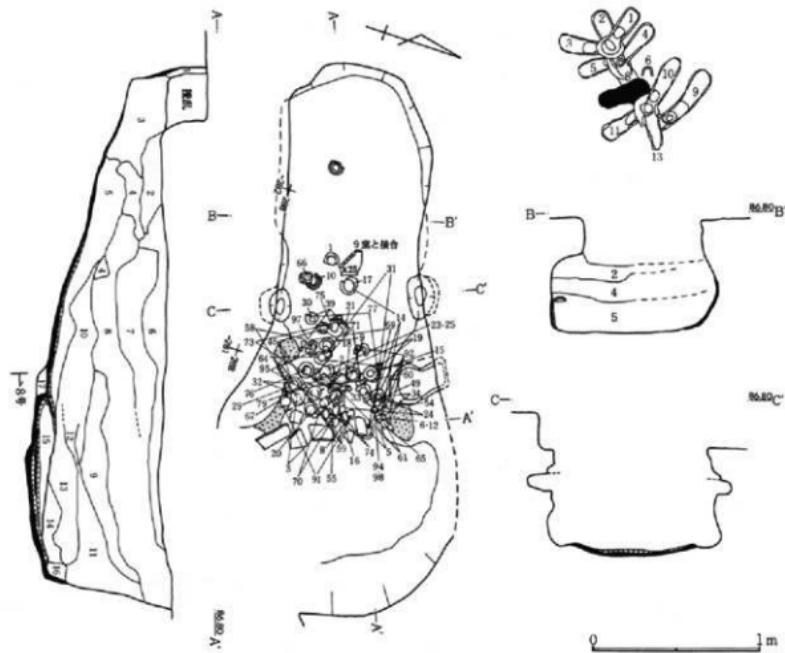
**規模** 焼成部・燃焼部など消失部分が大きく、詳細は不明であるが重複範囲を最大限に見積もれば全長は 3.5~3.6m になろう。弧状の幅広な窯尻で、床面は窯尻より約 1m の残存で床面幅 50cm を測る。奥壁は僅か 5cm の高さが残るのみで、緩く傾斜するよう立つ。長軸方位は N-6°-E を示す。壁高は遺存部分の最も深い箇所で 30cm である。床面の傾斜度は約 10 度、奥壁に近く 15 度となるが、変化は穢やかで有段などの痕跡は認められない。床・壁面とも還元層は見られず弱い赤化面を残している。

**埋土** 窯体埋土は擾乱によって僅かに残るのみであるが、7号窯前底部縫辺が 6号窯埋土を切り取り、7号窯起原と考えられる灰層の一部が堆積する。

出土遺物はごく少量で窯尻床面に焼台として使用されたと思われる壺 2~3 点がある。

## 7号窓跡 (第28・29・30図 P.L. 9・10)

窓体埋土中位に天井の崩落と考えられる Loam 被熱層が堆積し、掘り抜き地下式窓跡である。長軸面での土層断面では Loam 層の帯状範囲が狭く乱がちであるが、横断面では 10~15cm の厚みで窓体の幅員を満たしている。北方より 3 号・5 号が南側に 11 号が位置する西側並列で、南群に属し窓体は西方に伸ばす。平面上は 6 号・8 号・10 号・11 号・13 号窓と重複する。各窓跡との新旧関係は集約的部での重複した切り合いのため全てに渡っては明らかにすることはできなかった。7 号窓を中心とする新旧関係に限れば、6 号・8



- 7号窓跡土層
- 1. Loam 粒層 線まり無
  - 2. 暗褐色土 Loam 粒混縦まり無
  - 3. 暗褐色土 灰化物・純土粒・Loam 粒少量混
  - 4. Loam 被熱層 遺灰少量混 (天井崩落土)
  - 5. 黒色灰層 純土粒・遺元塊少量混縦まり無
  - 6. 暗褐色土 Loam 粒少量混縦まり無 (窓廻後の堆積)
  - 7. 暗褐色土 Loam 塵多量、灰・遺元・純土小塊混縦まり無
  - 8. 暗褐色灰層 灰化物・遺元・純土小塊多量、Loam 小塊少量混縦まり無
  - 9. 暗褐色土 Loam 程・小塊やや多く、灰化物小塊少量混縦まり無
  - 10. Loam 塵・灰色粘土混合層 (壁面など窓部材の一部)
  - 11. 灰化物層 壁面燒土塊混
  - 12. 純土・遺元塊混
  - 13. Loam 程層 灰化物混
  - 14. 灰層 灰化物多量混
  - 15. Loam 塵層 線まる (8号窓埋土で上線は7号窓床面)
  - 16. Loam 塵 (8号窓壁面の崩れ)
  - 17. Loam 粒層

第28図 7号窓跡(1)

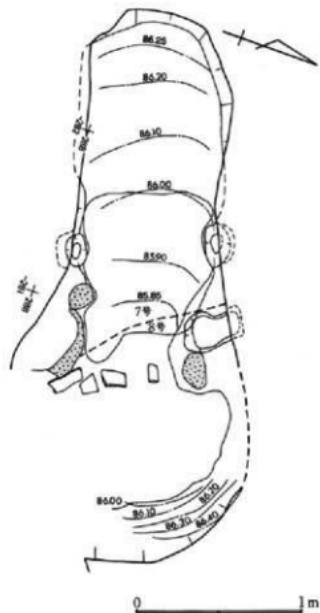
号・11号窯より新しい所産である。7号窯前底部は6号窯体を掘り込む。8号窯体のほぼ燃焼部に当たる削平部分には数片の瓦を敷いて床面とする。並列して構築されている11号窯とは燃焼部で重なる。左壁面は11号窯の埋土を切り込んで、下部には人頭大の石を据えて灰色粘土を後込めに充填する。

**形状** 7号窯の平面形は、弧状幅広な窯尻から焼成部を作り燃焼部から焚口にかけて強く狭まって大きめな土坑形態と思われる前底部へ続く。焼成部基底の壁線は左側がほぼ直線をなし右側のそれは僅かに膨らみをもち、窯体軸が緩く左へ（南へ）傾くような形状である。燃焼部は焼成部とを境にする両壁下部に石材の設置痕が検出されている。この設置痕から壁面とともに床幅は急に絞り込みが強くなり、壁面には灰色粘土

がやや厚めに塗布されている状況を示す。この灰色粘土は部分的に小児頭大の塊として用いられているようである。ただ粘土の表面にはほとんど被熱の痕跡は認められていない。この現象についての理由は、燃焼部に集中して検出された放置遺物上の堆積層には壁面残滓とともに灰色粘土も見られることから被熱面が剥落してしまった結果ではないであろうか。前底部は複複によって全体の形状は不明であるが6号窯の窯体を断つ部分が僅かに残り、深い縦坑になろう。

**埋土** 窯体内の埋土は焼成部から燃焼部にかけての床面上に窯尻寄りに厚く黒色灰層（5層）が堆積する。この堆積状態からは7号窯自体から発生した層ではなく外部からの投入あるいは流入と考えられる。また、前底部からの再堆積と考えられる（10層）・（9層）・（8層）等がある。いずれも窯操業にまつわる埋材の残滓や灰の混土層である。これらの層が堆積する過程で天井部（4層）の崩落が進行していくと思われるが、接するごとに構築されなお短期間に形成されたと考えられる窯跡群にあっては、他窯の築窯・改変などによって人為的に投棄又は前底部自体の均しなどによる堆積の可能性も考えられる。

**規模・構造** 窯体の全長は3.3m、長軸方位はN-121°-Wを示す。焼成部床面は弱く被打つように10度前後で



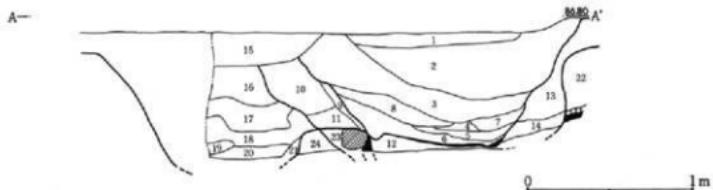
第29図 7号窯跡(2)

伸び、一旦短く25度ほどの急となるが明瞭な段形成はなく窯尻の近くで再び傾斜をゆるめる。各部位の規模は、奥壁はほとんど直に立ち上がり高さ45cmを有する。焼成部長さ約1.2m、最大基底幅はほぼ中央にあり80cmを測る。壁・床面とも顕著な還元硬化はなく薄い焼土の露出面となっている。還元面は左壁面に近い部分と燃焼部寄りで僅かに観察されたのみである。焼成部中央の壁面は50cmの高さまで内湾曲線をたどり、天井高もほぼこれに匹敵するであろう。右壁線は上位の壁面崩落のため直立する輪郭線を描く。燃焼部は長さ1mで最大幅70cm、焚口部直前で粘土塊の内法をたどった場合には強く絞り込まれて最小幅の55cmとなり小さくハの字状に開いて焚口部をなす。粘土除去後の幅は最大幅に変わらない。燃焼部の壁面曲線より推定される天井高は70cmになる。前底部の上端径は約1.6mと推定され、深さ80cm以上あり壁面の立ち上がりは急で

直立に近い。

焼成部は南方へ僅かに湾曲気味になるが、構造的な意味合いより築窯技術やその方法に起因すると思われる。燃焼部は細い窓み状を呈し前底部への変換は小さく盛り上がり、そのまま燃焼部より高まつた前底部を作る。燃焼部の床面は焼成部より続く焼土と還元層の1対層を形成している。焼成部とを画する様に両壁基底部に石材設置の痕跡が検出され、壁面上位には一対の横孔が穿たれる。径20×10cm、奥行き15cm、断面形は蒲鉾形状である。埋土は汚れが少なく縦まりのないLoam粒層である。壁面には他窯には見られない多量の灰色粘土が塗布されているが、調査中の観察では粘土は壁面下部に落ち溜まるような状況にあり必ずしも、燃焼部幅を狭めるための使用とは断定できない。焚口部の閉塞に用いられた可能性もある。燃焼部に使用される石材又はその設置痕跡は他窯に比べると数が少ない。左右の対称性も規則性に乏しく、粘土の存在と何かしら関係すると考えられる。なお、使用されている粘土中には寸莎等の混入は認められない。前底部は削平した8号窯の床面直上を覆うようにLoam塊を敷き込み床面とする。さらに、焚口部前面と考えられる箇所にはやや疊らではあるが横一列に瓦片数点を敷いて補強する。敷き込まれたLoam塊層下には8号窯の床面が明瞭に残る。

**遺物** 遺物は焼成部に残される物はほとんどなく、選別後燃焼部に集中的に放置されたかの状況であった。遺物種類には壺・蓋・塊があり、壺類が大半を占める。瓦は前底部ないしは焚口部に床材として用いられたものその他、窯体内からも數片の瓦ガラスが出土している。量的みて当窯で生産されたとは思われず、また破断面にも二次被熱の痕跡が認められることから、製品の焼台、または壁面の補材など窯内部材に用いられたと考えられる。

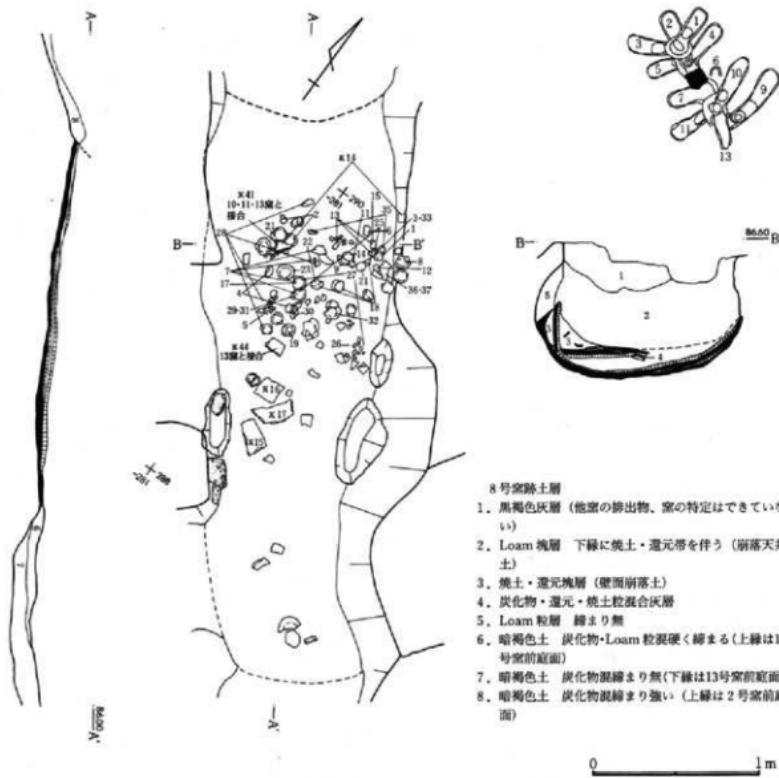


- 7号・8号・11号窯跡重複関係土層 ( )番号は7号窯の箇中土層番号を示す
- (6)暗褐色土 Loam粒少量混じり無(施業後の堆積)
  - (8)暗褐色灰層 塵化物・還元・焼土小塊多量、Loam小塊少量  
混縫あり無
  - (9)暗褐色土 Loam粒・小塊や多く、炭化物小塊少量混縫ま  
り無
  - (12)焼土・還元焼層
  - (11)炭化物層 壁面焼土塊混
  - (13)Loam塊層 塘化物混
  - (10)Loam塊・灰色粘土混合層
  - 灰層 暗褐色土・Loam粒・塘化物の混合層
  - 灰混じりLoam粒層(7号窯の窯壁層)
  - Loam塊層(7号窯掘影の後込土)
  - 暗褐色土 塘化物・Loam粒の混合層(7号窯掘影の後込土)
  - (15)Loam塊層 縫まる(8号窯底土で上締は7号窯床面)
  - Loam・焼土粒・塘化物混合層(7号窯掘影の後込土)
  - 焼土・還元土・塘化物混合層(7号窯掘影の後込土)
  - 暗褐色土 Loam斑点状に混(11号窯底土)
  - 暗褐色土 塘化物・Loam小塊混(11号窯底土)
  - Loam小塊・塘土塊混合層(11号窯底土)
  - 灰層 塗化物多量に混(11号窯生成)
  - Loam塊
  - 暗褐色土 塗化物混
  - Loam塊
  - Loam層 下締に焼土・還元層が純く(8号窯崩落天井)
  - 灰色粘土(8号窯掘影の後込土燃焼部材)
  - 基盤 Loam

第30図 7号・8号・11号窯跡前底部土層図

## 8号窯跡（第31・32図 PL. 11・12）

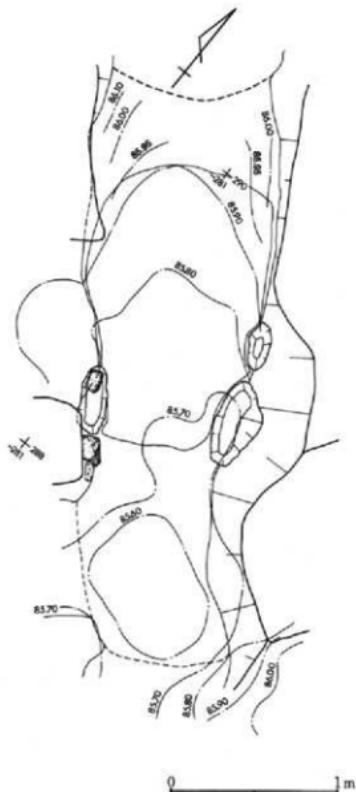
窯跡群で2号窯・13号窯とともに南北方向の軸線的配置をとり、まさに群内の中央に位置する。窯体方向は窯尻を北側に向ける。平面的にはほとんど全ての窯跡と重複し、実相としては焼成部から燃焼部にかけての窯体部位を残すにすぎない。窯体埋土にLoam土の厚い塊層が陥没したごとくにあり、掘り抜きの地下式窯窓と思われる。窯跡群全体への通観的重複関係は捉えきれていないが調査過程で知り得た実態の切り合いは2号窯と7号窯である。8号窯に対して、2号窯はその前底部開削によって彼の焼成部から窯尻部を断ち切っている。また、7号窯はその窯窓にあたって8号窯体削平面をLoamによる敷土と瓦を用いて、焚口及び前底部の床面整備を施している。窯跡12基の全てにわたっては整合性のある新旧序列を認知できていない。しかし、8号窯の当窯跡群形成過程における位置づけは、前後関係の判明している窯跡を加味しつつ8号窯の平面的位置とそこから心象される個々窯への窯窓手順を追想すれば、8号窯は重複的な窯跡群形成の端緒を担った窯跡の1基である蓋然性は極めて高いと考えている。



第31図 8号窯跡(1)

**形状** 平面形は上述したように焼成部と燃焼部の部分的な残存で窯尻や前底部の詳細は不明であり、立体構造は焼成部で少範囲の壁面がかろうじて残存する。焼成部は緩く膨らみ気味で窯尻に向かい僅かに狭まりの様相を見せ、燃焼部は徐々に細り焚口で最も狭まる。

**埋土** 窯体内の埋土は焼成部の一部分に残されていたのみで横断面での観察である。厚さ35cmあまりのLoam塊層が床面に放置された遺物群を直接に覆うがごとく崩落している。このLoam層下縁には被熱した赤色Loamと青灰色還元層がともに帯状に2~3cmの厚さをもって重なり、天井壁と側壁上部の構成そのままで一気に崩落している状況がみてとれ、なお壁面の小片剥落が少なく操業停止後間をおかず人に為的強制的に天井部を陥没させた可能性もある。重層する赤化Loamと還元層には土質的に異質感はなく寸莎等の混入も認められないことから、少なくとも掘り抜きによる天井部分の仕様はLoam露呈面そのままであったと考えられる。



第32図 8号窯跡(2)

**規模・構造** 残存する窯体長は3.5m、長軸方位はN-32°-Wを示す。焼成部基底最大幅は約1.1mで中央から若干燃焼部寄りにあり、残存長1.6mほどである。床面の傾斜は10度前後と緩い。壁面線は被熱面の剥落は進んでいるが形の良い内湾曲線の壁高は60cmを保ち、おそらく横断面形は梢円形を呈し復元天井高は75cm程度になろう。燃焼部は7号窯の構築による削平で床面がかろうじて残存している。ほぼ平坦面をなし長さ約1m、基底部幅は焼成部寄りで90cm、焚口幅70cmを測る。

前述したように窯尻部と前底部は重複によって消失するため形状及び構造は不明である。焼成部の床面傾斜度は群中で最も緩い。被熱の程度は焼成部でも燃焼部寄りほど強く、窯尻に向かい還元面が薄弱になる。床面の断ち割りで2枚の還元層が確認され複数回の操業が行われているが、側壁面では焼土・還元層の単位は一对である。燃焼部はほぼ平坦をなし、両側壁の基底部に設置された石とその痕跡及び灰白色粘土塊が少量検出されている。石の設置は左右対称の位置ではなく右壁はやや焼成部に寄り、痕跡のみで10cmほどの間隔をおいて2つである。設置痕内面はほとんど被熱現象が見られず、最下位の焼土面は設置旗の輪郭を明瞭になぞっている。焚口に近いそれは長径50cmほどで2石分とも思われる。左壁側は2個の石材と粘土塊が検出されている。焼成部寄りのものは設置痕内に取り残された材とおもわれ小塊であり、もう一つの石も丈が低く上積みされていたことが予想される。7号窯の構築に際して取り扱われた石材の残欠であろう。前底部の

掘形は燃焼部床面より15cm落差をもって窓むが、埋土は締まりのない炭化物混じりの暗褐色土で11号窓前底部の整地面と考えられる堅く締まった炭化物・Loam粒混じりの暗褐色土で覆われる。

**遺物** 遺物は燃焼部寄りの焼成部床面に集中して出土している。焼成品選別後に放置されたと考えられる。器種は壺類が大半で蓋と共に組み合わされる壺の他、瓶2個体分の破片がある。女瓦数片も他器種とともに混在しているが量的に僅かであり、二次被熱の痕跡があることから焼台等の窓内部材に転用されたものであろう。

#### 9号窓跡（第33・34図 P L.13）

窓体埋土には天井基盤のLoam層が厚めに堆積し、掘り抜きの地下式窓窓である。窓跡群中では大型な窓体である。北方より1号・4号・6号・10号窓と続く東側並列にあり、南群に属しその南端に位置する。重複は13号窓に唯一開わり、前庭部分が13号窓体中央部に重複しこれより新しい所産である。前底部の立ち上がり縁辺がかかる程度で13号窓に与える損傷はさほどではない。

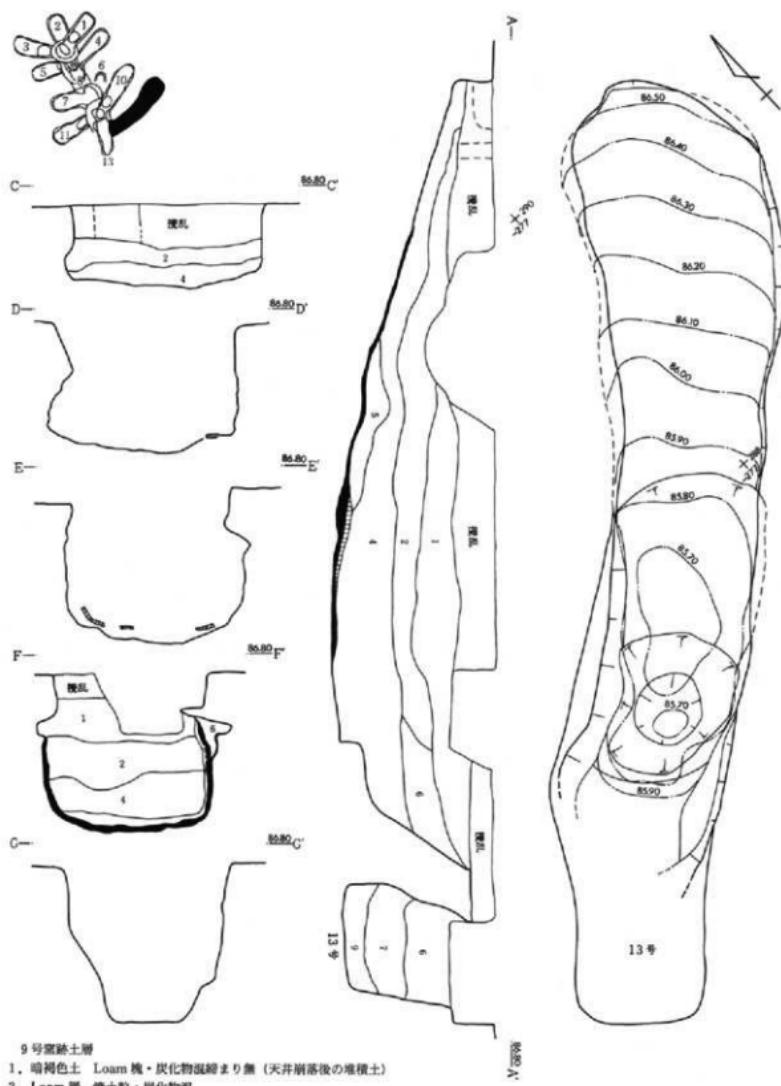
**形状** 窓体形状は窓全体が西側に緩く湾曲して弧を描き、窓尻はやや強く西に傾き細まり気味になる。窓尻に近い焼成部奥部で最大幅をなし、手前部分より窓体幅を狭めて燃焼部から前底部までは直線的な寸胴形状である。前底部掘形は幅狭く燃焼部そのままの形状を保ち手前上端部縁線だけが緩やかに開く。前底部の全体形状は他窓とは異なり大きく開口するすり鉢形にはならず、ほぼ窓体幅のまま細身である。

**埋土** 窓体内の埋土は中位に20~30cm厚のLoam塊層（1層）があり、天井基盤Loamの崩落と考えられる。下位の床面近くには天井・側壁面の表面剝落碎である還元塊・焼土塊を多量に混えたLoam塊層（2・5層）の堆積がある。この層序からは、操業停止の後、完全な天井崩落までには幾ばくかの時間の経過があつたことが窺われる。天井部Loam層（1層）の崩落範囲から推定される窓体内的煙道孔径は30cmになる。

**規模・構造** 窓体の見かけ全長5.7mで群中最大である。（但し8号窓はその遺存状況から見て同程度の規模になる可能性もある。）長軸方位はN-46°-Eを示す。奥壁は直に立ち上がり壁高25cmである。床面基底最大幅は焼成部の窓尻寄りにあり、基底幅1.1mと広く、燃焼部の近くで0.9mに狭まる。焼成部長さは2.3mを測る。燃焼部は長さ1.0mで基底面幅0.9mである。焚口幅は0.8mを測る。前底部深さは95cmで、窓体本幅よりさらに狭まるほどである。左右壁面の立ち上がりは急傾斜となっているが、前底部正面の手前縁部は緩やかに開き窓体内への昇降の便を図ったのであろう。

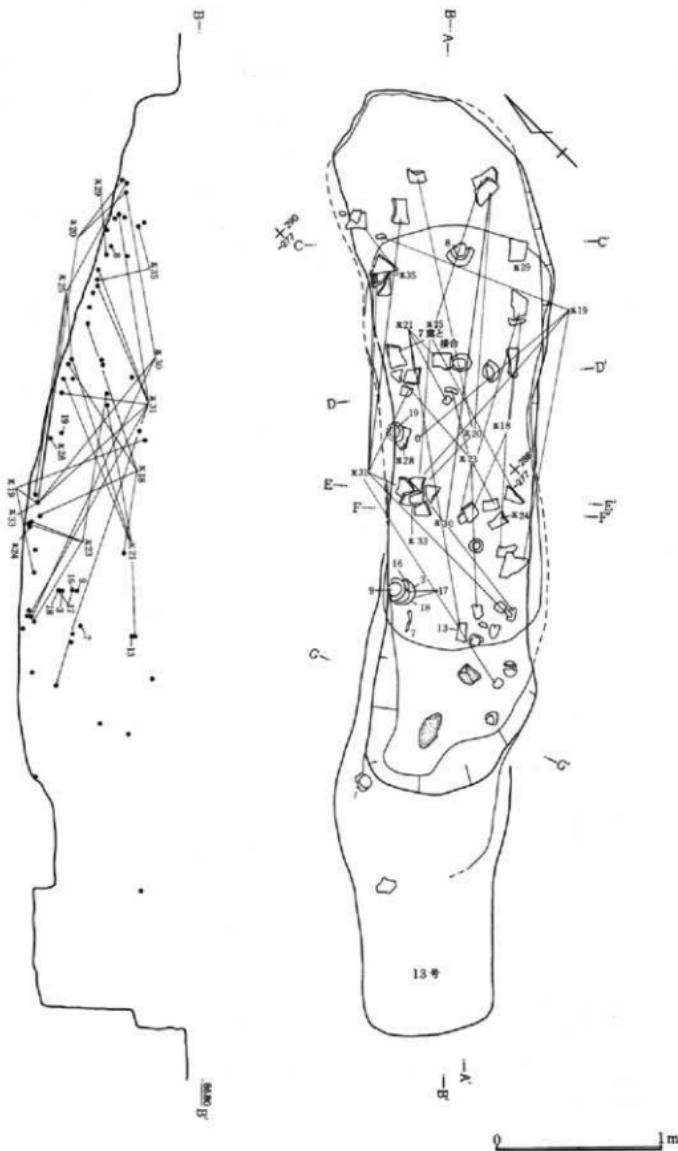
9号窓はその窓体湾曲の度合いが強くやや特徴的に見えるが、窓構造上に何らかの意味を持ちうるものであろうか。湾曲気味の窓体平面形は窓跡群中では3号窓にもその傾向があり、その他の窓跡においても左右壁線いずれかに多少とも変形が認められる。このことは窓の構造的な問題よりも、窓の実際的な方法やこれに携わる人間の身体機能的な侧面から理解を求める方が良いと考える。例えば窓窓に際してはそれほど精緻な設計はなされず、目測的で大きな構想にもとづいた作業ではなかったであろうか。右壁の湾曲線の原因は掘り抜き作業動作を想定する印象からは、右利き工人によつたもので他窓より窓体規模が大きいがために方向の“ずれ”が顕著に表れたと思われる。焼成部の床面傾斜は燃焼部に統く約1mの間は10度程度と緩く、窓尻に向かって20度ほどに傾斜を急にするが、その変化は段や屈曲を形成するような急激な変換状態は示していない。

床面断ち割りによる還元・酸化層の単位は一対で壁面の観察でも補修貼壁等の痕跡は見いだせず、その限りでは複数回の操業はなかったようである。還元層化は床面・壁面とも燃焼部で最も硬質に発達しているが、粘土などの塗布材の仕様は認められなかった。壁面においても還元層と被熱Loam層との土質的な差違は識



- 9号窓跡土層  
 1. 噴褐色土 Loam 桐・炭化物混在無 (天井崩落後の堆積土)  
 2. Loam 層 燐土粒・炭化物混  
 3. 黑褐色土 Loam 桐多量・炭化物混  
 4. Loam 桐層 燐土粒・炭化物多量混  
 5. Loam 壕層 遺存桐・燒土塊混 (天井崩落土)  
 6. Loam 杉層 炭化物少量混

第33図 9号窓跡(1)



第34図 9号実跡(2)

別できなかった。窯体内壁面の被覆はなく基本的には Loam 層の掘り抜きのままである。燃焼部壁面は天井部にかなり近い上位にまでその形状を保ち、推定される天井高は約70cmになろう。

燃焼部の奥部、焼成部との境に相当する左右壁面には一对の横孔が穿たれる。横孔より上位の壁面剥落が進んでおり検出時は凹状の遺存状態である。孔の内面などには被熱などの痕跡は見られない。この横孔と同じく焼成部と燃焼部区分の指標であり燃焼部の施設構造的特徴である窓石は遺存していない。また、調査時の見落としのためかその設置痕も明瞭には検出できなかった。

**遺物** 窯体内における遺物出土状況は他窯跡に見られるような選別後の部分的集中遺棄ではなく全体に散在している。瓦片の出土量は比較的多く、女瓦・男瓦の両者がある。接合資料から個体の全容が知れるものもあり瓦陶併焼窯とも考えられたが、瓦資料の量的な問題とほとんどが二次被熱を被っていることなどから、これらは焼台や窓体の補強など窓内部材として使用された可能性が強い。当窯で焼成された遺物器種は坏類を主に・皿・蓋・塊類の小型品を中心としているが他には、平底の中型甕と思われる小片が存在する。皿種には高台付きと無高台の二種があり、蓋は塊との組み合わせである。

#### 10号窯跡（第35・36図 P.L. 14・15）

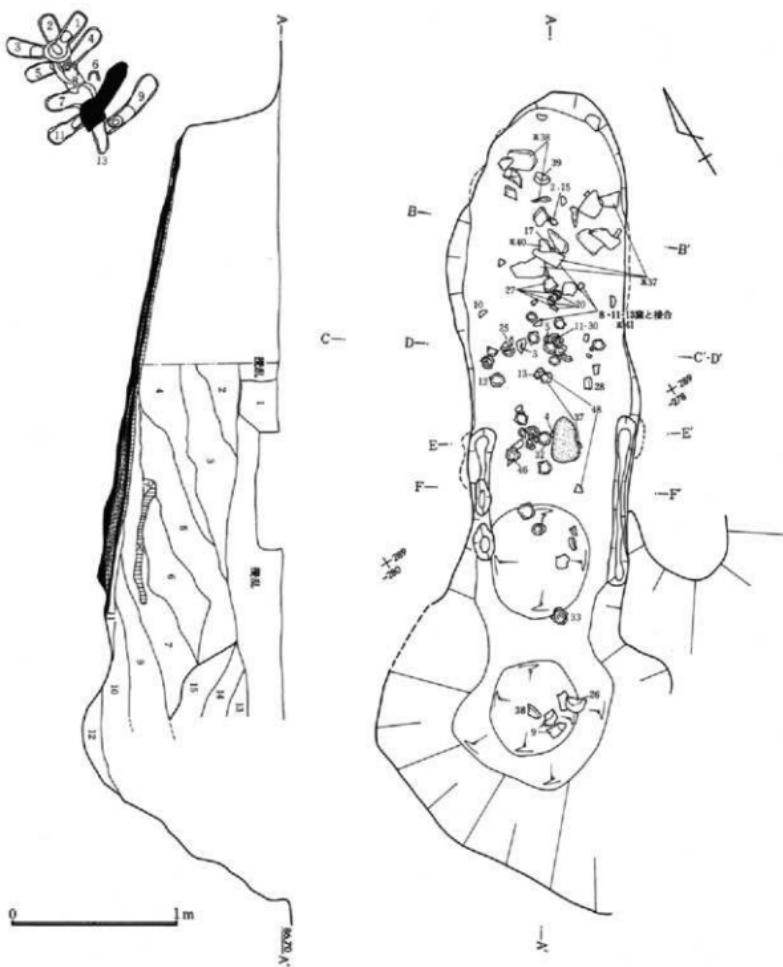
基盤の Loam 層が天井部を維持したまま残り、掘り抜きの地下式窯室を示す好例である。東側並列で、北方から1号・4号・6号窯と続き、当窯跡を挟んで南に9号窯が位置し南群に属する。6号・7号・8号・11号・13号窯と重複関係にあるが前底部を中心に多方向性配置を取る重疊のため前後関係の見極めはあまり明確にはできていない。前底部埋土の高い部位での切り合いが見られる。その位置関係から7号窯の前底部掘り込みと考えられ、新旧関係の一端が知れる。

**形状** 奥壁線は弧状を描き、当窯跡群の中では少ない先細り気味の窓尻形状をなす。焼成部の平面的壁線は緩い膨らみをもつが寸胴形態のまま燃焼部に至り、焚口はやや強めに絞る。前底部は重複により不明瞭な部分もあるが上縁の大きく開口する楕円形で深いす鉢形状を呈する。

**埋土** Loam 層を基盤とする掘り抜き天井の残存は、焼成部の燃焼部に近い部分で30cmの範囲であるが、ほぼ燃焼部との移行部に達している。Loam 層は検出調査面からは20cmの層厚があり、その下縁には2cm程度の厚みで焼土層が生成されている。表層にあるべき還元層の一部と考えられる材は、床面との間隔もなく焼土粒・塊と混在して堆積する。操業停止後ほどなく表面の剥落が生じたものであろう。窓体内埋土の堆積状況は窓尻から焼成部にかけては天井部横断面重視のきらいのある調査手順のため不明であるが、主には前底部側からの流入が認められる。前底部の下位層は Loam 粒・塊を主体にする層序からなり、他窯の構築に際して排土の投げ込みがなされたかのようである。層序上位には Loam 粒層を挟んで上下に灰層がありこれもまた他窯の操業によって排出された可能性が高いものの、発生元の窓跡を特定するには至っていない。

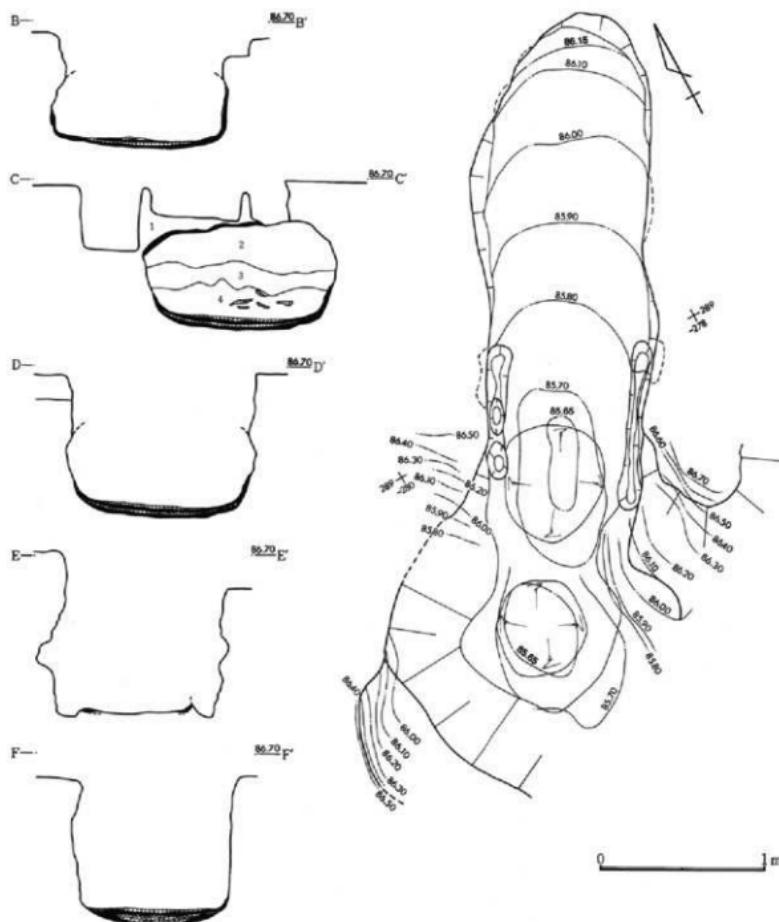
**規模・構造** 窯体の全長は4.7m、長軸方位はN-31°-Eを示す。奥壁は直立して壁高45cmを測り、群中では丈高な部類になる。各部位の規模は焼成部長さ1.7m、焼成部床の基底は床面の最大幅を有し90cmである。燃焼部長さ1.0m、基底幅（壁石痕内法）70cm、焚口部は60cmに狭まる。前底部の底面には50cm程度の小土坑の落ち込みをもち、上端径は南縁の一部は不明だが1.6m程度にはなろう。

検出面から各部位の単純な深さは前底部で1.2m、燃焼部は90cm、焼成部窓尻で60cmを測る。焼成部天井はやや燃焼部寄りで小範囲に残存する。天井基盤 Loam 層は現状での厚さ20cmで下縁に厚み2cm程度の焼土面を残し、還元面は床面近くに塊状で崩落している。窓尻方向は畑耕作による溝で天井土層の確認はできず煙道孔の規模は不明である。掘り抜きの天井が床面のように傾斜をもつかは判然としない。仮に残存する天井



- 10号窑跡土層  
 1. Loam 層 天井基盤  
 2. 黒褐色土 塗化粒・焼土粒・Loam 混混（流入灰層）  
 3. Loam 層・焼土層・還元燒基混合層（天井崩落土）  
 4. 烧土・小焼・塗化物粒・還元小焼 Loam 粒混合層 灰色粘土燒混  
 燃まり無  
 5. Loam 粒層 Loam 粒多、灰・焼土少量混  
 6. Loam 橢層 焼土帶少量混  
 7. Loam 粒層 Loam 粒多、灰・焼土少量混  
 8. 還元帶  
 9. 黒褐色灰層 塗化粒多混燃まり無  
 10. 黑褐色灰層 Loam 粒多、塗化物少量混  
 11. Loam 粒層 塗化物多量混、粘性有  
 12. 灰色灰層 塗化粒・Loam 粒混  
 13. 黑褐色灰層 塗化・Loam 粒混、遺物瓦土粒粗く燃まり無(発生元不明)  
 14. 黑褐色灰層 塗化・Loam 粒混、土粒粗く燃まり無(発生元不明)  
 15. Loam 粒層 (発生元不明)

第35図 10号窑跡(1)



第36図 10号窯跡(2)

高を水平に窯尻及び燃焼部方へ延長した場合の床面からの高さは、燃焼部奥で70cm、焼成部奥で40~50cmになる。

床面は凹凸の少ない緩傾斜で燃焼部から焼成部窯尻までほとんど変化がなく傾斜角度は緩く10度前後である。燃焼部の両壁基部には石材設置の痕跡が残る。痕跡は一連の溝状となっているが底面の窪みより、3ないしは4個の石材が用いられていたと考えられる。最も焼成部寄りの石材設置痕の上位左右壁面には横孔状の窪みが穿たれている。壁面の剥落が少ないとばかり思っていたが、実際は剥落が多かった。

おそらく壁面に設置された石材の上端が孔の下顎になっていたと思われる。孔の下縁は床面より約32cmの高さにあり、孔径は縦15cm・横20~25cmを測る。孔の外縁及び内面には被熱などの痕跡は認められていないが、右壁に穿たれる孔内には10cmほどの塊状の炭化材が検出されている。角か丸か等の形状は定かではないが横孔が確認・検出された窯跡では唯一である。燃焼部手前から焚口部にかけての床面は僅かな窪みをなすが排水や湿気防止などの機能を積極的に考える様な施設ではなく灰・炭化物などの焼き出しによって生じたものと考えられ灰層が固く締まった状態で充填してある。燃焼部床面から前底部への変換は堤状の小さな盛り上がりを見せてすり鉢状の落ち込みを作り、炭化物を多く含む Loam 塊層が埋まる。前底部は重複によって西から南縁の一部があきらかになっているのみであるが東縁はやや大きく膨らむ様な状況が窺われる。

窯体の断ち割り調査によれば壁面での修築や粘土の塗布などは認められなかったが、焼成部では2枚の、燃焼部では3枚の硬質還元層を確認できた。焼成部から燃焼部へと続く還元層から焼成部には初期段階の床面は残されず、第2面と3面（最終面）が形成されている。当窯跡群では相対的に窯一基の操業回数が少ない傾向にある中で、8号窯を上回る床面数をもつ。

**遺物** 窯体内の遺物出土は焼成部に散在して検出された。焼成部埋土中からは床面より30~40cmの高さで瓦片がややまとまりを見せて出土しているが、操業停止後の投棄と考えられる。遺物種は壊類を中心に皿・蓋と共に組み合う塊類で、残存する遺物量はさほど多くはない。焼成遺物の他に第2床面と第3床面には焼台に使用されたと考えられる体部の欠損した壊類が若干残されている。

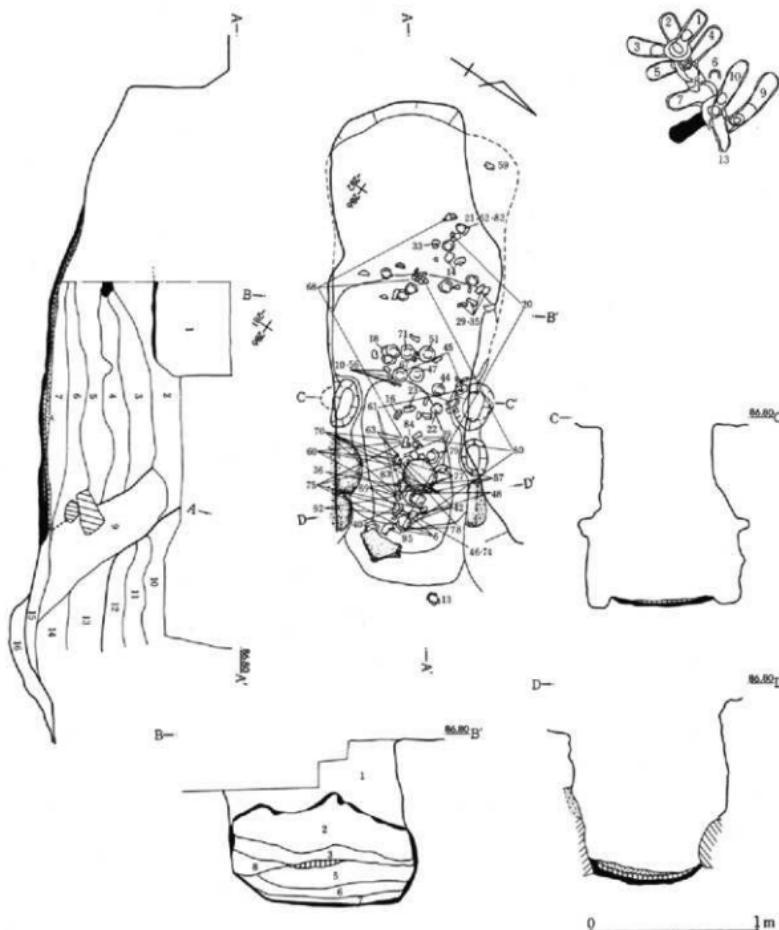
#### 11号窯跡（第37・38図 P L. 15・16）

焼成部天井に Loam 層を基盤にする掘り抜き天井を残す地下式窯である。天井部が往時の状態で依存するのは10号窯と当跡の2例であるが、10号窯よりその範囲は大きい。北より3号・5号・7号窯と続く西側並列の南端にあり、南群に属する。10号窯と13号窯の3者で前底部位置を共有するごとく構築されている。ほぼ180°の反対方向へ10号窯の窯体が伸び、13号窯は両者を二分するように南へ窯体を伸ばす。重複は6号・7号・8号・10号・13号窯に関わり、前底部での土層観察では7号・10号・13号窯より旧く、6号・8号窯よりは新しいと考えられる。

**形状** 最大幅を窯尻にもち、奥壁線は膨らみが少なく直線的で明瞭である。窯体の掘形は変化のない直線的な壁線で僅かに幅を狭めながら燃焼部に至る長方形で寸胴形状を呈する。しかし、燃焼部位の両壁に施される壁石によって内部構造的にはかなりの絞り込みがなされている。前底部は重複する切り合いのためその全容を把握することはできないが本来は他窯と同様なすり鉢状の縦坑をなしていると考えられる。

**埋土** 烧成部から燃焼部にかけての床面直上にはやや厚めに混入物の少ない黒色灰層（7層）が覆っている。中位で板状の還元塊が見られ天井表面材などの剥落であろう。残存する天井部の直下には締まりのない暗褐色土（2層）が窯尻煙道寄りに厚く堆積する。混入物の極めて少ない粗粒ながら均一な土質で自然流入によるものと考えられる。これより下位堆積層には焼土・還元・Loam の塊状物混入が多く見られ、窯体内壁面の剥落による層序形成がなされていると考えられる。総じて窯跡内の土層堆積状態は水平堆積に近く、人為的な投入・投棄等の状況は顯著には認め難い。

**規模・構造** 窯体は前述したように後出する10号窯や13号窯との重複によって前底部が失われているためその全長を知ることはできない。燃焼部または焚口部に相当する範囲までの窯体長は2.8mを測り、長軸方位はN-55°-Eを示す。検出面からの窯体の深さは最深部の燃焼部で約1mに達する。床面は燃焼部から焼成部前半部にかけてはほとんど平坦を保ち、20度ほどに短く傾斜をなした後緩く波打って窯尻部は約30度に角度

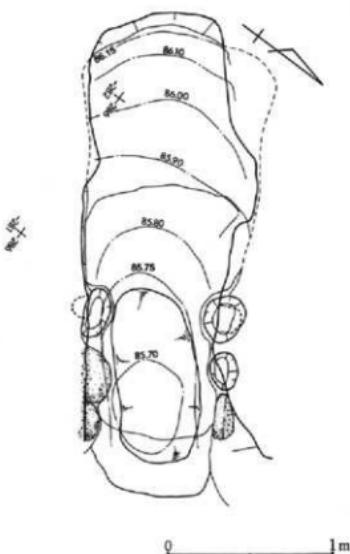


## 11号窯跡土層 ( )番号は10号窯の箇中土層番号を示す

1. Loam 層 天井基盤
2. 喀褐色土 Loam・燒土塊、少量炭化物混縋無
3. 燃土・還元・Loam 混合層 (天井崩落土)
4. Loam 程層 燃土塊・炭化粒混縋無
5. 喀褐色土 燃土粒・還元小塊・黒色炭化物混縋無
6. 橙灰色粘質土 燃土・還元粒混
7. 黑色灰層
- 7'. 黑色灰層
8. 燃土・還元塊層 (壁面崩落)

9. Loam 煙・粒層 炭化物・燒土粒混 (10号または11号窯の排出土)
10. (13) 黒褐色灰層 炭化・Loam 粒混、遺物混土粒粗く縋まり無(発生元不明)
11. (14) 黒褐色灰層 炭化・Loam 粒混、土粒粗く縋まり無(発生元不明)
12. (15) Loam 粒層 (発生元不明)
13. (9) 黒褐色灰層 炭化粒多混縋無
14. (10) 黒褐色灰層 Loam 粒多、炭化物少量混
15. (12) 黒褐色灰層 炭化粒・Loam 粒混
16. 炭化物層 Loam 粒混 (8号窯灰層)

第37図 11号窯跡(1)



第38図 11号窯跡(2)

る。孔の内面に被熱の痕跡や粘土等の使用は認められない。

奥壁面は極めて希薄な焼土面となっており還元層は遺存していない。この現象は焼成部や燃焼部などの部位でも焼土層厚が増す程度で大差のない状況である。いずれも壁面の剥落によるものと考えられ、従って壁面から修築や操業の回数などの確認はできなかった。床面の断ち割りによって、燃焼部のごく小範囲で焼土面と還元面の組み合わせで 2 対を確認し、これによって当窯の最小限の操業回数が 2 回であることが知れる。残存する焼成部の掘り抜き天井は燃焼部境から約 1 m の範囲で確認されている。天井 Loam 層は 30~40 cm の厚さで、弧状天井の下縁には焼土の薄層が生成されている。焼土層に重なる還元層面は見られず、窯体内堆積層中位の還元層帯はこれが落下したものの一部であろう。窯体の横断面に見る天井は小さく波うつものほぼ原型を保っていると思われるが、内溝して立ち上がる側壁と丸天井へ移る変換部に小さな落ち“ズレ”が生じている。Loam 層掘り抜きの範囲から推定される窯体内での煙道孔径は 60 cm だろう。

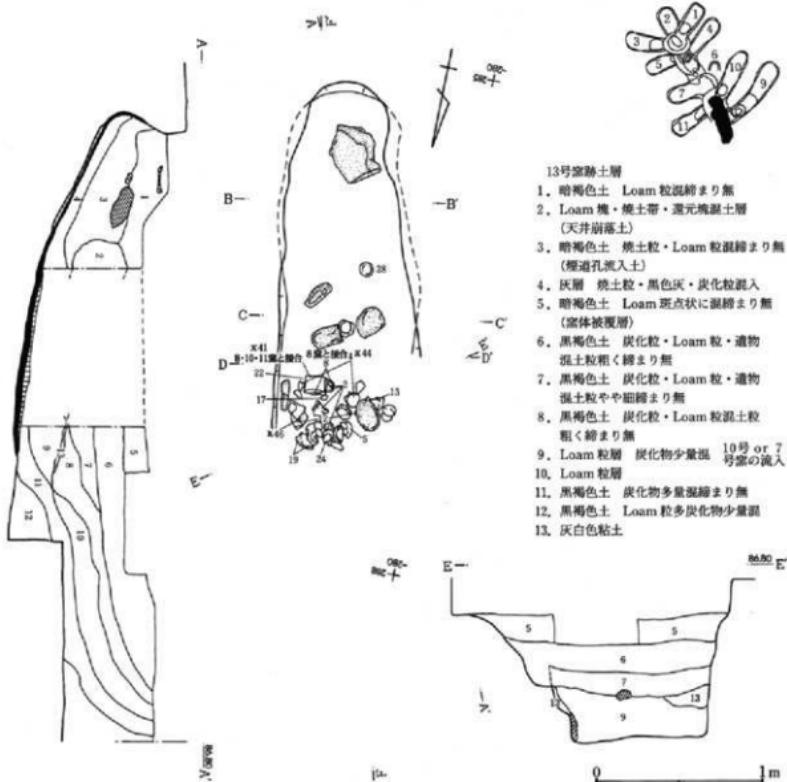
**遺物** 遺物は選別後に遺棄された物と思われる燃焼部の一群と、焼台に使用された焼成部出土のものがある。燃焼部に集中する遺物は床面より僅かながら高く、黒色灰を間層にしている。焼成部には燃焼部に近く、横 2 列に伏せられた焼台使用の外観上完形度の高い壊類がのこり、中位部では体部の欠損した壊類が右壁寄りにやや散在して検出されている。遺物器種には壊・蓋・塊類があり、壊類が主体をしめる。特異遺物としては蓋類に擬宝珠紐で、膨らみのある天井に凸帯の巡る資料がある。窯跡群中および当窯跡遺物としても唯一 1 点例である。女瓦數片が出土しているが量的には極めて少なく、二次被熱も観察されることから当窯跡での焼成品とは考えられない。焼台等の窯内部材として使用されたものであろう。

を増す。しかし、この傾斜の変化は階・段など施設的な構造を認めうるほどの状態ではない。奥壁高は群中で最も丈高で約 60 cm である。直に立ち上がり、上端で緩く傾斜するが縁部の崩れによって生じたものと考えられる。各部位の規模は、焼成部が長さ 1.6 m、床面基底幅は奥壁の近くで 1.1 m を測り、窯体の基底では最大幅となっている。燃焼部は長さ約 90 cm の範囲で、左右両壁にはそれぞれ 3 石の設置が認められる。左壁は設置痕 1 カ所に 2 個の石材が残り、右壁には 2 カ所の痕跡に 1 個の石材が元位置にあり、抜き取られたと思われる 2 個体の石が燃焼部に放置されている。使用する石は径 20~30 cm で厚さ 15 cm 程度のやや扁平の栗石状である。この壁石の設置によって燃焼部幅は石または設置痕の内法で 50 cm になり、焼成部幅の 1/2 までに絞られる。焚口幅は 60~65 cm とやや広がるが意図的な開口幅とは思われない。遺存する側壁石の表面には灰色粘土が巻かれ設置痕にも同質の粘土が充填してあり、ともに被熱等の痕跡はなく粘性が残る質感があった。左右両壁には焼成部側石設置痕の真上位に一对の横孔が穿たれる。床面から孔の下縁まで 40 cm の高さがあり、径は 15~10 cm で奥行き 12 cm の横断面形蒲鉾状を呈する。

## 13号窯跡 (第39・40図 P.L.17)

窯体埋土に崩落 Loam 層があり掘り抜きの地下式窯跡と考えられる。窯体長軸を 1 号・8 号窓とともに南北方向に一線をなす南端南向きの窯跡である。9 号・10 号・11 号窓と重複し、平面的な配置からすれば 7 号・8 号窓ともその可能性はある。新旧関係は 9 号窓より旧く 11 号窓より新しい。土層堆積の複雑な多面観察のため確認を得た結論にいたらず 10 号窓との新旧には不明部分も多い。しかし 13 号窓の燃焼部に及ぶ 10 号窓前底部の掘形がやや浅く 13 号窓燃焼部の残痕とおぼしき裏面基底が認められたことから、10 号窓よりも古い可能性は高い。

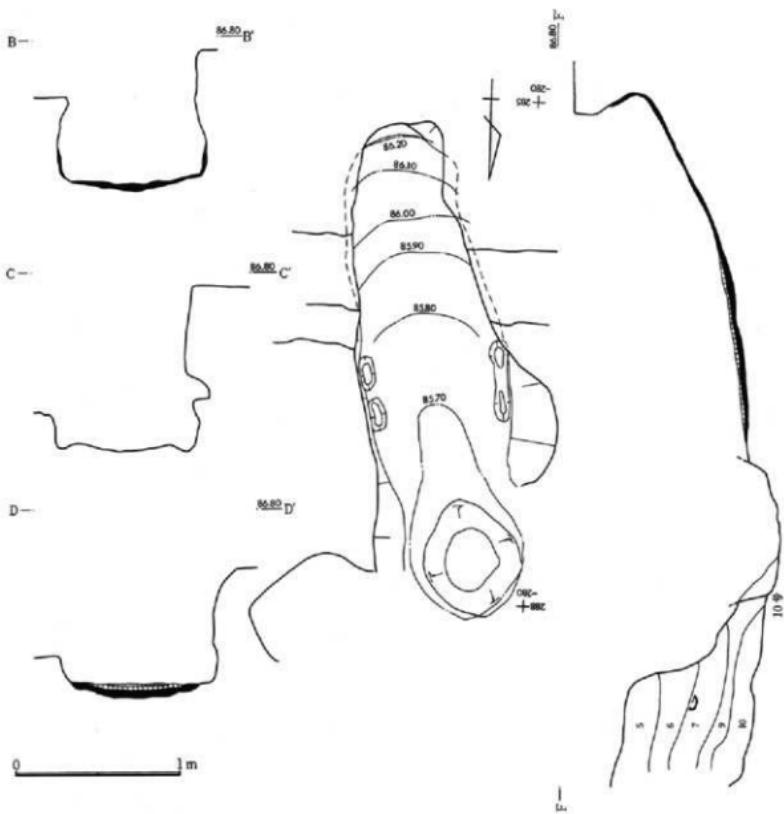
**形状** 光仙房遺跡の窯跡群中では他に無い窯尻の細まりの強い平面形状を呈する。窯体幅も燃焼部に至って緩く膨らむ程度で全体に細身寸胴型である。前底部は調査時に 7 号・10 号窓前底部との重複の新旧が見極めがたくその形状を明らかにできなかったが、縱坑状であったと考えられる。



第39図 13号窯跡(1)

**埋土** 焼成部の中位に Loam 塊・焼土帯・還元土塊の厚い混合層（2層）が認められ、天井の崩落と考えられる。窯尻部には締まりのない暗褐色土（1・3層）が大量に堆積し、煙道孔からの流入土であろう。床面直上には操業に伴って生成された焼土粒・炭化粒・黒色灰の混じった灰層（4層）が覆う。この灰層と同質の層は燃焼部から前底部におよび搔き上げされた状況が窺われる。

**規模・構造** 窯体の全長は前底部の北端部が10号窯との区別が確定できないため、最大に見積もって3.4mになる。長軸の方位は、N-11°-Wを示すが、前述したように窯尻の方向は南方方位軸に対してS-11°-Eとなる。床面は燃焼部から焼成部手前まで傾斜10度で緩く、奥壁より約1mの後半部から段等の変換を作らず27度と急傾斜になる。奥壁は強く内傾して立ち上がるが、地上部に近くは直立すると思われる。奥壁高は40cmである。焼成部長さ1.4m、床面基底の最大幅は80cmで焼成部と燃焼部の区切り部位にある。燃焼部両壁には石材の遺存がなく、それぞれ2個体の設置痕跡が検出されている。石材の痕跡より燃焼部の長さ50cm、内法幅



第40図 13号窯跡(2)

60cmを測る。焼成部寄り右壁の石材設置痕上には横孔が穿たれる。床面より孔下縁までの高さは30cmで、径は15×15cm、奥行き15cmである。左壁は後出する9号窯の前底部によって壁面の上縁が削平され横孔は遺存していない。基底部に近い左壁面には扁平な小石材の設置と少量の灰色粘土塗布が認められた。

床面断ち割りでは、焼成部前方部から燃焼部にかけて1対の焼土層と還元硬化面が確認されている。各部位の壁面被熱度合は、その上位で剥落のため明瞭な赤化焼土面も残らず、床面に近い基底付近で焼土と還元層の形成が確認できる程度である。床面、壁面のいずれでも複数回操業を示す修復等の痕跡は認められなかった。

**遺物** 遺物は燃焼部に集中して検出され、製品選別後の放置と見られる。遺物直上には燃焼部壁面に設置されたと考えられる数個の扁平石がある。遺物器種には壺・皿・蓋・塊類があり、壺類が大半を占める。特異遺物には耳坏がある。口縁に続く耳部単品のため底部や全体の器形状などは不明で、器本体にも耳部の剥落や欠損を観察できる資料は見いだせていない。窯跡群で13号窯のみの出土で当窯においても僅か小片1点である。この耳坏については窯跡群周辺に近接する数軒の堅穴住居出土遺物に見られるが、数個単位で耳部だけに限られ、あえて耳部だけを収集したのではないかと思わせるような不可解な出土状況である。

光仙房窯跡一覧表

窯跡名	構 造	室 内 施 設	室 体 長	焼成部長・幅	燃焼部長・幅	焚 口 幅	床傾斜度	操業回数
1号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石・横孔	3.7m	1.4m×0.95m	0.9m×0.6m	0.6m	15度	2回
2号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	4.8m	1.7m×1.1m	1.4m×0.75m	0.7m	19度	2回
3号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	4.3m	1.6m×1.0m	0.9m×0.75m	0.6m	20度	1回?
4号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	3.9m	1.6m×0.9m	0.65m×0.75m	0.65m	23度	1回
5号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	3.6m	1.5m×0.95m	0.9m×0.75m		20度	1回
6号窯跡	窯尻部のみ	消失部分多く詳細不明					(10度)	不明
7号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	3.3m+α	1.2m×0.8m	1.0m×0.70m	0.55m	10度	1回
8号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石	3.5+α	1.6m×1.1m	1.0m×0.9m	0.7m	16度	2回
9号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	5.7m	2.3m×1.1m	1.0m×0.9m	0.8m	20度	1回
10号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	4.7m	1.7m×0.9m	1.0m×0.7m	0.6m	10度	3回
11号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	2.8m+α	1.6m×1.1m	0.9m×0.5m	0.6~0.65	20~30度	2回
13号窯跡	地下式窯室	燃焼部側壁石痕・横孔	3.4m+α	1.4m×0.8m	0.5m×0.6m		10~27度	1回

## 2. 窯跡操業に関わる灰及び燃料材について

### (1) 7号窯検出の灰試料

光仙房遺跡の須恵器窯跡群では、薪燃料に用いたであろう炭化材とともに11号窯跡の燃焼部床面より灰試料が検出されている。この灰の遺存状態は、焼成品の選別に際して放置されたと考えられる不良品が覆った状態で、両手のひらに乗る程度の量である。肉眼観察での灰質は極めて微細で灰白色を呈し、夾雜物がほとんど無く明らかに薪材燃料からの生成物でないことが見て取れるものであった。直感的には藁灰に近い物ではないかと思われた。量的には僅かではあったがまでは須恵器焼成に何らかの関連も考えられたため、この灰の母植物について検討する目的で植物主酸体分析を試みた。

一般にイネ科植物は主酸を多量に吸収して細胞壁に沈積させること（植物主酸体）が知られており、そのうち、葉に形成される機動細胞主酸体についてはイネを中心とした形態分類の研究が（藤原 1978など）によって進められている。こうしたことから、得られた灰試料について植物主酸体（機動細胞主酸体）の検出を図り、その形態を観察することによってその母（イネ科植物）についての検討ができると考える。

#### 灰試料の分析方法

試料は光仙房遺跡須恵器窯跡11号窯跡の燃焼部床面上より採取された灰である。この灰試料について以下のような手順に従って植物主酸体の検出を図った。

試料（0.5g）をトルビーカーに採り、30%の過酸化水素水を20~30ccを加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ボジナイザによる試料の分散後、沈降法により10mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。

#### 結果及び考察

観察の結果、多くの植物主酸体が認められ、そのうち鳥のくちばし状突起をもつ主酸体が最も多く観察された。この植物主酸体はその特徴（鳥のくちばし状突起を持つ）からイネの穂（穀殼）に形成される主酸体と判断される。次いで多く認められるのは、断面形態がイチョウの葉形をして裏面には小さな亀甲状紋様が観察される機動細胞主酸体（葉に形成）と判断される。また、砂時計の形状をした単細胞珪酸体（葉や茎に形成）が横向きに連なった状態で観察され、この特徴からイネ型の単細胞珪酸体と判断される。

その他、ネザサ節型（アズマネザサなど）やクマザサ属型（ミヤコザサ・スズタケなど）、ヨシ属（ヨシ・ツルヨシなど）の機動細胞型酸体も若干認められるが、これらは灰を採取する際に粘土や砂と一緒に混入した可能性が高いと推測される。

以上のような結果から、灰試料の母植物はイネであり、その主体は穀殼で、一部稻藁も焼かれていると判断される。

#### 引用文献

藤原宏志（1978）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）…イネ (*Oryza*) 属植物における機動細胞主酸体の形状」『考古学と自然科学』11 P. 9~20

7号窯燃焼部床面出土遺物に覆われて残されていた灰は、稻穀と稻藁が主たる生成物であることが判明した。窑窓構造の須恵器窯で製品焼成に稻穀や藁が果たして燃料材の一部として用いられていたのであろうか。灰の量が少ないと点からすればこれに消極的ならざるを得ないが、調査時でこの種の灰に対する認知に不明であった危惧は払拭できない。したがって単純燃料材としての稻穀や藁の使用は考えにくいとしても、祭儀または技術的等何らかの目的的行為を想定する余地は残されていると考えた。それらを想定する理由には、3号窯にはほとんど唯一の出土遺物である土師器がある。この遺物そのものには祭器としての属性は認

められないものの、3号窯の検出状況を考慮したとき祭儀的な行為の行われた可能性を思わしめる状況下の遺物であること。また、焼成技術的に関連するのでは、という根拠は、11号窯をはじめ何基かの窯跡製品の中には器表面が不完全な煤切れとは言い切れない吸炭黒色を呈するものがあり、そのような資料が少ないとがら存在しているからである。器面の黒色化を意図した処法材の可能性も考えられる。

#### (2) 光仙房遺跡須恵器窯跡燃料材の樹種同定

各窯跡の窯体内や灰原を形成する前底部には灰または粒状の炭化層とともに多くの塊状炭化物が残されていた。蛇足にすぎるが、これらの炭化物・材は須恵器焼成の燃料に用いられたであろうことは容易に推測できる。どのような樹種が燃料として利用されていたかを同定の主目的とする。

#### [同定結果

遺構・出土位置	樹種	主な試料の形状	(r : 横断面の放射方向の長さ) 最高計測年輪数
1号窯前底部中層	クヌギ節	r3.5~5.0cm	35年輪
1号窯前底部埋土	クヌギ節	r2.5~5.0cm	21年輪
2号窯燃焼部	クヌギ節	r2.0~4.5cm	24年輪
4号窯燃焼部床面	クヌギ節	r5.0cm前後	
5号窯燃焼部灰層	クヌギ節	r2.7~4.5cm	45年輪
6号窯焼成部床面	クヌギ節	r3.5~4.0cm	25年輪
9号窯埋土	クヌギ節	r2.0~3.5cm	39年輪
9号窯埋土	アカガシ亞属	推定直径5.5cm節部	]

炭化材の採取位置は各窯により、前底部中層・床面・燃焼部灰層・床面・埋土など異なる位置からの採取にもかかわらずアカガシ亞属1点を除きすべてクヌギ節であった。この結果から、当窯跡群では燃料材としてクヌギ節材が専らに使用されていたと考えられる。また、数えられた年輪数からは、そのほとんどが20年以上、最高で45年の生育を経た樹木が燃料材として使用されている。

当窯跡群の各窯跡において、1回の操業でどのくらいの薪燃料が費やされたかは不明である。およよその心象を描くに、現代陶芸で用いられる薪焚きの窯窓を考えれば比較的易いと思われる。むろんここで生み出されるのは焼締陶器であり長時間の燃焼の上に高温を必要とし、質的にも須恵器とかなり違った物であり、消費燃料量には格段の差があろう。しかし、須恵器焼成に際しても枯れ木を収集する程度で事足りるとは思われず、伐採から乾燥を施したかなりの量の薪燃料材が求められたと考えられる。舞台遺跡の窯跡群11基の場合でも同様であるが、薪材の伐採・運搬には少なからず労力を必要するという推測は難くない。ごく手短な周辺には燃料採集のための自然環境が整っていたのであろう。クヌギ材の燃料以外の使用については、光仙房遺跡古墳時代前期の消失家屋(D-1号住居)の建築材もそのほとんどがクヌギ節であったことが判明している。したがって当遺跡周辺地域にはクヌギ節が豊富な植生として雑木林の様な自然環境が推定できよう。

窯跡操業に関わる灰及び燃料材についてのうち、灰試料と燃料材樹種同定自然科学分析結果についての報告〔 〕部分は、前者が鈴木 茂、後者は植田弥生の両氏(株式会社 パレオ・ラボ)による。それ以外の記述は編集者が行った。

## 第2節 出土遺物

光仙房道跡群は12基の基本的には（6号窯は窯尻部のみの残存で定かではない）焼成部天井掘り抜き式窯方法の窯窓で構成されている。当窯跡群は、本書第2章第2節(2)で述べたように各窯跡から分離した状態での灰原形成は確認されず、したがって出土した遺物は前底部を含めそのほとんどが窯体の内部からのものである。窯跡群全体の遺物量は小片をも含めた総数1854個で、調査過程で表面採取として扱った量を加えても2000個には満たない。また、口縁部等の小片を除き、底部残存1/4を個体把握の目安としてかろうじて個体を認識できる数量は1275個体にすぎない。考古学調査による遺物資料の多・少は必ずしも本質的な数量を示すものではなくたまたま残った物であり、しかも生産跡の場合は破損廃棄品である。“すぎない。”とする遺物量に対してはその認識の仕方によっては論議の生ずるところとなろう。光仙房窯跡群における残存遺物量に対する感覚は、群構成が拮抗し光仙房窯跡群に開窓時期が先行しながらも工人組織が同一系譜あるいは幾人かの工人はそのまま生産に携わっているのではないかと考案している隣接舞台窯跡群検出の15000点を上回る遺物量との比較からくる印象である。とは言え、舞台窯跡群の個別窯跡が示す稼働操業回数は大方に光仙房窯跡のそれより多いという事実があり、操業期間の長さも勝る可能性もまた高い。これらのこととは同窯跡群の単体窯跡での一回稼働による須恵器生産量の多寡を、残存する遺物の単純数量には置き換えられないという至極簡単なことを意味している。

しかしながら、光仙房窯跡群の破損廃棄品1854個ないしは1275個に“すぎない”。遺物量を等閑視し難い点はまさに遺物そのものの外見的様相に見いだせるからであり、それは、生産量の總体数よりも生産効率の側面を強く意識づけられるものだからである。そして、単発・単独での生産ではなく群構成を成立させうる生産体制を一定期間持続するという技術的な定立が窯われるからに他ならない。再び舞台窯跡群との比較に頼るが、光仙房窯跡群での破損廃棄遺物に残される歪みの生じている量的な度合いは極めて少量で、むしろ焼きの甘さが目立つ傾向にある。これを焼成技術の低下や品質の粗悪化とする考え方もある。しかし、舞台窯跡群と光仙房窯跡群との差違は巨視的には平野平坦地域の立地条件を同じくするが、微地形的に見て前者は伝統的ともいえる傾斜面利用の築窯形態がその初発で多作・多損の傾向がいまだ色濃く、焼き歪み品の多さや顕著さ、そして広範な灰原の形成がそれを物語っている。対し、後者は舞台窯跡群において行われたであろう様々な築窯方法の段階を経て、1号窯に顕現される築窯技術（『舞台遺跡（1）』「第4章 1. 須恵器窯跡について」（静岡県埋蔵文化財調査事業団 2001））を引き継ぎ、須恵器生産立地の選択肢を格段に拡げる平坦面での築窯方法と窯構造の変革を短時間で確立し、焼成過程における少損効率化を生み出すことで発展的に展開した生産技術の改良現象とする見方に、より与したいからである。

### 1. 焼成須恵器の器種構成と特徴

光仙房窯跡群での焼成器種は小型食器類がほとんどで、坏類を中心に皿・蓋・塊などを主体的な生産器種とする。貯蔵具は小型瓶や鉢類が1～2点確認されたのみで定量が生産されているとは考えにくい。その他中型平底甕の小片も出土するが僅か2点で二次被熟の痕跡から焼台など転用部材である可能性が高い。特徴的な遺物には13号窯より耳坏の耳部と思われる片耳が、11号窯からは疑宝珠紐で笠部に低凸帯を巡らす蓋がありいずれも1点のみである。各窯跡からは量の多・少に差があるものの男瓦・女瓦が出土する。9号窯に比較的多く検出されているが接合関係にある二次被熟手の平大の小割資料が目立ち、焼台としての使用が主であったと考えられる。また、7号窯焚口の床面となる削平された8号窯埋土に数枚の女瓦が下地に用いら

れている。他窯の出土状況からも当窯跡群で瓦を焼成した積極的な痕跡は見出しづらい。総体としては窯部材使用の性格が強く、外部からの搬入と考えられる。したがって光仙房遺跡窯跡群は須恵器専焼窯として良く、焼成器種には個別窯跡による占有性も認められない。

器種別の数量割合は窯跡群全体で総個体数1275(1854)に対し、坏類974(1442)で76.3% (77~78%)、皿類77(123)で6% (6~7%)、蓋類51(51)で4% (2~3%)、塊類149(222)で11.6% (12%)の比率が得られる。なお、( )内の数値は個体把握から除いた小片も含めた数ないしは比率値である。また、瓶・壺類は数点であることから総体数から除いてある。器種別の数量は坏類が主体で他種が客体的な状況は明らかであるが、個別窯跡段階では遺物の残存量にかなりの差があり上記の比率数値に必ずしも対応するわけではない。最も低割合の1号窯は自窯総個体数に対する坏類の比率は50%(41%)、窯体のほとんどが消失する6号窯を除く高比率の窯跡は、坏類90% (94%)の13号窯である。各窯跡における器種別の比率は表(表. 1-2)に示したが、概括では坏類の割合は高く80~90%を焼成していたと考えられる。他器種の窯跡別比率にさほどの変動が見られないことからも坏類が主生産品目であったとして良いであろう。

製作技法については、各器種とも破損状況の観察から体部巻き上げで輪轍による成・調整を基本としている。

表. 1 光仙房遺跡窯跡器別生産百分率 (1)

窯跡名	器種	個体数	総数	下段破片含百分率
1号窯跡	坏	26	26	50%
	口縁小片	10	計36	41%
	皿	14	14	35%
	小片	26	計49	45%
	塊	12	12	23%
	計		計88	
2号窯跡	坏	53	53	64%
	口縁小片	38	計91	68%
	皿	7 + α	7	8%
				5%
	蓋	5	5	6%
				4%
3号窯跡	塊	18	18	21%
	口縁	12	計30	23%
	計		計83	
				計133
4号窯跡	坏	75	75	66%
	口縁小片	88	計163	72%
	皿	16	16	14%
				7%
	蓋	5	5	4%
				2%
5号窯跡	塊	17	17	15%
	口縁小片	26	計43	19%
	計		計113	
				計227
6号窯跡	坏	21	21	58%
	口縁小片	21	42	49%
	皿	5	5	14%
	小片	29	25	29%
	蓋	4	4	11%
				5%
7号窯跡	塊	6	6	16%
	小片	9	15	17%
	計		36	
				計86
8号窯跡	坏	212	212	85%
	口縁小片	111	計323	97%
	皿	7	7	3%
				2%
	蓋	7	7	3%
				2%
9号窯跡	塊	20	20	8%
				5%
	計		246	
				計357
10号窯跡	坏	58	58	69%
	口縁	2?	2?	2%
	皿	8	8	9%
	蓋	13	13	15%
	塊			
	計		81	

## 第3章 窯跡と出土遺物

表2 光仙房遺跡窯跡器別生産百分率(2)

窯跡名	器種	個体数	总数	下段破片含百分率	窯跡名	器種	個体数	总数	下段破片含百分率
9号窯跡	坏	107	107	76%	13号窯跡	坏	86	86	90%
	口縁小片	25	計132	69%		口縁小片	55	計141	94%
	皿	9	9	6%		皿	3	3	3%
				4%					2%
	蓋	3	3	2%		蓋	3	3	3%
				1%					2%
	塊	20	20	8%		塊	3	3	3%
	口縁小片	26	46	5%					2%
	總		246			總		95	
	計		計357			計		計150	

窯跡名	器種	個体数	总数	下段破片含百分率	窯跡群總体器種別生産百分率			
					器種	総個体	下段破片含百分率	
10号窯跡	坏	161	161	83%	13号窯跡	坏	974	26.30%
	口縁小片	90	小片合計251	88%		片合	1442	77~78%
	皿	11	10	5%		皿	77	6%
				3%			123	6~7%
	蓋	3	3	1%		蓋	51	4%
	塊	20	20	10%			51	2~3%
				7%		塊	149	11.60%
	總		194				222	12%
	計		計284			總	1275	
						計	1854	

窯跡名	器種	個体数	总数	下段破片含百分率
11号窯跡	坏	155	155	77%
	口縁小片	22	計177	80%
	皿	小片	3	2%
				1%
	蓋	小片多	13	7%
				6%
	塊	29	29	15%
				13%
	總		200	
	計		計222	

ると考える。有高台の皿・塊類はいずれも付高台で、高台付き塊には底部外面に爪形の圧痕を施すものがある。また、底部の切り離し・調整技法は右回転糸切り無調整が大半で、とくに鍵盤回転方向に関して左回転は観察資料の限りでは確認していない。ただ、底部切り離し後の調整には坏類で腰部を持ち箒削りを施すものがある。箒削り調整の坏類は1号窯出土に限定され、出土遺物量の少ない中でも一定量を占める。箒工具による坏類底部とその周辺再調整は群馬県での須恵器製作技法変遷では8世紀代までを中心として、同世紀の糸切り切り離し技法導入後の併用は比較的短期間のうちに無調整へ変換を遂げるとされるのが一般的である。光仙房窯跡群では前述したように回転糸切り無調整が通有な技法として確立された時期になり、箒調整を施す坏類を焼成した1号窯は中でも最も後出な窯跡の一基と考えている。この回帰的ともいえる箒削りの技法については、群馬県内の須恵器坏類の一般的後続型態に見られる底部小径化現象への指向的対応とも解釈できる。しかし、光仙房窯跡群のみならず当該期の須恵器には、例えは蓋類の笠部に普遍的に施される箒削り調整のごとく通常に存在し用いられる技法である。従って技法上の変遷観をもって遺物や遺構の帰属年代を安易には過らせることはできない。ここでは、1号窯という限定された窯跡での無調整資料と混在するあり方から、1号窯操業段階で生産に携わる構成員内部の世代交代にともなう新人工人の参入を想定し、底部への体部巻き上げでの稚拙な製作技術を補正した特殊・局所的なものと理解したい。

## 2. 器種分類

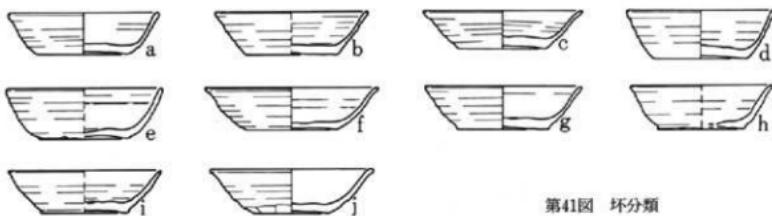
光仙房遺跡窯跡出土の焼成須恵器種には壺・皿・蓋・高台付き壺・無高台壺をはじめ極少量の瓶・広口鉢などがある。分類に際しての基本的な考え方や分類類型の規範は、「舞台遺跡（1）」側群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001 第3章 第2節 窯跡 窯跡出土遺物に準じこれを踏襲しているが、器種形態の類似様相が強く窯跡群の成立自体が一系譜的な繼承の可能性が高いと思われるからである。しかし、壺類に限っては窯跡群全体を包括するには類型分けが煩雑にすぎ舞台遺跡で用いた規範には収まらないものがあり類型が増えている。なお、光仙房遺跡窯跡に新器種として登場した皿類や壺類以外の各器種の新類型については舞台遺跡窯跡遺物分類の規範に加えた。

遺物の作図にあたっては細部における多様な歪みが形状（個体間の類似・相違の識別）・計測値などの同定に大きな障害になるため、遺物の最も端正と思われる部分を選択し展開法で示した。現実に生じている歪みは須恵器製作に際し意図的・作為的に成されたものではないであろうと考え、本来製作者が目指したであろう器形状の復元形を第一義に求めたためである。器種ごとの分類は全体形状を目安にした形態分類であるが、器種によって若干異なる。例えば蓋類については口縁端部折り返しの形状などで分類したがそれらの部位が類型化の特徴を有していると考えた。外輪指数などの具体的な数値を根拠にしないため、全体ないしは部分形状からうける印象を類型化したといったものに近い。その際特には壺類に顕著であるが、口唇部の「薄」・「厚」・「丸」などの属性を考慮していない。それは、粘土紐による積み上げないしは巻き上げという基本的な成形技法と精選均一な粘土素材によらないために生じる個別変異の結果である可能性も考えられ、実際の類別作業においてはこれらの属性を加味した場合には個体段階にまで類型化が及んでしまうことが懸念されたからである。

分類については器種ごとの形状によってA・B……類の大別を、各類の小別をa・b……類型で、I・II……は同類器形内での大・小の分類を示した。なお、小別a類・b類……は複数工人の協業体制を想定し、個工人の“作風”あるいは“作り癖”などいわば“くせ”なるものの抽出を意図した分類である。しかし、個工人の内的な型式変遷とともに言うべき形状変化の峻別は、なし難く分類の括りにやや無理・不明晰が残る。

**壺** 1形態に包摂されa～jの10類型がある。各同類型とも多少の計測値差はあるものの、計測値としてのまとまりの変移は緩やかで明瞭な大・小器形の分化としては認めにくい。右回転糸切り無調整で、少量腰部に手持ち箒削りを施すものがある。（第41図）

- a類 口・底径比の差が小さく、体部が直線的に立ち上がる。やや外反気味の体部をもつものもあるが少量で類型中の変異とした。
- b類 口・底径比が大きく、深目で直線的な体部をもつ逆台形。
- c類 口・底径比が小さく、扁平で体部が直線的・外反するものがある。
- d類 口・底径比が小さく、深目で箱形である。体部は直線的か、中位に張りをもつものもある。
- e類 口・底径比が小さく、深目で体部に丸味をもつ。
- f類 口・底径比が大きく、腰部に張りがある。丸味のある体部下半から上半は外反して開く。
- g類 口・底径比が小さく、腰部にやや強いくびれをもつ。体部上半は緩く外反して開く。
- h類 口・底径比が小さく、丸味が強くくびれて張りのある腰・体部から口縁は外反して開く。
- i類 口・底径比が小さく、体部は直線的に延びる。
- j類 口・底径比が大きく、体部に丸味を持ち上半は大きく外反する。腰部に手持ち箒削りを施す。



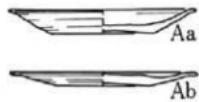
第41図 皿分類

皿 無高台皿A類と高台付き皿B類の2形態に分類できる。(第42図)

皿A類はa・bに分類する。確認できる資料が2点と少なく、b類は製作・焼成時の重みからくる形状の可能性もある。

a類 口径15cm、底7.8cm、器高2.1cmの体部が直線的に開く。

b類 口径15cm、底径7.8cm、器高1.2cmで体部が外反し水平になる。

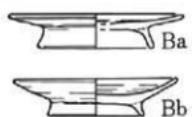


皿B類は丈高な付高台で、口径が12cm後半から13.5cmの間にあり、大・小器形分化は不明瞭である。形状からa類・b類の2類型がある。

高台の形状で2~3に分類が可能であるが、皿種の数量が少なく煩雑になるため窯跡別で指摘するにとどめる。

a類 体部が直線的で水平気味に開く。

b類 体部が直線的で僅か立ち上がり気味に開く。



第42図 皿分類

蓋 鈕形状と天井笠部の作りでA類・B類に分類する。(第43図)

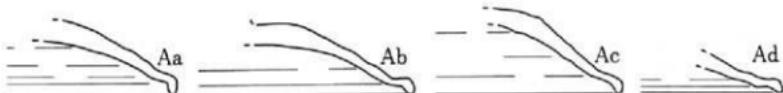
蓋A類は天井笠部回転窓削を施し、環状鋸で口縁単純折れである。総じて天井部は丸味が少なく扁平である。口縁端部の形状にはa類~d類の4類型がある。口径では15cmから18.3cmまでの幅があり、組合わざる塊類口径との対比からI類(15cm以下)、II類(17cm以下)、III類(17cm以上)に分類される。

a類 口縁端部は丸味をもち内屈する。

b類 口縁端部は丸味をもち直下に折れる。

c類 口縁端部は略三角形で外縁は面取り波音に調整を施す。

d類 口縁端部の屈折は緩く、外方に開く。



第43図 蓋分類

蓋B類は天井部に断面三角形の凸帯を巡らし、凝宝珠鉢である。口縁端部は欠損するが単純折れになろう。

窯跡出土資料は1点のみで、同形の蓋は光仙房遺跡C区C-15号・16号両住居跡より小片が出土している。



**塊** A類無高台塊とB類有高台塊に分類する。(第44図)

塊A類は回転糸切り無調整で深い体部の形状でa・bに分類する。口径15cm以下のI類と15cm以上のII類で大・小の分化が認められる。I類小口怪塊は坏類に類似するものがあり、器高が4cm以上を塊に、以下を坏器種分類した。

a類 体部が直線的または内湾する。

b類 体部が緩く外反する。

塊B類は回転糸切り付高台で、形態からa・b・c・d・e・fの6類型に分かつ。また、口径15cmを境にI類(15cm以下)とII類(15cm以上)に分化が認められるものもある。

a類 腹部にやや丸味をもち強く張る。深目の体部は直線的に立ち上がる。

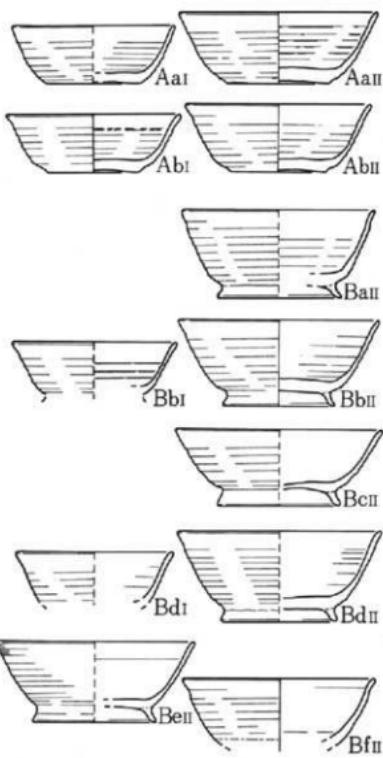
b類 腹部の張りは強く、やや浅めの体部が外反気味に開く。

c類 腹部にやや張りをもち、浅い体部が大きく開く。

d類 腹部に僅かな丸味をもち、深目の体部は上半外反気味に開く。

e類 腹部を作らず、体部は直線的に開く。

f類 丸く内湾する体部で、口縁部が強めに反る。



第44図 塊分類

**耳坏** 長目の耳部から体部の片耳片で、高台の有無は不明である。13号窯から1点のみの出土であるが、光仙房遺跡C区C-2号・C-15号・C-16号住居跡より耳部だけが出土しておりいずれも全体器形状をなす資料はない。C-15号住居跡からは耳部9点が検出され、窯跡群での1点とともに不可解な出土状況である。

**瓶** 口颈部と胴部・底部破片である。胴部片形状からa・bに分類できるが全体形状は不明である。

a類 肩から胴部にかけて丸味の強い形状である。

b類 低い高台が付き直線的な胴部である。

**広口鉢** 平底で体部は内湾気味に大きく開き、口縁部は外反。口唇は断面矩形になる。

## 3. 窯跡出土遺物各説

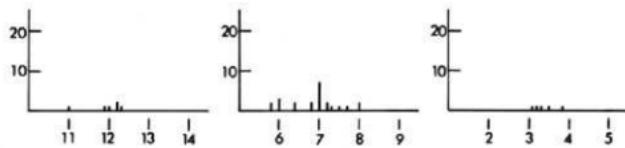
## 1号窯跡出土遺物 (第45・46図 表. 3 PL. 18)

1号窯跡は当窯跡群中でも最終操業になると考えられる1基である。出土遺物は少なく、なお全体形状の知れる個体数も少量である。壺・皿・塊などがある。

壺は口径13cm前半に集中。底径は7cmを頂点に6cmから8cmまでの幅がありやや小径の底に傾く。器高は3cm前半に収まる。底部のみの資料には8cm大底径も少量あり塊A類の存在も考えられる。a類(1)とj類(2~9)がある。j類の特徴となる腰部の簾削りをもつ資料は半数近く、1号窯跡ではこの技法を用いる壺は製品中の一定量を占めていたと思われる。

皿は丈高な高台の付くB類で体部の直線的なa類(20~22)と内湾気味なb類(23~25)がある。口径12~13cmである。

塊は付高台のB II類で全体形状を知るものはない。体部の丸味が強く、口縁部に反りを持つBf II類(26)が特徴的な他は部分的に各類型に特定できない。

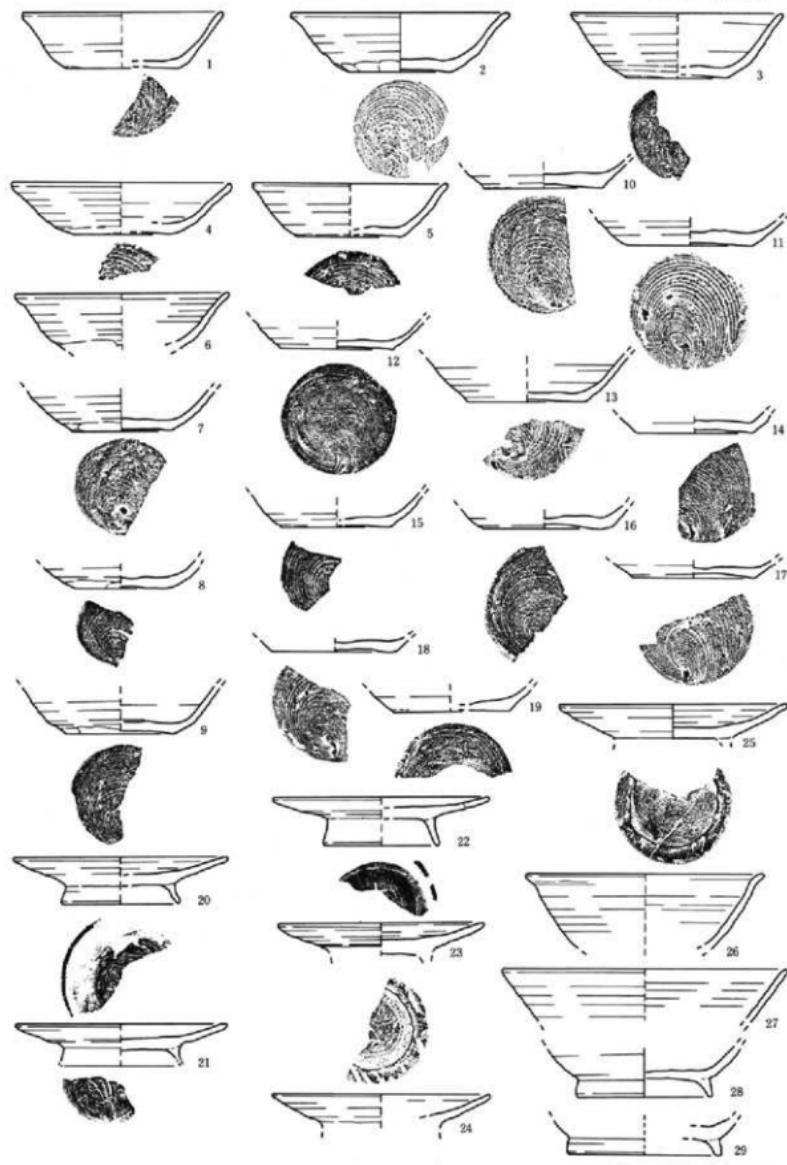


第45図 1号窯跡環計測値分布図

表. 3 1号窯跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	高さ	色調	焼成	胎土	成形・特徴	残存	備考
1	壺	12.0	7.0	3.3	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、簾縫目弱	体1/4	
2	壺	13.0	5.8	3.5	白灰	良好	砂少	右回転糸切り、腰手持ち簾削り、簾縫目少強	口小欠	
3	壺	12.7	5.8	3.9	灰白	やや軟	粗砂少	回転糸切り、底縫・腰右回転簾削り、簾縫目弱	1/3	
4	壺	13.2	6.0	3.1	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、腰手持ち簾削り、簾縫目強	体1/4	
5	壺	11.6	6.5	3.3	灰白	やや軟	粗砂土	右回転糸切り、簾縫目弱	1/4	
6	壺	12.8	—	—	灰白	やや軟	細砂多	腰手持ち簾削り、簾縫目多弱	体1/4	
7	壺	—	5.8	—	灰	良好	細土	右回転糸切り、腰手持ち簾削り	底2/3	
8	壺	—	5.2	—	灰白	良好	粗砂少	右回転糸切り、腰手持ち簾削り	底1/3	
9	壺	—	6.4	—	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、腰手持ち簾削り、簾縫目少強	底1/2	
10	壺	—	7.2	—	灰白	良好	細土	右回転糸切り	底2/3	
11	壺	—	7.3	—	灰白	良好	粗土	右回転糸切り、底押痕	底1/1	
12	壺	—	6.8	—	浅黄	やや軟	細土	右回転糸切り、二次被熱	体欠	
13	壺	—	7.0	—	灰	良好	細砂少	右回転糸切り、簾縫目細弱	底1/2	
14	壺	—	7.0	—	黄褐	やや軟	細土	右回転糸切り、内面燃し	底1/3	
15	壺	—	6.4	—	灰白	良好	砂少	右回転糸切り	底1/4	
16	壺	—	7.0	—	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、二次被熱	底1/3	
17	壺	—	7.2	—	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り	底2/3	
18	壺	—	7.5	—	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り	底1/3	
19	壺	—	7.0	—	灰白	良好	細土	右回転糸切り	底1/3	
20	皿	12.8	7.1	2.8	灰白	良好	砂多	回転糸切り、付高台、底爪状削み	1/3	
21	皿	12.6	7.3	2.5	灰白	良好	細土	回転糸切り、付高台	1/3	
22	皿	13.0	7.0	2.9	灰白	やや軟	細土	付高台	1/4	
23	皿	12.2	—	—	灰白	良好	細土	回転糸切り、付高台	1/4	
25	皿	13.6	—	—	灰白	良好	細砂少	回転糸切り、付高台、一部二次被熱	1/2高台欠	
26	塊	14.2	—	—	灰白	良好	粗砂少	回転糸切り、付高台	体1/2	
27	塊	17.0	—	—	灰白	やや軟	細土	簾縫目弱	口1/3	
28	塊	—	8.2	—	灰白	良好	粗砂少	回転糸切り、付高台	底1/3	
29	塊	—	9.2	—	灰白	良好	粗砂少	回転糸切り、付高台	底1/3	

第2節 出土遺物



第46圖 1号窯跡出土遺物

0 10cm

## 2号窯跡出土遺物 (第47・48・49図 表. 4・5 PL. 18)

坏・皿B類・蓋・壺B類・瓶・鉢などがある。

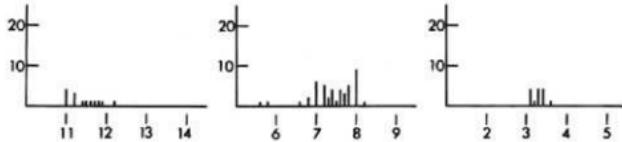
坏は口径12cmを頂点に13cm以内に収まり、底径は7cmから8cmに向かって頂点をもつ。器高は3cm大前半にある。a類(1~3) g類(4~13) j類(14~18)に分類されるがg類の一部にはb類・c類と判別が困難な資料(4・6・8)もある。また、j類の存在については1号窯跡との重複部分である前底部を中心とした出土地点であることから混入の可能性も考えなければならない。

皿は丈高な付高台のB類でa類(18~19)とb類(20~21)両者がある。口径は14cm、b類にはやや小振りな13cm大がある。

蓋は小片で少数で口縁端部が丸味があり直に折れるAa類である。

壺は付高台のB類で(23)はBc II類になる。ほとんど体部や底部のため類別できる資料は少ない。高台には4種程度の形状がある。なお、(36)は壺A類の底部と思われるが体部下半に焼成後の穿孔がある。

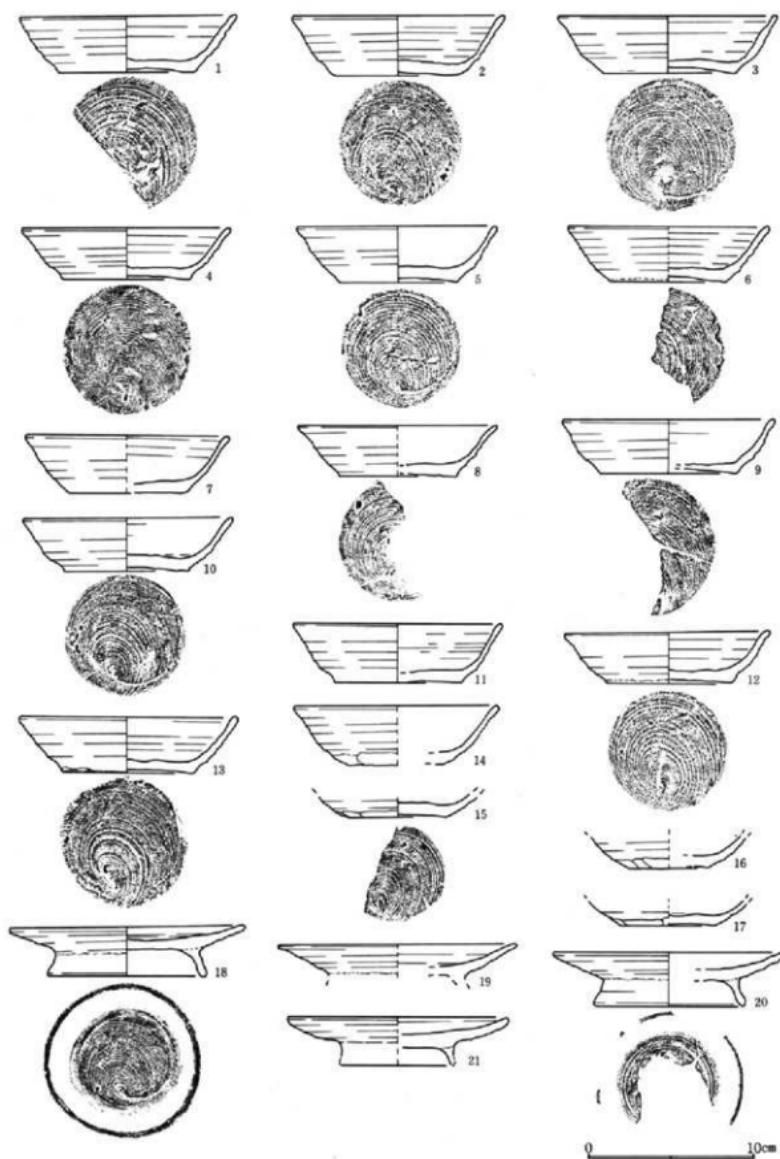
瓶B類と広口鉢はいずれも4号窯との重複前底部からの出土である。



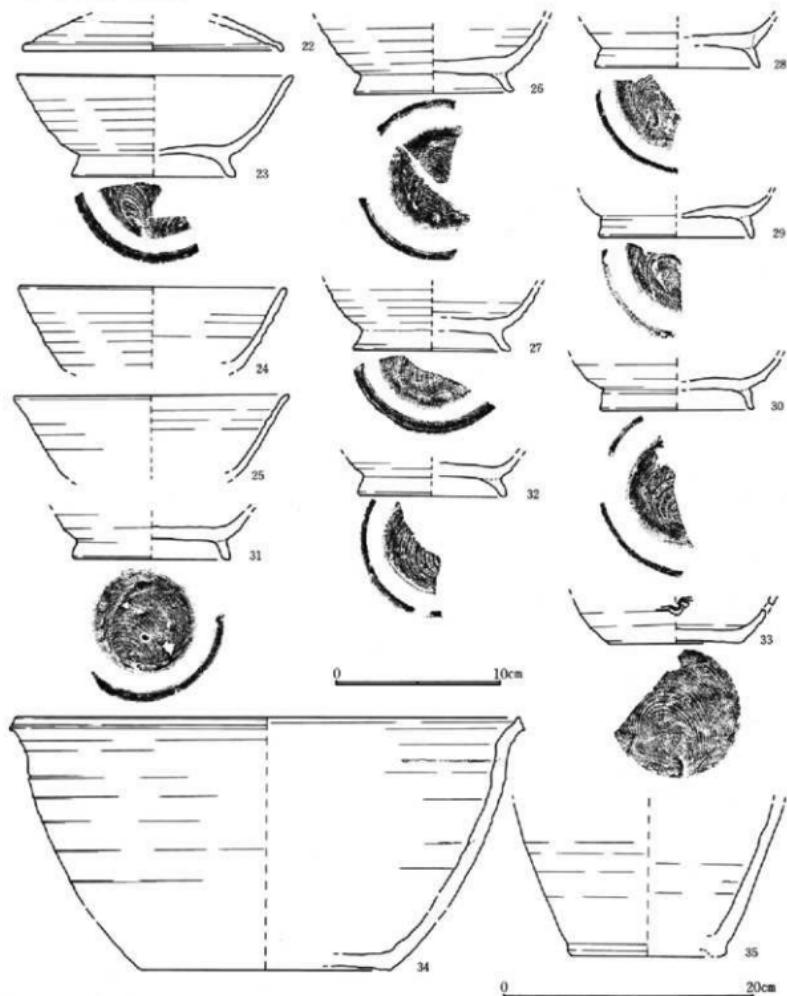
第47図 2号窯跡坏計測値分布図

表. 4 2号窯跡出土遺物観察表 (1)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴	残存	備考	
1	坏	12.9	8.0	3.4	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目強	底2/3		
2	坏	12.7	7.4	3.6	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目多強、底薄痕	底2/3		
3	坏	12.8	8.0	3.4	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目弱、底薄痕	1/3		
4	坏	12.4	7.7	3.1	灰白	良好	砂少	右回転糸切り、輪轂目強	体少残		
5	坏	12.0	7.3	3.2	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目強、底薄痕	1/3		
6	坏	12.0	7.0	3.3	灰白	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目多強	1/4		
7	坏	12.2	6.8	3.4	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目少弱、内面開当	1/4		
8	坏	12.0	7.0	3.1	灰白	良好	粗砂	右回転糸切り、輪轂目少強	口1/4		
9	坏	12.5	8.0	3.3	灰白	良好	細砂	右回転糸切り、輪轂目少強、底薄痕	口少欠		
10	坏	12.6	7.3	3.1	灰白	良好	砂少	右回転糸切り、輪轂目少強、底薄痕	1/4 高台欠		
11	坏	12.5	7.5	3.5	白灰	やや軟	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目少強	1/3		
12	坏	12.3	7.3	3.1	灰黄	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目少弱	体欠		
13	坏	13.0	7.7	3.3	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱、底薄痕	底1/2		
14	坏	12.2	5.5	3.5	灰黄	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目少弱	体欠		
15	坏	-	5.8	-	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、腰手持ち鋸削り			
16	坏	-	4.7	-	灰	やや軟	細土	右回転糸切り、腰手持ち鋸削り	底1/4		
17	坏	-	5.6	-	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、腰手持ち鋸削り	体欠1/2		
18	皿	14.0	9.5	3.0	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、付高台	底1/3		
19	皿	14.1	-	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、付高台	体1/4			
20	皿	13.8	9.0	3.3	灰白	良好	細土	付高台	1/4		
21	皿	13.2	7.0	3.0	黄褐	やや軟	細土	右回転糸切り、付高台	口1/3		
22	蓋	15.6	-	灰	やや軟	細土			1/4		
23	壺	16.4	9.8	6.1	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、付高台、輪轂目弱	小片		
24	壺	16.0	-	白灰	良好	細土	右回転、輪轂目多強		外吸火		
25	壺	16.4	-	灰白	良好	細砂多	右回転、輪轂目外側内強	2/3	内吸火		
26	壺	-	9.2	-	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、付高台	2/3	内吸火	
27	壺	-	9.4	-	灰	良好	細砂多	右回転糸切り、付高台、底爪状痕	2/3	二次被熱	
28	壺	-	9.8	-	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、付高台	2/3	二次被熱	
29	壺	-	9.3	-	灰	軟	細土	右回転糸切り、付高台	2/3	内吸火	



第48図 2号窯跡出土遺物(1)



第49図 2号窯跡出土遺物(2)

表.5 2号窯跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	底径	器高	色	調	焼成	胎 土	成 形	・ 特 徴	残 存	備 考
30	壺	—	9.2	—	灰白	やや軟	繊土	右回転糸切り、付高台			1/2	
31	壺	—	9.5	—	淡黄	やや軟	繊土	右回転糸切り、付高台			1/2	
32	壺	—	8.8	—	灰	やや軟	繊土	右回転糸切り、付高台			1/4	内吸灰
33	环	—	7.9	—	灰白	やや軟	繊土	右回転糸切り、付高台			2/3	
34	広口鉢	40.4	20.0	29.0	灰白	良好	細砂多	平底撲で調整			底1/4	
35	壺	—	12.5	—	灰	やや軟	繊土	組作り、内外撲で調整			底1/4	

## 3号窯跡出土遺物 (第83図 P.L.28)

3号窯跡からは、窯操業に伴う出土遺物は皆無である。遺構報文で述べたごとく、操業の跡を窺わせるような煩雜な痕跡はなくあたかも清掃が成されたような状況であった。窯体内よりの出土は燃焼部床面直上に置かれたごとくの半欠土師器坏のみである。

土師器坏は口径12.3cm、底径8.4cm、器高3.0cmである。平底気味の形態で、直線的な体部から口唇部は細まって緩く外傾する。内面及び口縁部は横撫で、体部外面は指頭による成・調整で寄せ皺跡が著しく、内面見込み部縁辺は強い指頭圧で窪む。底部は右回り方向の範削りを施す。細土で鈍橙色を呈する。

## 4号窯跡出土遺物 (第50・51・52図 表. 6・7 P.L.18)

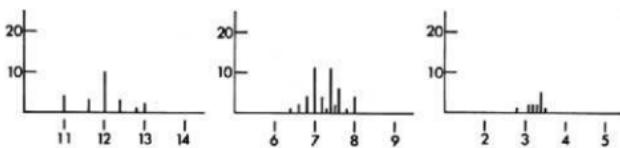
燃焼部に集中しているが数量は少ない。坏・皿B類・蓋・塊B類がある。

坏の計測値傾向は口径13cmを中心に12cmから14cmの間に、底径は7cm前半を頂点とし、器高は3.5cmから前半に傾く。類型には多様さが見られる。a類(1~3) b類(4~5) c類(6~7) d類(8) f類(9) g類(10~13) j類(19~20)などである。j類は腰部範削りの有無で大きな指標とするが、底部の欠損する(14~16)も丸味の強い体部からこれにあたると考えられる。

皿B類のみである。体部直線的なa類(21~22)と内湾するb類(23~24)があり、高台では丈高なa類に比べb類はやや厚みが加わり低めになる。

蓋は少量・小片でA類である。c類(27)・d類(28)にならうか。

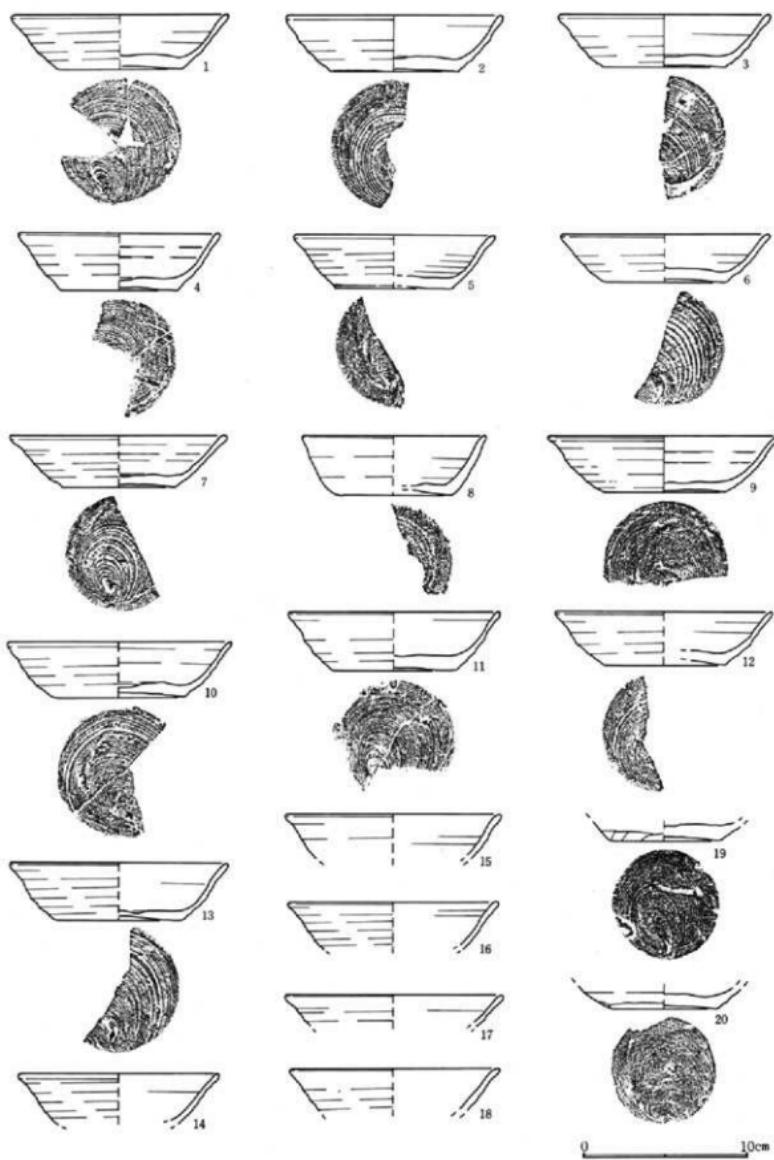
塊B類は全体形態を保つものは少なく、体部の形状から他類型も存在すると考えられるがBc II類(29)とBf II類(30)がある。高台の形には内湾気味(29~40)や直線的に立つ形状(37~39・41~43)の他、疊付け(接地面)が平らな角高台気味(44~45)のものに分類できる。



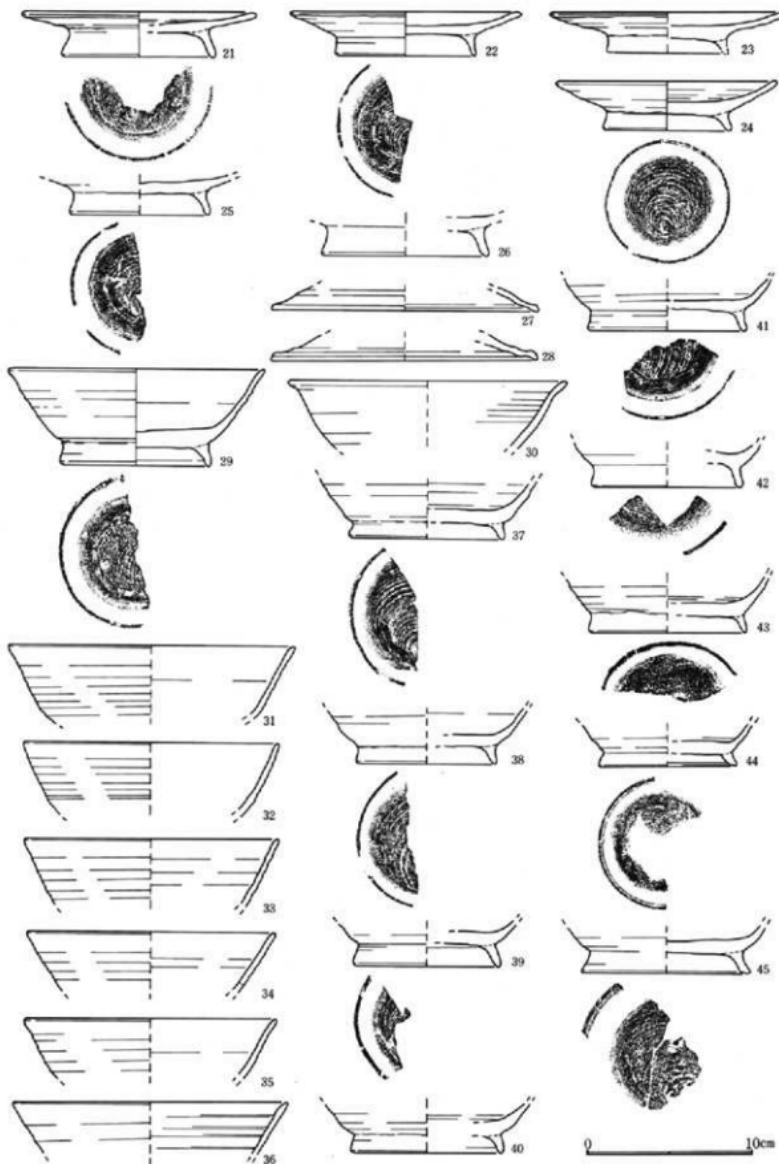
第50図 4号窯跡坏計測値分布図

表. 6 4号窯跡出土遺物観察表 (I)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	燒成	胎土	成形・特徴	残存	備考
1	坏	13.0	7.5	3.3	鈍黄橙	軟	細砂	右回転糸切り、織籠目強	1/3	
2	坏	12.8	7.6	3.3	鈍橙	軟	細土	右回転糸切り、織籠目強	3/5	
3	坏	12.6	7.4	3.1	鈍橙	軟	細土	右回転糸切り、織籠目漸弱	4/5	
4	坏	12.0	7.0	3.4	鈍橙	軟	細砂	右回転糸切り、織籠目強	1/3	
5	坏	12.0	7.0	3.2	灰	粗砂	良好	右回転糸切り、織籠目多漸弱	1/4	
6	坏	12.6	7.2	2.8	灰白	良好	細土	右回転糸切り、織籠目漸強、内外使用擦	1/3	
7	坏	13.0	6.8	3.1	灰	良好	細土	右回転糸切り、織籠目強、底押痕	1/4	
8	坏	11.0	7.0	3.5	灰	良好	粗砂	右回転糸切り、織籠目擦剥	1/4	
9	坏	13.4	7.5	3.4	黒褐	やや軟	細土	右回転糸切り、織籠目弱	1/2	内外吸炭
10	坏	13.4	8.0	3.4	浅黄	軟	細土	右回転糸切り、織籠目強	1/3	
11	坏	12.6	7.5	3.5	鈍黄橙	軟	細砂	右回転糸切り、織籠目強、底押痕	1/3	
12	坏	13.0	7.4	3.2	灰白	やや軟	粗砂	右回転糸切り、織籠目強	1/4	内吸炭
13	坏	13.0	7.5	3.4	浅黄橙	やや軟	細砂	右回転糸切り、織籠目強	1/4	
14	坏	12.0	—	—	黒	やや軟	細土	右回転織籠目強	口1/3	内外吸炭
15	坏	13.0	—	—	黒	やや軟	細土	右回転織籠目弱	口1/4	内外吸炭



第51図 4号窯跡出土遺物(1)



第52図 4号窯跡出土遺物(2)

表. 7 4号窯跡出土遺物観察表 (2)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴		残存	備考
								右回転織籠目多強	右回転織籠目漸強		
16	壺	12.6	-	-	黒	中や軟	細土	右回転織籠目多強		口1/4	内外吸炭
17	壺	13.0	-	-	灰	細土	良好	右回転織籠目漸強		口2/5	
18	壺	12.5	-	-	灰	良好	細砂	右回転織籠目弱		口1/3	
19	壺	-	6.6	-	浅黄	やや軟	細砂	右回転糸切り、腰手持ち窓削り		体欠	内吸炭
20	壺	-	6.3	-	鈍黃橙	軟	細砂	右回転糸切り、腰手持ち窓削り		体欠	
21	皿	14.0	9.6	2.7	灰白	軟	細土雜少	右回転糸切り、付高台、織籠目弱		1/3	内吸炭
22	皿	13.8	8.4	2.7	灰黄	やや軟	細砂	右回転糸切り、部分吸炭		1/3	
23	皿	14.0	7.5	2.5	灰白	やや軟	細砂	付高台		1/3	内吸炭
24	皿	13.2	7.7	2.9	鈍灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、付高台、織籠目弱、低高台		略完	
25	皿	-	8.4	-	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、付高台			
26	皿	-	10.0	-	灰	良好	細砂	付高台		高台1/3	
27	蓋	16.0	-	-	黒	やや軟	細土	右回転		1/3	
28	蓋	16.0	-	-	灰白	良好	細砂			口小片	
29	壺	15.2	9.0	5.7	灰白	やや軟	砂多	回転糸切り付高台、織籠目漸強		1/2	
30	壺	16.6	-	-	浅黄橙	軟	細砂	右回転織籠目微弱		体1/4	
31	壺	17.2	-	-	灰白	やや軟		右回転織籠目多弱		体2/3	
32	壺	15.2	-	-	灰黄	軟	粗砂少	右回転織籠目多弱		体1/4	
33	壺	15.2	-	-	灰白	やや軟	細砂	右回転織籠目強		体1/4	
34	壺	14.8	-	-	灰白	やや軟	細砂	右回転織籠目漸弱		体1/4	
35	壺	15.0	-	-	黒	やや軟	細土	右回転織籠目弱		体1/4	内外吸炭
36	壺	16.4	-	-	灰白	やや軟	細土	右回転織籠目弱、内窓当て		口1/4	
37	壺	-	9.4	-	灰黄	やや軟	細砂多	右回転糸切り、付高台		底1/2	
38	壺	-	8.4	-	灰白	やや軟	細砂	回転糸切り、付高台		底1/3	
39	壺	-	8.8	-	灰白	やや軟	細土	回転糸切り、付高台		底1/4	
40	壺	-	9.1	-	灰白	良好	細砂	付高台		底1/4	
41	壺	-	9.4	-	灰白	やや軟	砂多	右回転糸切り、付高台		底1/3	
42	壺	-	10.0	-	灰白	軟	細砂	回転糸切り、付高台		底1/4	
43	壺	-	9.4	-	灰白	やや軟	細土	回転糸切り、付高台		底1/2	内吸炭
44	壺	-	8.2	-	灰	良好	細砂	回転糸切り、付高台、疊付微段あり		底2/3	
45	壺	-	10.0	-	灰黄	軟	細土	回転糸切り、付高台		底2/3	

## 5号窯跡出土遺物 (第53・54図 表. 8 P L. 19)

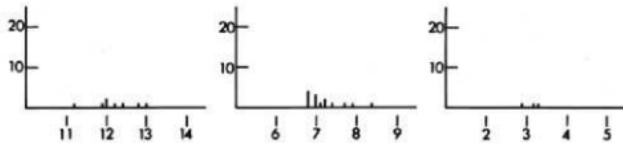
燃焼部周辺の出土で散在的少量である。壺・皿B類・蓋A類・B類がある。

壺は口径13cmから14cmに近く、底径は6cm後半から8cm以内に収まり、器高は3cmを前後する。b類(1)・j類(2・3)がある。底部のみで詳細は不明であるが、(9・10)は体部の深さと8cm大の底径から壺A類の可能性が高い。

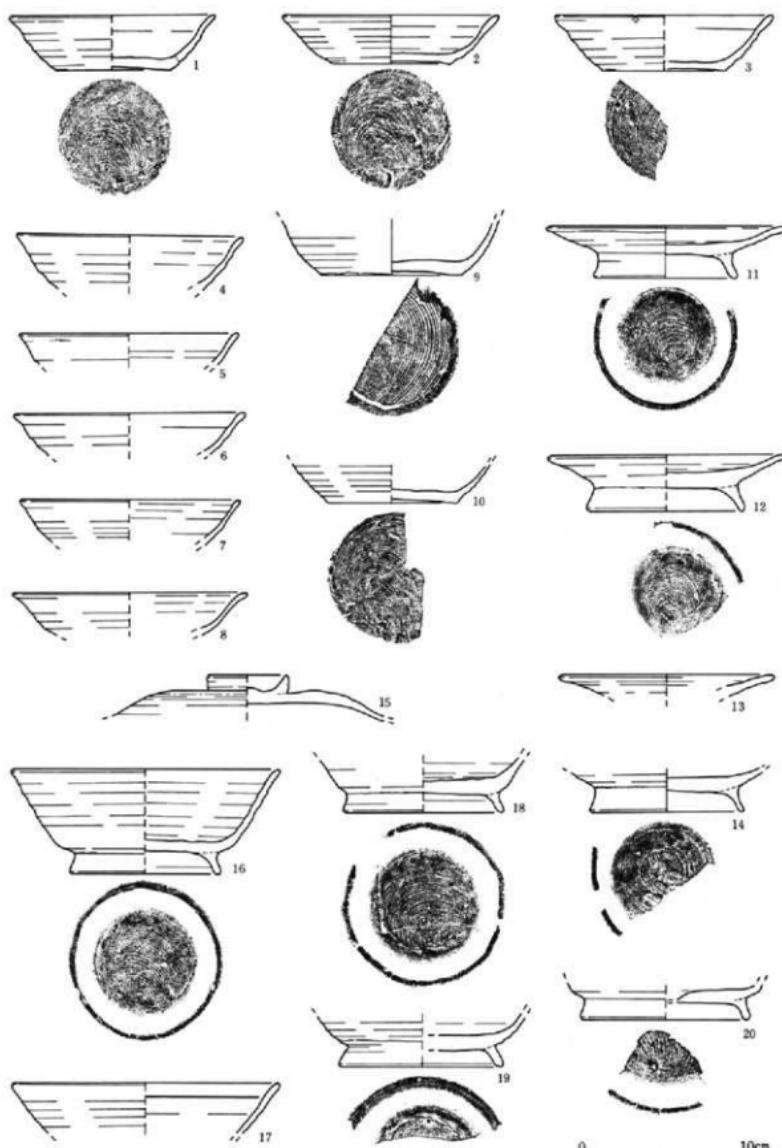
皿は口径14cmのBa類であるが口径13cmのやや小振りのものがある。高台形状にはハの字状、内湾気味、直線的で細身の形態に分類できる。

蓋は環状鉢のA類である。

壺はBb II類(16)の他、Bc II類と思われる(17)がある。高台形には直線的・ハの字状・角高台気味の各種がみられる。



第53図 5号窯跡壺計測値分布図



第54図 5号窯跡出土遺物

表. 8 5号窯跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	色調	施成	胎土	成形・特徴	残存	備考
1	壺	12.2	6.8	3.2	灰	やや軟	細土	右回転糸切り、外輪縫目弱3段、底部痕	体1/4	
2	壺	12.9	7.1	2.9	灰	やや軟	細土	右回転糸切り、外輪縫目弱6段、底部痕	体1/3	
3	壺	13.0	7.4	3.3	白灰	良好	細土	右回転糸切り、外輪縫目強4段、口唇縫目弱	1/4	長石多
4	壺	13.6	—	—	灰黄	やや軟	細土	右回転、輪縫目弱	口1/3	黒岩片多
5	壺	13.0	—	—	暗灰黄	やや軟	細土	右回転	□1/3	
6	壺?	13.8	—	—	灰黄	良好	細土	右回転、外吸炭、外輪縫目強	□1/4	
7	壺	13.2	—	—	灰	良好	白粗粒多	右回転、輪縫目弱	□1/4	
8	壺	14.0	—	—	灰	良好	細土	右回転、輪縫目弱	□1/3	
9	壺	—	—	8.4	灰白	良好	細土	回転糸切り、内吸炭、腰窓微で、底部痕	底体1/2	
10	壺	—	—	7.7	白灰	良好	細土	右回転糸切り、見込吸炭、外輪縫目弱5段	底3/4	
11	壺	14.4	8.5	3.1	灰黄	良好	細砂繊少	回転糸切り付高台、右回転	2/3	
12	壺	14.2	9.4	3.3	灰白	やや軟	細土	回転糸切り付高台、右回転	2/5	
13	壺	12.8	—	—	白灰	良好	細土	右回転	□1/4	
14	壺	—	9.0	—	灰白	やや軟	細土繊少	回転糸切り付高台、右回転	底1/2	
15	蓋	16.0	—	4.5	純黄橙	やや軟	細土	天井糸切り後右回転窓削り	天井1/4	長石少
16	塊	16.0	9.0	6.2	灰白	良好	細砂多	回転糸切り付高台、右回転	1/3	
17	塊	16.0	—	—	白灰	良好	細土	右回転	□1/4	
18	塊	—	9.6	—	灰白	やや軟	細砂多	回転糸切り付高台、右回転	体欠	
19	塊	—	9.6	—	灰	やや軟	細土	回転糸切り付高台、右回転、二次被熱	底1/3	
20	塊	—	10.0	—	白灰	良好	細土	回転糸切り付高台、右回転	底1/4	

## 6号窯跡出土遺物 (第56図 表. 9 P.L. 19)

窯体は窯尻部のみの残存で、床面からは1～2点の壺類出土にすぎない。

口径は13cmを上回るものはなく、11cmの大比較的小口径が多い。底径は6.8～7.9cmとかなり幅があり、器高は3.2cmと一定値を示す。a・b・e・f・i類などに相当する類型が見られる。

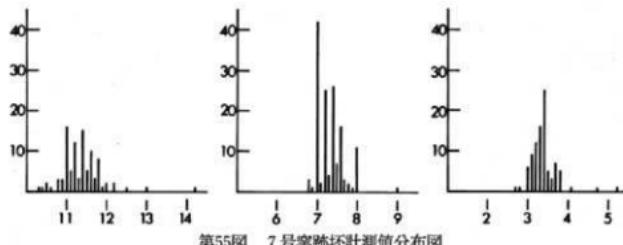
## 7号窯跡出土遺物 (第55・57・58・59・60・61・62図 表. 10・11 P.L. 19・20・21)

窯跡群の中では遺物量が多い窯跡に属し、壺類には酸化炎焼成気味の淡橙色を呈する資料が顕著に見られる。燃焼部に集中して検出されたことから選別後の放置と考えられる。壺・蓋A類・塊A・B類がある。

壺は口径12cmに頂点があり、ほぼ13cmの間に集中する。底径は7cmを頂点として8cmへ傾き、器高は3.5cmを中心とする。j類を除くほとんどの類型が抽出できるが、b類とg類に該当する資料が目立っている。a類(1～7)、b類(8～33)、c類(34)、d類(35～43)、e類(44～53)、f類(54～63)、g類(64～83)、h類(85～88)、i類(84～86・87・89・90)が相当しようか。

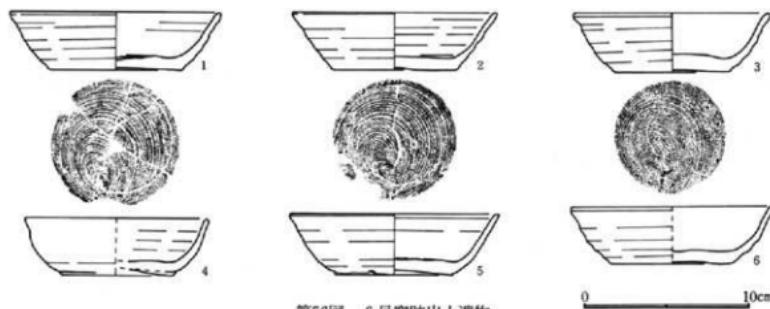
蓋は口径17cm前後で環状縫Ab・Ac類がある。

塊はA・B類があり、無高台塊A類は(93)がAb I類に、(94)がAa II類になる。有高台塊はBe II類。

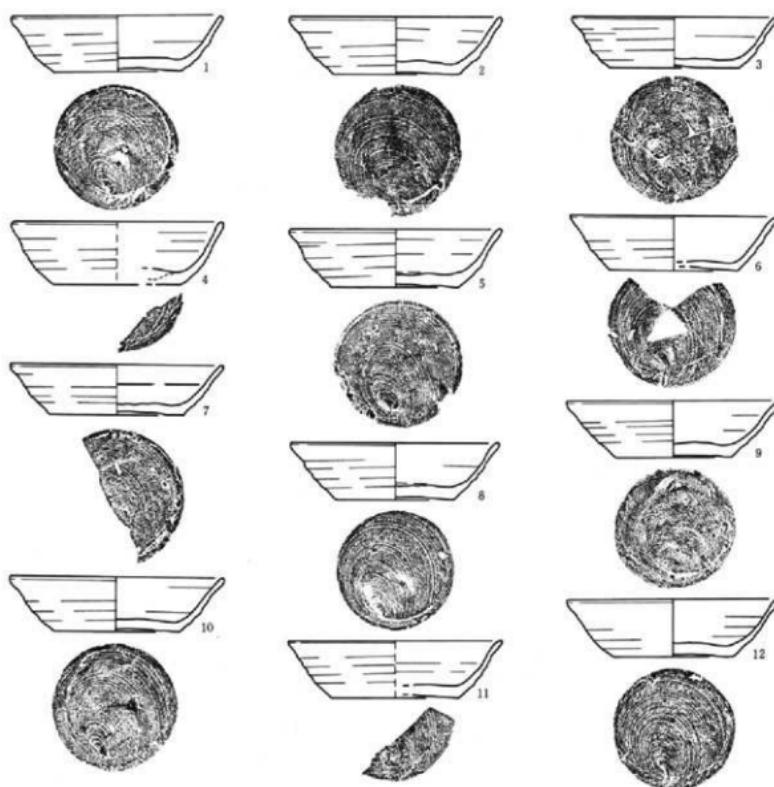


第55図 7号窯跡壺類計測値分布図

第2節 出土遺物

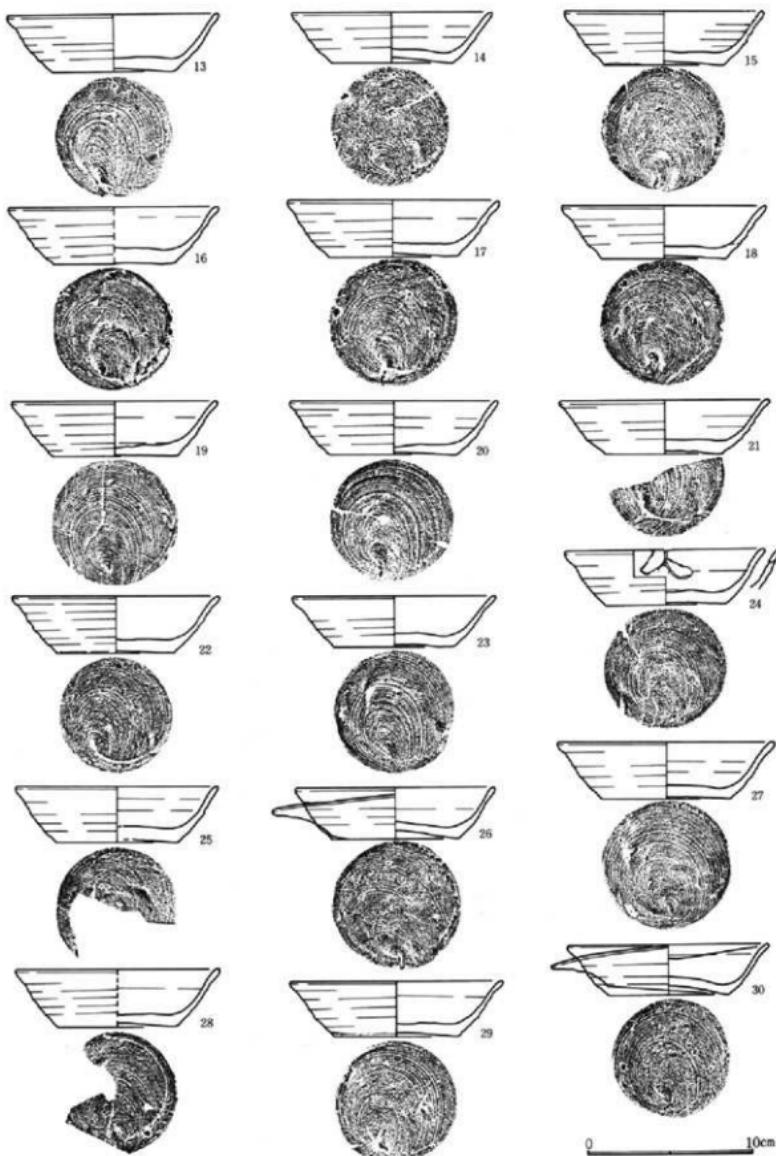


第56圖 6號窯跡出土遺物

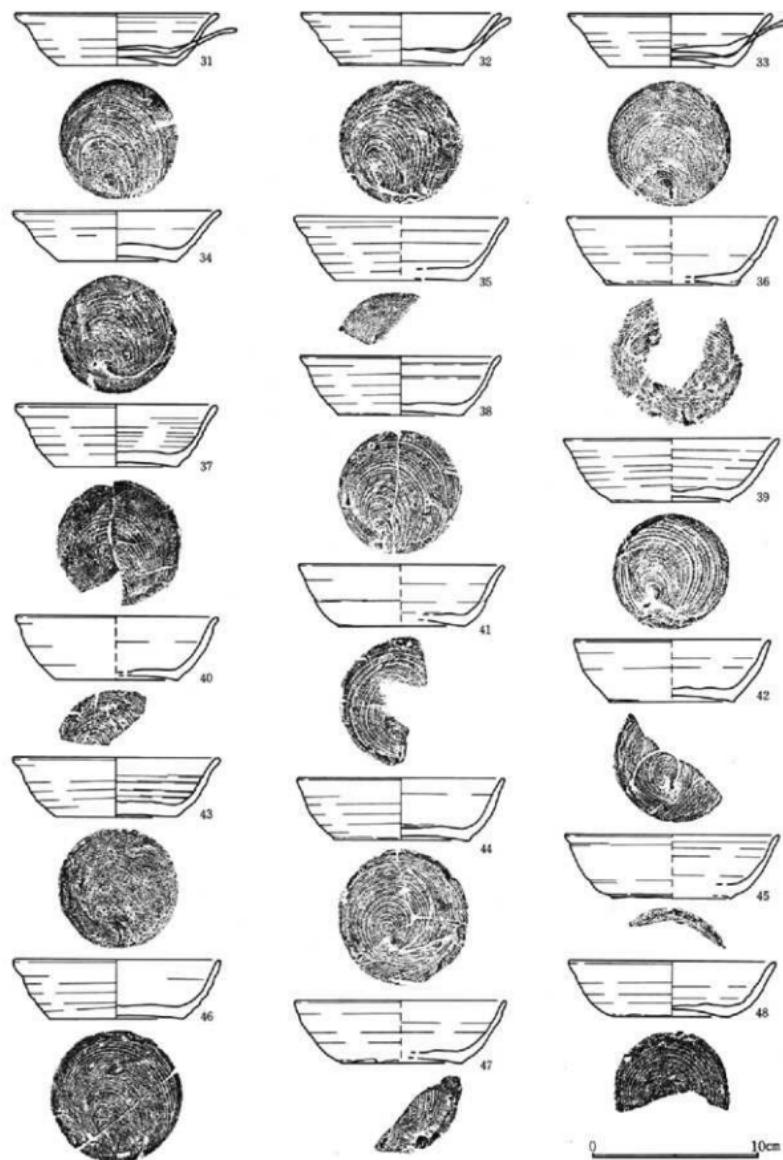


第57圖 7號窯跡出土遺物(I)

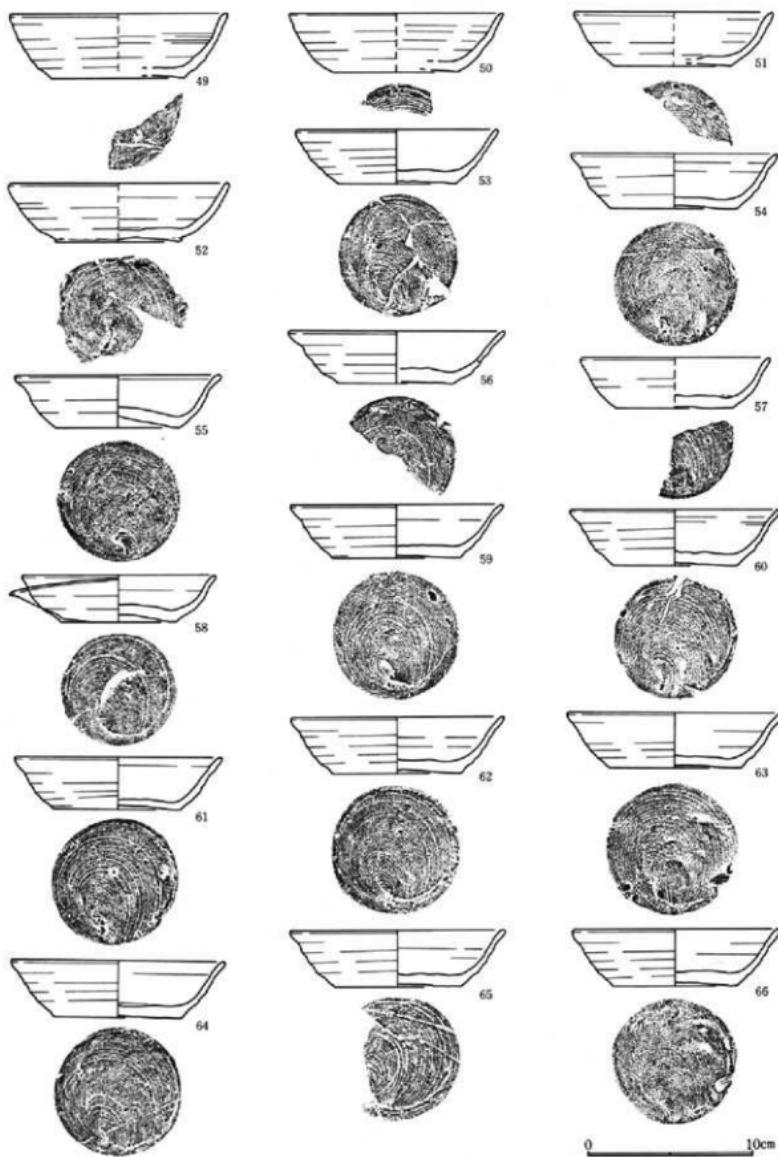
0 10cm



第58図 7号窯跡出土遺物(2)

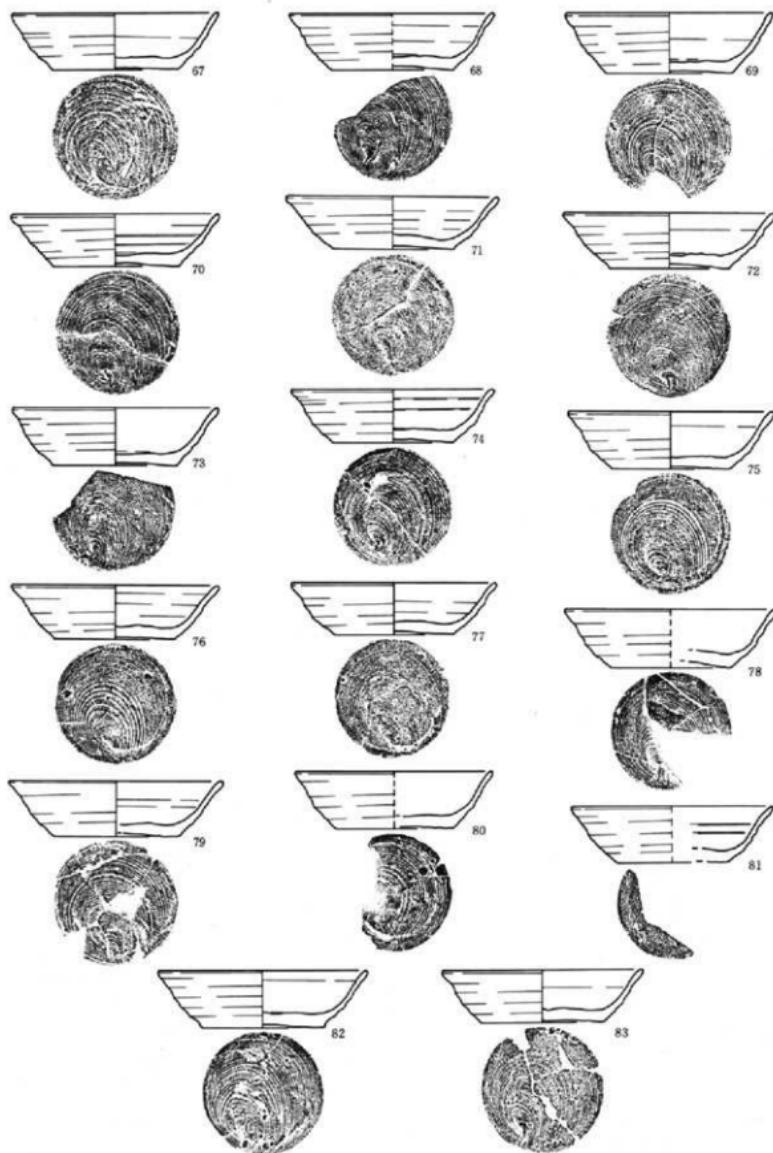


第59図 7号窯跡出土遺物(3)



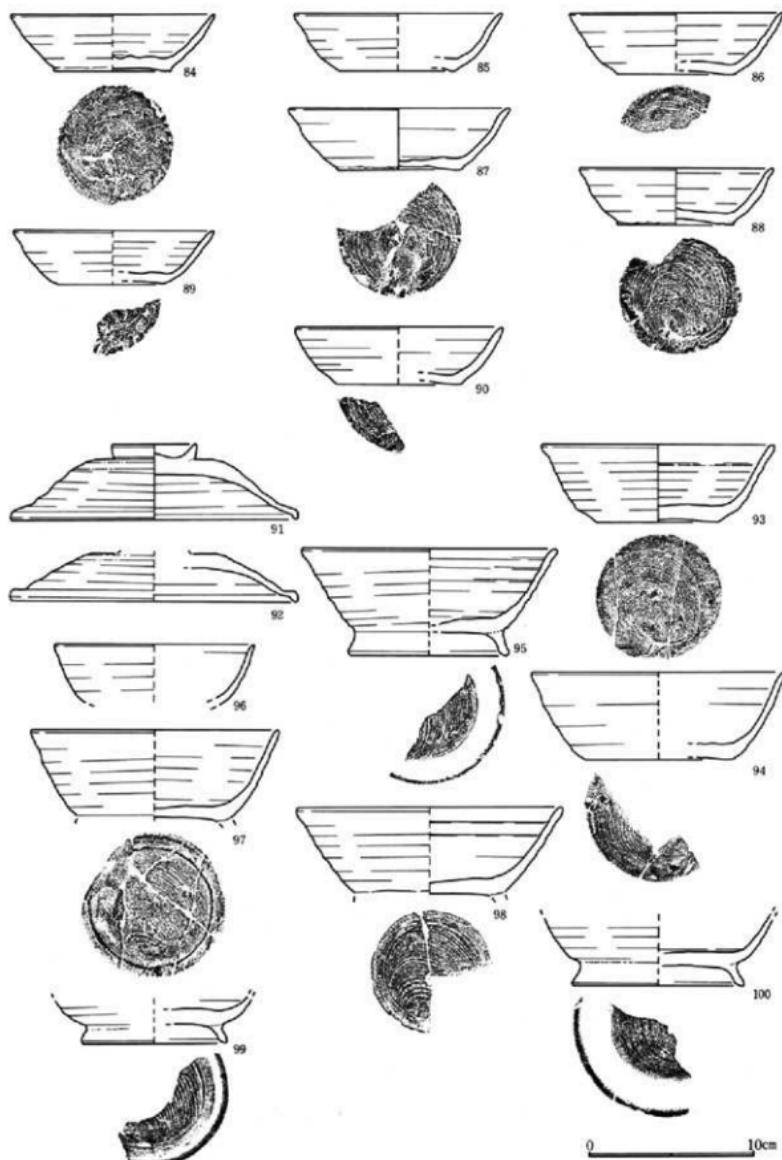
第60図 7号室跡出土遺物(4)

第2節 出土遺物



第61図 7号窯跡出土遺物(5)

0 10cm



第62図 7号窯跡出土遺物(6)

表. 9 6号窯跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴	残存	備考
1	环	12.6	7.8	3.4	純白	軟	細砂	右回転糸切り、織目強	1/3	
2	环	12.2	7.4	3.4	純黄橙	軟	細土	右回転糸切り、織目強	1/2	
3	环	11.8	6.8	3.5	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織目漸強	2/3	
4	环	10.8	6.8	3.4	灰	良好	細砂	右回転糸切り、織目極弱	1/5	
5	环	12.5	7.0	3.7	純黃橙	軟	細土	右回転糸切り、織目極弱、底押痕	4/5	
6	环	12.2	7.4	3.4	純黃橙	軟	細砂	右回転糸切り、織目強	1/3	

表. 10 7号窯跡出土遺物計測表 (1)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴	残存	備考
1	环	12.7	7.4	3.3	灰黄	やや軟	細砂	右回転糸切り、織目強、底押痕	2/3	
2	环	12.7	7.6	3.4	浅黄橙	やや軟	細砂多	右回転糸切り、織目少漸弱、底押痕	4/5	
3	环	12.2	7.5	3.1	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、織目強、底押痕	完	焼き歪
4	环	12.7	7.6	3.7	灰	良好	細土	右回転糸切り、織目漸強、見込み充積	1/4	
5	环	12.6	7.5	3.4	浅黄橙	中や軟	砂多	右回転糸切り、織目強、底押痕	2/3	
6	环	12.4	7.5	3.3	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、織目強、底押痕	2/3	
7	环	12.8	8.0	3.0	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、織目少弱	1/2	
8	环	12.4	7.0	3.4	純橙	中や軟	細土	右回転糸切り、織目少弱、底押痕	3/4	
9	环	12.8	7.0	3.4	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織目強弱、底押痕	5/6	焼き歪
10	环	12.9	7.5	3.3	灰白	良好	細土	右回転糸切り、織目強、底押痕	3/5	
11	环	12.7	7.5	3.4	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、織目多漸強	1/4	
12	环	12.8	7.2	3.4	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、織目弱	3/5	
13	环	12.8	7.2	3.4	灰黄橙	軟	細砂	右回転糸切り、織目多漸強、底押痕	3/5	内淡黄
14	环	12.0	7.0	3.0	灰	良好	細砂	右回転糸切り、織目漸強	略完	焼き歪
15	环	12.0	7.2	3.2	灰白	良好	細土	右回転糸切り、織目強、底押痕	完	焼き歪
16	环	12.5	7.2	3.4	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、織目強、底押痕	1/2	内淡黄
17	环	12.8	7.6	3.4	灰黄	やや軟	粗砂多	右回転糸切り、織目弱、底押痕	略完	二次被熱
18	环	12.2	7.5	3.2	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織目強	3/5	焼き歪
19	环	12.3	7.5	3.3	純橙	軟	細砂	右回転糸切り、織目漸強、底押痕	略完	
20	环	12.4	7.2	3.2	浅黄橙	軟	粗砂少	右回転糸切り、織目強	2/3	
21	环	12.6	7.0	3.2	灰白	良好	細土	右回転糸切り、織目強、内窓当て	1/4	
22	环	12.4	7.0	3.3	純黄橙	軟	細砂多	右回転糸切り、織目多弱、底押痕	3/5	
23	环	12.2	7.3	3.0	灰	良好	細砂多	右回転糸切り、織目強弱、底押痕	2/3	焼き歪
24	环	12.0	7.2	3.3	灰白	良好	粗砂少	右回転糸切り、織目強弱、口縁補修痕	完	
25	环	12.2	7.2	3.3	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織目強、底押痕	1/2	焼き歪
26	环	12.0	7.6	3.1	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、織目強、底押痕	完	焼き歪
27	环	13.0	7.7	3.4	灰白	良好	細土	右回転糸切り、織目少弱	4/5	
28	环	12.2	7.2	3.4	純橙	軟	細砂	右回転糸切り、織目漸強、底押痕	1/3	
29	环	12.4	7.4	3.3	純橙	やや軟	細土	右回転糸切り、織目弱、底押痕	1/2	
30	环	12.0	7.0	3.0	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織目強、底押痕	完	焼き歪
31	环	12.1	7.0	3.1	灰	良好	細砂	右回転糸切り、織目漸強	略完	焼き歪
32	环	12.0	7.5	3.1	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織目漸強	3/4	焼き歪
33	环	12.0	7.0	2.7	暗灰	良好	細砂	右回転糸切り、織目弱、底押痕	5/6	焼き歪
34	环	12.4	7.0	3.0	暗灰内灰	良好	細土	右回転糸切り、織目弱	4/5	焼き歪
35	环	12.8	7.8	3.8	灰白	中や軟	細土	右回転糸切り、織目多強、内燃处理	1/4	
36	环	12.5	7.8	4.1	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、織目弱、底切削後充塞	1/4	
37	环	12.1	7.4	3.7	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、織目多強、底押痕	1/2	焼き歪
38	环	12.0	7.5	3.5	浅黄橙	軟	細砂	右回転糸切り、織目漸強、底押痕		
39	环	12.8	7.0	3.8	純黃橙	砂多	やや軟	右回転糸切り、織目多弱、底押痕	1/3	
40	环	12.1	7.2	3.8	灰白	良好	細砂	右回転糸切り、織目弱	1/4	
41	环	12.2	7.6	3.7	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、織目少弱、底押痕	1/3	
42	环	11.7	7.5	3.7	灰白	良好	細土	右回転糸切り、織目弱	1/4	
43	环	12.4	7.3	3.6	灰黒内灰	良好	細砂	右回転糸切り、織目強、底押痕	3/5	内灰
44	环	12.4	8.0	3.7	灰白	やや軟	細砂多	右回転糸切り、織目漸強、底押痕	3/4	内淡黄
45	环	12.8	7.0	3.8	灰黄	良好	砂多	右回転糸切り、織目極弱	1/3	
46	环	12.4	8.0	3.5	灰黄	中や軟	砂多	右回転糸切り、織目強、底押痕	3/5	
47	环	12.7	7.2	3.7	灰白	良好	粗砂少	右回転糸切り、織目弱	1/4	
48	环	12.4	7.0	3.3	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、織目弱、底押痕	1/2	
49	环	13.0	8.0	3.8	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、織目多強	1/4	

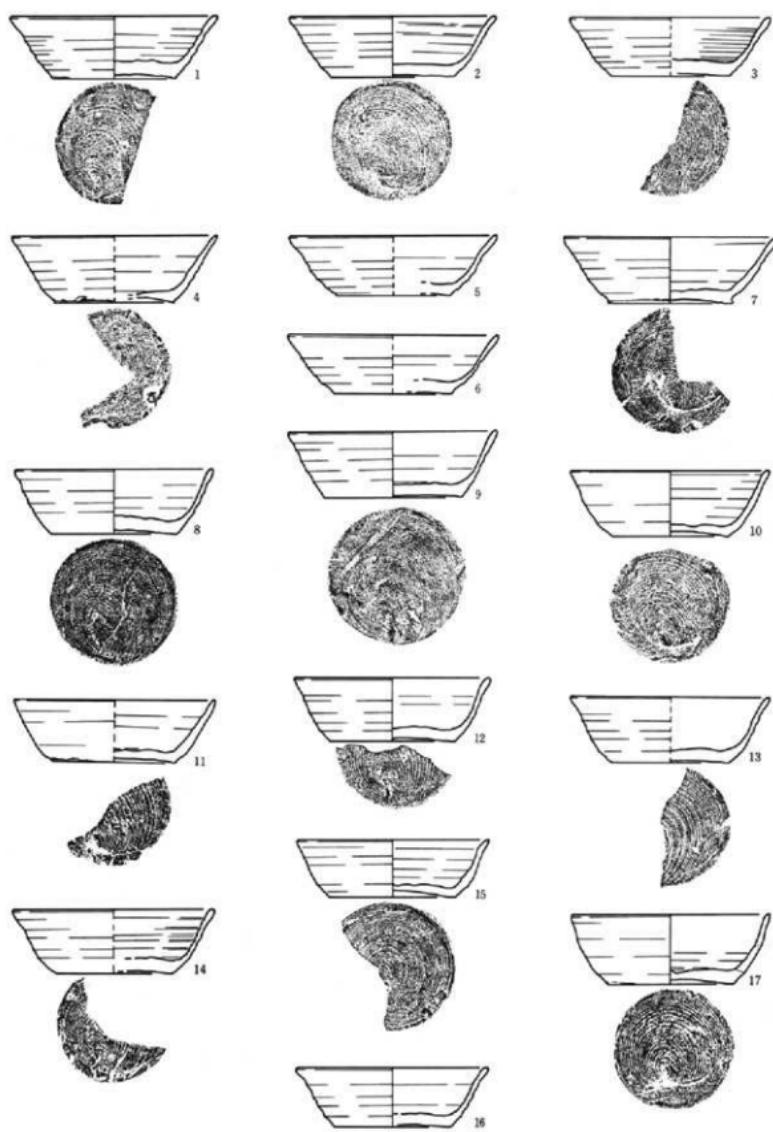
## 第3章 窯跡と出土遺物

表.11 7号窯跡出土遺物計測表 (2)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴	残存	備考
50	壺	12.8	7.5	3.5	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目弱	1/3	
51	壺	12.0	7.0	3.2	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪縁目弱	1/4	
52	壺	13.2	7.2	3.5	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目極弱、底拂痕	1/4	
53	壺	12.1	7.0	3.2	浅黄褐色	軟	細土	右回転糸切り、輪縁目多強、底拂痕	3/5	
54	壺	12.4	7.5	3.3	浅黄褐色	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪縁目強	2/3	
55	壺	12.4	7.2	3.1	暗灰内灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縁目弱	略完	焼き歪
56	壺	12.9	7.0	3.1	灰白	良好	少塵少	右回転糸切り、輪縁目少強	1/3	
57	壺	11.4	7.0	3.0	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縁目弱	1/4	
58	壺	11.6	6.8	2.8	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縁目極弱	略完	焼き歪
59	壺	12.8	7.6	3.2	浅黄褐色	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強、底拂痕	3/4	
60	壺	12.4	7.4	3.4	淡灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目少強、底拂痕	2/3	内灰白
61	壺	12.4	7.5	3.2	浅黄褐色	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪縁目強、底拂痕	略完	
62	壺	12.8	7.7	3.4	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪縁目強、底拂痕	2/3	
63	壺	13.0	8.0	3.3	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪縁目断強、底拂痕	3/4	
64	壺	12.8	7.6	3.4	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目少強、底拂痕	1/2	
65	壺	12.8	7.4	3.4	純黄褐色	軟	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目少強、底拂痕	1/2	内淡橙
66	壺	12.5	7.5	3.4	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目多強、底拂痕	5/6	
67	壺	12.4	7.6	3.3	純黄褐色	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強、底拂痕	1/2	
68	壺	12.4	7.2	3.3	浅黄褐色	軟	細土	右回転糸切り、輪縁目多強	1/3	
69	壺	12.4	7.6	3.6	淡灰	やや軟	細砂多	右回転糸切り、輪縁目少強	略完	内淡橙
70	壺	12.4	7.5	3.2	浅黄褐色	軟	砂多	右回転糸切り、輪縁目断強	4/5	
71	壺	12.8	7.2	3.2	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縁目断強	完	焼き歪
72	壺	12.7	7.3	3.3	純黄褐色	軟	細土	右回転糸切り、輪縁目断強、底拂痕	1/2	
73	壺	12.4	7.4	3.4	純黄褐色	軟	少塵少	右回転糸切り、輪縁目強、底拂痕	1/2	
74	壺	12.2	7.2	3.2	浅黄褐色	砂多	軟	右回転糸切り、輪縁目強、底拂痕	1/2	
75	壺	12.4	7.2	3.4	純黄褐色	細土	軟	右回転糸切り、輪縁目強、底拂痕	3/5	
76	壺	12.4	7.2	3.4	灰白	良好	少塵少	右回転糸切り、輪縁目断強、底拂痕	完	
77	壺	12.4	7.0	3.1	暗灰内灰	良好	細土	右回転糸切り、輪縁目強	完	焼き歪
78	壺	12.7	7.0	3.5	浅黄褐色	細砂	軟	右回転糸切り、輪縁目強	1/3	
79	壺	12.8	7.4	3.3	純黄褐色	細土	軟	右回転糸切り、輪縁目少強弱	2/3	
80	壺	11.8	7.0	3.4	純黄褐色	砂多	軟	右回転糸切り、輪縁目強	1/3	
81	壺	12.0	6.5	3.4	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪縁目多強	1/4	
82	壺	12.5	7.4	3.4	浅黄褐色	軟	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目多強、底拂痕	1/2	
83	壺	12.0	7.4	3.1	純黄褐色	軟	少塵少	右回転糸切り、輪縁目少強	3/5	
84	壺	12.2	7.0	3.4	暗灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縁目弱、体中位痕	1/3	焼き歪
85	壺	12.4	7.0	3.4	灰	良好	細砂	右回転糸切り、輪縁目弱	1/4	
86	壺	12.8	7.0	3.6	灰白	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目内強	1/4	
87	壺	13.2	7.4	3.7	純黄褐色	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目極弱、底拂痕	1/2	外吸炭
88	壺	11.6	7.0	3.4	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目弱	5/6	
89	壺	12.0	6.2	3.2	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目極弱	1/4	
90	壺	12.4	7.4	3.4	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪縁目弱、底拂痕	1/4	
91	蓋	17.0	5.0	4.5	浅黄褐色	軟	砂多	天井右回転糸割り	3/4	
92	蓋	17.2	-	2.8	浅黄褐色	軟	細砂多	天井右回転糸割り	1/3 横欠	
93	壺	14.0	7.4	4.7	灰	良好	細砂	右回転糸切り、輪縁目多強	5/6	
94	壺	15.2	9.0	5.2	純橙	細土	軟	右回転糸切り、輪縁目弱	1/4	無高台
95	壺	15.2	9.6	6.4	浅黄褐色	軟	細砂	右回転糸切り付高台、輪縁目強	1/2	
96	壺	12.0	-	-	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪縁目弱	1/3 底欠	
97	壺	14.8	9.0	-	淡灰	軟	少塵少	右回転糸切り付高台、輪縁目多強	1/3 高台欠	
98	壺	15.8	9.0	-	浅黄褐色	軟	細砂多	右回転糸切り付高台、輪縁目多強	2/5 高台欠	
99	壺	-	8.7	-	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り付高台、底に爪状痕	底1/3	
100	壺	-	10.4	-	灰白	やや軟	細土	回転糸切り付高台、内擦し処理	底1/2	

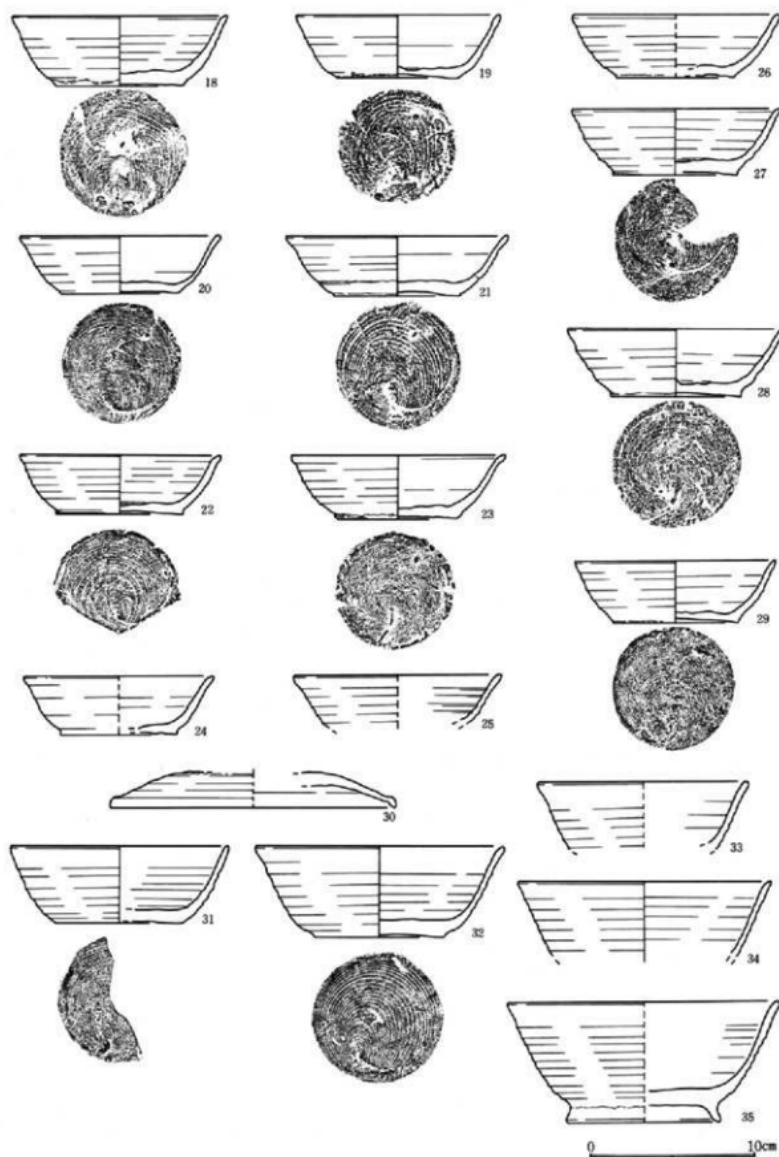
8号窯跡出土遺物 (第63・64・65・66図 表.12・13 P.L.22)

光仙房遺跡窯跡群の初期に構築された窯跡の1基である。複数窯跡との重複によって燃焼部から焼成部にかけて少範囲の一画が検出された。遺物は焼成部手前寄りの床面に集中し、選別後の放置と思われる。壺・蓋・壺 AB・瓶類がある。

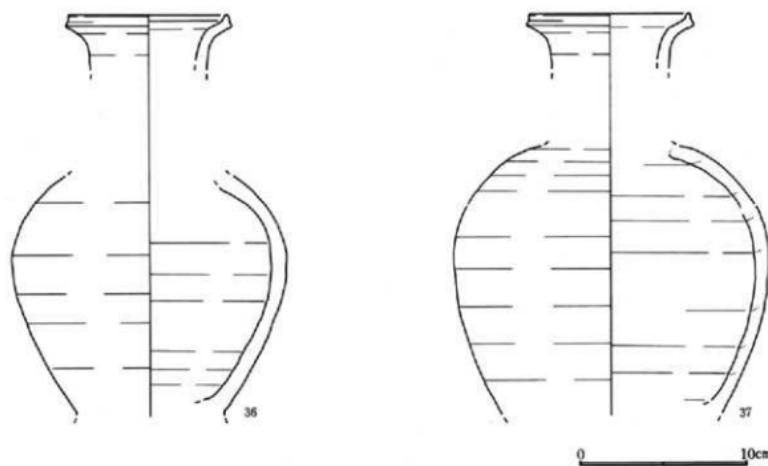


第63図 8号窯跡出土遺物(1)

0 10cm



第64図 8号窯跡出土遺物(2)



第65図 8号窯跡出土遺物(3)

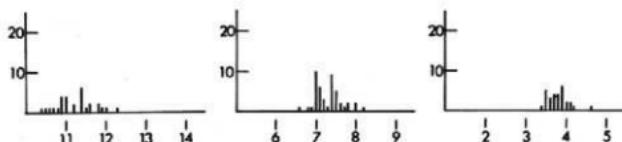
环は口径10cm大から12cmの間に收まり、11.5cmに中心がある。底径は7cmから7.5cmが多く、器高は3.5cmから4cm大になる。他窯跡の遺物に比べ小口径で、深目の体部になる傾向がある。b～i類の各類型が見られ、b類(1～5・7)、c類(6)、d類(8～17)、e類(18・19)、f類(20～23)、h類(24)、i類(26～29)に分類できようか。

蓋は少なく形状の図示できるのは1点である。Ab類になろう。

無高台塊A類は、Aa I類(31)とAb II類(32)である。

塊B類はBb I類とBb II類がそろう。

瓶は肩部から胴部にかけて丸味の強いA類2個体である。口縁部は小片1点ながら、径の異なる胴部片があり口縁部と合成したものである。長頸になろう。



第66図 8号窯跡環計測値分布図

表.12 8号窯跡出土遺物計測表 (1)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴		残存	備考
								右回転糸切り、織目極強	右回転糸切り、織目少強、二次被熱、押痕		
1	环	12.4	7.4	3.7	灰白	良好	細土			1/2	
2	环	12.4	7.4	3.6	灰白	良好	細土			1/2	
3	环	11.9	7.2	3.5	灰	良好	細土	右回転糸切り、内外織目多強		1/3	
4	环	12.2	7.1	4.0	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、織目多弱、底押痕		1/4	

表.13 8号窯跡出土遺物計測表 (2)

番号	器種	口径	底径	高さ	色調	焼成	胎土	成形・特徴		残存	備考
								右回転余切り、織縫目多断強	右回転余切り、織縫目多弱		
5	坏	32.4	6.8	3.6	灰	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多断強		1/4	
6	坏	12.6	7.0	3.5	灰灰	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多強		1/4	
7	坏	12.6	7.4	4.0	灰	良好	砂多	右回転余切り、織縫目少断強、底押痕		3/5	
8	坏	11.9	7.5	3.9	白灰	良好	細土	右回転余切り、織縫目少弱、底押痕		1/2	
9	坏	12.4	8.2	3.9	灰白	良好	細土	右回転余切り、織縫目少断強、底押痕		2/3	
10	坏	11.9	7.0	3.9	暗灰	良好	粗砂	右回転余切り、織縫目少弱、底押痕		2/3	
11	坏	12.0	7.2	3.7	灰白	良好	白粗粒	右回転余切り、織縫目弱、二次被熱、底押痕		1/3	
12	坏	11.7	7.4	3.8	灰	良好	粗砂	右回転余切り、織縫目強		1/3	
13	坏	11.9	7.0	3.9	灰	良好	細土	右回転余切り、織縫目多断強		1/4	
14	坏	12.0	6.9	3.9	灰	良好	細土	右回転余切り、織縫目少弱、内窓当て		1/3	
15	坏	11.5	7.4	3.4	灰	良好	粗砂	右回転余切り、織縫目多弱		1/2	
16	坏	11.5	7.0	3.5	白灰	やや軟	細土	織縫目強、内面黒色に焼成		1/4	
17	坏	11.8	7.3	4.0	灰白	良好	砂多疊少	右回転余切り、織縫目少弱		1/2	
18	坏	12.9	7.6	4.1	灰白	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多弱、底押痕		2/3	
19	坏	12.2	7.1	3.8	灰	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目弱		1/3	
20	坏	12.0	7.1	3.5	灰白	良好	細土	右回転余切り、織縫目弱、底押痕		1/2	
21	坏	13.3	7.5	3.6	灰白	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目弱、底押痕、縁巻上痕		1/2	
22	坏	12.0	7.6	3.5	灰白	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多断強		1/2	
23	坏	12.6	7.1	3.8	灰白	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多弱		口縁小欠	
24	坏	11.4	7.0	3.5	灰	良好	砂多	右回転余切り、織縫目弱		1/4	
25	坏	12.4	—	—	灰	良好	細土	織縫目多強		底欠	
26	坏	12.4	7.0	3.7	灰	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多断弱		1/4	
27	坏	12.4	7.4	3.9	灰	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目内外多強、底押痕		2/3	
28	坏	12.5	7.8	4.0	灰	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目強		2/3	
29	坏	12.0	7.5	3.7	灰	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多強、二次被熱、縁痕		2/3	
30	蓋	17.0	—	—	灰白	良好	粗砂	天井右回転置削		1/3	
31	坏	13.0	7.7	4.6	灰	良好	細土	右回転余切り、織縫目多強		1/3	
32	塊	14.8	7.7	5.4	灰白	良好	粗砂多	右回転余切り、織縫目多強、底押痕		他少欠	
33	坏	12.6	—	—	灰	良好	粗砂	織縫目多強		1/4	
34	塊	15.1	—	—	灰白	やや軟	細土	織縫目多強、右回転		口1/4	
35	塊	16.2	9.3	7.2	灰白	良好	細土	回転余切り台高、織縫目多強、右回転		1/3	
36	瓶	9.5	胸径18.7	—	白灰	やや軟	細土	内面淡褐色		胴部1/3	長錐瓶
37	瓶	9.5	胸径16.4	—	白灰	やや軟	細土			胴部1/4	長錐瓶

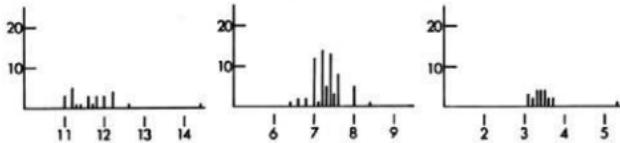
9号窯跡出土遺物 (第67・68・69図 表.14 P.L.23)

遺物出土は散在的で、燃焼部などの局所集中状況ではない。瓦の出土量は多いが当跡で焼成されたものではなく、焼台など窯部材として用いられたと考えられる。坏・皿・蓋・塊などがある。皿には無高台のA類と有高台のB類がある。A類は9号窯跡にのみ検出される器種である。平底中型甕類は小片で焼台か。

坏は口径11cmから12cmの間に集中し、底径は7cm前半に多く、器高は3cm大に收まる。類別では、b類(1~10)が最も多く、c類(11~12)、(13)はd類かe類になろう。f類(14~18)、g類(19)、i類(20)などに分類できる。

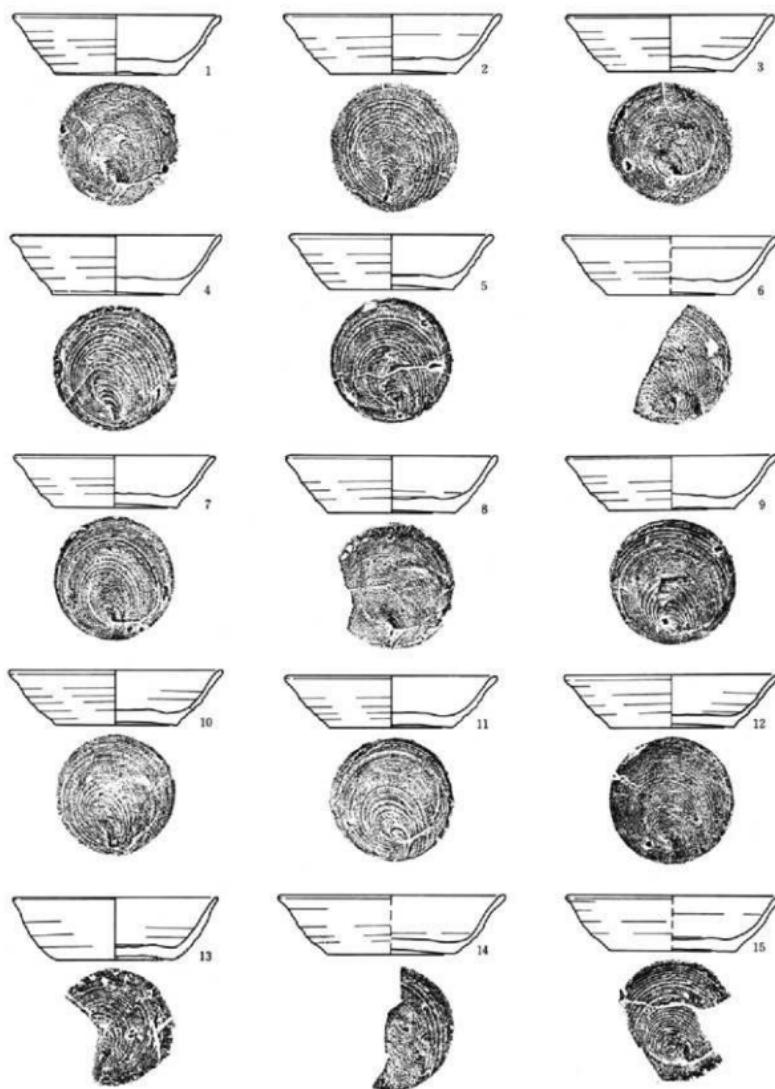
皿A類はAa(22)・b類(23)とも口径15cmである。

塊はAa II類(26)、B類は体部形態と深さからBc II類の可能性が高い(27・28)。小底径のI類もある。(29~31)の底部には爪形圧痕が見られる。



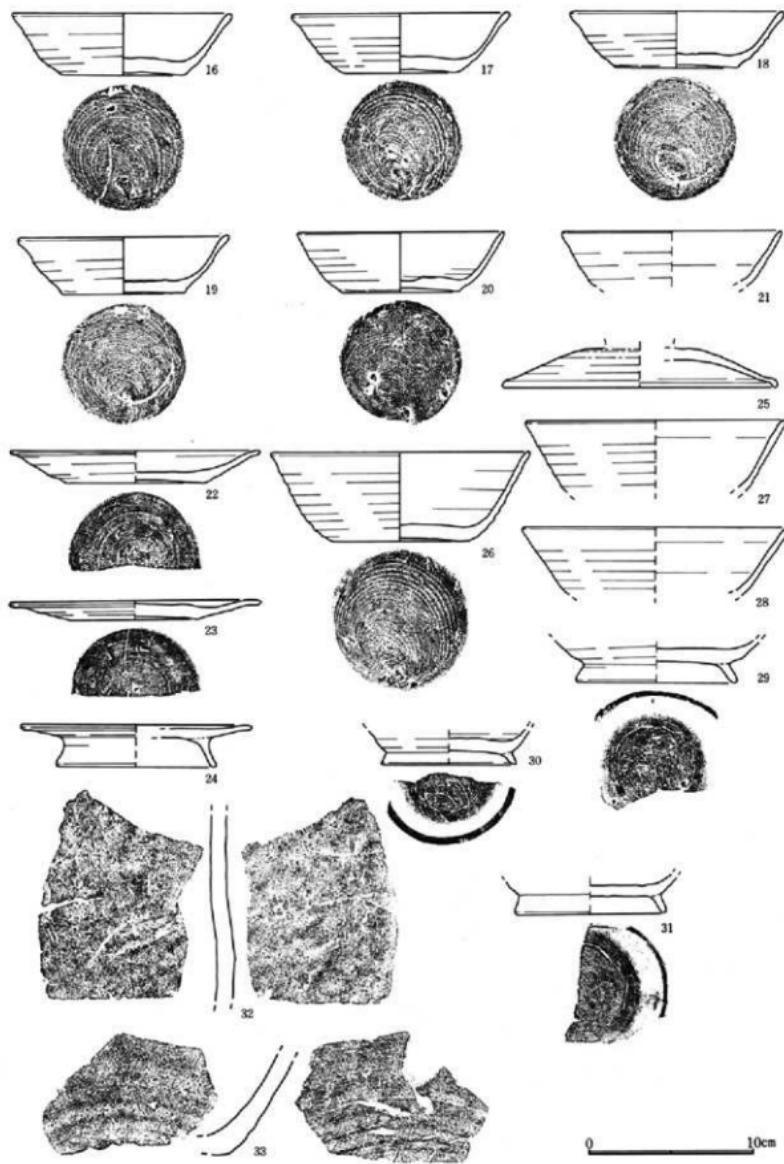
第67図 9号窯跡坏跡計測値分布図

第2節 出土遺物



0 10cm

第68圖 9号窯跡出土遺物(1)



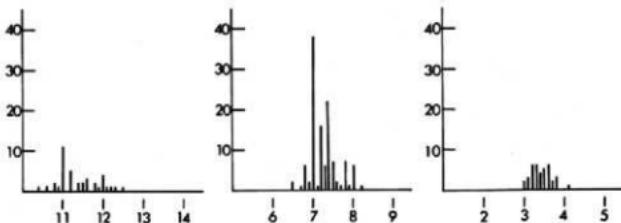
第69図 9号窯跡出土遺物(2)

表.14 9号窯跡出土遺物計測表

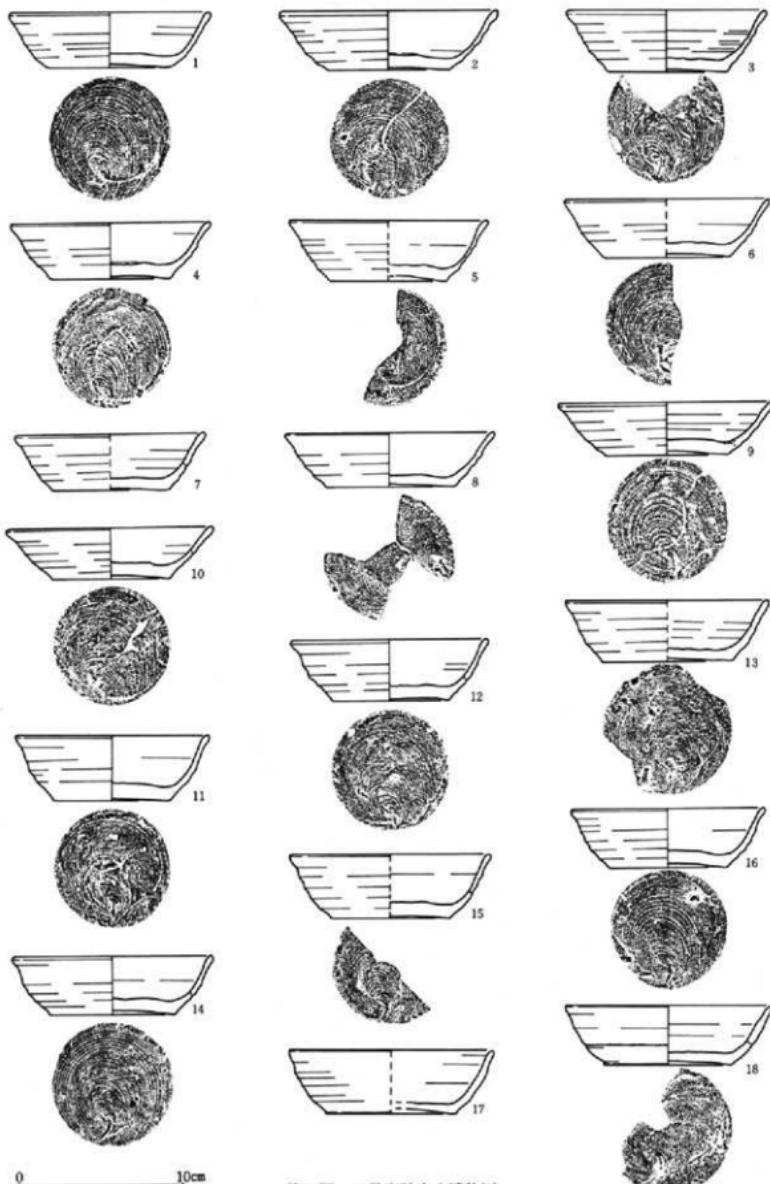
番号	器種	口径	底径	器高	色調	施成	胎土	成形・特徴	残存	備考
1	环	12.6	7.4	3.6	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪縁目弱、重ね焼	2/3	外底吸炭
2	环	13.0	7.6	3.5	黒	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強	略完	内外吸炭
3	环	12.5	7.5	3.3	灰黄	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪縁目強、重ね焼	略完	外底吸炭
4	环	12.6	7.6	3.7	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強	2/3	内吸炭
5	环	12.2	7.3	3.3	灰	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強	略完	
6	环	13.0	7.4	3.5	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強弱	1/4	
7	环	12.0	7.4	3.1	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強、重ね焼	2/3	外底吸炭
8	环	12.6	7.6	3.4	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強、底神痕	2/3	
9	环	12.6	7.6	3.2	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強、底重ね焼痕	2/3	
10	环	12.8	7.2	3.3	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪縁目柔弱	2/3	外底吸炭
11	环	12.7	7.4	3.1	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪縁目強、重ね焼	略完	外吸炭
12	环	12.7	7.5	3.1	灰黄	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強	2/3	浅吸炭
13	环	12.2	7.0	3.7	浅灰黄	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪縁目微弱、底神痕	3/4	
14	环	13.6	7.6	3.5	白灰	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目柔弱	1/3	
15	环	12.8	7.4	3.3	鈍黄褐色	軟	細土	右回転糸切り、輪縁目微弱	1/3	
16	环	13.2	7.2	3.7	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目強	完	内外吸炭
17	环	13.0	7.0	3.5	浅黄	軟	細砂	右回転糸切り、輪縁目強、重ね焼	3/5	浅吸炭
18	环	12.8	7.3	3.3	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目弱、重ね焼	2/3	外底吸炭
19	环	12.6	7.4	3.4	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪縁目柔弱、重ね焼	2/3	外吸炭
20	环	12.3	7.2	3.6	灰	良好	細砂	右回転糸切り、輪縁目柔弱	体3/4欠	
21	环	13.2	—	—	灰白	砂多	やや軟	右回転輪縁目柔弱	体1/4	
22	皿	14.9	8.0	1.9	灰白	細土	やや軟	無高台、底部右回転糸切り、輪縁目微弱	1/2	
23	皿	15.0	7.6	1.1	灰白	軟	細土	無高台、底部右回転糸切り、輪縁目柔弱	1/3	
24	皿	13.8	9.5	2.5	灰白	細砂	良好	付高台	1/4	
25	蓋	16.4	—	—	灰白	細砂	軟	天井部右回転糸切り、輪縁目微弱	1/3	
26	塊	15.4	8.0	5.3	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪縁目弱、底神痕	2/3	外吸炭
27	塊	15.6	—	—	灰黄	細土	やや軟	右回転輪縁目柔弱	体1/4	外吸炭
28	塊	16.0	—	—	灰白	細土	やや軟	右回転輪縁目弱	体1/4	外吸炭
29	塊	—	9.0	—	灰白	砂多	やや軟	右回転糸切り、付高台、底部爪状痕	体欠	
30	塊	—	8.0	—	灰	細土	良好	右回転糸切り、付高台、底部爪状痕	底1/3体欠	
31	塊	—	9.0	—	灰白	砂多	やや軟	右回転糸切り、付高台、底部爪状痕	底1/2体欠	

## 10号窯跡出土遺物 (第70・71・72・73図 表.15・16 PL.23・24)

出土遺物は焼成部を主にするが、量的には少なくなお散在した状況である。环・皿・蓋・塊類などがある。环は口径11cmに頂点があり、12cmに分布がびる。底径は7cmを頂点に8cmの間に、器高は3cm大に収まる。類型は多く、a類(1・2)、b類(3~7)、c類(8~10)、d類(11~17)、e類(18~19)、f類(20~29)、g類(30~37)、i類(38~39)に分類するがf・g類はやや判別に明瞭さを欠くくらいがある。

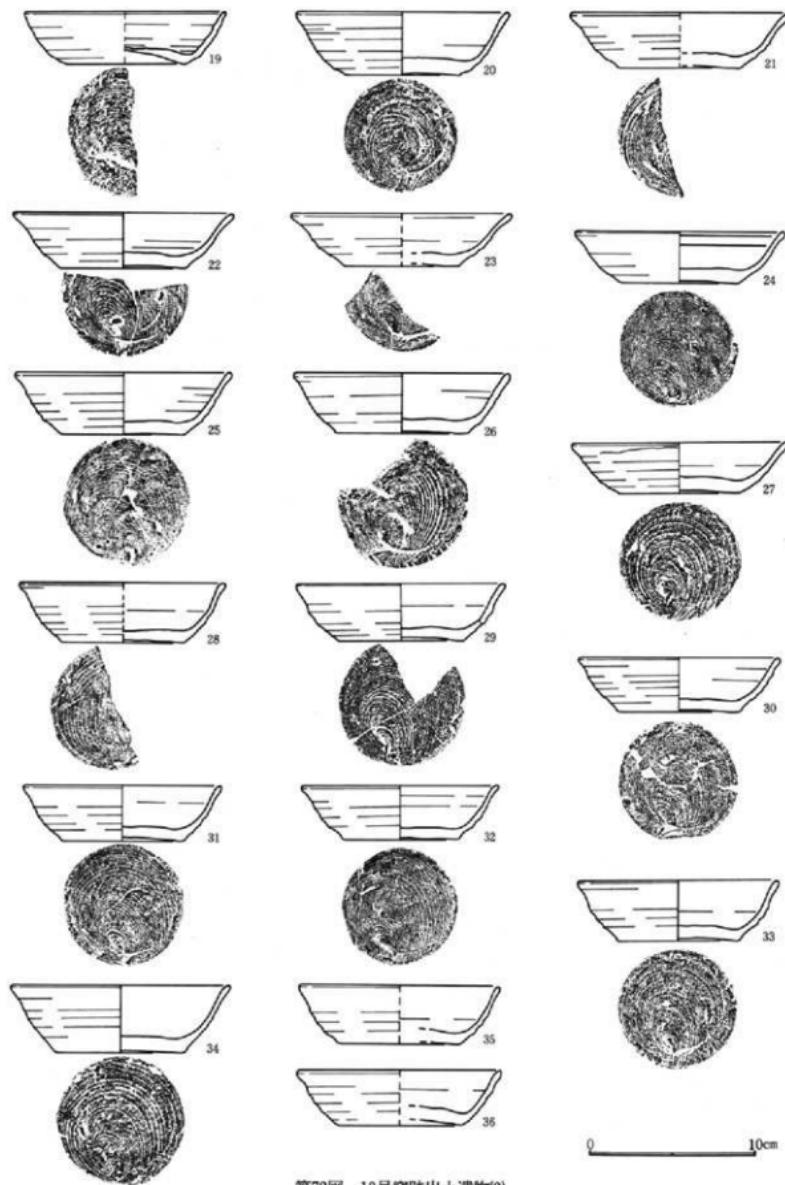


第70図 10号窯跡环計測値分布図

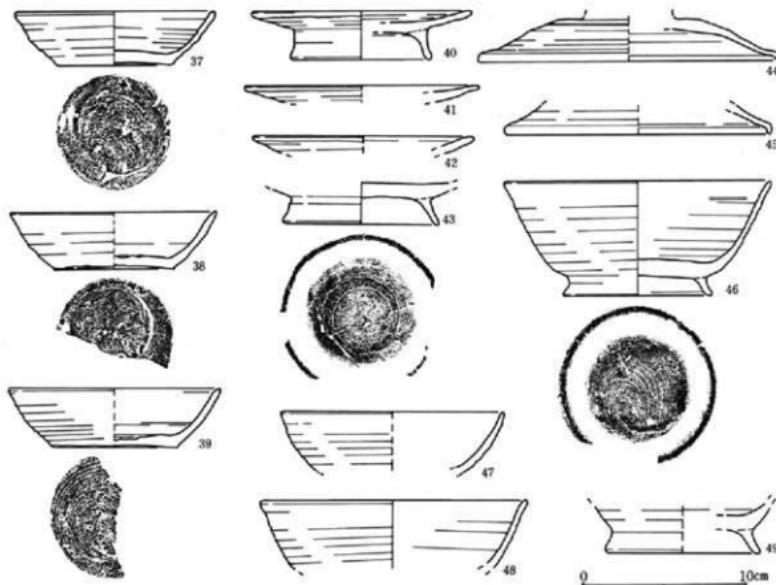


第71図 10号窯跡出土遺物(1)

第2節 出土遺物



第72図 10号窯跡出土遺物(2)



第73図 10号窯跡出土遺物(3)

皿は Ba 類で口径が13cmのやや小振りの (40) がある。(43) は底部に爪形圧痕が見られる。

蓋は口径から塊 B 類に対応すると考えられる大小があろうか。Aa 類 (45)、Ac 類 (44)。

塊 B 類は Bb II 類 (46・48) の他、口唇が外反せず体部が丸く内湾する形態 (47) は Bf 類の変異であろうか。

表.15 10号窯跡出土遺物計測表 (1)

番号	器種	口径	底径	高さ	色調	焼成	胎土	成形・特徴		残存	備考
								方法	特徴		
1	环	12.0	7.4	3.3	灰白	軟	粘土	右回転糸切り、輪縫目弱		2/3	内吸抜
2	环	13.2	7.0	3.5	灰白	やや軟繊土	粗砂少	右回転糸切り、輪縫目強、底押痕		3/5	
3	环	12.0	7.2	3.7	灰白	やや軟繊土	粗砂	右回転糸切り、輪縫目強		3/5	
4	环	12.0	7.1	3.3	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縫目強、底押痕		1/2	
5	环	12.0	7.0	3.6	灰	良好	粘土	右回転糸切り、輪縫目強		1/3	
6	环	12.2	7.4	3.5	灰白	やや軟繊土	粘土	右回転糸切り、輪縫目弱		1/3	
7	环	11.4	7.0	3.3	灰白	良好	砂少	右回転糸切り、輪縫目強		1/4	
8	环	12.5	7.8	3.2	灰白	やや軟繊土	粘土	右回転糸切り、底内外擦で、輪縫目強		1/2	
9	环	13.0	7.4	3.1	白灰	やや軟繊土	粘土	右回転糸切り、輪縫目強		3/4	
10	环	12.4	7.0	3.0	灰	良好	粗砂	右回転糸切り、輪縫目強、底押痕		1/2	
11	环	11.6	7.0	3.9	灰白	やや軟繊土	粗砂	右回転糸切り、輪縫目強		3/5	
12	环	11.8	7.0	3.6	灰白	やや軟繊土	粗砂	右回転糸切り、輪縫目強、底押痕		3/5	
13	环	12.2	7.8	3.6	灰	良好	粘土	右回転糸切り、輪縫目弱、底押痕		1/3	
14	环	12.0	7.4	3.5	灰白	やや軟繊土	砂多	右回転糸切り、輪縫目強、底押痕		3/5	
15	环	12.0	7.0	3.8	灰白	やや軟繊土	粘土	右回転糸切り、輪縫目強		2/5	
16	环	11.6	7.0	3.5	灰白	やや軟繊土	粗砂	右回転糸切り、輪縫目強、底押痕		3/5	
17	环	12.2	7.8	3.8	灰	良好	粘土	右回転糸切り、輪縫目極弱		1/4	
18	环	12.4	7.6	3.5	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縫目極弱、腰上に紐接痕		1/2	
19	环	12.0	7.0	3.1	暗灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪縫目弱、底亞大		2/5	
20	环	12.8	6.8	3.8	灰白	やや軟繊土	砂多	右回転糸切り、輪縫目強、底押痕		1/2	

表.16 10号窯跡出土遺物計測表 (2)

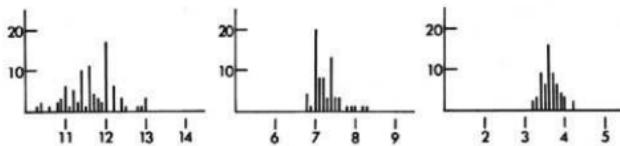
番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴	残存	備考
21	壺	13.1	7.2	3.3	白灰	やや軟繩土	細砂	右回転糸切り、輪轂目漸弱	1/4	
22	壺	13.3	7.5	3.3	灰白	やや軟繩土	繩土	右回転糸切り、輪轂目漸弱	3/5	
23	壺	13.2	7.0	3.2	灰白	やや軟繩土	細砂	右回転糸切り、輪轂目漸	1/3	
24	壺	12.5	7.0	3.1	灰白	軟	粗砂少	右回転糸切り、輪轂目強	体極少	
25	壺	13.0	7.5	3.7	灰白	やや軟繩土	繩土	右回転糸切り、輪轂目強、底押痕	1/2	
26	壺	13.0	7.9	3.6	黄灰	軟	細砂	右回転糸切り、底部分の側で、輪轂目弱	略完	吸灰
27	壺	13.0	7.2	3.0	灰白	やや軟繩土	細砂	右回転糸切り、輪轂目漸弱、底押痕	3/4	
28	壺	12.4	7.4	3.6	灰白	やや軟繩土	細砂	右回転糸切り、底・部擦で、輪轂目細強	2/5	
29	壺	12.5	7.5	3.4	浅黄灰	軟	繩土	右回転糸切り、輪轂目強、底押痕	1/2	
30	壺	12.0	7.2	3.2	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目細強、底押痕	3/5	
31	壺	12.0	7.3	3.3	灰	良好	細砂	右回転糸切り、輪轂目強、底押痕	1/2	
32	壺	11.8	7.0	3.2	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目強	3/5	
33	壺	12.0	7.2	3.6	白灰	やや軟繩土	細砂	右回転糸切り、輪轂目強、底押痕	3/4	
34	壺	13.0	7.7	4.0	灰白	やや軟繩土	繩土	右回転糸切り、輪轂目強	3/5	
35	壺	12.0	7.0	3.5	灰白	やや軟繩土	細砂	右回転糸切り、輪轂目強	1/4	
36	壺	12.4	7.4	3.3	灰	良好	繩土	右回転糸切り、輪轂目強	1/4	
37	壺	12.0	6.9	3.2	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目強	3/5	
38	壺	12.3	7.0	3.4	灰黄	やや軟繩土	繩土	右回転糸切り、輪轂目弱	1/3	
39	壺	12.6	7.5	3.5	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目細多弱	1/4	
40	皿	13.1	8.5	2.9	灰	やや軟	細砂	付高台	1/6	
41	皿	14.0	—	—	灰	良好	細砂	右回転	1/3底欠	
42	皿	13.2	—	—	灰	良好	繩土	右回転	口縁1/4	
43	皿	—	9.2	—	灰	やや軟	粗砂多	回転糸切り付高台、底に爪状痕	3/5底欠	
44	蓋	18.0	—	—	灰白	やや軟	細砂	天井右回転撓削り	1/3底欠	
45	蓋	16.0	—	—	灰	良好	砂多		口縁1/4	
46	塊	16.0	8.9	6.8	灰白	やや軟	繩土	右回転糸切り付高台、輪轂目強	2/3	内吸灰
47	壺	13.4	—	—	灰	良好	砂多	右回転、輪轂目細弱	1/4底欠	
48	塊	15.8	—	—	灰白	良好	繩土	輪轂目強	2/3底欠	
49	塊	—	9.3	—	灰白	軟	繩土	回転糸切り付高台、外観吸灰	底1/4	
50	甕	11.1	8.2	13.8	暗赤褐	—	繩土	台付箆、肩へ上半横模・下半縱模削り	1/2	土師器

11号窯跡出土遺物 (第74・75・76・77・78・79・80図 表.17・18・19 P L. 24・25・26・27)

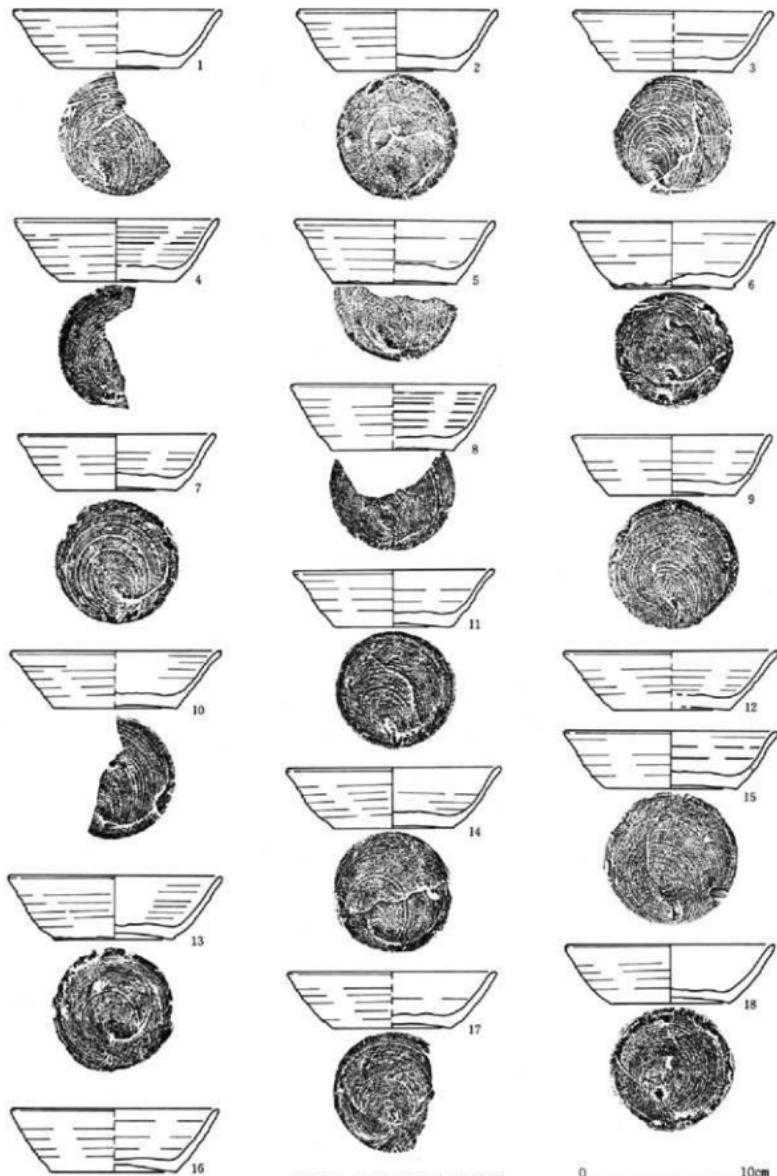
燃焼部に集中して検出され遺物量が多い。床面直上には操業時の生成と考えられる黒色灰層がのこり、遺物はこの灰層上にうち重なり選別後の放置であろう。壺・蓋・塊類がある。B類の蓋が唯一検出されている。壺は口径12cmを頂点にするが、小径化に傾き11cmまでが多く10cm大も一定量をしめる。底径は7~7.5cm器高は3.5cmが中心になる。類別ではb類(1~18)、d類(19~24)、e類(25~33)とf類(34~58・60)はやや不分明な部分もある。g類(59)、h類(61~74・85・86)、i類(75~84)に分類できようか。

蓋はA・B類がある。B類(87)はC区C-15号・16号住居跡からの出土があり、複数の個体は製作されていたと考えられる。A類にはAa類(92)、Ab類(88・91)、Ad類(90)がある。

塊はAa類(93・94)とB類がある。B類にはBa II類(95・97)、Bb I類(100)、Bf I類(102)・II類(103)があり、(99)はBc I類に相当しよう。

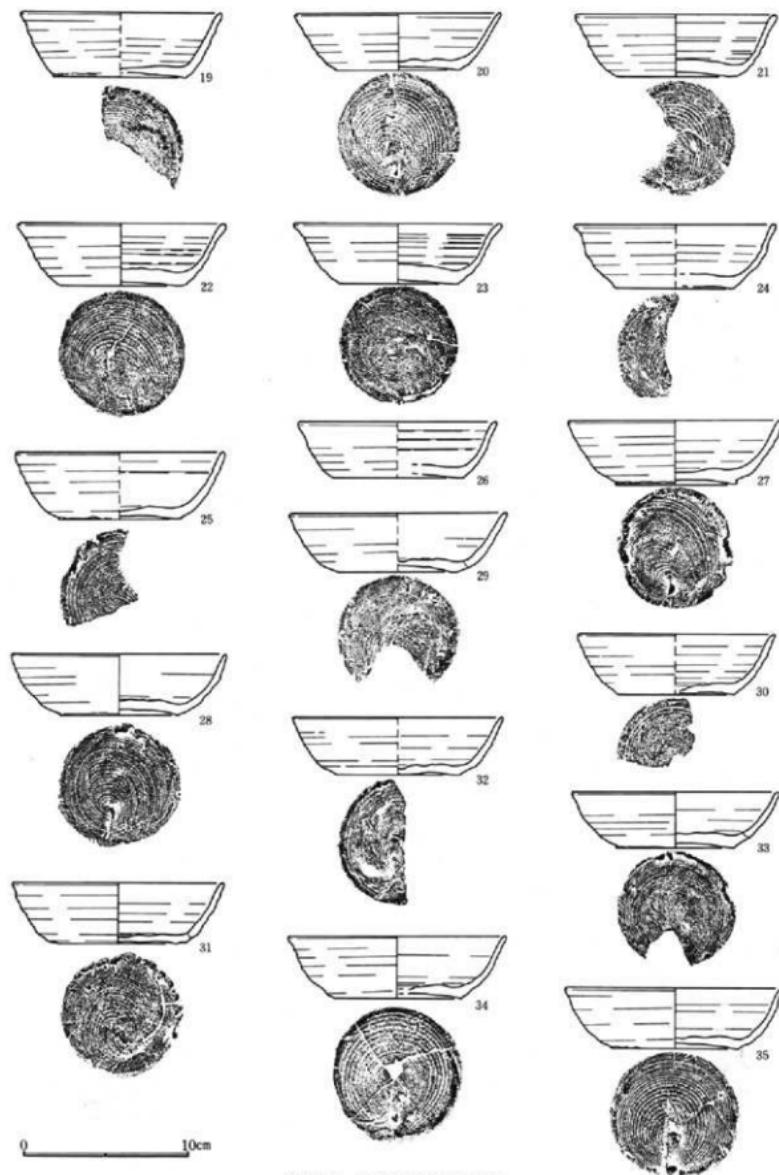


第74図 11号窯跡壺計測値分布図

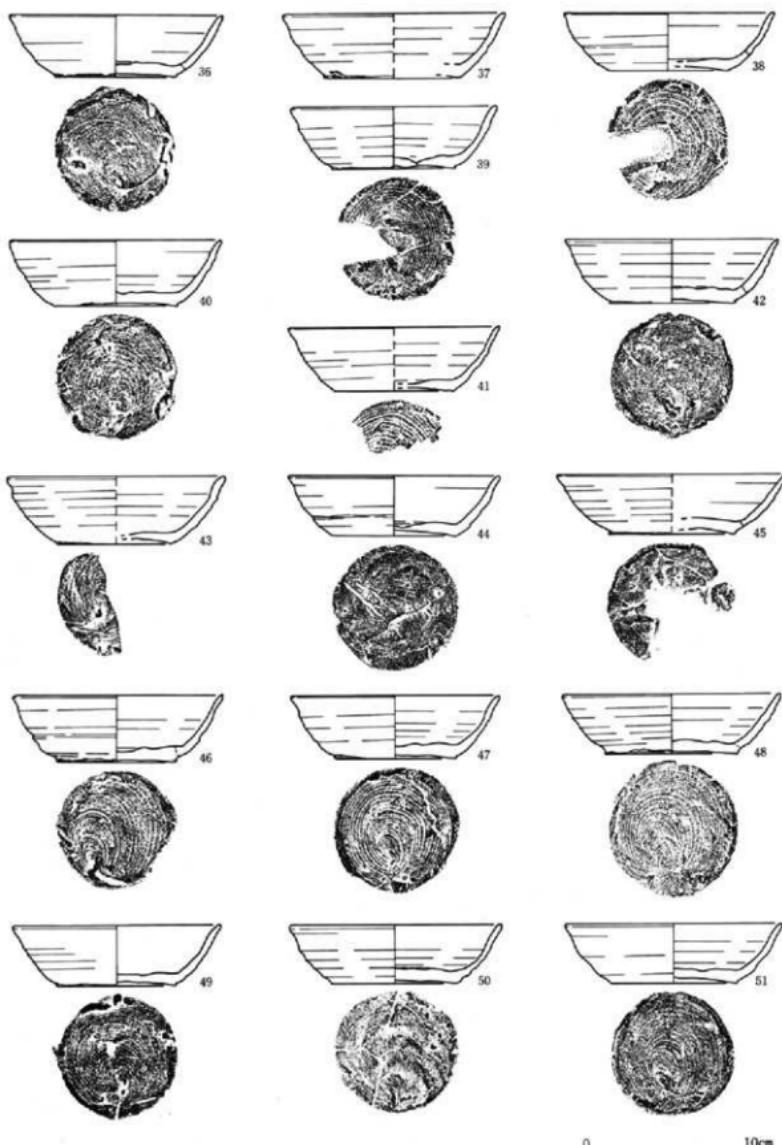


第75図 11号窯跡出土遺物(1)

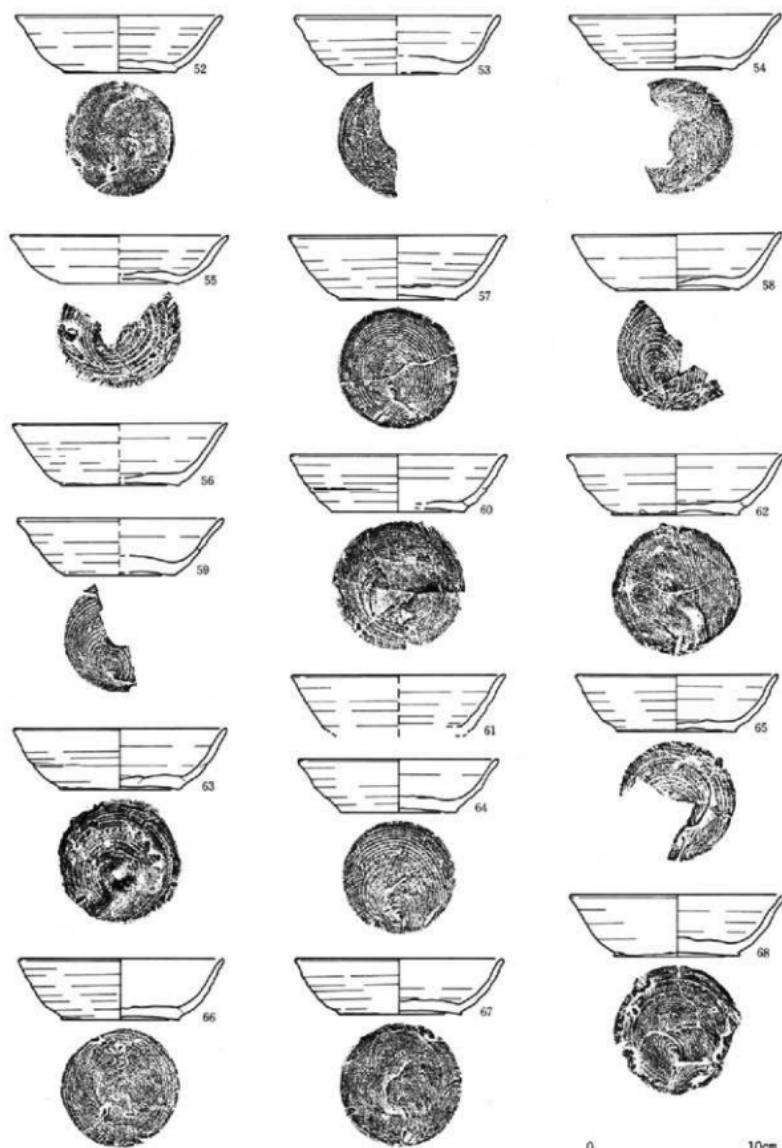
第2節 出土遺物



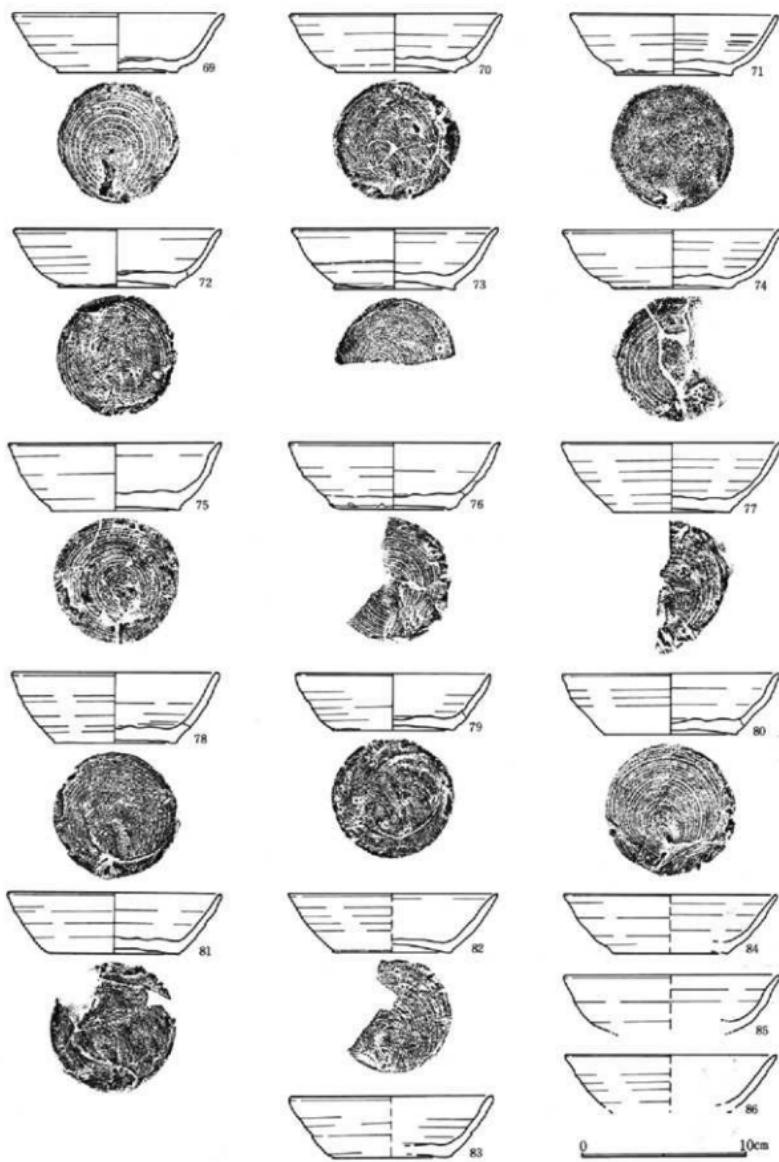
第76圖 11号窯跡出土遺物(2)



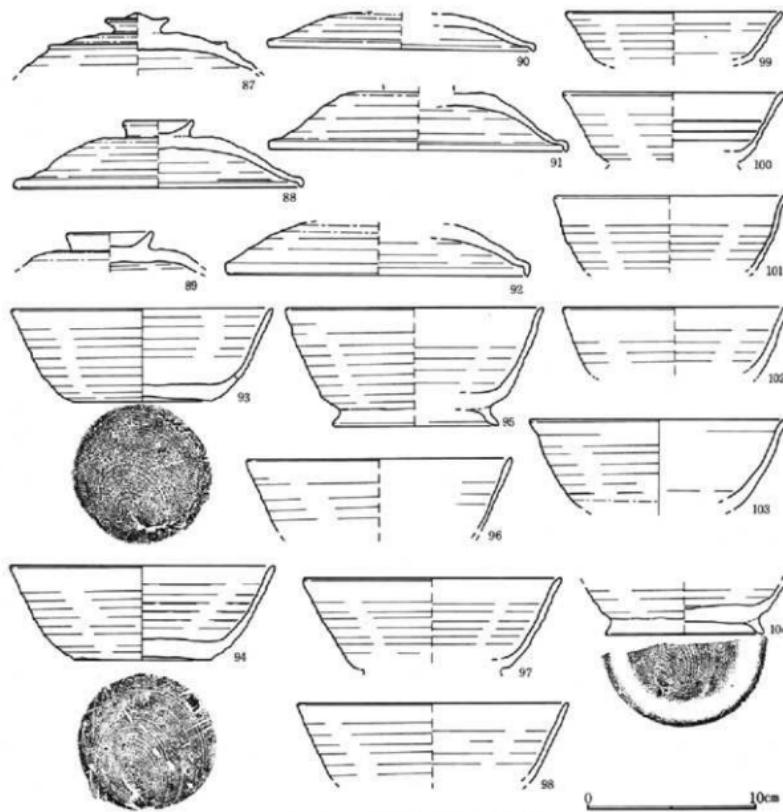
第77図 11号窯跡出土遺物(3)



第78図 11号窯跡出土遺物(4)



第79図 11号窯跡出土遺物(5)



第80図 11号窯跡出土遺物(6)

表.17 11号窯跡出土遺物件数表 (1)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎 土	成形・特徴	残存	備考
1	壺	12.4	7.4	3.5	灰白	良好	細土	右回転糸切り、織籠目複	1/3	
2	壺	12.0	7.2	3.6	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織籠目弱	3/4	
3	壺	11.8	7.1	3.4	灰白	やや軟	粗砂多	右回転糸切り、織籠目少強	2/5	
4	壺	12.2	7.0	3.7	灰	良好	細砂多	右回転糸切り、織籠目多強内裏当?	1/2	
5	壺	12.0	7.4	3.8	灰	良好	細砂	右回転糸切り、織籠目漸強	1/3	
6	壺	12.2	7.0	4.0	白灰	やや軟	細土	右回転糸切り、織籠目弱	2/3	
7	壺	11.8	7.2	3.3	灰	良好	細土	右回転糸切り、織籠目強、底押痕	3/4	
8	壺	12.2	7.3	3.9	灰	良好	細砂	右回転糸切り、織籠目多強内裏当、底押痕	2/5	
9	壺	12.0	7.6	3.6	灰白	中や軟	砂多	右回転糸切り、織籠目少強	1/2	
10	壺	12.6	7.4	3.4	灰	良好	細土	右回転糸切り、織籠目強、窓壁付着	2/5	焼き亞
11	壺	12.0	7.0	3.4	灰	良好	砂多	右回転糸切り、織籠目強	3/5	
12	壺	12.8	7.0	3.5	灰白	良好	砂少	右回転糸切り、織籠目漸強	1/3	
13	壺	12.3	7.1	3.8	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、織籠目漸強	3/5	

表.18 11号窯跡出土遺物計測表(2)

番号	器種	口径	底径	器高	色調	焼成	胎土	成形・特徴		残存	備考
								右回転糸切り、輪轂目削			
14	坪	12.7	7.2	3.6	灰	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目削	3/4		
15	坪	12.8	8.0	3.4	灰白	良好	細砂	右回転糸切り、輪轂目削、底掉痕	3/5		
16	坪	12.3	7.5	3.8	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目強	1/3	焼き重	
17	坪	12.4	7.1	3.4	暗灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目削、焼き歪	2/5	二次被熱	
18	坪	12.6	7.0	3.5	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目削、窓型付着	3/5	二次被熱	
19	坪	12.0	8.0	3.8	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目強、底掉痕	1/3		
20	坪	12.4	7.4	3.4	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目削	3/5		
21	坪	12.0	6.8	3.7	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目強	3/5		
22	坪	12.4	7.4	3.7	灰	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目内凹当	1/2		
23	坪	12.4	7.0	3.6	灰	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目多強内凹当、底掉痕	3/5	焼き重	
24	坪	12.0	7.0	3.8	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	1/4		
25	坪	12.4	7.2	4.0	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目削	1/4		
26	坪	11.8	7.8	3.3	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目強	1/4		
27	坪	12.8	7.0	3.8	純黄橙	細砂	細土	右回転糸切り、輪轂目強、底掉痕、外吸灰	3/5		
28	坪	12.8	7.0	3.7	純黄橙	軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	4/5		
29	坪	13.0	7.0	3.5	純黄橙	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目略無し	2/5		
30	坪	11.8	7.0	3.6	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目強弱	1/4		
31	坪	12.6	7.0	3.6	灰白	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪轂目強弱、底掉痕	3/5		
32	坪	12.6	7.4	3.4	純黄橙	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目弱	1/3		
33	坪	12.2	7.0	3.3	灰黄	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目弱、底掉痕	略完		
34	坪	13.0	7.6	3.7	純黄橙	軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	4/5		
35	坪	13.0	7.5	3.6	純黄橙	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目極弱、外吸灰	完	重ね焼	
36	坪	12.7	7.2	3.6	灰黄	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目弱	3/5		
37	坪	13.2	8.0	3.8	灰白	やや軟	細土	輪轂目弱	1/3 底欠		
38	坪	12.5	7.0	3.4	褐灰	良好	細砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	3/4		
39	坪	12.4	7.2	3.7	純黄橙	やや軟	細土	右回転糸切り、底に充満灰、輪轂目多強弱	3/5	重焼痕	
40	坪	12.7	7.3	3.9	灰	良好	細砂多	右回転糸切り、輪轂目弱、底掉痕	略完		
41	坪	12.5	7.0	3.8	純黄橙	軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	1/3		
42	坪	12.8	7.4	3.7	純黄橙	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目弱	略完		
43	坪	13.0	7.0	4.0	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目弱、内黒處理?	1/4		
44	坪	12.6	7.4	3.5	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目弱	略完		
45	坪	13.8	7.5	3.5	純黄橙	軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	1/3		
46	坪	12.4	7.0	3.9	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	完		
47	坪	12.4	7.2	3.7	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目弱、内吸灰重ね焼	3/4	二次被熱	
48	坪	13.0	8.0	3.6	純黄橙	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目強	3/4		
49	坪	12.4	7.0	3.6	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	3/4		
50	坪	12.7	7.4	3.5	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目強	1/2		
51	坪	13.0	7.5	3.5	灰白	良好	砂少	右回転糸切り、輪轂目強、内口縁吸灰	略完	重ね焼	
52	坪	12.4	6.7	3.4	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	1/2		
53	坪	12.3	7.0	3.5	灰	良好	細砂	右回転糸切り、輪轂目削	1/3		
54	坪	12.6	6.8	3.2	灰	良好	砂少	右回転糸切り、輪轂目強	1/4		
55	坪	13.0	7.0	2.9	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目削	1/3	焼き重	
56	坪	12.8	7.0	3.7	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	1/3	焼き重	
57	坪	13.0	7.2	3.8	純黄橙	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目削	7/8		
58	坪	12.5	7.3	3.3	灰白	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	1/2		
59	坪	12.3	6.6	3.4	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	1/4		
60	坪	13.0	7.8	3.4	純黄橙	軟	粗砂少	右回転糸切り、輪轂目強	3/4		
61	坪	12.8	—	—	純黄橙	やや軟	細土	輪轂目強、内焼處理			
62	坪	13.0	7.5	3.6	純橙	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轂目弱、底掉痕	略完		
63	坪	12.8	7.2	3.6	灰黄	やや軟	砂少	右回転糸切り、底に充満灰、輪轂目弱	3/5		
64	坪	12.0	6.8	3.2	灰白	良好	砂少	右回転糸切り、輪轂目少強	3/5		
65	坪	12.0	7.0	3.4	褐灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目削	3/5		
66	坪	12.3	7.0	3.7	灰	良好	粗砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	略完	二次被熱	
67	坪	12.4	7.3	3.3	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目強、内縁内外吸灰	完	重ね焼	
68	坪	12.8	7.5	3.7	純黄橙	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	略完		
69	坪	12.8	7.2	3.5	白灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	3/4		
70	坪	12.5	7.1	3.4	灰黄	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪轂目弱、底掉痕	略完		
71	坪	12.4	7.1	3.6	灰白	良好	細土	右回転糸切り、輪轂目弱	5/6		
72	坪	12.4	7.0	3.5	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	3/5		
73	坪	12.4	7.4	3.6	白灰	やや軟	細砂多	右回転糸切り、輪轂目弱	1/2		

表.19 11号窯跡出土遺物計測表 (3)

番号	器種	口径	底径	高さ	色調	残存	備考
74	环	13.0	7.1	3.5	純黄橙 軟	細土	右回転糸切り、織縫目弱 3/5
75	环	12.7	7.5	4.1	純黄橙 やや軟	細砂	右回転糸切り、織縫目弱、底持痕 略完
76	环	12.5	7.4	4.0	純黄橙 やや軟	細土	右回転糸切り、織縫目弱 4/5
77	环	13.0	7.0	4.2	純黄橙 やや軟	細土	右回転糸切り、織縫目弱、外吸炭 1/2
78	环	12.4	7.5	4.2	灰白 良好	細砂	右回転糸切り、織縫目弱 5/6
79	环	11.6	7.2	3.7	灰黄 良好	砂多	右回転糸切り、織縫目弱、焼き歪 2/3
80	环	13.0	7.9	3.6	純橙 やや軟	細土	右回転糸切り、織縫目少強 略完
81	环	12.8	7.7	3.6	灰白 良好	砂多	右回転糸切り、織縫目弱、底持痕 3/4
82	环	12.4	7.0	3.5	灰 良好	細砂多	右回転糸切り、織縫目弱 1/3
83	环	12.2	7.0	3.7	純黄橙 やや軟	細土	右回転糸切り、織縫目弱 1/5
84	环	12.8	7.0	3.5	純黄橙 やや軟	細土	右回転糸切り、織縫目弱 1/3
85	环	13.0	7.0	3.4	灰白 良好	細砂多	織縫目極強 1/4 底欠
86	环	12.6	—	—	灰白 良好	細砂多	織縫目強 2/3 底欠
87	蓋	—	—	—	灰白 良好	砂多	天井右回転糸切り、擬定珠鉢、天井凸帶付 1/2 増欠
88	蓋	17.3	4.2	4.0	灰白 良好	砂多	天井右回転糸切り、難状鉢 1/2
89	蓋	—	—	—	灰白 やや軟	細土	天井右回転糸切り、準形状径5.2cm 体部欠
90	蓋	16.0	—	—	純黄橙 軟	砂多	天井右回転糸切り 1/4 底欠
91	蓋	17.8	—	—	灰白 やや軟	細砂多	天井右回転糸切り 1/4 底欠
92	蓋	18.0	—	—	純黄橙 やや軟	細砂	天井右回転糸切り 1/3 底欠
93	塊	15.6	8.2	5.5	灰白 良好	細砂	右回転糸切り、織縫目強、底持痕 1/2
94	塊	15.8	8.2	5.6	灰白 やや軟	細土	右回転糸切り、織縫目強、内窓当? 1/2
95	塊	15.3	9.8	7.0	灰白 やや軟	細土	回転糸切り、付高台、織縫目強 1/2 外吸炭
96	塊	15.8	—	—	灰白 やや軟	細土	織縫目強 口縁小片 内外吸炭
97	塊	15.4	—	—	灰白 良好	細土	織縫目強 1/3 底欠
98	塊	16.2	—	—	黒 軟	細土	織縫目強、内外吸炭処理? 2/3 底欠
99	塊	13.0	—	—	純橙 やや軟	細土	織縫目強 1/3 底欠 内吸炭
100	塊	13.2	—	—	灰白 良好	砂多	織縫目強 1/4 底欠
101	塊	14.0	—	—	灰白 良好	細土	織縫目強 1/3 底欠
102	塊	13.4	—	—	純橙 軟	細土	織縫目弱 1/4 底欠
103	塊	15.4	—	—	灰黄 やや軟	細土	織縫目強、腰部回転糸切り 底欠 無高台?
104	塊	—	9.4	—	灰白 良好	細砂	右回転糸切り、付高台 底欠 1/2

13号窯跡出土遺物 (第81・82・83図 表.20 P.L.27)

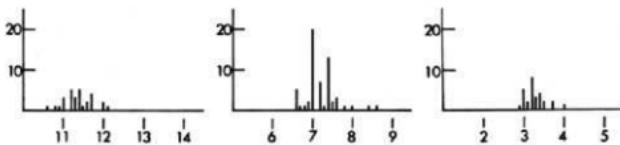
燃焼部に集中して検出され、選別後の放置と考えられ、出土量はさほど多くはない。环・皿・蓋・塊類がある。耳环の片耳部が特異な遺物であるが当跡から1点のみの出土で接合資料も無く全体形状は不明である。

环は口径11cm大に集中し12cmを超えない。底径は7cmを中心に、器高は3cm前半が大半である。a類(1~4)、b類(5~8)、c類(9~15)、e類(16~21)、f類(22)、g類(23~25)、i類(26~27)に分類できよう。

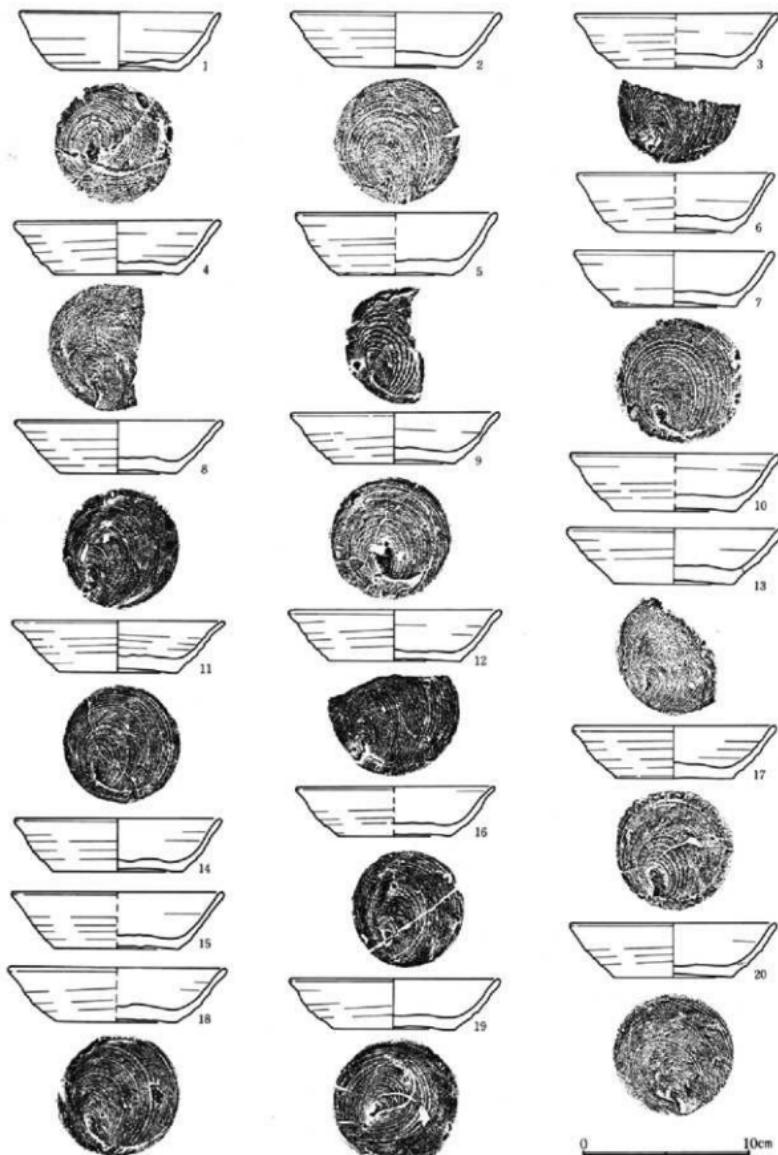
皿はBa類(28)。蓋はAc類(30)であるが15cm以下で、塊のI類に符合する。

塊はBe II類(31)で、高台形状には角高台気味の(31・34)と内窓する(33)がある。(32)は底径が9cmにせまり、腰部のくびれ形状から塊Ab II類になろう。

耳环はやや長目で竪による丁寧な面取り調整を施す。耳部上位の口縁部まで残すが底部高台の有無は不明である。内外面は吸炭によって均一な黒色を呈する。意図的に黒色処理を施した可能性もある。

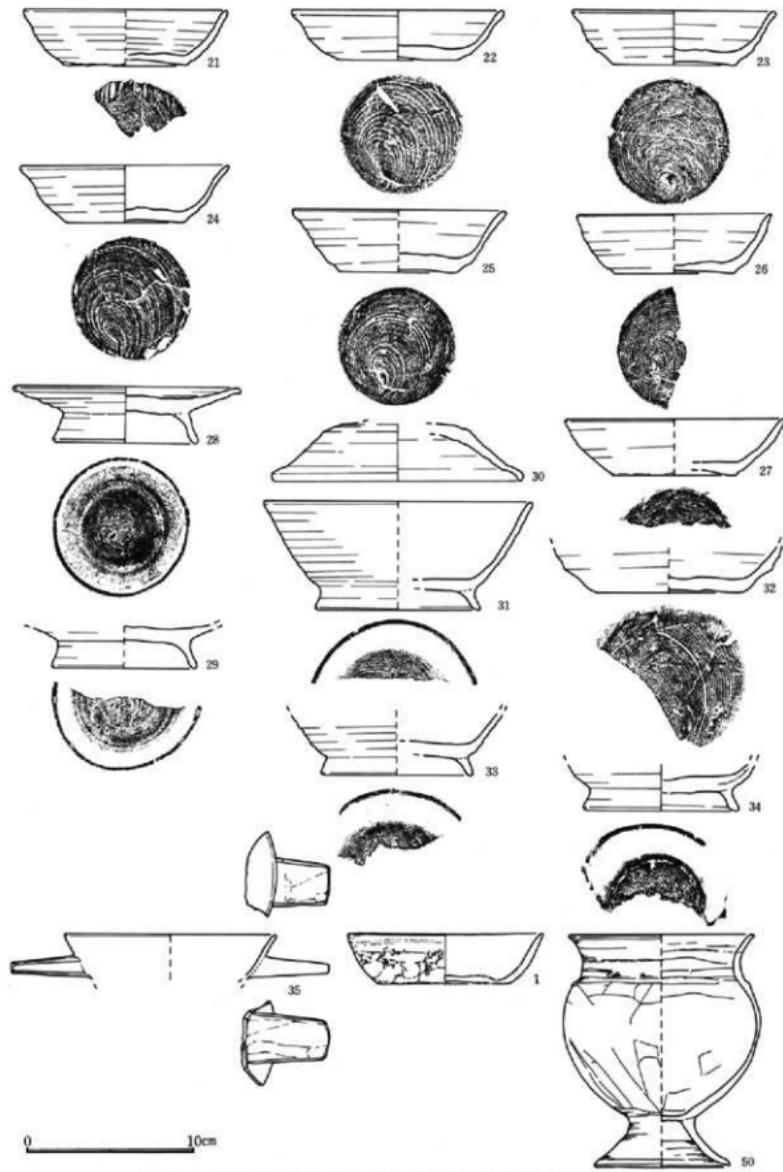


第81図 13号窯跡耳環計測値分布図



第82図 13号窯跡出土遺物(1)

第2節 出土遺物



第83圖 13號窯跡出土遺物(2)、3號・10號窯跡出土遺物(土師器) 1・50

表.20 13号窯跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	色	調	成	胎	土	成形・特徴		残存	備考
										右回転糸切り、輪轍目剥弱			
1	环	12.0	7.2	3.4	灰白	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪轍目剥弱	3/5				
2	环	12.7	7.4	3.2	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪轍目剥強	3/5				
3	环	12.2	7.0	3.2	灰白	良好	細砂多	右回転糸切り、輪轍目強	1/3				
4	环	12.3	7.4	3.2	灰白	良好		右回転糸切り、輪轍目強	1/2				
5	环	12.0	7.0	3.7	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轍目剥弱	2/5				
6	环	11.8	7.0	3.5	灰	良好	細砂	右回転糸切り、輪轍目強	1/4				
7	环	12.0	7.5	3.3	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轍目剥弱、底押痕	3/5				
8	环	12.4	7.0	3.1	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪轍目剥強	3/5				
9	环	12.4	7.2	3.0	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轍目強	1/2				
10	环	12.5	7.4	3.4	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轍目剥弱	2/5				
11	环	12.7	7.0	3.0	灰白	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪轍目剥強	1/2				
12	环	12.6	7.8	3.0	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轍目強、底押痕	1/2				
13	环	13.0	7.5	3.3	灰黄	軟	細土	右回転糸切り、輪轍目剥弱	2/5		内外黒皮		
14	环	12.3	7.7	3.1	純黄橙	細砂縫少	軟	右回転糸切り、輪轍目強、底押痕	3/4				
15	环	12.7	7.5	3.3	灰	砂多	やや軟	右回転糸切り、輪轍目剥弱、内吸痕	1/4				
16	环	11.9	6.8	2.9	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轍目剥弱	2/5				
17	环	12.2	7.0	3.1	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り、輪轍目剥強、底押痕	2/5				
18	环	13.0	7.2	3.2	灰白	軟	細土小縫	右回転糸切り、輪轍目強、底押痕	3/5		内吸痕		
19	环	12.4	7.4	3.0	灰白	良好	細砂	右回転糸切り、輪轍目剥弱	3/5				
20	环	12.4	7.0	3.2	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪轍目強、底押痕	1/2				
21	环	12.2	7.4	3.3	灰	良好	細砂	右回転糸切り、輪轍目弱	1/3				
22	环	12.7	7.2	3.0	灰白	やや軟	砂多縫	右回転糸切り、輪轍目剥弱、底押痕	1/2				
23	环	12.2	7.3	3.2	灰白	やや軟	砂多	右回転糸切り、輪轍目剥強、底押痕	3/4				
24	环	12.4	7.0	3.4	灰白	良好	砂多	右回転糸切り、輪轍目弱、底押痕	3/5				
25	环	12.7	7.0	3.7	灰白	やや軟	細土	右回転糸切り、輪轍目剥強、底押痕	2/5				
26	环	11.6	7.2	3.5	灰黄	良好	細砂	右回転糸切り、輪轍目剥弱、底押痕	2/5				
27	环	13.1	7.4	3.4	灰	良好	砂多	右回転糸切り、輪轍目弱	1/4				
28	皿	13.6	8.6	3.3	灰	細砂	良好	回転糸切り、付高台	略完				
29	皿	—	8.6	—	灰	細砂	良好	回転糸切り、付高台	底1/2				
30	蓋	15.0	—	—	灰	砂多	良好	天井右回転糸切り、細欠損	1/2				
31	塊	16.0	9.8	6.4	灰白	軟	細土	回転糸切り付高台、輪轍目弱多	1/3				
32	塊	—	8.6	—	灰白	やや軟	細砂	右回転糸切り	底2/3				
33	塊	—	9.0	—	灰	軟	細砂	回転糸切り付高台、輪轍目弱多	底1/3				
34	塊	—	9.2	—	淡黄灰	軟	細土	回転糸切り付高台	底1/2				
35	耳环	12.6	—	—	黑	やや軟	細土	双耳か?・長目の耳皿削り面取り調整	耳部		焼し焼成		

## 10号窯跡出土土師器（第83図 P.L.28）

光仙房遺跡窯跡群からの土師器出土資料は3号窯跡の环（第83図）の他、当窯跡からの台付き小型臺1個体の計2点である。言うまでもなく両者は土師器そのものであり、窯跡での生産品とは考えられない。

土師器台付き小型臺は10号窯跡の前底部床面近くからの出土である。前底部の中心範囲は重複する11号・13号窯跡のそれとほとんど同じくしているが、新旧関係から土師器臺の帰属は10号窯である蓋然性が高い。出土状況はやや小片化していたが個体そのものは集中していた。遺存の度合いは胴部中位が欠落するものの全体形状は留めている。口径11.0cm、底径8.2cm、器高13.8cm、最大径は胴中位で11.8cmを測る。口縁部は外反して伸びやかに立ち上がり、口唇部は小さく丸まる。肩部は寛調整による小さな段を成し、球形に張った脇を作る。台部は高さ3cmでハの字状に大きく開き、全体に端正な形態である。口縁・台部は横撫で、肩から脇上半は横位、中位から下半は縦位の範削りを施す。細土で暗赤褐色を呈する。

## 窯跡出土瓦（第84~92図 P.L.28~30）

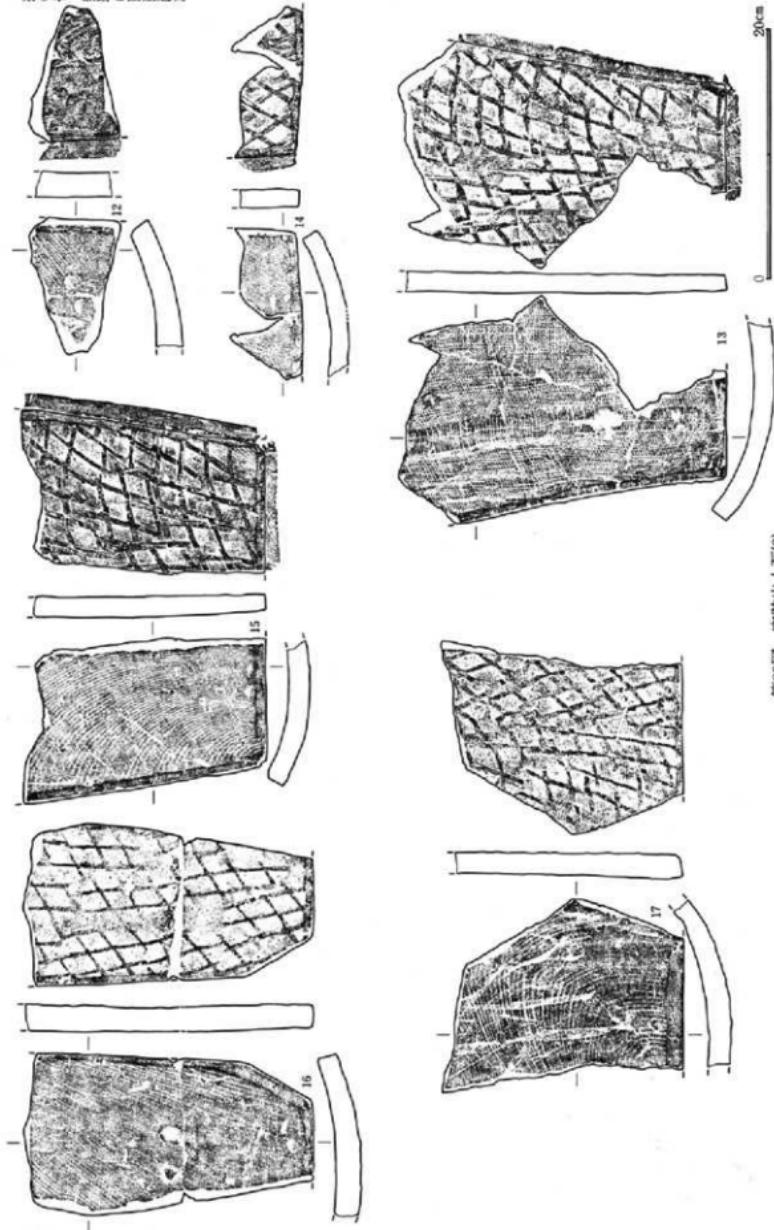
光仙房遺跡の窯跡からはその量に過多はあるものの、12基中2号・6号窯跡を除くほとんどの窯跡に瓦が検出されている。総数89点で個体識別数は大凡その半数に近くなると思われる。瓦種では鏡瓦（軒丸）・芋瓦

20cm

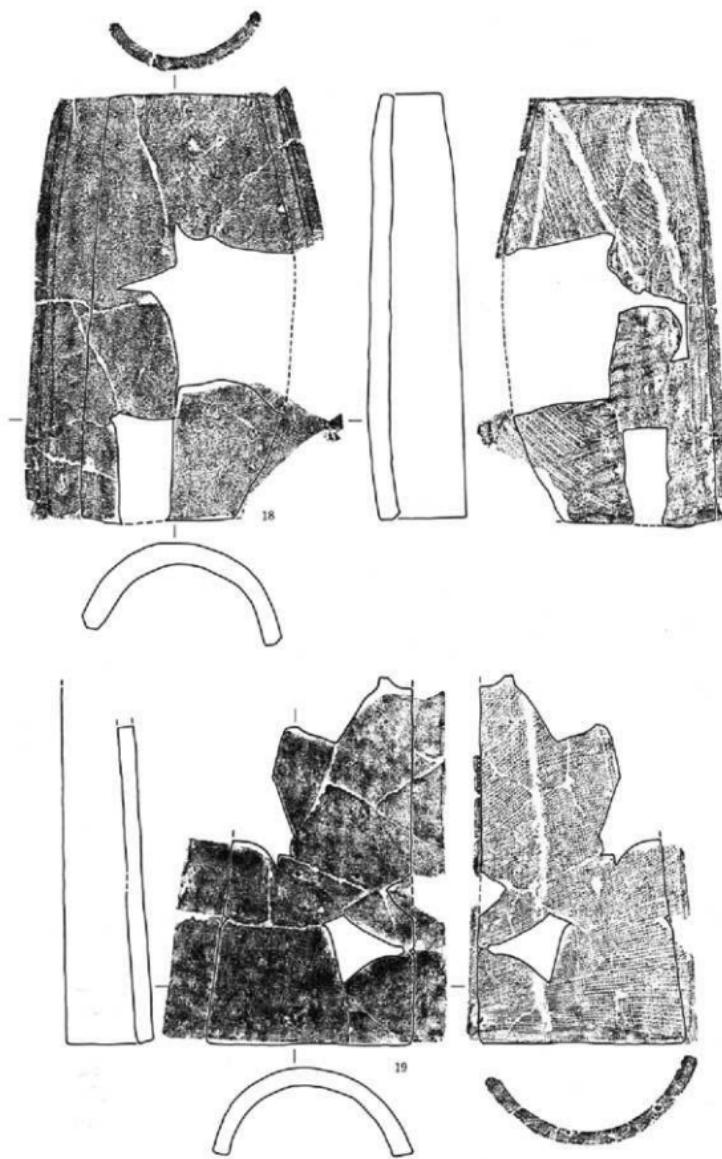
第34圖 窯跡出土瓦(1)

The image contains 12 numbered archaeological finds, likely fragments of kiln debris, arranged in three columns. Each find is depicted from two perspectives: a top view and a side view. The fragments vary in shape and size, some being large rectangular tiles with a prominent grid pattern (waffle or brick pattern) and others being smaller, more irregular pieces. Numbered labels 1 through 12 are placed near their respective fragments. To the right of the fragments, there is a vertical scale bar labeled '20cm'.

103



第3章 窯跡と出土遺物  
第85図 窯跡出土瓦(2)

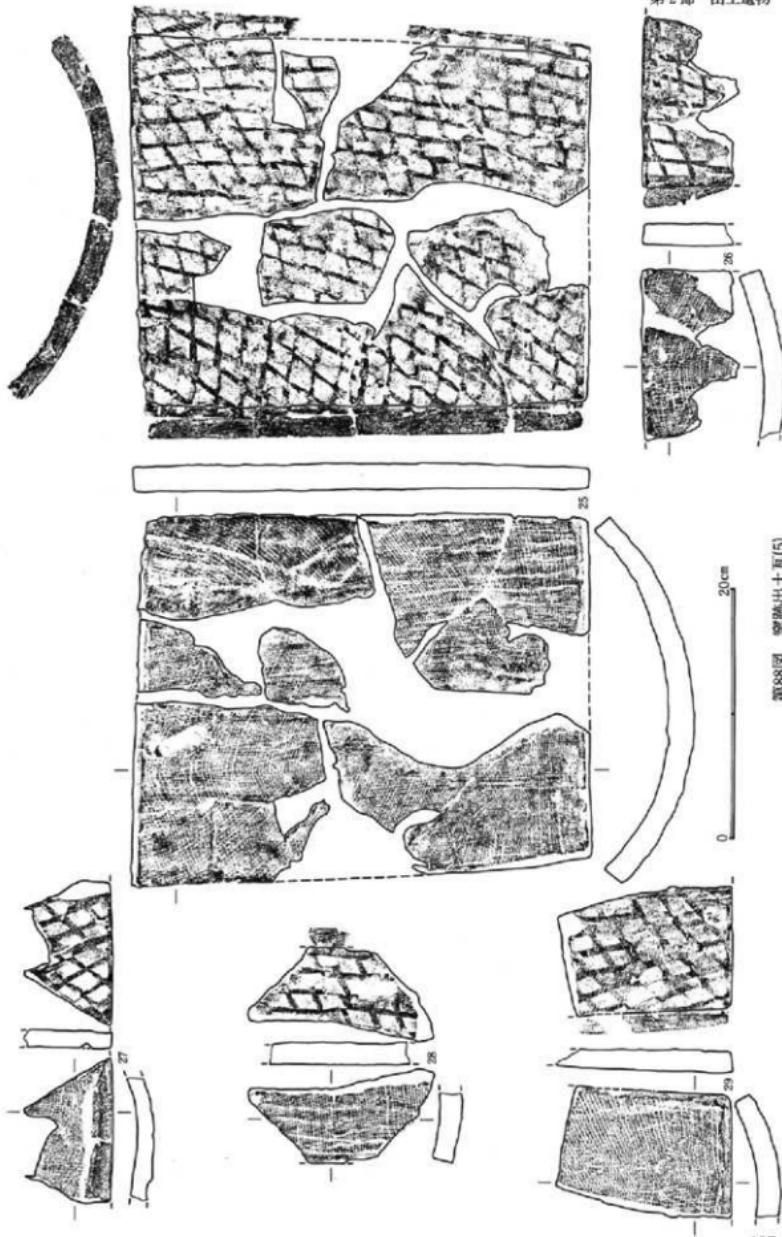


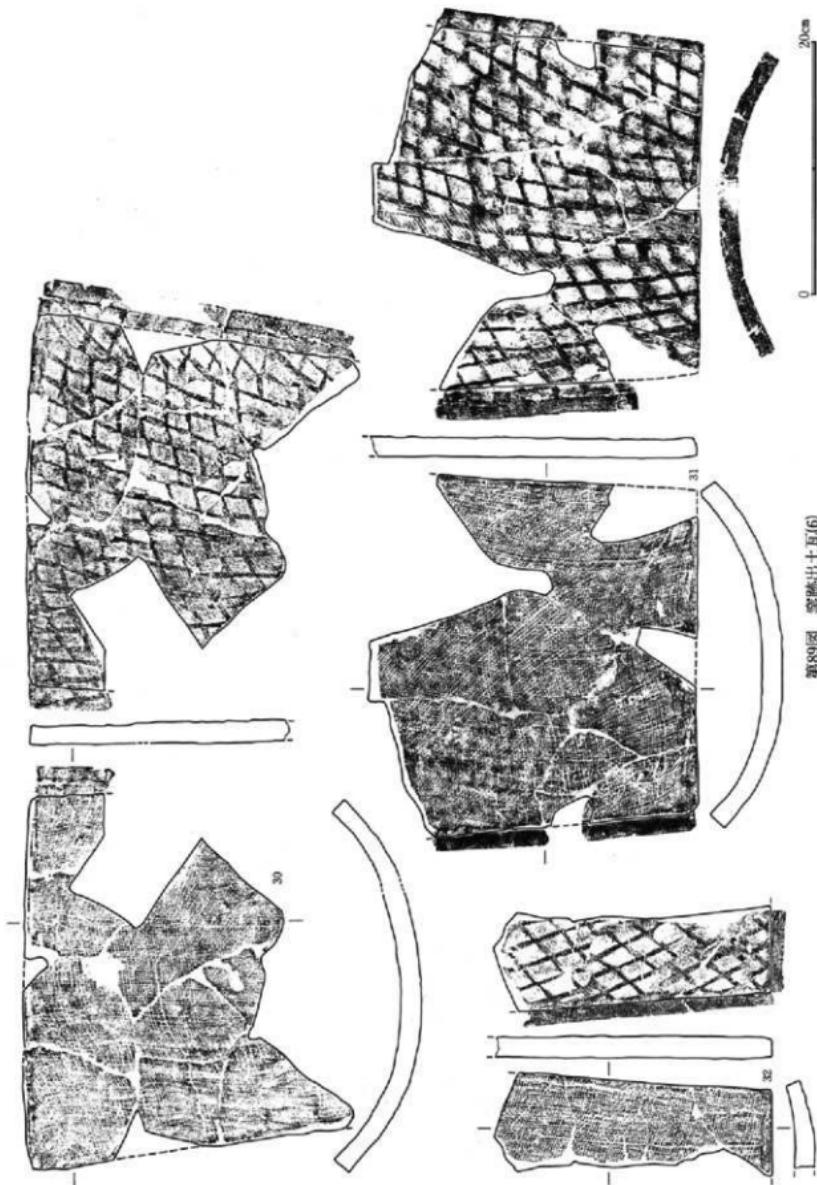
第86図 窯跡出土瓦(3)



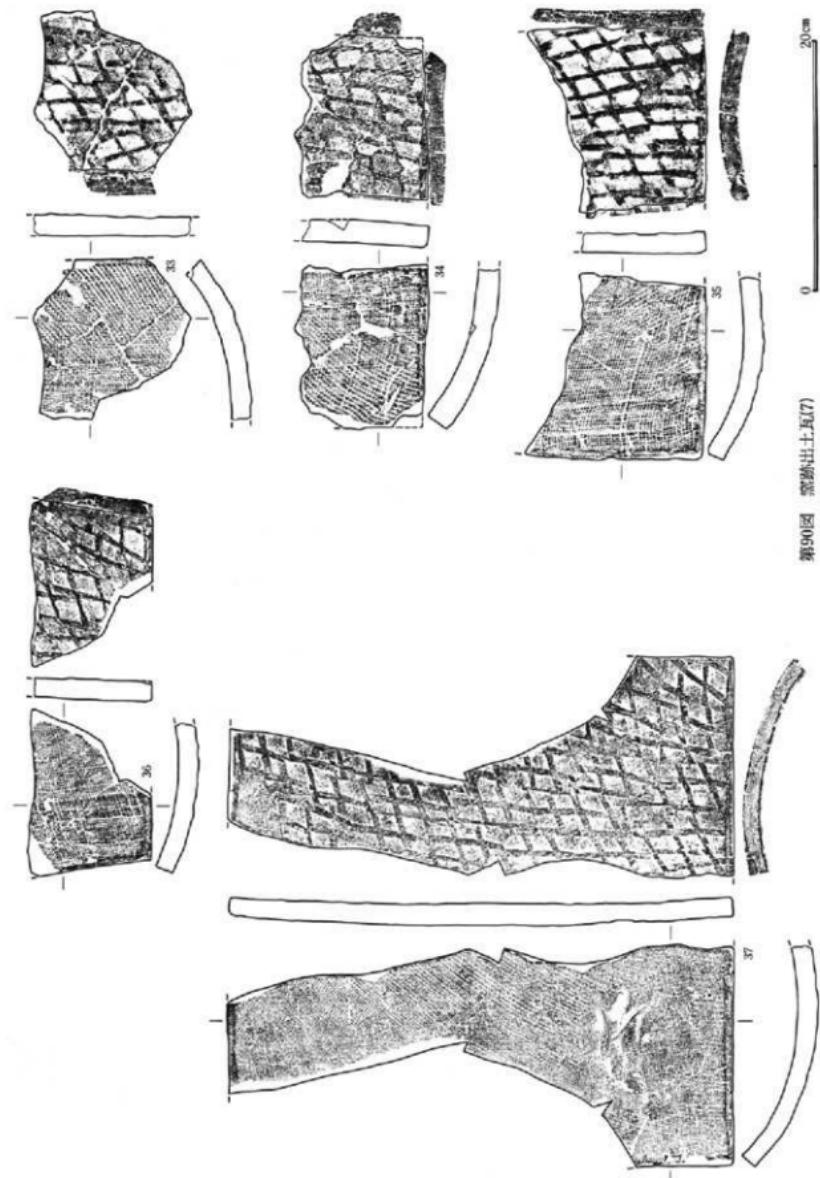
第387図 織跡出土瓦(4)

第88圖 燈盤出土瓦[5]

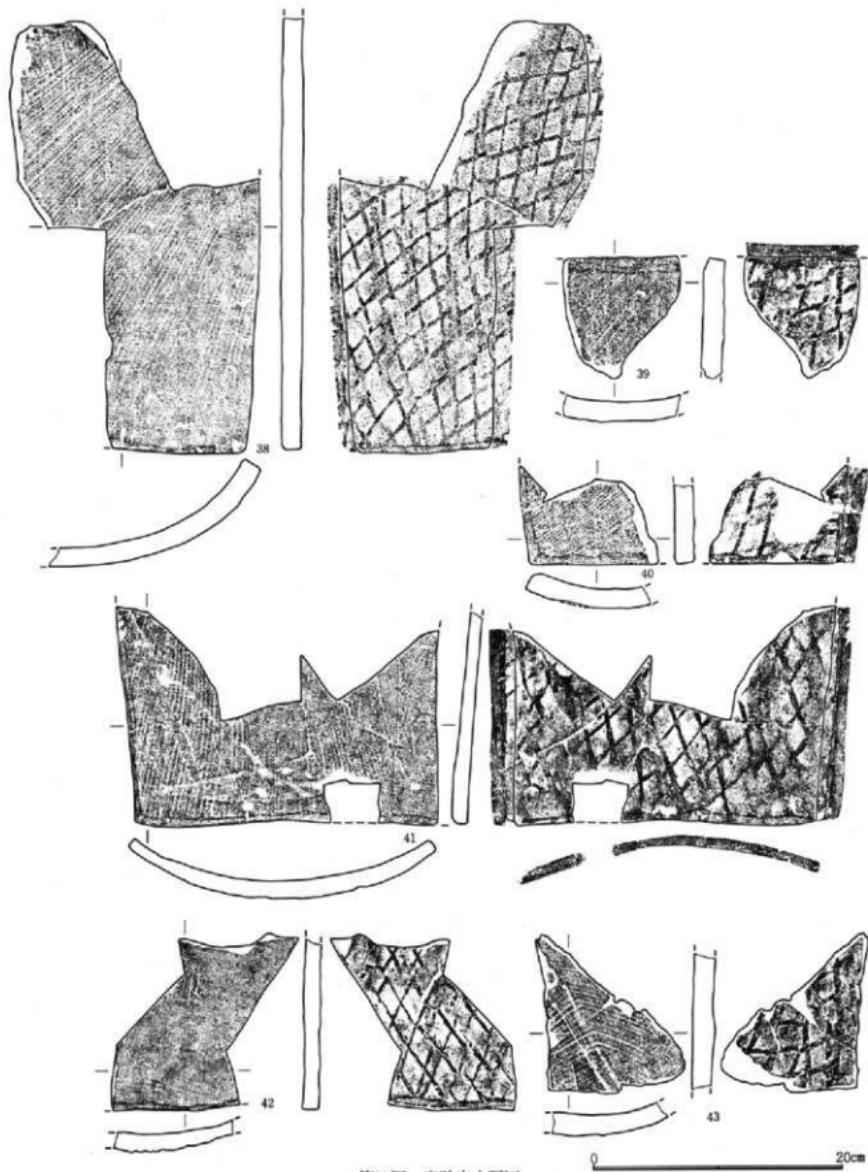




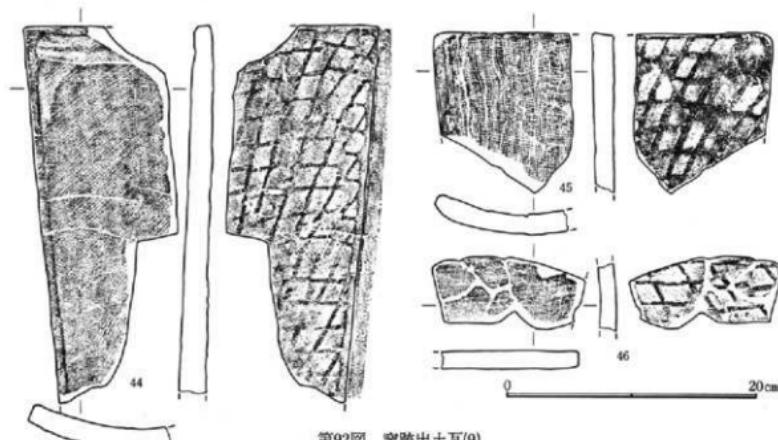
第89図 窯跡出土瓦(6)



第90圖 簋盤出土瓦片



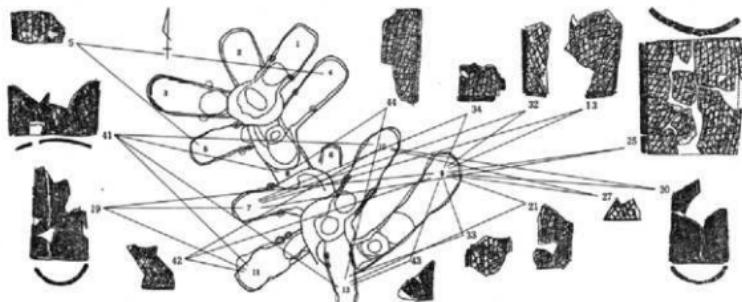
第91図 窯跡出土瓦(8)



第92図 窯跡出土瓦(9)

(軒平)の存在は確認されず全てが男瓦・女瓦である。また、女瓦の量が多く、男瓦は6個体である。窯跡出土の瓦類については本節の冒頭で述べたように、出土状況や外観的観察からは本窯跡群での焼成品とは考えられず、窯部材として外部からの搬入と思われる。その使用方法についても、7号窯跡の焚口部床下地に用いられた窯体部材としての例はむしろまれで、多くは小割りされ須恵器焼台としての用にあてたものである。それは、一窯跡内あるいは窯跡別に出土した同一個体の接合で、吸炭・酸化・煤切れ現象が斑状の瓦面色表情を成しており、被熟環境が様々であったことから推測できる。

男瓦は表面に回転条痕を残しており、桶巻きまたは型巻きによる2分割半裁作りと考えられるが、裏面には明瞭な横骨痕を観察できず型巻作りとした方がよいのであろうか。また、横位に緩い凹凸の触感と破断面観察の土粒走行単位認識から紐作りが大半と思われるが、9号窯跡出土の1点(第86図18)には土合わせと見える縦走痕があり粘土板張り合わせ作りの可能性が高い。型当て面は布目で(第86図19)は布合わせ目、(第87図20)は布合わせ目と撫で消痕、(第87図22)は布膝り目、(第87図23)は表面片端に分割割り傷がある。側面及び縁辺は対削り調整を施す。女瓦は横骨痕が観察できないところから型一枚作りを基本として



第93図 窯跡出土瓦相関図

いるようである。型当て面は全て布目で、裏面は約1.5×2.0cmの大目斜格子叩きが全面に施される。格子区画凸線は太さ0.5cmに近く摩耗の進行のためか減り張りに欠ける。側面及び表裏縁辺は窓削り調整を施す。

接合資料には複数の窯跡出土の瓦が関係する。(第86図19)は7号・9号・10号・11号窯跡出土の資料が接合関係にある。他に(第86図13)・(第88図25)・(第89図32)・(第90図34)は7号・9号、(第87図20)は9号・10号、(第87図21)・(第90図33)・(第92図43)は9号・13号、(第91図41)は8号・10号・11号・13号、(第92図42)は9号・10号・11号、(第92図44)は8号・13号などが接合関係を有している。一枚の瓦を小分け分有するごとの現象は、総体的に9号窯跡へ集約される感があり、瓦出土量も9号窯跡が最も多い。窯跡群創業期の1基と考えられる8号窯跡の部材に供した瓦は後続して操業を開始した窯跡へと転用され、9号窯跡に至ったとすれば光仙房遺跡窯跡群の形成過程解明に有効な一助となる。

表.21 窯跡出土瓦観察表

番号	出土窯跡	出土位置	瓦種	土・色・焼	製作法	叩技法	型面	厚み(cm)	備考
1	1号窯跡 前廻部埋土	女瓦	粗・二次被熱黒灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.55	焼台		
2	3号窯跡 埋土	女瓦	細・二次被熱? 暗灰・甘い	1枚作り 素文?	布目	1.25~1.56	焼台?		
3	4号窯跡 埋土	男瓦	粗・二次被熱黒灰・良	型2枚作り 素文回転条絞	布目	1.25~1.57	焼台		
4	4号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・三次被熱白赤斑地・やや甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.58	焼台 表張模		
5	4号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・二次被熱灰白灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.59	5号埋土と接合 焼台		
6	4号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・二次被熱黒灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.60	焼台		
7	4号窯跡 燃焼部	女瓦	粗・三次被熱黒場・やや甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.61	焼台		
8	4号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・二次被熱白灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.62	焼台 表張模		
9	7号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・二次被熱黒灰・甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.63	焼台		
10	7号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・三次被熱白灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.64	焼台		
11	7号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・三次被熱灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.65	10号と接合 焼台		
12	7号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・三次被熱灰白灰・良	1枚作り 素文?	布目	1.25~1.66	焼台 表張模		
13	7号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・三次被熱白灰灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.67	9号床面と接合 焼台		
14	8号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・三次被熱黒場・やや甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.68	焼台		
15	7号窯跡 梵口部床敷き	瓦瓦	粗・二次被熱灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.69	8号前平面に敷く焼台にも		
16	7号窯跡 梵口部床敷き	瓦瓦	粗・三次被熱灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.70	8号前平面に敷く焼台にも		
17	7号窯跡 梵口部床敷き	瓦瓦	粗・三次被熱灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.71	8号前平面に敷く焼台にも		
18	9号窯跡 燃焼部	男瓦	粗・二次被熱黒灰・良	型2枚作り 素文回転条絞	布目	1.25~1.72	焼台		
19	9号窯跡 燃焼部	男瓦	粗・三次被熱白赤斑地・甘い	型2枚作り 素文回転条絞	布目	1.25~1.73	7号前庭・11号接合焼台		
20	9号窯跡 燃焼部	男瓦	粗・二次被熱黒灰・白灰・良	型2枚作り 素文回転条絞	布目	1.25~1.74	10号と接合 焼台		
21	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰・黄灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.75	13号と接合 焼台		
22	9号窯跡 燃成部埋土	男瓦	粗・三次被熱白灰・中や甘い	型2枚作り 素文回転条絞	布目	1.25~1.76	焼台		
23	9号窯跡 燃成部	男瓦	粗・三次被熱黒白純物・良	型2枚作り 素文回転条絞	布目	1.25~1.77	割りキズあり 焼台		
24	9号窯跡 燃焼部	女瓦	粗・三次被熱灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.78	焼台		
25	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰黒斑状・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.79	7号と接合 焼台		
26	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱・黒灰灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.80	焼台		
27	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱・淡黄灰・やや甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.1~1.5	10号と接合 焼台		
28	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰白・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.5~1.85	焼台		
29	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱白灰・やや甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.4~1.8	焼台		
30	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰黒斑状・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.55~1.75	焼台		
31	9号窯跡 燃成部・燃焼部	女瓦	粗・三次被熱灰白純物・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.5~1.6	焼台		
32	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰黒斑地・やや甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.5~1.7	7号と接合 焼台		
33	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰黄斑地・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.5~1.8	13号と接合焼台・表張模		
34	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.6~1.8	7号と接合 焼台		
35	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱・白灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.4~1.75	焼台 表張模		
36	9号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰白・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.5~1.7	焼台		
37	10号窯跡 燃成部	女瓦	粗・三次被熱灰白純物・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.3~1.7	焼台他部材使用か		
38	10号窯跡 燃成部	女瓦	やや粗・二次被熱灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.1~1.6	焼台		
39	10号窯跡 燃成部	女瓦	粗・二次被熱? 良	1枚作り 大斜格子	布目	1.6~1.7	焼台?		
40	10号窯跡 燃成部	女瓦	粗・二次被熱灰褐・甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.4~1.7	焼台		
41	10号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・二次被熱灰黄地・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	0.7~1.5	8号・11号・13号と接合焼台		
42	11号窯跡 埋土	女瓦	粗・二次被熱灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.1~1.5	9号・10号と接合 焼台		
43	13号窯跡 埋土	女瓦	粗・二次被熱灰・堅いやや甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.5~1.7	9号窓跡と接合 焼台		
44	13号窯跡 燃焼部床面	女瓦	粗・二次被熱灰・堅い	1枚作り 大斜格子	布目	1.4~2.0	8号と接合 焼台		
45	13号窯跡 埋土	女瓦	粗・二次被熱白灰・良	1枚作り 大斜格子	布目	1.1~1.9	焼台 表張模		
46	13号窯跡 埋土	女瓦	粗・二次被熱? 暗灰・甘い	1枚作り 大斜格子	布目	1.25~1.4	焼台?		

## 第4章 成果と課題

### はじめに

1976年、北関東自動車道建設地域の伊勢崎市三和町舞台遺跡において11基の、さらに2年後の1998年には光仙房遺跡で12基の須恵器窯跡が発見・調査された。当地はおよそ5万年前、赤城山の裾野と新田郡笠懸町鹿田山の間に流路をもった渡良瀬川による形成とされる大間々層状地形の西縁にあたる。低平な洪積台地先端部近くに両窯跡群は営まれ、周囲は湧水浸食谷の発達と共に続く南方眼前には平坦・平野地形が広がる。舞台遺跡窯跡群の発見当初、平野平坦地域に立地する須恵器窯跡の存在自体が私にとって大きな驚きであったが、調査の進行とともにその築窯方法、窯形態など新知見が相次いだ。そして、続く光仙房遺跡窯跡群の発見による築窯の手順や窯構造は、それまで須恵器窯跡に対して抱いていた既成概念の浅狭さに止めを刺されたように思われた。光仙房遺跡窯跡群の発見で再び須恵器窯跡の調査に携わることができた幸運に恵まれたが、当時は舞台遺跡窯跡報告書作成の途上であった。刊行準備の進む舞台遺跡窯跡群（以下舞台窯跡群）は光仙房遺跡窯跡群（以下光仙房窯跡群）整理作業が進むにつれその存在がより鮮明に形作られることになったが、両窯跡群の比較・検討なしには、より具体的な実像に迫ることはできなかった。

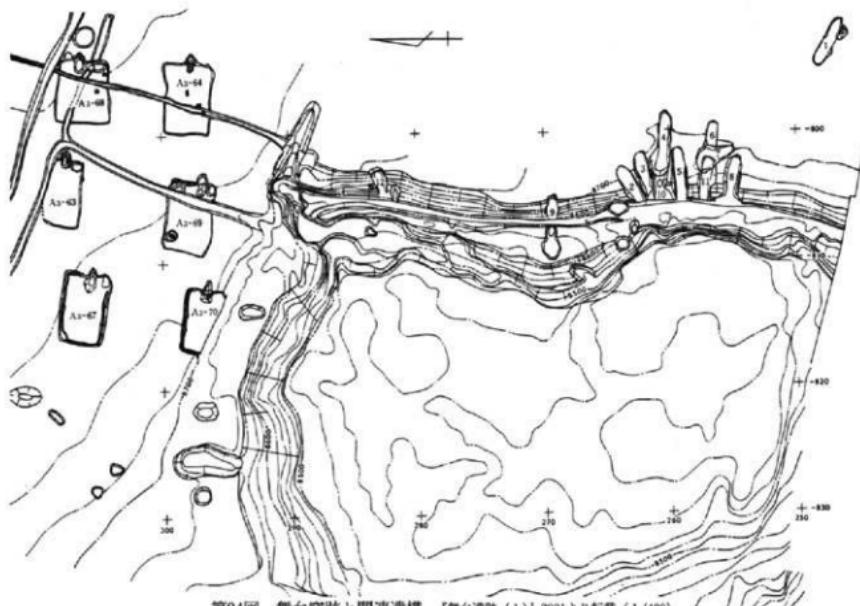
本章では、両窯跡群の様相を絡めながら築窯の方法・構造をはじめ、出土須恵器の年代など既刊「舞台遺跡（1）」財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001年に残された多くの課題の一端に触れ、僅かでもその責を果たしたい。

## 第1節 光仙房窯跡群の築窯とその構造

### 1. 築窯の経過と方法

光仙房窯跡群は前底部を中心とする放射形状ともいえる群様を呈する。当窯跡群の形成に先立つ舞台窯跡は、窯体形状・築窯方法・窯構造の変化変遷の展開過程が明らかになった。開窓初期段階の10号・11号窯跡に始まり窯跡群構成員による内部的な創意と考えられる変遷を経て、築窯技術方法論的には平坦地形縱坑掘り抜きの1号窯跡に至りその終焉を迎える。光仙房窯跡群形成の初発となるであろう8号窯跡は、立地条件からみて舞台窯跡群での1号窯跡の築窯方法によっていると考えざるをえない。両窯跡群には築窯の技術的継承による一系工人集団としての繋がりが色濃く窺われる。時間的な断絶期間は測り得ないが舞台窯跡群の工人構成員が光仙房窯跡群の形成に際して再編成が行われた可能性が高いと考えられる。奇異とも見える光仙房窯跡群の群様形成には舞台窯跡群での築窯変遷をたどったうえでの理解が可能ではないかと思われる。舞台窯跡群形成過程の詳細は報告書を参照されたいが、ここでは舞台窯跡群の築窯の概略から述べる。

舞台窯跡群の11基は、湧水開析による南開口の谷西傾斜面とその縁辺に構築され、1号窯跡の1基だけが台地平坦面にある。谷頭台地には6軒の工房または住居跡が併設される。（第94図）窯構造は地下式窯窓で、窯体形状は窯尻が幅広で寸胴な焼成部から燃焼部や焚口部の紋りも顕著ではない。前底部が八の字状に開放すると思われる2号・3号・5号・8号・10号・11号窯跡と、すり鉢に閉じる1号・4号・6号・7号・9号窯跡がある。構築方法はこの前底部の形状によって区別され、谷縁辺の肩部落差を掘り抜く窯は前者と、庵絶窓の窓みを利用する窯は後者に一致する。群中に平坦面にある1号窯跡のみ立地と構築方法が特異で、前底部にあたる縦坑底面から窯体は僅かな床面傾斜をつけて掘り抜いている。1号窯跡周辺には灰原の形成



第94図 舞台窯跡と関連遺構 『舞台遺跡(1)』2001より転載(1/400)

は見られない。ただ、9号窯跡は窯本体は急傾斜地にあり、平坦部分を前底部にする中間的な窯業と考えられる。群としての形成過程は重複関係や配置規範の可能性から、大枠4群を設定し操業の順を想定した。傾斜面を掘り抜くI・II群、からI群窯体を利用するIII群へ、III群との重複と窯形態からのIV群である。それらの中でも1号窯跡はその構築方法の新機軸から最終段階のものとしたのである。(註1)

しかし、窯業の場が光仙房窯跡群に移った時には、舞台窯跡群で最後の1号窯跡構築法が群形成の第1歩となり窯体利用の舞台窯跡III群の窯業光景が展開し、それが光仙房窯跡群の最終的に残された景観である。光仙房窯跡群内における形成過程は重複の連鎖による不明部分が多く、詳細な連続性を追うことはできない。また同時操業の単位の把握にも大きな障害となっている。よって窯跡構築及び操業の順は、調査時で確認した切り合い関係による認識以上の見解を持っていない。窯跡群全体としては、8号窯を介在させ明瞭な切り合い関係のない南北二分配置される北側群の1号・2号・3号・4号・5号窯跡と、南側群の6号・7号・8号・9号・10号・11号・13号窯跡に大別される。この群形が意味するところは明らかではないが、窯体長・壁高等など規模は南側群が勝り、その形態からも北側群に先行すると思われる。また、出土遺物の総体的比較からは7号・10号窯跡などの环類は北側窯跡群のものより器高がやや高く、窯跡群の中では初発の8号窯跡に、さらには先行する舞台窯跡群の环類計測値分布に近い傾向が窺われる。概略では南側群の操業後に北側群に窯業が展開されたと考えられる。南北両群の切り合い新旧関係は次のようである。

(旧) 8号 → 11号 → 13号 → 10号 → 7号

…6号 (13号) ..... 9号 → …3号 → 2号 → 4号 → 1号 (新)

…5号 →

## 2. 窯構造

光仙房窯跡における窯跡を特徴づける点は、1つには縦坑掘り抜き式とも言うべき地下式窯窓の築窯方法である。これは、先行するであろう舞台窯跡群から引き継がれた方法である。2つには群様の放射形状にある。前段階で操業していた窯の前底部をほぼ同一の起所に継続して築窯がなされた結果である。個別縦坑からの築窯労力の省力化が図られたものであろうか。3つには窯の内部構造に見ることができる。窯構造の特徴は燃焼部両壁に設置された石材と一対の横孔で、これは燃焼部の天井に関わる施設と考えている。しかし、この施設が窯跡群成立当初の6号・8号窯跡の段階から存在していたか否かは不明である。燃焼部の天井については、半地下式・地下式の窯窓であっても存在の有無が問題になろう。光仙房窯跡の掘り抜き天井範囲は煙道孔を除く焼成部位に限られている。調査では燃焼部・焚口・前底部などには天井施設を想定できるような焼土塊・粘土及び地土の崩れの痕跡はなく、少なくとも天井は常設的（例えば焼成部掘り抜き天井の延長部等）な形態ではなかったと考えている。燃焼部から焚口部にかけての部位は窯操業の一連の行程を考えた場合、窯詰めや窯出しに際しては開口部の大きさにある程度の広さが必要であろう。窯詰め終了後、この部分に何らかの施設的な手が加えられたとしても窯出し時には取り扱われる可能性は高い。操業の度にこれが繰り返されることになり、当然最後の操業窯出しの後、廃窯時点ではこの部分の構造物は存在していないことになる。

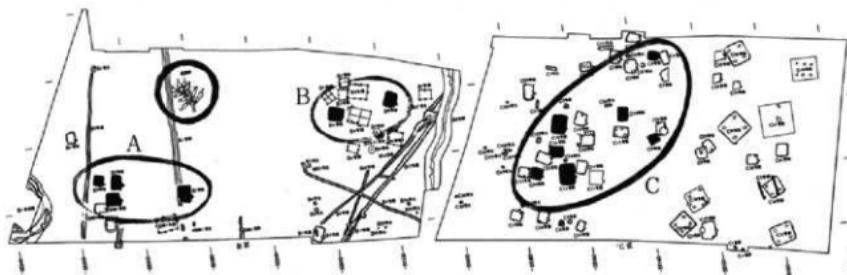
最近の精緻な窯跡調査の成果では、燃焼部位の壁面や床面などが受けた被熱状況を焼成部状態との比較検討によって、燃焼部の天井は開放とはいえないまでも焼成部とは異なる天井の存在が指摘報告されている。所謂仮設天井である。石川県南加賀郡林タカヤマ2号窯では、焼成部両側壁床面に構築材が打ち込まれ、その上位壁面には横打ち込みの構築材が残されている。横打ち込みの構造材は燃焼部寄りにも検出され、これらを骨組みとする簡便な天井が想定されている。（註2）また、埼玉県大里郡寄居町桜沢窯跡では、操業が壁面の崩落によって中断されたと考えられている第1号窯跡で焚口部底面中央に径10cmの穴が穿たれており、周辺壁際に塊状の炭化物が浮いた状態で検出されていることからこれらは天井架構材にあたると考えられている。（註3）

光仙房窯跡群には前述したように、ほとんどの窯跡について燃焼部位での共通した施設が認められている。燃焼部の両側壁面には多寡はあるもののほぼ例外なく礫（設置痕跡も含む）を用い、最も焼成部寄りの左右側壁礫の上位に断面蒲鉾形の横孔一対が穿たれるが、孔の下縁と礫の頂部が接することはないようである。焼成部に架かる掘り抜き天井の縁とこの横孔の平面的位置関係ではほぼ一致する。横孔埋土はほとんどの場合、汚れの少ないLoam粒層で満たされているが、いくつかのものには少量の燒土粒が混在し孔面に微かな被熱痕の認められる例と、小児拳大の炭化物が遺存した孔が確認されている。焼成部に限定される掘り抜き天井と燃焼部から焚口にかけての部位を考慮すれば、横孔は燃焼部の仮設的天井架構に關係する施設と考えられ、側壁礫もまた補強材としての機能と同時に天井架構に共していた可能性が高い。以上の状況からやや想像にすぎるが推定的復元を試みたいと思う。惟1例ではあるが、断面蒲鉾状の横孔に検出された炭化材の存在からは、左右の壁に渡された丸太縦半截の構築材が想定できる。横孔は一対のため、焚口に向かっては壁面補強材ともなっている礫を受けとして材をさし渡して天井の骨組みを作る。骨組みには粘土等を塗布すると思われるが、直接炎を受ける下面は予め粘土で巻き込んでおく必要があるかも知れない。孔内の被熱度合いの弱さは構築材の周辺を目地止めが施されたためと思われる。横孔の床面からの高さは各窯跡で異なっているが、これは各窯跡焼成部天井高に合わせたもので、仮設天井との段差を作らないためであろう。また、一対孔である理由は壁面の強度を保つためと考えられる。焚口部へは徐々に天井を低くして絞り込まれる形

状が考えられる。焼成部と燃焼部との境界部にはさほどの細まりが無く、この狭められた焚口は開閉具合を容易にし窯体内への必要な火勢・温度操作を可能にしたと思われる。(註4)

### 3. 須恵器工人関連施設

光仙房窯跡群須恵器工人に関わると考えられる工房や住居施設としての遺構群は、所謂“ロクロピット”状小穴や粘土貯蔵用と想定される土坑を備えた住居跡と、出土遺物から窯跡群と同時に考えられる住居跡群である。(第95図) それらはおよそ3群(A～C)に分かれ、窯跡群のA群にはロクロピットと思われる小穴を南壁際に備えるB南1号住居跡と粘土貯蔵土坑のB1号住居跡がある。東C群の2軒は工房的な要素は見られない。さらに東方C群にはC15号・C16号・C18号住居跡などロクロピットを備えた比較的大型な住居跡がある。全体的配置からは舞台窯跡群に見るような集合性や規則性は無く、窯跡群から窯業的協業体制とは合致しない景観となっている。窯跡操業の時間経過による居所の移動とも考えられるが、出土遺物からは時間差は捉えられず当初からのほぼ一貫した配置と考えられる。このことは、11基の窯跡を擁する舞台窯跡における工人施設の一一所繼続性が傍証となろう。舞台窯跡における統一的企画性の強い工房・居住施設配置で推測される結果的協業体制からは、かけ離れた体制のように思われる。しかしそれは、舞台窯跡での6軒を1単位とした協業的組織が核構造として内包する室内完結型労働形態(註5)がより明瞭化されたことによると考えられる。舞台窯跡群廻窓と光仙房窯跡群の開窓に至る隔年のごとき時間の経過を如実に示すもので、そこには既に、時に応じて離・集を前提として行う協業体制が存在していたことを窺わせる。10世紀代に入り顕在化する個々工人単位(家族的小集団)的規模での須恵器生産は古代後半期の地方的・地域的窯業生産体制の実相を両窯跡群の工人関連施設のあり方にも探れるとすべきであろう。(註6)



第95図 光仙房窯跡窯跡関連遺構図(黒塗りは当該期の住居跡)(1/800)

(註1) 「舞台遺跡(1)」「第4章 成果と課題 1. 須恵器窯跡について」 岐阜県埋蔵文化財調査事業団 2001

(註2) 「林タカヤマ窯跡」 小牧市教育委員会 1999 但し本文獻は直接ではなく「須恵器窯の技術と系譜 発表会旨」 窯跡研究会 1999 によっている。

(註3) 椎間孝志「桜沢窯跡」 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994

(註4) 土器作り研究会「須恵器窯焼成実験報告—光仙房窯跡須恵器窯を利用として—」『研究紀要』18 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 焼成実験での窯業元に基づいた推定である。

(註5) 「舞台遺跡(1)」「第4章 成果と課題 2. 須恵器工人関連施設」 岐阜県埋蔵文化財調査事業団 2001

(註6) 小規模須恵器生産の例には前橋市上西原遺跡に見ることができる。焼成部を2ヶ所に持つ小規模な須恵器窯は集落内での自給的生産と考えられている。「上西原遺跡」群馬県教育委員会 1999 但し「自給的生産」の語意については須恵器工人が集落構成員として内存的な存在であるかの検討が必要であろう。

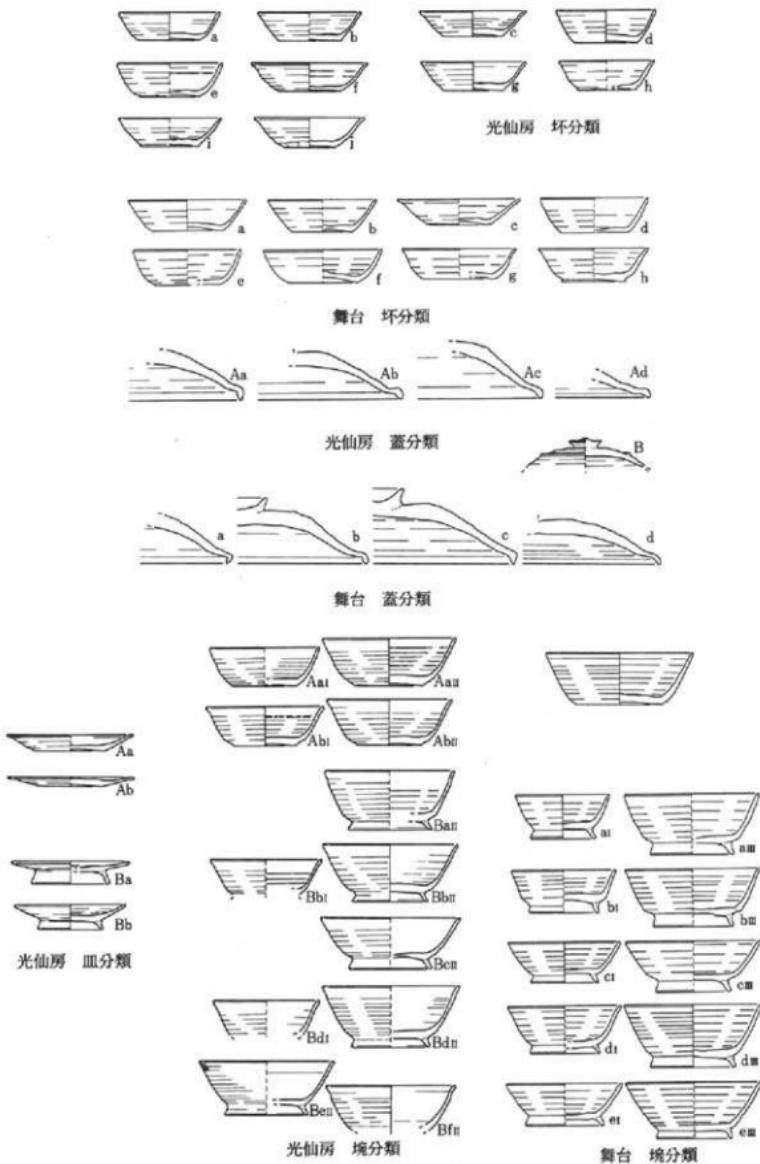
## 第2節 光仙房窯跡群の須恵器とその年代

本報告による出土遺物については、計測値による大小(法量)、外傾指数、浅深度などの分析から見た諸傾向は、個別窯跡単位や群全体を通して私には序列としての差違・変化をそれらの中にとらえることはできなかった。一般に、計測値(法量)の変化や形態の変遷はその程度にもよるが時間差が現れると考えられている。窯跡出土遺物には灰層の上下や複数床面からも遺物の形態・計測値(法量)の変遷が追求されている。先に報告した舞台窯跡群では、窯跡の重複によって時間の推移は十分に認識された状況であった。しかし、遺物に関しては形態・計測値の変化・変遷は明瞭ではなく、そこでも計測値の属性に時間幅はとらえがたかった経緯がある。舞台窯跡で行った出土遺物に対する器種毎の類型化分析作業からは、各類型の一部が窯跡全体を通して複合的に存在することが認められた。結果、「…操業窯には常に複数の工人の手になる製品が窯詰めされ、…窯跡群の存続はその成立から終焉まで一系の工人組織のみ関与しており、土器の形態はその構成員各人の“くせ”が継続する期間を超えて、明確な土器型式変遷がとらえられない時間幅であることが考えられた。」(『舞台遺跡(1)』2001)とせざるを得なかった。その状況は光仙房窯跡群でも同様であり、遺物変遷の動静は両窯跡群をそれぞれの単位とした大枠での比較を経なければ現状では何らの活路も見いだせないと思われる。但しこのことが、計測値に基づいた遺物の変遷が各窯跡群の中に存在しないという意味ではない。私の変遷探索のための方法や分・解析能力に問題があろうことを認識した上でのことであり、窯跡重複関係からみた変遷に対し整合的な理解ができなかつたためである。

### 1. “くせ”(作風)としての類型

光仙房窯跡群出土遺物の器種別類型化は舞台窯跡群での試案に基づいたものであり、計測値による数値比などによるものではない。類型化は器種毎の個体形状からみた類似群の括りという極めて主観的なものであり、形態上の大まかな特徴によっている。先の舞台窯跡群出土須恵器の器種別類型化はそのぞれの工人の持つ“くせ”(作風)とも言うべき器の型(形態)から個別工人の抽出をめざしたもので、窯跡群操業には複数の工人がほぼ一貫して携わっていたことが想定された。ただ、試案段階では坏焼の類型に一部不分明があり今回それを修正した。光仙房窯跡群の坏 f・g・I 類型は舞台窯跡群坏 R 類型を明瞭にしたものである。同様な意図をもって行った今回の光仙房窯跡群での分類作業で得られた須恵器個体別差異の類型化は舞台窯跡群で試案したそれと酷似するものであり、むしろ類別に設定された須恵器からは舞台窯跡群の工人たちがそのまま再現されるかのようである(第96図)。分類については第3章第2節に触れたので参照願いたいが、類型化で得た結論は、舞台窯跡群の工人集団はほぼその構成員のまま光仙房窯跡群の操業に携わった蓋然性が極めて高いことである。

舞台・光仙房の両窯跡群で生産された須恵器が同一の工人集団によるものとすれば工人系列における器の形状変化・変遷を追うことができる。さらに、個別工人の手作業段階の変化変遷をも解明できる可能性がある。しかし、本書現段階では類型毎の変遷を解明するに至っていない。時代の流行相(編年式的段階設定)と、工人あるいは工人集団の内的な形態・形状変遷による個別変化の関係はいずれの側に重きを置くべきであろうか。工人個人または一系工人集団製作の須恵器に表れ、個人(集団)に起る内的な変化幅と時代(時期・段階)の変化は現状の当該期認識年代及び型式変遷とどのような関係を示しているのか。そしてどのように捉えられているのであろうか。遺物のあり方がかなり複雑な消費遺跡では重複関係などからむしろ比較的簡単に答えが出されているかも知れない。生産跡遺跡ではどうであろうか。時代的変化の根拠としては光仙房



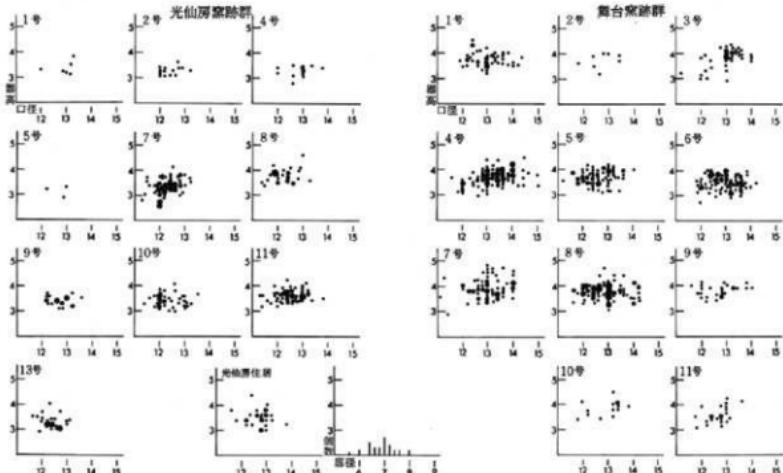
第96図 光仙房・舞台窯跡遺物分類図（1/6 但し蓋分類は1/3）

窯跡群における皿（A・B）・耳環など新器種の出現、各器種内における類型の増加（坏J類・塊Bf類）は舞台窯跡群から光仙房窯跡群への時間推移を示すものであることはほぼ間違はない。一方、内的変化幅の要素として、光仙房窯跡群の1号窯跡には坏類で底部回転糸切り後底部と腰部にかかる縁辺に手持ち箒削りを施す一群がある。1号窯跡は群中最も後出段階の窯跡に属するが、一般的に見て回転糸切り後の再調整に箒を使用することは須恵器製作上の技法では古式と考えられている。しかし、箒削り技法自体は当窯跡のみならず当該期では例えば、須恵器蓋の天井部には通常に施される普遍的技法である。先行する舞台窯跡群もすでに糸切り無調整であり、坏類底部回転糸切り無調整をもっぱらにする光仙房窯跡群の須恵器成調整技法上では回帰現象ともいえる。ここでは、窯跡群の操業に集団内部から新人工人の参入が想定でき、箒削りは彼の須恵器製作技術の未熟さによるものというような理解も可能である。そこには窯跡群段階での時間的推移は当然窺われるが、少なくとも群馬県内においてはこの調整法が当該期から後代への継続性はない。したがって異系譜工人参入などの新世紀的現象を考慮する必要はなく、局所・単発的な成・調整技法と見られる。対して積極的な解釈では、底部小径化の時代指向への先駆け的な処置ともとれるが、いずれにしても窯跡群の間断のない形成過程や成立状況を勘案すれば、少なくとも光仙房窯跡群ではこの箒削り技法の存在をもって「段階」や「画期」などの大きな時間の区切りを設定する根拠にはならないであろう。

## 2. 計測値分布

舞台・光仙房窯跡群それぞれでは窯跡単位のみならず群のなかでも計測値による変移の動きはとらえられなかった。窯跡群単独の中での須恵器自体には少なくとも段階的設定に相当するような時間幅が存在していないのではないかと思われる。ここでは二窯跡群の各窯跡から得られた坏類の口径と器高の計測値分布を比較して変移の動向を確認したい。（第97図）

舞台遺跡では、口径は窯跡全体を通して11cm後半から14cmまでの間にありそれらを上下する資料は数少な



第97図 光仙房・舞台窯跡群坏類計測値分布図

#### 第4章 成果と課題

い。13cmを中心にして12cmと14cmへほぼ均等分布がある。器高ではもっとも分布の集中する3.5cmを中軸に見立てるとやや上方の4cmへ偏っている。

光仙房遺跡での口径は、12cmから13cmの間に分布の中心がある。13cmを頂点に12cmへ分布が傾く。器高は3.5cmを中心にはすれば8号・11号窯跡を例外に他窯は3cmへ寄っている。

底径についても舞台遺跡が7~8cmに中心があるのに対して、光仙房遺跡のそれは7cm寄りに数量を増やしている。口径・器高の計測値からは舞台窯跡群にくらべ光仙房窯跡群の坯類は小型化への変化が見られる。須恵器変遷における現在の研究視点では両者間に明瞭な時間軸が想定され、舞台窯跡群須恵器から光仙房窯跡群須恵器へと時間推移していると捉えられる。したがって編年の段階設定も可能と考えられるがしかし、同類型の中にも大小の変異があり、両窯跡群の遺物を個別無作為で対照したとき、計測値による振り分けは困難な場面も多いと思われる。

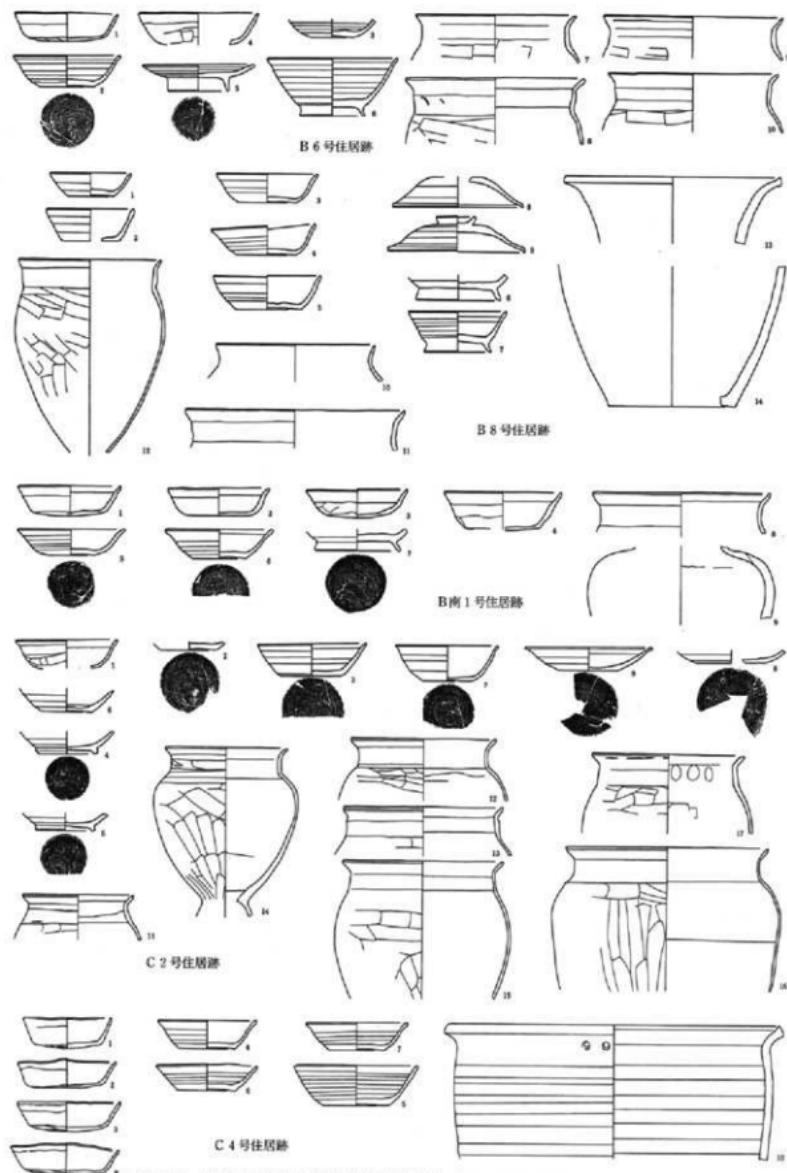
#### 3. 年代について

前載「舞台遺跡（1）」では開窯・操業・出土遺物などの年代についてまったく考定できず、9世紀前半から下っても中頃とまだ漠然とした思いのまま年代観を記してしまった。今日に至るまで私に年代比定の方法や根拠には当時からなんらの進展もないが、当該期須恵器研究再考や進展のきっかけにでもなればと、あえて年代の推定を試みたい。

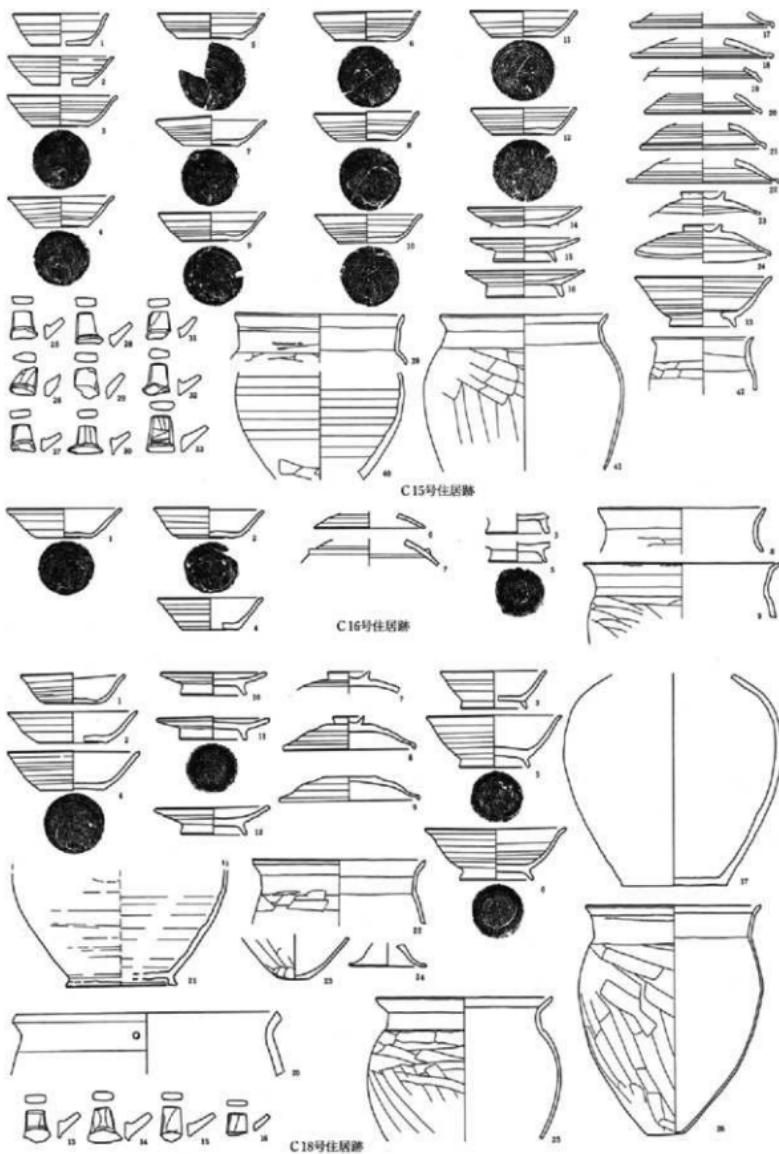
#### 「コの字」壺からの年代推定

群馬県内の奈良時代後半から平安時代の前半にかけての土器様相、とくに須恵器は編年的な分析分野でも土師器との共伴資料としての地位を脱してはいない。消費地集落跡を中心に進められている土器研究の現状では、体系的な須恵器に対する取り組みに限界を感じられる。一方当該期の土師器は多方面から精力的に研究が行われている。「コの字」口縁壺（以下「コの字」壺）については、その出現から終焉に至る段階的形態変遷が模索され、これを中心に据えた分析的論考は未だ見られないが、県内の平安期土器編年に重要な指標になりつつある。「コの字」壺の段階的変遷を示したのは今から27年前、高橋一夫氏の「国分期土器の細分・編年試論」が最初であろう。当時この論文は汎国内的地域で古代後半期土器年代の指標になっていた灰釉陶器の年代観に、大幅な修正を迫る東国からの騎手であり研究者に強い印象を持って受け取られた。（私にはだいぶ後になってのことだが）改めて高橋氏の「コの字」壺の変遷8分類をみても、現在の研究段階とはさほど違和感もなく、分析視点の高さが知られる。この論文で付与された年代観もまた灰釉陶器の研究の進展に伴う変動はあるもののこれもまた、大きくは乖離してはいないといえよう。（註1）

年代的な根拠を持たない光仙房窯跡群および舞台窯跡群の須恵器については、県内研究者による「コの字」壺の現時点での編年的位置付けの研究成果を援用しつつ年代推定を試みたい。群馬県内の「コの字」壺は桜岡正信氏によって継続的に追求が成されており（註2）、最新の論述では、「愛宕山遺跡」の「愛宕山遺跡第4号住居址出土土器の再検討」がある。県内「コの字」壺の黒帯14号窯式の灰釉陶器及び皇朝十二銭「富壽神寶」との共伴出土事例の検討から“完成期に近い「コ」の字状口縁の土師器壺の年代も、少なくとも9世紀第1四半期からあまり下らない時期が想定されるのである。”とする。従来、群馬県内においては「コの字」壺は9世紀中頃という年代観が一般的であったが、黒帯14号窯式をはじめとする灰釉陶器の実年代についての諸研究に伴って、9世紀前半第1四半期に限りなく近く考えられているのが県内における最新の研究状況であろう。（註3）



第98図 光仙房窯跡関連住居跡出土遺物(1)【光仙房遺跡(集落編)】より転載 一部改変 (1/6)



第99図 光仙房窯跡関連住居跡出土遺物(2)「光仙房遺跡(集落部)」より転載 一部改変 (1/6)

「コの字」壺そのものは両窯跡群から直接には見いだせないため、手がかりは光仙房窯跡群遺跡内の当窯跡で焼成された確率の高い須恵器と「コの字」壺共伴の堅穴住居跡である。遺構・遺物の詳細は別巻（集落編）を参照されたいが窯跡群との関連については前項で述べたようにロクロビット状の小穴を持つ住居跡があり窯工人の工房、居住施設の可能性が高い遺構の一部を含んでいると考えられる。それら遺構の中には窯跡須恵器の焼台として使用された瓦と同形態の斜格子叩き目を持つ瓦類が検出されており、B 6号・B 8号・B 南1号・C 2号・C 15号・C 16号・C 18号住居跡を対象とする。（第98・99図）器種は壺・皿・蓋・塊類を主にし、その形態や胎土の肉眼観察ではいずれも光仙房窯跡群と考えられる須恵器として良い。また、C 15号・C 16号・C 18号住居跡の天井部に凸帯を巡らす蓋形態や耳环耳部は窯跡出土遺物にもみられ、両者の遺物構成系は時間的併存の緊密性を高める左証になる。ただ、壺類など主要な遺物は舞台窯跡群の須恵器とも酷似するため岐別する必要がある。壺類の口径・器高計測値の分布を両窯跡群の傾向と比較した場合、口径は12cmから13cmの間に集中し、器高も3cmへ偏り、舞台遺跡の口径14cmへの分布領域と器高4cmに偏る傾向との比較では、より小型化傾向の光仙房窯跡群の壺類に近い。底径もまた7cmを頂点に6cm大のものが多く底部の小量化が進んでいる。（第97図）従って、これらが光仙房窯跡のものである蓋然性は高く、光仙房窯跡群の須恵器の年代を、共伴する「コの字」壺の年代観から9世紀第1四半期頃とすることができる。

#### 灰釉陶器からの年代推定

光仙房遺跡C 18号住居跡からは原始灰釉または初現期と思われる灰釉陶器が出土している。（註4）産地での同定を得ていないため定かではないが猿投古窯跡群黒釜14号窯式期ないしは井ヶ谷78号窯式期相当の短頭壺下部となろう（第98図C 18号住居跡21）。底径13cm、胴部最大径は25cmを測る。胎土は灰黄色の高密度で、堅敏な焼成は外面灰黄褐、内面純黄色を呈す。現存上端部には施釉か自然釉かは不明だがマグマ状黒褐色釉に灰綠色釉が濃い目に乗り、見込み部・底部にも鈍い発釉が見られる。胴部の器肉は薄く、倒側右回転の丁寧な窪削りを施す。高台は下辺の広い台形を成し縁辺は鋭い。形態類似資料は黒釜11号窯跡の原始灰釉広口短頭壺に求められる。（第100図）黒釜11号窯の編年的な位置づけは、井ヶ谷78号窯式期とされ、井ヶ谷78号窯式期は黒釜14号窯式期古段階に一部並行する見解がある。（註5）これによれば須恵器工人関連施設の一つと考えているC 18号住居跡の共伴出土遺物には9世紀第1四半期を上限とする頃の年代が与えられ、窯跡操業と須恵器年代の一端をこの頃に置くことができる。



第100図 C 18住居跡出土灰釉陶器と黒釜11号窯跡の短頭壺 註5より一部転載（1/6）

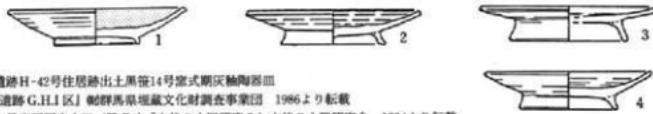
#### 皿器種について

光仙房窯跡の焼成器種の1つに皿類がある。舞台窯跡群の器種構成には未見の器であり、光仙房窯跡群の操業に入ってからの生産と思われる。無高台と高台付きの2種が存在するが群形成の最初期である8号窯跡

などからは検出されていない。10号窯跡または13号窯跡稼働場に出現する可能性は高いが高台付き皿のみで、無高台皿の存在そのものと両者が伴うのは9号窯跡に限られている。光仙房窯跡での皿器種は、7・8世紀代から続く盤類とは一線を画し別系譜のものとして考えたい。無高台・高台付の両者を一括りに皿としているが高台の有無は形態の上だけではなく口径計測値からも差があり、光仙房窯跡では器種として区別しておく必要があるかも知れない。県内における皿類は9世紀代から集落遺跡において出現するが、器種構成の主体的なものとはなっていない。その中でも無高台皿は少なく高台付き皿の形態が多い。近隣地域の武藏国では無高台皿が高台皿を上回っている印象を受け、上野国とは対照的である。皿の出現については時期・系譜とも明らかではないが、武藏国鳩山窯跡群では無高台皿が鳩山V期に見られ、下ってVII期には高台付皿が始源とされ無高台皿とともに定量生産に入るとされる。おおむねV期は8世紀第4四半期に、VII期は9世紀第3四半期頃に考えられている。(註6)

光仙房窯跡の高台付皿は、皿部が直線的で水平に近いBa類と、直線的でやや深みのあるBb類である。口径は14cmから13cmが大半である。ハの字状に開く径7cmから9cmの丈高な高台が特徴的形態で、とくにBa類は器高の2/3を占める。高台有無皿のうち出土量の多い高台付皿(無高台皿は2点のみ)の丈高な形態に視点をあて上野における皿器種の始源を考えてみたい。

皿類は灰釉陶器の生産開始に登場する新器種とされており、共膳具の主器種として量産される。県内では皿類の出現を灰釉陶器の影響の元に考えているのが一般的な傾向であり、発信地猿投窯周辺域の美濃須衛窯の須恵器生産なども同様な理解がされているようである。上野の灰釉陶器の搬入状況は、少ない出土資料ながら黒窓14号窯式期から認められ、大半は塊・皿類である。従って須恵器皿の素形は最大遡って黒窓14号窯式期にその範を求められよう。周知のように、黒窓14号窯式の形態的特徴の一つは低い角高台である。形状変化が各窯式の大きな指標項目の1つであるが、高台の高さそのものはさほど変化はなく後続する灰釉陶器皿類にも丈高な光仙房窯跡皿形態の変形とすることはできないであろう。灰釉陶器自体に須恵器皿の範を求めることが不可能とすれば灰釉陶器を含め皿の始源的発生へ視界を展開せざるを得ないが、須恵器・原始灰釉・灰釉陶器を巡る产地での複雑な様相は遠国上野からは理解しにくい。また編年・年代観など平城・平安都城消費地との活発な論議でもやはり傍観者としての位置から脱しきれない。このような現状を承知であえて模倣先を試行すれば、灰釉陶器誕生直前・直後の須恵器または原始灰釉陶器の段階である。(第101図)岩崎25号窯灰原出土の盤Bc(註7)とされる資料は口径14cm、底径8cm強、器高3cmである。形態は光仙房窯跡皿Bb類がこれに近く、計測値もさほどにかけ離れた物とはなっていない。この他、形状・計測値はやや異なるが、前出黒窓11号窯・美濃須衛3号窯(註8)などに類似資料が散見できる。それらの直接模倣に限らず新器種としての認識から皿生産が始まるとすれば彼の窯跡資料の年代観を援用し、光仙房窯跡の皿B類は800年前後を上限に考えられている井ヶ谷78号窯式期の後半期から黒窓14号窯式期が上野にもたらされ



1. 鳥羽道路H-42号住居跡出土黒窓14号窯式期灰釉陶器皿  
「鳥羽道路G.III区」朝鮮馬県埋蔵文化財調査事業団 1986より転載  
2. 岩崎24号窯灰原出土皿(盤Bc)「古代の土器研究3」古代の土器研究会 1994より転載  
3・4. 光仙房窯跡4号窯跡出土皿 Ba・Bb類(本書より)

第101図 灰釉陶器皿と須恵器皿(1/4)

るまでの間、9世紀第1四半期の頃に上限の年代を与えることも可能である。

以上、光仙房窯跡群及び須恵器に対し「コの字」壺・灰釉陶器・皿器種を根拠にして年代推定を試みた。それから9世紀前半の年代が想定でき、その上限を9世紀第1四半期に、光仙房窯跡群の操業期間を考慮しても9世紀第2四半期前半までの間に位置づけられるものと考える。「コの字」壺の段階的変遷の確認とその年代、原始灰釉陶器の当否と共に正当・確実性など超えるべき問題は多く、年代比定根拠の危険さを解消できないままである。皿類の出現については盤形器種との系譜的な関係の検証も未解決で、当窯跡の皿種に対する位置づけも手順を踏んだものではない。また、出現の時期についても近隣地域と大きくかけ離れてしまい検討されなければならない問題である。

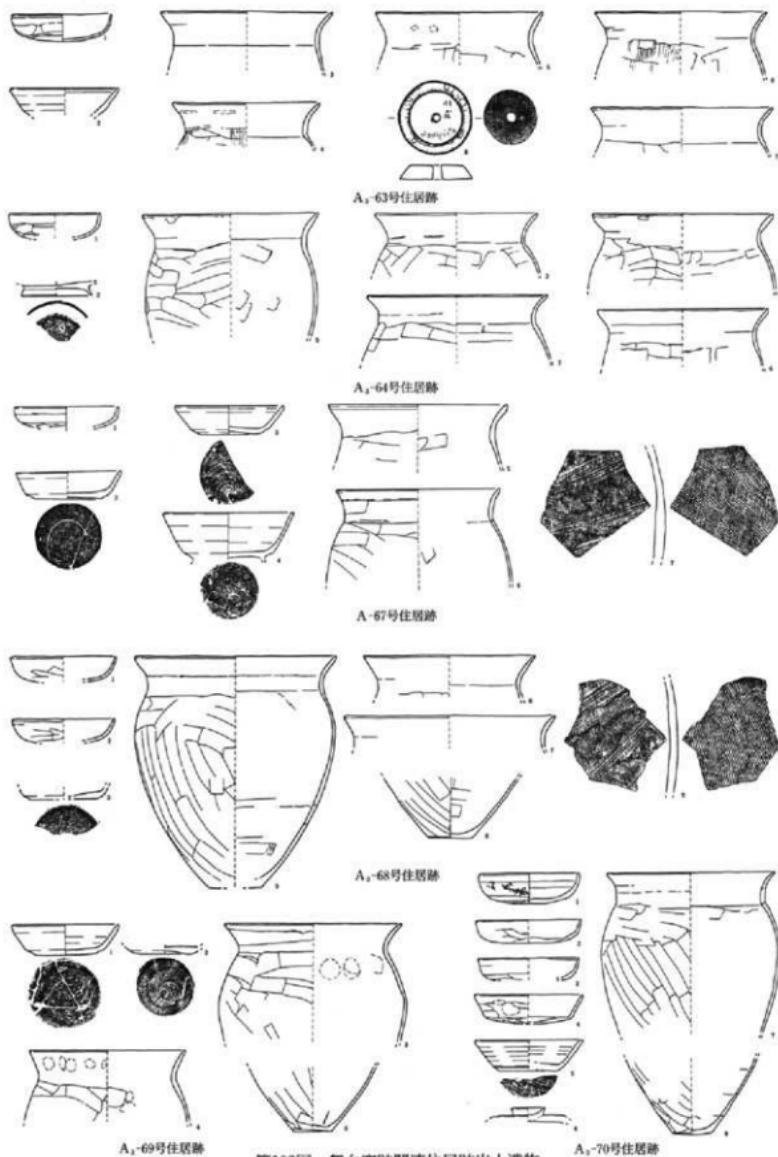
#### 4. 光仙房窯跡群と舞台窯跡群

光仙房窯跡とその須恵器の年代推定を「コの字」壺、井ヶ谷78号窯式期（黒帯14号窯式期）原始灰釉陶器、皿器種を手がかりに探ってきたが大凡、年代の中心を9世紀第1四半期とし、第2四半期前半までの間にあると考える。この年代観に基づいて舞台窯跡群の年代にふれたいが、年代比定については光仙房窯跡と同様工房・住居跡の出土遺物から追ってみたい。

舞台窯跡の工人施設は、先にも触れたように6軒を単位として窯跡操業期間内同時に存在した可能性が高い造構である。A<sub>3</sub>-63号・A<sub>3</sub>-64号・A-67号・A<sub>3</sub>-68号・A<sub>3</sub>-69号・A<sub>3</sub>-70号住居跡には窯跡の須恵器製品が少なく奇異に思われるが、生産品と工人の所有形態を示しているのか、居所移動の作法であろうか。窯跡産と考えられる遺物はA<sub>3</sub>-64号の2の塊底部・A-67号4の塊、A<sub>3</sub>-70号5、6の壺・蓋である。その他の須恵器壺類には腰部に強い差し込みがあり口・底径比の小さい形態上の特徴と、加えて底部に全面ないしは周辺に回転窓削りの再調整が施されることから窯跡資料より古く考えられるもので新・旧形態の須恵器が混在することになる。各住居跡とも土師器壺の遺存数が多く、いずれも「くの字」口縁焼の系譜で頸部の屈曲がゆるやかである。A<sub>3</sub>-68号の5、A<sub>3</sub>-69号の3などはいわゆる「武藏型壺」とされる形態で、土師器壺の大多数は底部丸味の残る形状である。（第102図）窯跡製品と考えられる須恵器を除く土器の組み合わせは県内年代観の現状ではおよそ8世紀後半代頃に比定される土器相であり、これら住居跡が工人に関連する施設としてよく、舞台窯跡の年代もまたとりあえずはこの頃におけるよう。

ところで消費遺跡での土器相はこのような複雑な状況を呈する例が多く、段階設定や年代の決定に混乱を招いている。とくに壺底部切り離しについては回転糸切り無調整と籠による再調整技法の混在に顕著である。本例のように生産遺跡と直結した状況での混在するという事実は、それが実体としての現象である可能性が高いとすることもできるが、消費遺跡自体のもつ複雑な属性はなお十分に考慮されねばならない。生産遺跡としての舞台窯跡群は、上野の古代前半と後半との須恵器製作技法上では、まさにそれが転換する瞬間に存在すると言うところにあり、その意義は大きいと考える。しかしながら上野全域に対しては、「窯」の使用から「回転糸切り」無調整技法の変革が、舞台窯跡での時をもって律することはできないであろう。国内の東毛・西毛・北毛のごとく地域分けが必須ともいえる須恵器生産の多様性を考えれば、少なくとも上野各地域の様相を明らかにしたうえでの検討が必要である。

光仙房窯跡群と舞台窯跡群の関係については、先行操業する舞台窯跡から光仙房窯跡への展開が即時的な継続とは考えていない。窯跡の内部構造や壺類に現れた計測値の差、皿類などの新器種の出現には如何ほどであれ両者には間欠的な形成過程があったと理解される。しかし一方、築窯方法の技術的な系譜と須恵器の分類類型の抽出によって、両者には同系工人または同工人が関わっている可能性を示した。このことの蓋然



性が高いとすれば、舞台窯跡群から光仙房窯跡群への時間の推移は一工人の工人寿命の年月の中にあり、両窯跡群の存続年限もその期間と考へることもできる。工人としての寿命は測るべくもないが、この間を30年あまりとすれば、舞台窯跡の稼働時期は光仙房窯跡の上限年代9世紀第1四半期からは8世紀第4四半期に、第2四半期前半を取れば9世紀第1四半期前半に位置づけられる。いずれにしても、舞台窯跡の成立から・光仙房窯跡群終焉までの期間が半世紀を超えることはないと考えられる。

ところで、先に述べた両窯跡群形成の間にある時間的・質的不連続性と、工人関連施設の分散化にみる変化を瓦の存在に求め工人たちの動向をたどってみたいと思う。光仙房窯跡と舞台窯跡はともに須恵器専焼窯であるが、両者の出土遺物の際だった相違の一つは光仙房窯跡からの瓦出土である。関連する工人の工房・住居遺構でも舞台遺跡のそれには皆無である。光仙房窯跡の瓦は窯部材や住居跡竈構築材として利用されているもので、それらは上植木庵寺城出土の瓦種と同系である。C18号住居跡出土の軒平瓦（註9）は同範が確認され同寺と工人組織の結びつきが浮上してくる。このことから、舞台窯跡群から光仙房窯跡群へ再編までの経緯には上植木庵寺への関与期間があったのではないかとの想定が可能になる。さらに、周辺遺跡での少量・小片の瓦出土状況とは様相が異なり、光仙房窯跡・住居跡出土の瓦は量の多さと完形度の高さから工人たちが瓦を持ち出せる先方との緊密さが窺われる。須恵器工人ならでは、瓦製作に携わることは想像に難くなく、瓦の入手先については生産窯跡から直接とも考えられる。しかし、出土瓦は他所からの搬入品であり、窯跡の年代より遙かに位置づけられなければならない。瓦そのもののからの年代的検討も必要となろう。また、住居跡出土手瓦の裏面は全面大画斜格子叩きが大半であるが、『集落編』掲載の当該期C22号住居跡出土瓦一例は小画正格子の単位叩きが施され、より古式に属している。このあり方からすれば、瓦の入手先は新旧の瓦が混在する環境と考えた方が自然であろう。そのような条件を満たすのは上植木庵寺を中心とした場所がふさわしい。工人たちは舞台窯跡群操業後の一時期、庵寺の何らかの動きに関わっていたものと考えられる。

須恵器工人の動向にはもう一つ触れておかなければならぬ事項がある。先述したが舞台遺跡に隣接して調査された三和工業団地遺跡からは、2基の須恵器窯が検出されている。出土遺物を実見する機会を得たが、遺物の形状は舞台・光仙房窯跡のそれに極めて近く、坪類底部計測値では両者の中間から底径の大きい舞台窯跡よりもやや近づく。（註10）舞台窯跡群存続期間内の派生的操業か、光仙房窯跡群の再編までの間を小規模生産体制で窯跡經營を維持していたものであろうか。なお、舞台遺跡E-151号・155号・172号などの住居跡（前出「舞台遺跡（1）」）は出土遺物や窯跡との位置関係から工人関連の施設の可能性が高い遺構である。

（註1） 高橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」「埼玉考古」第13・14号 埼玉考古学会 1975

（註2） 板岡正信「土器の分類と時期設定」「上野国分寺跡・尼寺中間地域（2）」財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987、板岡正信「群馬県内出土の埴輪土器について」「群馬県史研究30」群馬県史へんさん委員会 1989、板岡正信他「群馬県における灰釉陶器の様相について（1—消費地からのアプローチー）」「研究紀要」9 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992

（註3） 板岡正信「Ⅶ 成果と問題点 1. 愛宕山遺跡第4号住居址出土土器の再検討」徳江秀夫「愛宕山遺跡」徳江群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 「「の字」甕の口縁形態について、「前々段階」、「完成期に近い」、「完成期直前の段階」、「完成期」等の段階的な変遷を意味すると思われる「「の字」甕」の説明がされる。しかし、それぞれについての規定や、特徴の指標はなく明快さに欠ける。例えば、「完成期に近い」とする中唯遺跡1号住居の甕は3点有る甕のどの資料をさしているのだろうか。少なくとも、私にはよく「「の字」甕」とまさに「「の字」甕」そのものの2点としか認識できない。

「「の字」甕に限らず新たな形態が出現する場合、基本的に器種を同じくするものであっても（この場合甕）前代形態のものが、退化形態へ向い徐々に「次の完成形態へ変化していく」という考え方。対し、衰退する物は新たな物の出現によってその形態を保つおおよそ一代限りの存在であり、後代へ続く新種は完成形として突然に生まれるとする視点は成立しないであろうか。（何が完成形かは議論の要するところではあるが）新たな器種が出現後に変化の過程を踏むことに異論ないが、衰退する物と生まれ出る物の関係を一系の段階変遷として捉える視点に疑問を持つ。ややもすると、時間軸

- を得るために形状変遷の諸段階設定を行ってはいないだろうか。県内の「コの字」変遷過程の分析がなされる。
- (註4) 「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書—XIX—台耕地(II)」財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984・酒井清治「第2節埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館 1987 埼玉県大里郡の台耕地遺跡第61号 住居跡には「コの字」型に井ヶ谷78号窯式とされる灰釉陶器が伴う。共伴資料には光仙房窯跡群と類似形態の無合皿もあるが、底径は光仙房9号窯跡の皿A類の底径が7.8cmであるのと比べ6cm大でやや小径になる。
- (註5) 尾野善裕「馬11号窯発掘調査報告書」三好町教育委員会 1992 掲載資料の他に底径・高台の形態など類似するものがあるが、絶じてC18号住居跡出土灰釉陶器の器身より多少厚い傾向がある。
- (註6) 渡辺一「鳩山窯跡群Ⅱ」鳩山町教育委員会 1990、渡辺一「南北企業跡群の須恵器の年代～鳩山窯跡の年代を中心～」『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会 1990
- (註7) 齋藤季正「東海地方の施釉陶器生産一業投票を中心に」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3施釉陶器—』古代の土器研究会 1994
- (註8) 渡辺博人「美濃須衛古窯跡群調査報告書」各務原市教育委員会 昭和59年
- (註9) C18号住居跡の軒平瓦は「伊勢崎市史 通史編1 原始古代中世」伊勢崎市 昭和62年 掲載の上植木庵寺出土瓦型式で1551型とされている。
- (註10) 三和工業団地遺跡の須恵器窯跡資料については整理担当者平田貴正氏にご教授いただいた。

### おわりに

伊勢崎市教育委員会には、上植木庵寺関連と周辺集落遺跡の資料調査の便を再三にわたり図っていただいた。「伊勢崎地区須恵器窯出現の時代とその背景」に思いを巡らし、光仙房・舞台両窯跡群の須恵器がどのくらいの範囲に、どこに供給されたかを考えた。当初より両窯跡群から南方僅か1.5kmの距離にある上植木庵寺との関係が強く意識されていたためである。現在のところ庵寺関連の資料からは両窯の遺物は見いだせず、周辺遺跡で80余軒のうち7割を占める平安期の住居を擁する恵下遺跡からも、可能性の高い2、3点の須恵器を抽出したに止まった。このような傾向は舞台・光仙房遺跡内容も大同小異であり、遺物の多寡は窯跡を抱えるという遺跡そのものの性格の中に解消してしまうであろう。須恵器分布範囲の追求は伊勢崎市域のさらに限定された地域とはいえ、当該期の須恵器生産と流通の機構に関わっている。とりもなおさず、光仙房遺跡・舞台遺跡・上植木庵寺窯跡群成立の歴史的背景を考えるに不可欠な作業であるが、資料調査の不徹底さを懸念している。しかし、光仙房遺跡C18号住居跡出土の軒平瓦に上植木庵寺瓦との同范が確認され、上植木庵寺との関わりを考えるに重要な資料を得たことは、今後に若干の光明となっている。

本項を終わるにあたって、残された課題は大きく多岐におよんだままである。しかし、それらは私の能力を遙かに超えた問題でもある。本書と調査記録・遺物の限られた資料ではあるが極近い将来にはより詳細により明快にそれらが研究・解明されることを願っている。未筆ながら、資料調査に多大な便宜を賜った伊勢崎市教育委員会・同 須長泰一氏・三和工業団地遺跡整理担当の平田貴正氏に感謝いたします。

# 補遺編

## 光仙房遺跡出土瓦について

はじめに

整理作業も、貢立て、仕舞い込みなど終幕に近づいた頃、整理担当から古瓦を手がける機会の多かった筆者に観察視点などについての質問が寄せられ、やがて話は古瓦を分担し、一文を起し、報告に寄与せよとの依頼を受けることとなってしまった。その間、共通瓦の有無に關し、本遺跡より約1.5km南方にある伊勢崎市上植木庵寺出土の市教育委員会資料の実見・探査影の使用、また、同教育委員会が平成7年11・12月に実施した『上植木庵寺・上植木庵寺瓦室』2002の概報による教示など、同教育委員会と埋蔵文化財担当須長泰一氏には多大な便宜をいただいた。改めて感謝したい。「ありがとうございました。」と。

### 1. 出土瓦

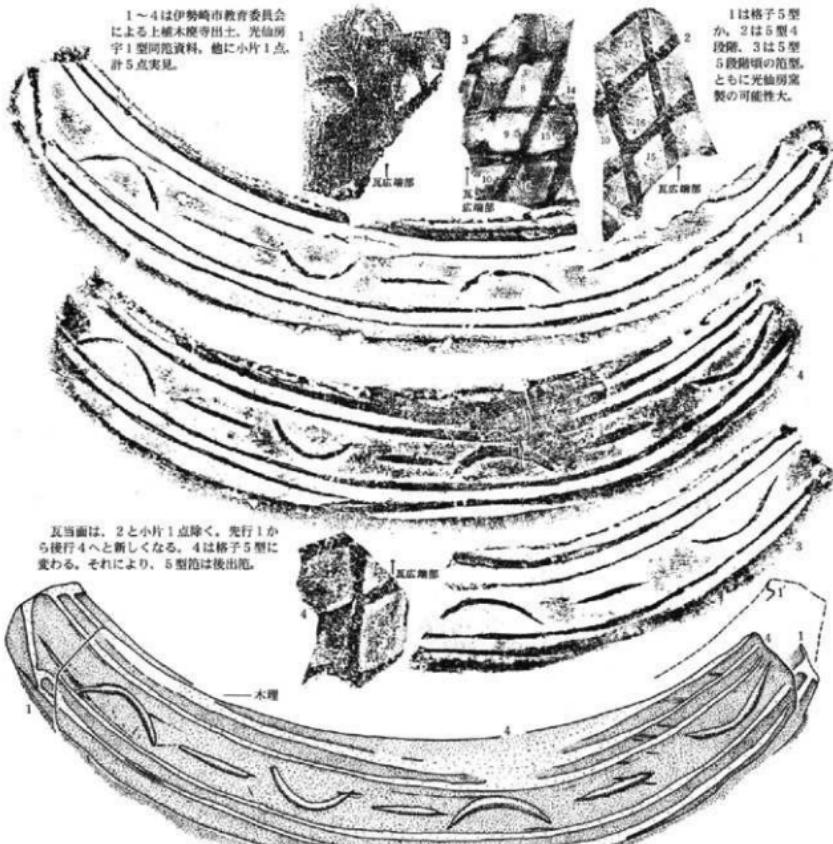
出土瓦は、窯跡編・集落編とに分けて整理が行われ、窯跡編では報告中に46点（第84～92図1～46、うち2点未見）・他に5点の女瓦大斜格子印片（未掲載筆者番号47～51）、集落編では報告書中に63点（第31～135図中、うち素文の23点未見）・他に12片接合後（15住カマド・18住No543接合）11点の女瓦特大斜格子・大斜格子印片、計125点を扱った。このほか整理当初の分別から外された少量が存在するようである。次に瓦類型を示すが、素文は一括の扱いで、格子印片は類似型でなく同範分類である。

光仙房遺跡瓦分類 番は「窯跡編」、集は「集落編」を、整は報告書作成のための整理を意味する。

- |  |  |
|--|--|
| 籠瓦   | 0。籠瓦の出土はない。  |
| 宇瓦1類   | 合計2。窯第103回を参照。集102回27は瓦当面端部。本来の瓦当面端部まで当たらず、広端部幅約30cmと推定。<br>集2（102回27・窯103回中）  |
| 男瓦1類   | 合計27。18および疑似10。回転台を使用した2枚割りで製作され、回転条痕あり。寄木痕不明瞭もしくは見えず。<br>窓6（3・18・19・20・22・23）<br>集12（66回11・12、94回63・64・65、97回11・12・14、103回29・32、105回37、106回39。男瓦素文か66回9、74回10、94回61・62・67、124回31・33、125回1、133回11の10点は報告図のみの判別のため疑問符付いた。）                            |
| 女瓦1類   | 合計1。格子印片1型。桶巻作で粘土板合せ目。1～2.2cm単位の桶寄木単位あり。同回広端部推定約33cm。<br>集1（118回17）  |
| 2類   | 合計1。未実見。拓影により、格子印片2・3型を起こす。桶巻作で粘土単位見える。同回長さ約29cm。<br>集1（53回26）   |
| 3類   | 合計3。B8住居跡に2/3個体あり、素文印の女瓦は存在する。素文印1型。同回広端部で約27.5cm。<br>窓1（12、疑似2）<br>集1（31回18）  |
| 4類   | 合計74。67および疑似5。格子印片4型を全面に伴う。表面布目痕は、やや細かい類に窓4・5・7・9・11・14・15・16・17・38・41・42・43・47・48・50・51、並の類に窓1・6・8・28・33・37・44、荒い類に窓10・13・21・24・25・26・27・29・30・31・32・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47は8窓87床・48は8窓86床・49は9窓136床・50は10窓186床少し上・51は10窓191埋土。） |
| 集24（31回17・18、80回B9、81回B11、87回5、88回7、92回51、93回54・55・57、94回58・60・68・69、97回13・15・16、98回17、103回30・33・34、104回35、109回15、120回14、133回16、18住カマド壁No947、疑似109回16、112回13、124回32、16住カマド壁No526、18住595壁No940の5点は小片と整理時間切れのため組合できず。） |  |
| 5類   | 合計17。格子印片1型を全面に伴う。窓では出土せず。製作台は凸面で寄木痕、部分的に見える。広端部幅は集104回35で30.7cmであるが、欠損の狭端部幅との差は少なうである。  |
| 集17（92回52、93回53・56・59・66、102回28、103回31、105回36、118回13、18住カマド壁No635、18住661壁No833、15住壁No838、18住231壁Noなし、18住15壁No958、18住307壁No939、18住111壁No934、15住カマド18住543壁No835・937接合。）  |  |

補遺編

1～4は伊勢崎市教育委員会による上植木庵寺出土。光仙房字1型同様資料。他に小片1点、計5点実見。



瓦当面1・3・4を4を基本に  
合成。右端は1の現状端部と、復  
元した端部1'。全幅33cm。

上植木庵寺字瓦例

33cm幅と4の約30cm幅の移行  
は、宇1型存在中にあり。上野  
宇瓦趨勢とおよそ一致か。

種量	標準例・描き起こしと観察摘要			
光仙房 字1型 窯0・集2				

集落出土の2点は、上植木庵寺例より範消耗があり後出。そのため、女瓦部の印は、印5型が施されたと推定される。この場合女瓦4・5類広端部幅は4幅で測定しうる4個体の幅が平均で29.2cmであるのに対し、5類の1点は少し押潰れの感があり、逆に後出例が寸延びとなるので、幅の大小は瓦当部との接合の際に調整したのであろう。

第103図 宇1型と上植木庵寺字瓦例

1:2

種量	標式例・描き起こしと観察摘要	種量	標式例・描き起こしと観察摘要
光仙房格子叩1型 窯0・集1	<p>集118図17を標識とする。上植木廃寺の創建瓦の一つ。7世紀中頃。おそらく新里村雷電山瓦窯の製品。叩目は、<math>6.2 \times 5.4\text{cm}</math>を計り、瓦面に木目見えず、団右上と左下細縦が木理方向。消耗量。</p>	光仙房格子叩2型 窯0・集1	<p>標式集53図26。左上、右下叩端部で幅7cm。同窯製か。</p>
光仙房格子叩4型 窯43・集24+5か	<p>▶先行標式集31図19上方叩端、右近離部叩4型1段階。</p> <p>▲後行標式集30団右は叩端、左下は端近し、木割れは目詰りか。叩4型12段階。</p>	光仙房格子叩3型 窯0・集1	<p>標式集53図26は2種の叩。上方叩端。格子目1・2に欠損。</p>
光仙房素文叩1型 窯0・集1+α	<p>標式集31図18。先端部側から明く。格子・平行叩消耗量見えず。上野では、浅い平行叩と9世紀中以降盛行。</p>	光仙房格子叩5型 窯0・集17	<p>後行標式集104図35。木割れ多く消耗量者で最末期を思われる。集落から撤在出土のため、5型叩を使用した後出の別窯跡支前構成は至近にある。工人集落は、本遺跡中か。</p>

第104図 女瓦格子1～5型・素文1型式一覧

範型式一覧 同范関係を得て次のように型式認定したほか、所見・推考を加えた。

**宇1型** 異なる部位であるが、消耗の近い2片が集落にあり、集102図27、窓103図中がある。窓103図は上植木庵寺例を回示した。範型は同図1・3・4の頃で新しく、当遺跡の2点は、後出窓の4より後出してある。範型の本来は同図4を中心とした複数個である。同図中段の描き起こし図のように幅約33cmとなり、後范型の同図4では、約30cmの狭幅形となっている。同范型は上野国分寺・同尼寺にある。模式は集102図・窓103図中と補足として窓103図1・3・4。なお女瓦部については4・5型参照。

**格子卯1型** 梯巻作り、4分割による製作時、同軸台左回転、左上方から叩かれている。格子目右上、格子1目、見えず。集118図17の卯は新鮮で、格子目距離初期である(以降範型とよぶ)。上植木庵寺に同范、同范組合していないが新里村新宮古瓦寺地に類似の女瓦がある。集118図17は、白色粒を多くまじえ、やや輕い前の個体のため、新里村雷電山瓦窓の製品と推定される。模式集118図17。

**格子卯2・3型** 階53図26の一個体に2種の卯印が刻まれる。整理終了間際のため取り出しができず、拓影函をトレスして確認した。表面側面には桶の奇本状の単位があり、梯巻作りらしい。もとに回軸台の横方向から叩かれている。この範型は、叩き板の表裏に削られたか不明ながら、組で使用されることがわかつらしく、上植木庵寺・同瓦室・寺井庵寺に同范、同范組合していないが、新宮古瓦敷地、川上遺跡に類似の女瓦がある。上植木庵寺瓦窓製品か。各模式53図26。

**格子卯4型** 窓跡出土瓦女の主体資料である。卯板は木割の先端しづら材が用いられていたため、拓影を介し、現物を見ながらエンビクトレーシーし、同范確認に努めた。大斜斜は、格子目内の深さ、格子柱目の形状、高底・粘土の目詰まり、粘土の付着、さらには叩打音での格子目が受けた大小変化など様々な判別困難現象が認められた。当初、複数範型が予測されていたが、格子目底部の凹凸形状・木割位置、卷子目の欠損部を把握することにより索引で大斜斜卯印が同一範型であることが分かった。しかし卯と呼ぶには板端部の壁い込みが弱く、板中央部を用いた押打行為もある。叩われたと推測された。卯は瓦扶端部から叩かれたが、その速もあり、決まり事ではなかったようである。窓跡の変遷は、窓跡出土瓦を中心に順序立てで試みた時間的都合で住居跡出土個体の統てにはおよばなかつたし、個体変遷には届かず、16段階分類に留まつた。段階番号はおよそ次のとおりである。1-窓14-37・47、2-15-(3)18・19、3-6、4-31図17、5-43-45-50・51、6-5-11-18-26-38-41・42、7-44、8-8-28、9-7-17、10-24-31、11-1-49、12-25-29-30-33、13-32-39、14-27-35、15-4-16-26-46の順に新しくなり、窓4-9-10-13-48-49不明であった。この中に1段階目は、格子目番号8-15・3-9-16などに浅い木割れが、4段階では格子目番号21に欠損が、5段階では番号10に欠損、番号15にヒビが、6段階では枚目を含む部分流しが、7段階では番号15ヒビが前出とは別に、番号21ヒビが、8段階では番号14ヒビが、10段階では番号15ヒビが、14段階には番号9の觸部の一部が丸くなり、16段階では番号15ヒビが欠けた。さらにこのほか全体に数枚のヒビが発達して消耗範型となっていた。上植木庵寺窓103図2は、4段階に、103図3は5段階頃と觀察された。この頃は床・屏平面など差接樂闇通面出土位置と合すると新しい側から、9窓床は11段階頃以前に、7窓焚口床は9段階頃以前に、8窓廊前は8段階頃以前に、13床床は7段階以前に、10床床は6段階以前にと云う推測過程が導き出され、調査・整理担当に問い合わせたところ、その頃は、窓跡変遷順位によって結果が得られた。この作業での未答点は、4窓床に5-6・8が8段階以前であり、古材瓦であろうと推測された。総論的に云えば、換業過程の中で瓦も焼造されたと考えられた。模式先行範例は住31図9の背面、後出窓例30。

**格子卯5型** 紛糾出土を主体とし、窓跡の出土はない。宇1型と同范関係の得られた上植木庵寺弧輪互違文字瓦(窓103図1~4)の背面には2種の卯があり、1種は4型(窓103図2・3・背面)、いま1種は5型(窓103図4背面)である。上植木庵寺例宇1型には窓型の消耗に新古の関係があり、5型範型で叩かれた個体の後出しているため、4・5型の関係は4型が先行し、5型が後行したと推測される。その上植木庵寺例同図4は5型の中ではやや後出範型で、範型周縁部の消耗減絶や木割れが発達している。窓跡出土例は初期から消耗までの個体を含む。窓型の過程は格子目番号6に次落部が生じる。模式は、先行範例93図53、後行範例104図55。

**素文1型** 素文側面の全部を照合していないが、素文印が存在するので明示するため窓104図に回示した。模式は集31図18であるが、新・古範型が明確にできなかった。同図でも挟端部側から連打する様子が認められる。範面は木筋が現れ、荒れた状態となっている。

## 2. 光仙房窓跡出土瓦の存在意義

出土瓦を整理し、造瓦背景をさらに知りうるようになったことは、瓦そのものの存在なくしては考えられなかったことであり、光仙房窓跡出土瓦の存在意義は大としなければならない。出土瓦は、9世紀初頭でありながら全面叩きを施すという上野の造瓦技法中、異例である。異例技法は、軽質の生地性質に起因するばかりではなく、須恵器製作を成しうる工人であればありうる技術背景も加わるであろう。格子目印は東毛地域に広がる上植木・雷電山瓦系の一端にあることは当然であるが、同系譜の瓦群中、上野・北武藏の国を越えた、群馬・埼玉県の瓦研究者のいう米字状叩瓦が8世紀代第2四半期に盛行してある。その米字状叩印は、米字の子葉を除くと卯4型に類似すること、胎土も白色粒を含む軽質であることに光仙房窓跡瓦と脈絡があり、直接系譜と考えられ、從前から米字状叩瓦の製作地は、東毛地域で陶土の存在しない地域としてきたことに一層の推測が可能となった。つまり上植木庵寺瓦、光仙房窓跡、柏川の支谷で8km北方にある雷電山瓦窓跡群を結ぶ地である。さらに同瓦系譜中、上野国分寺瓦窓の笠懸窓跡群が生まれる前代工人の所在地が不明であった点も、ほぼこの地帯と考えられ、合せて東毛地域で8世紀後半に極軽質の瓦が少ないと、および同系譜は素地合成に卓越した技術を有していたことも加えておきたい。

(1) 大江正行「窓跡」『群馬県史 通史編2 原始・古代』1991

(2) 「瓦類」『史跡十三宝塚遺跡』1992は堀町所在。推定佐野都寺。8世紀終末瓦主体。11422点中、極軽質瓦は3点である。

# 写 真 図 版





光山房遺跡全貌(北上空から)  
前也始高第12层から軟骨灰に形成されている。骨骼は逆側的に重複しており、地表面近く深窓と稱せらるたことが想定される。窓跡の周辺には灰原が形成された痕跡はない。

## P L 2



### 1. B区全景(上が南)

画面右は窓跡群。左は堅穴住居と掘立柱建物群。左端は南北走行の大溝(B8号溝)。窓跡群の南西部にも一畠の堅穴住居跡がある。両堅穴住居跡群とも須恵器工人の工房ないしは居住施設に関係すると思われる



### 2. B区東半(北から)

堅穴住居跡と掘立柱建物跡が混在する地区。  
画面左下方には上幅約7m、深さ3mの大溝(B8号溝)が南へ走り、左縁辺には道路状造構が沿う



1. 1号窯跡(西より)

2号・3号・4号・5号・8号の各窯跡と重複し、それらのなかで最も新しく構築された窯跡である



2. 1号窯跡全景(西より)

焼成部奥半部に設置状態で梢円扁平な石使用の焼台約40個が残る。石材は粗粒安山岩で西方の柏川で同種石材の採取ができる

P L 4



1. 1号窯跡焼成部焼台出土状況 焼成部に80~100個の設置が可能である



2. 1号窯跡焼成部(含む煙道部)土層堆積状況 上位層はLoam



3. 1号窯跡前底部土層堆積状況



4. 1号窯跡焼成部西壁石組 上位に横孔が穿たれる



5. 2号窯跡(南から)

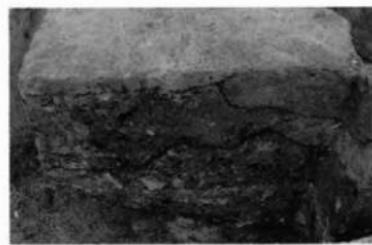
右上1号・右下4号・左上3号・左下5号・下7号窯跡の各窯体



1. 2号窯跡全景(南から)



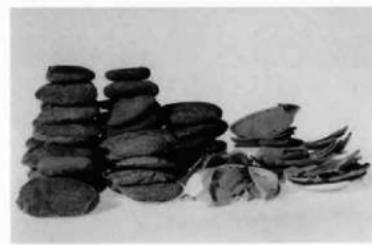
2. 2号窯跡床面遺物出土状況



3. 2号窯跡焼成部土層堆積状況 隣に窯壁附塊の崩落が顕著



4. 2号窯跡窯尻部土層堆積状況 黒褐色土は煙道孔からの流入



5. 1号窯跡使用的焼台と出土遺物 環・皿・蓋・碗



6. 2号窯跡出土遺物 環・皿・蓋・壺・瓶・広口甕



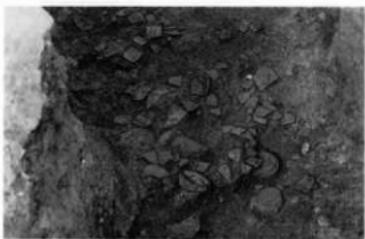
1. 3号窓跡全景(南東から) 掘柵に間わる堆積物は無く、操業前もしくは修復の直前か。土師器壺1点のみ出土する。際儀か。左は5号窓跡、右には2号・1号・4号窓跡の窓体



2. 4号窓跡全景(西から) 中央4号窓跡を左回りに1号・2号・3号・5号窓跡。画面右上は10号右下は7号窓跡



1. 4号窯跡全景(西から) 左は1号窯跡、前底部は画面下方5号窯跡と共有する位置で、8号窯跡焼成部はこの前底部によって削平消滅



2. 4号窯跡燃焼部遺物出土状況



3. 4号窯跡焼成部土層堆積状況(縦断) 右が窯尻方向



4. 4号窯跡出土遺物 環・皿・蓋・壺・瓦



5. 4号窯跡焼成部土層堆積状況(横断) 2層目が  
Loam塊層



1. 5号窑跡(左から3番目)全景(東から) 画面中央7号、左11号、右3号窑跡(窯体南縁)が並ぶ



2. 5号窑跡全景(東から) 前底部は対西する4号窑の前底部分によって削平される



3. 5号窑跡焼成部土層堆積状況



4. 5号窑跡出土遺物 环・皿・蓋・塊



1. 6号跡窯(南から) 室尻部のみ残存。右上10号、下は7号窯跡の構底部



2. 7号窯跡全景(東から) 段下が7号窯跡の床面。燃焼部の遺物は床面灰層中に入り



3. 7号窯跡全景(東から) 中央が7号窯跡。段下が焚口から前底部で8号窯跡平面に瓦を混えて整地。左11号、右5号窯跡



1. 7号窯跡遺物出土状況 燃焼部に集中



2. 7号窯跡遺物出土状況 製品選別後の遺棄



4. 7号窯跡完掘状況(東から) 燃焼部左右壁下に石設置痕と粘土地。上位に横孔穿つ



3. 7号窯跡焚口部土層断面 8号・11号窯跡との重複状況



5. 7号窯跡出土遺物 壺・蓋・塊・瓦



6. 7号窯跡燃焼部右壁下石設置痕 設置痕上位に横孔を穿つ。右手小穴には灰色格子が充填



1. 8号窯跡(南から) 中央遺物出土部分が8号窯跡。群中最初期に構築。上延長部が2号窯跡、右上より1号・4号・10号、左上より3号・5号・7号・11号窯跡



2. 8号窯跡(南から) 上半は1・5号で下半は7号窯の削平で焼成部手前から燃焼部にかけて残存



3. 窯跡群配置図



4. 8号窯跡発掘状況



1. 8号窯跡焼成部土層堆積状況 遺物直上を天井崩落の還元・焼土塊帶が覆う



2. 8号窯跡焼成部遺物出土状況 手前の瓦は7号窯  
薪構築時に敷かれたもの



3. 8号窯跡焼成部土層堆積状況 左上黒色土は5号  
窯跡の灰層



4. 8号窯跡出土遺物 环・蓋・壺・瓶・瓦



1. 9号窯跡全景(南西から) 緩く曲がる窯体。窯長は10号窯跡とともに群中で最大



3. 9号窯跡焼成部遺物出土状況 散在的で少量の甕片が混じる



4. 9号窯跡出土遺物 瓢・皿・蓋・壺・甕



2. 9号窯跡燃焼部土層堆積状況 床面を還元・焼土・黒色灰混入のLoam塊層が埋める



1. 10号窯跡(南西から) 右は9号窯跡。前底部は7号・11号・13号窯跡のそれと重複し、それより新しい。



2. 10号窯跡第1面(最終面)遺物出土状況 环は体部の欠損した物が多く炕台へ転用か



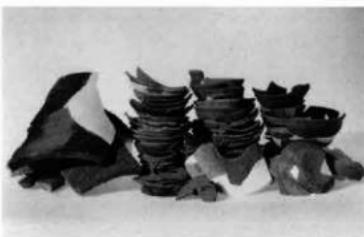
3. 10号窯跡床第2面(前操業面)遺物出土状況 炕台使用と思われる环状部



1. 10号窯跡完掘状況 燃焼部両壁下には石設置板が残る



2. 10号窯跡燃焼部両壁下石設置痕 先端の設置痕上位壁面に横孔を穿つ



3. 10号窯跡出土遺物 环・皿・蓋・塊・瓦



4. 11号窯跡全景(東から) 中央が11号窯跡。振り抜きによる天井が残る窯である。右7号、左13号窯跡



1. 11号窯跡焼成部土層堆積状況 天井Loam層が残る。側壁との変換部に小さなズレが生じている。床面との間には還元・燒土塊が多く混在する



2. 11号窯跡遺物出土状況 焼成部中央に遺物が集中して出土



3. 11号窯跡遺物出土状況 手前坯類は鍋台状に伏せてあるが下部に遺物がある。焼成部右壁に石が設置されている



4. 11号窯跡出土遺物 坯・蓋・壺



1. 13号窯跡全景(北から) 2号・8号窯跡と南北一  
線に連なり、群中唯一実戸が噴向き。燃焼部に選別後の  
遺物が集中し、燃焼部側壁に用いた石材も放置される



4. 13号窯跡燃焼部 燃焼部右壁の石設置痕と壁面に  
空たれた楕孔



2. 13号窯跡燃焼部土層堆積状況 墓際に石材設置補  
強に用いた灰色粘土塊がのこる



3. 13号窯跡燃焼部遺物出土状況 選別後に遺棄され  
た遺物

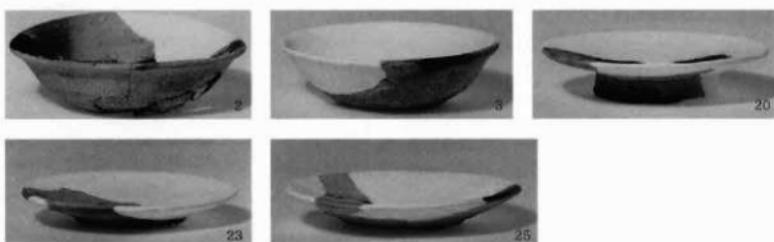


5. 13号窯跡出土遺物 坯・皿・蓋・碗・瓦

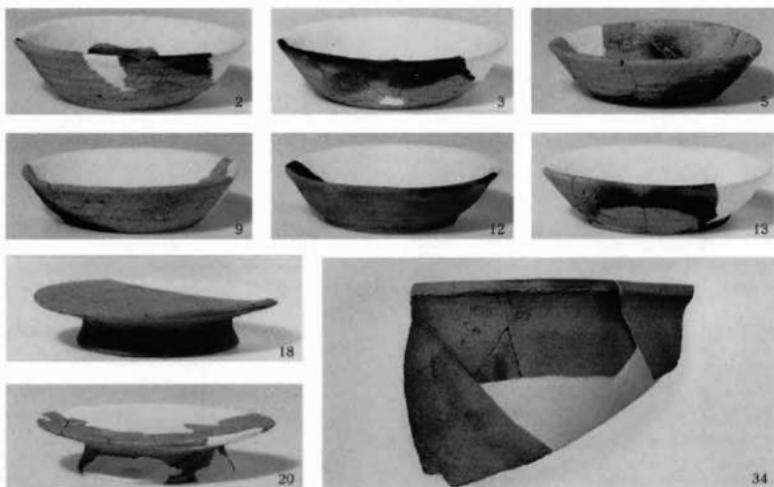


6. 光仙房遺跡窯跡群の調査風景

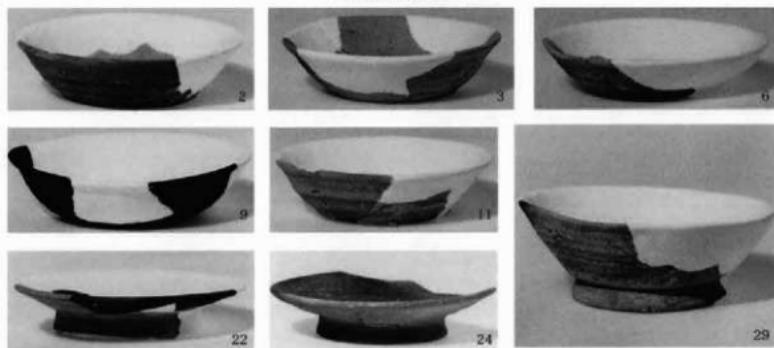
PL 18



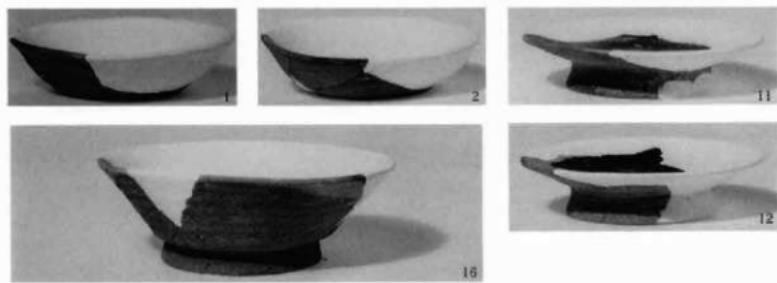
1号窑跡出土遺物



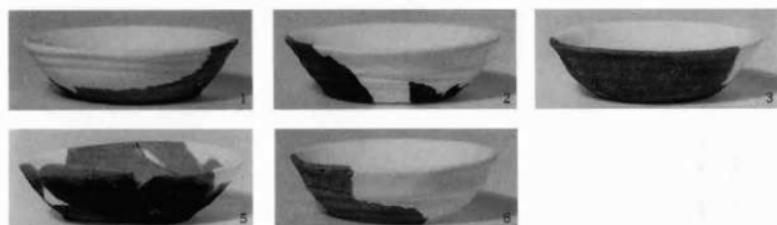
2号窑跡出土遺物



4号窑跡出土遺物



5号窑跡出土遺物

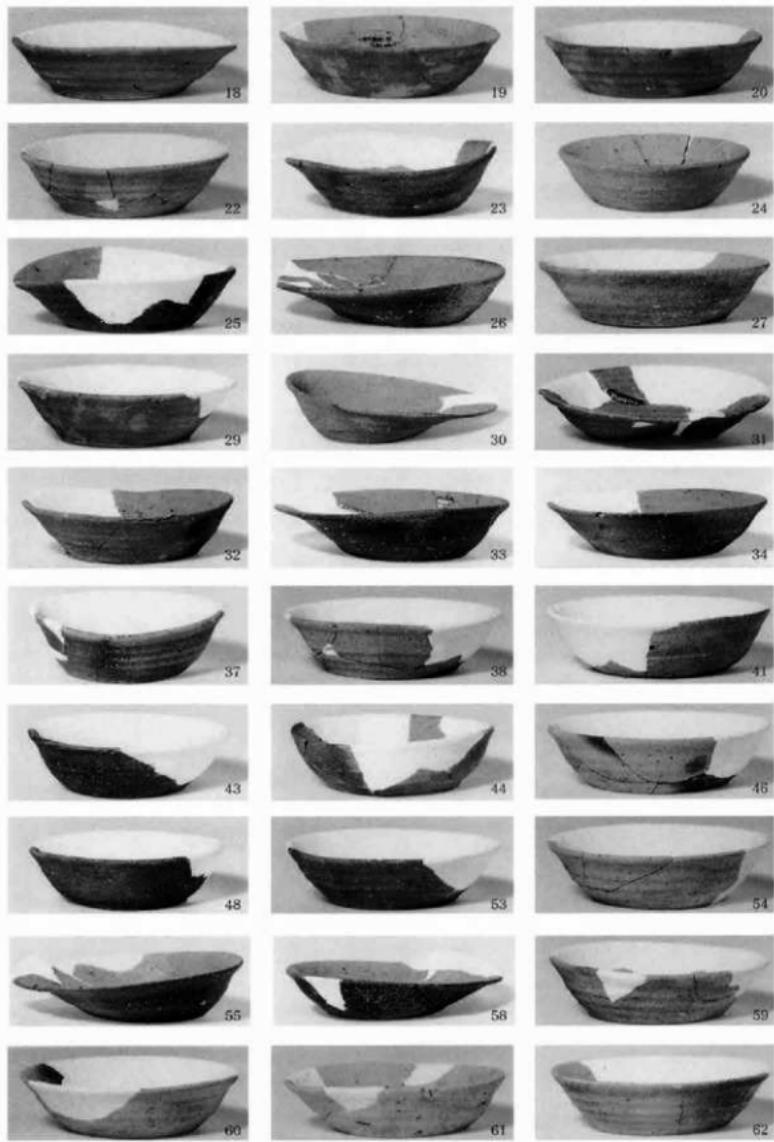


6号窑跡出土遺物

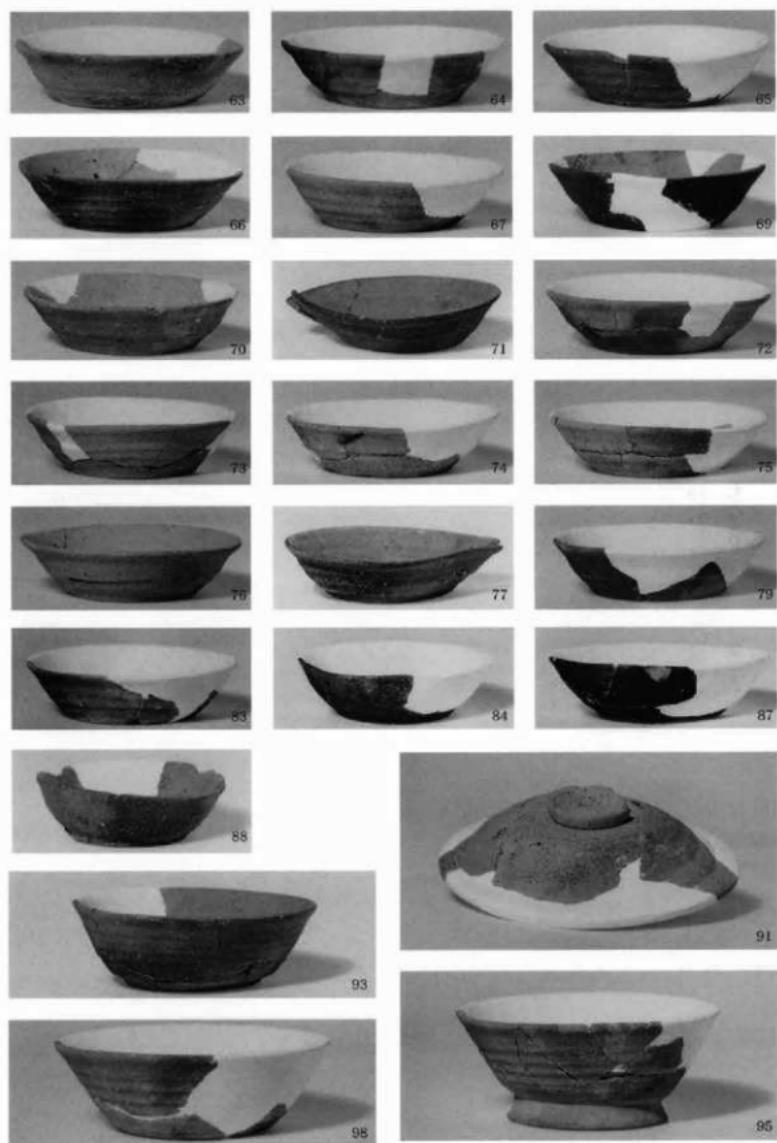


7号窑跡出土遺物(1)

P L 20

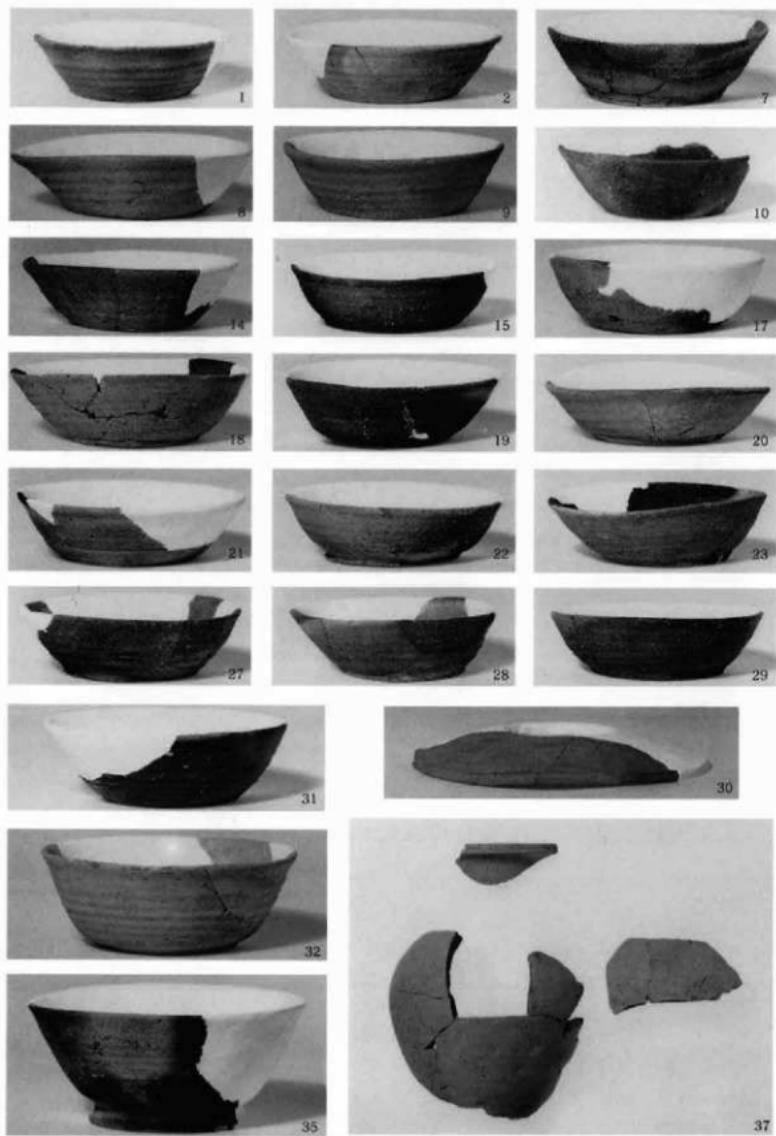


7号墓葬出土遗物(2)

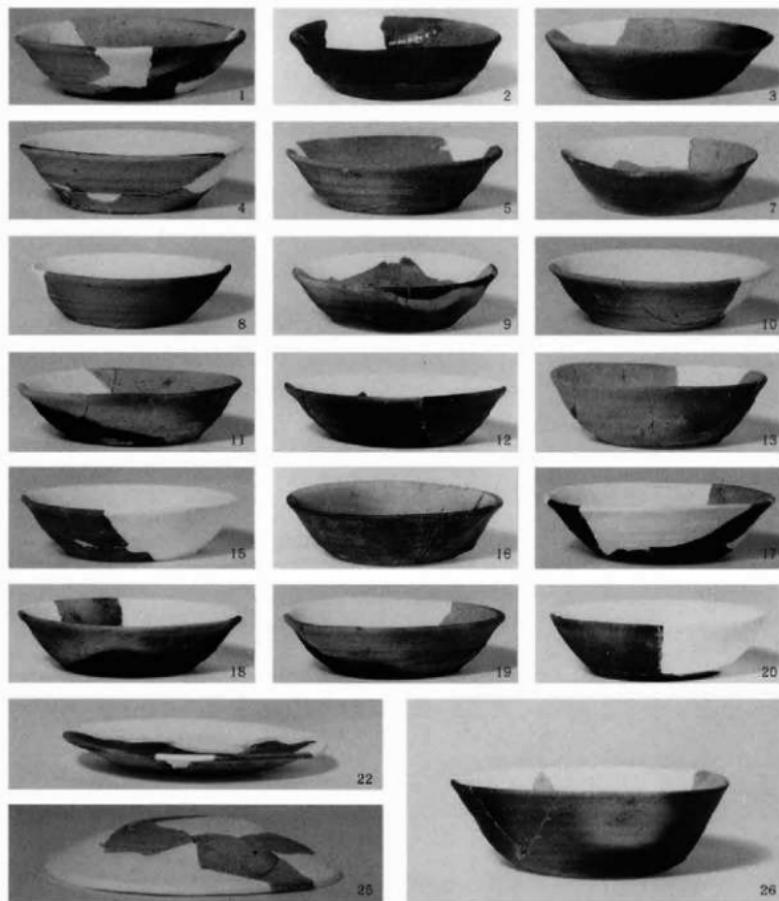


7号窑址出土遗物(3)

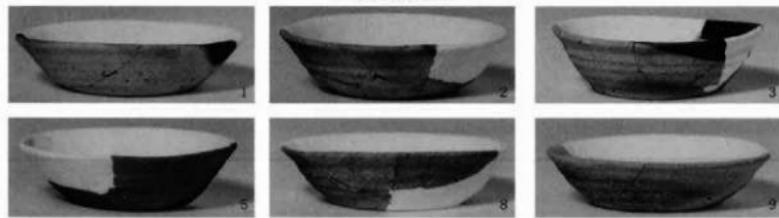
PL 22



8号窑址出土遗物

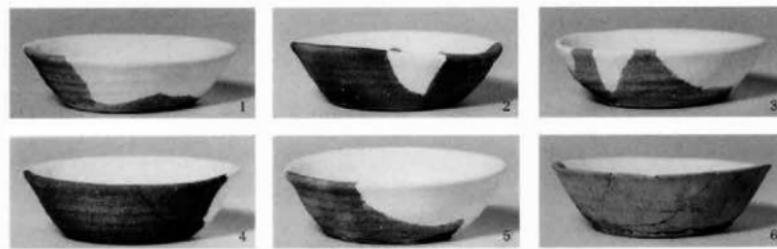
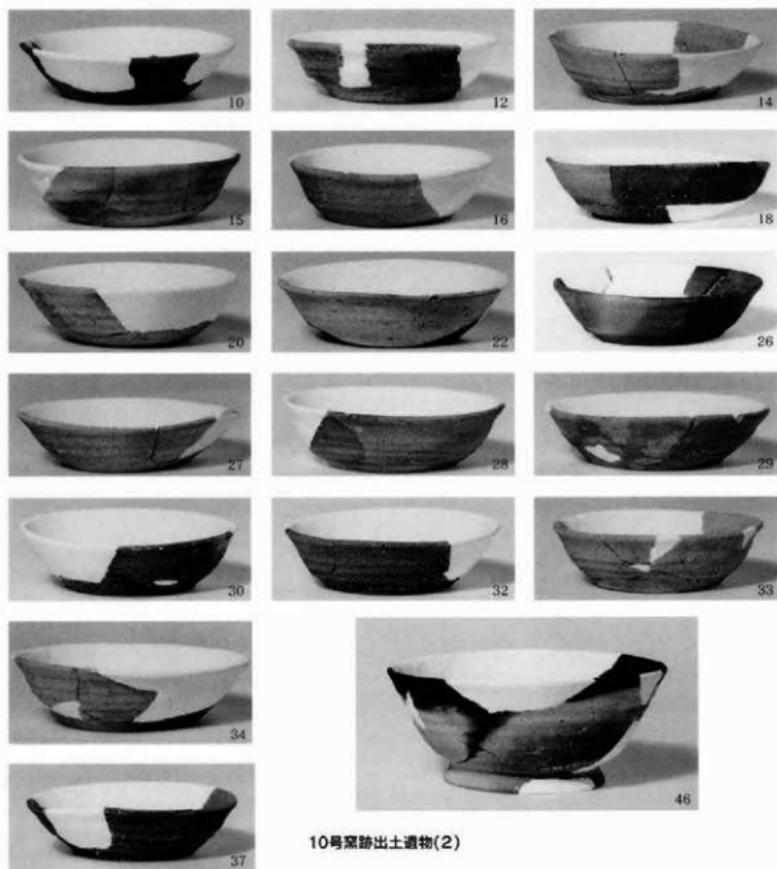


9号窑跡出土遺物



10号窑跡出土遺物(1)

P L 24

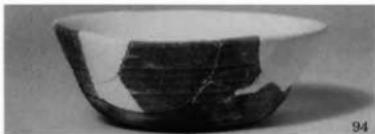
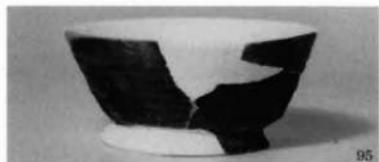
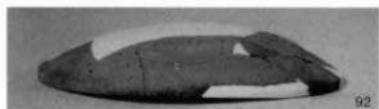




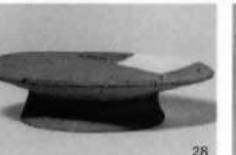
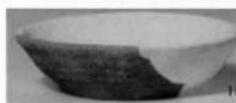
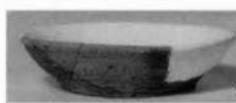
11号窑址出土遗物(2)



11号墓出土遗物(3)



11号窑址出土遗物(4)



13号窑址出土遗物



3号窑跡出土土師器



10号窑跡出土土師器

50



13



15



18



20



19



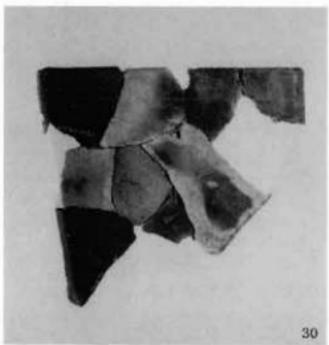
23



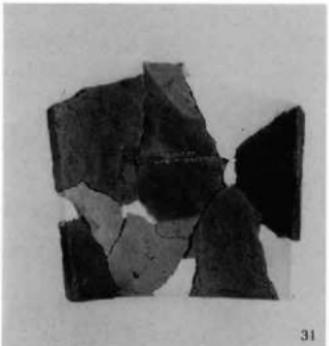
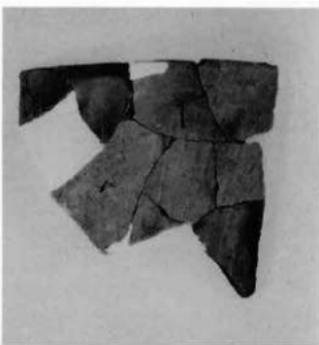
窑跡出土瓦 7号窑 (13·15) 9号窑 (18~20·23)



25

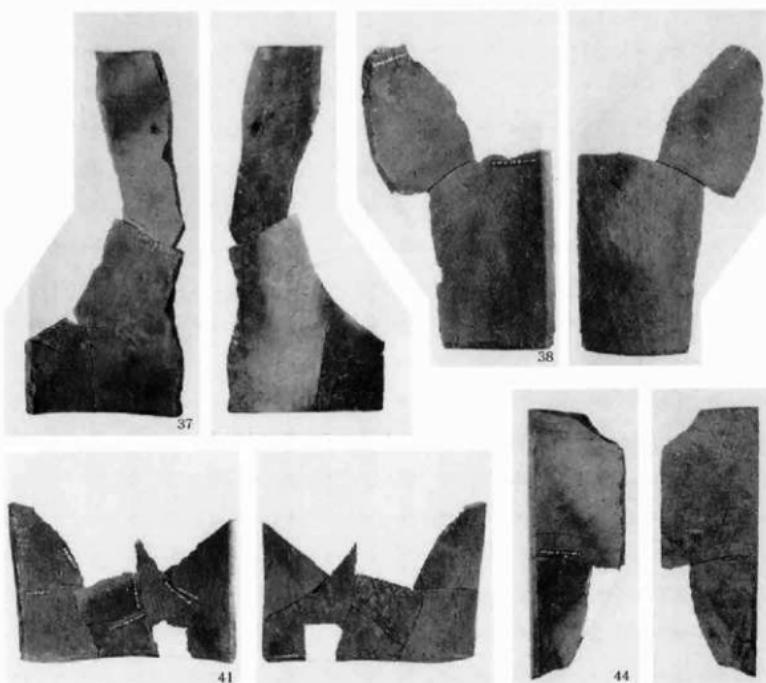


30



31

窑址出土瓦 9号窑 (25·30·31)



窯跡出土瓦10号窯（37・38）11号窯（41）13号窯（44）





財団法人、群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第308集

# 光仙房遺跡 (須恵器窯跡編)

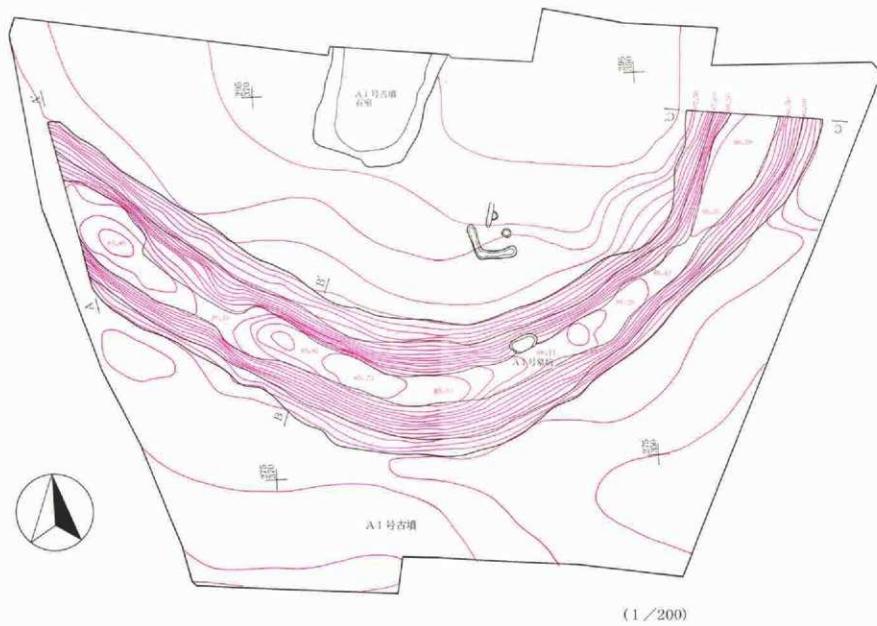
北関東自動車道(高崎~伊勢崎)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

平成15年3月20日 印刷  
平成15年3月27日 発行

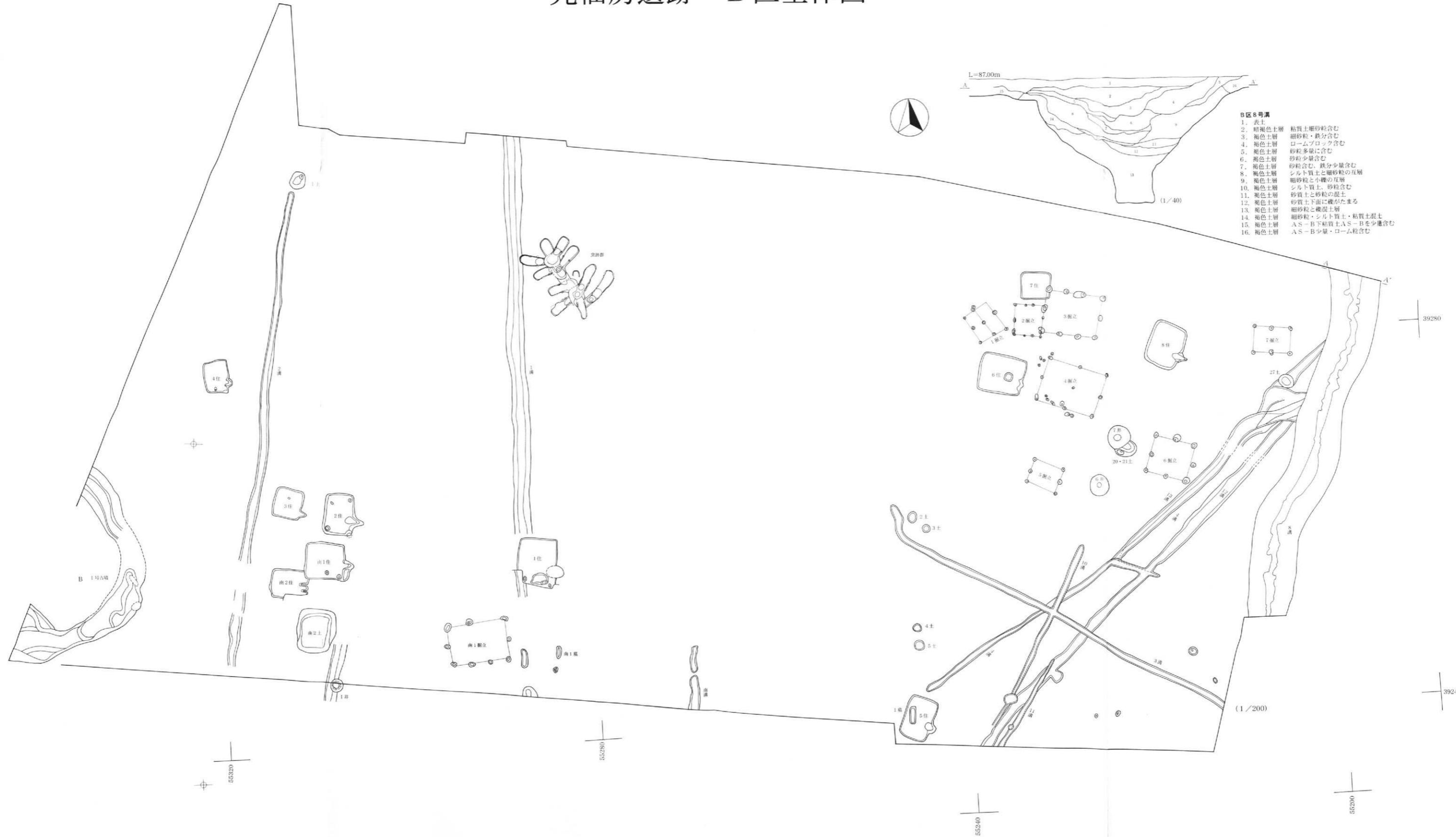
編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

# 光仙房遺跡 A区全体図



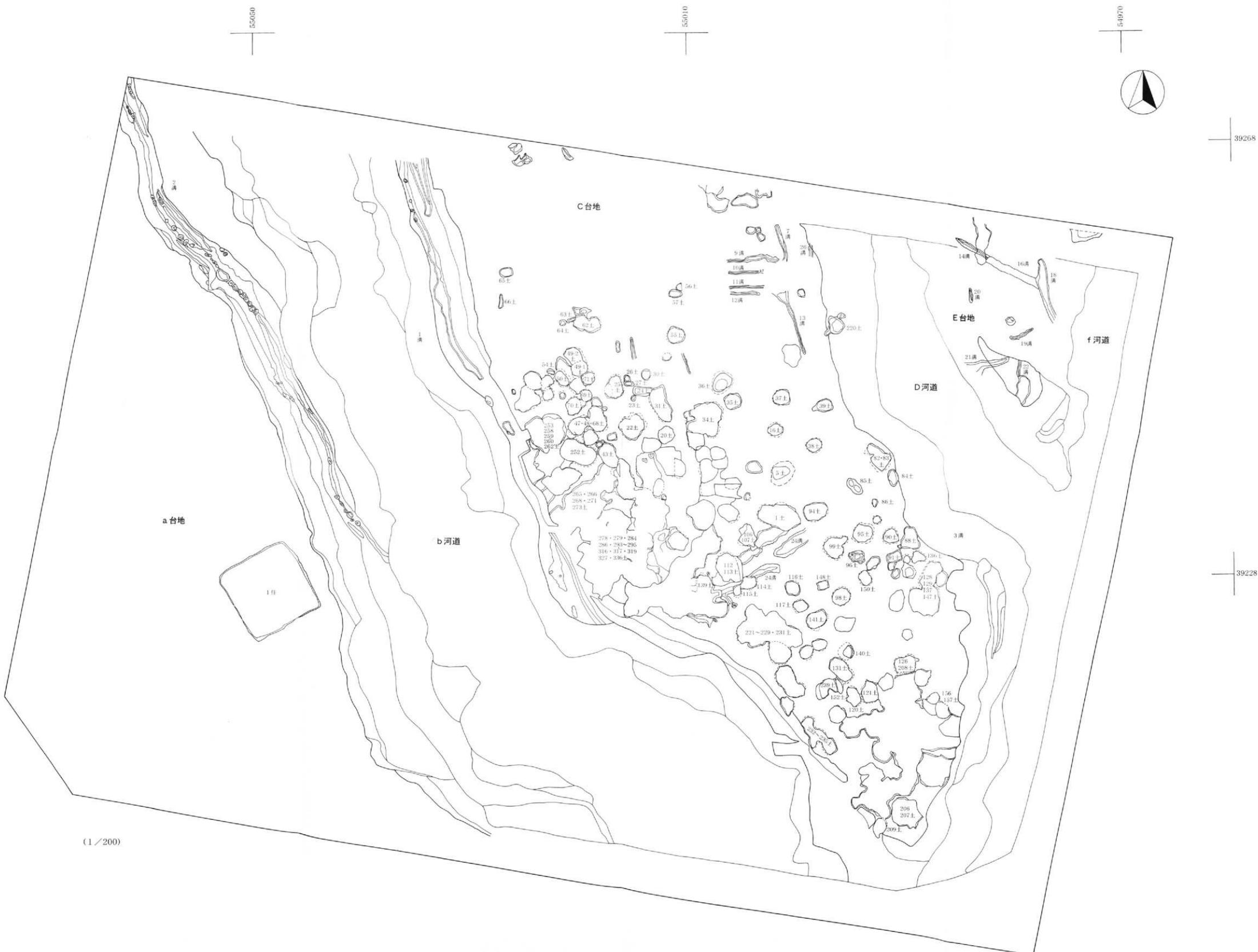
# 光仙房遺跡 B区全体図



# 光仙房遺跡 C区全体図



## 光仙房遺跡 D区全体図



光仙房遺跡 全体図(1/400)

